

秋田県文化財調査報告第262集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXI

— 小田V遺跡 —

1 9 9 6 • 3

秋田県教育委員会

# 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXI

— 小田 <sup>だ</sup>V 遺跡 —

1 9 9 6 • 3

秋田県教育委員会

## 序

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるものです。すでに秋田市から岩手県湯田町までの73.2Kmについては、平成7年11月に開通し供用されています。

本区間の路線上には、多くの遺跡の存在することが確認されており、秋田県教育委員会では、平成2年から工事に先立って、遺跡の発掘調査を実施して記録保存に努めてまいりました。

小田V遺跡は平成5年度に調査し、その結果縄文時代早期から弥生時代の複合遺跡であり、特に縄文時代前期には食料獲得の場所として遺跡が営まれていたことがわかりました。

本報告書が埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々にご利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、ご協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、山内村・山内村教育委員会、横手市教育委員会、平鹿町教育委員会、雄物川町教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

秋田県教育委員会

教育長 橋 本 顯 信

## 例 言

1. 本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の21冊目の報告書である。
2. 本書は、平成5年度に発掘調査された山内村に所在する小田V遺跡の調査成果を収めたものである。
3. 調査の内容について、既にその一部が報告会資料などで公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。
4. 本書の執筆は、第2章第2節、第6章を除いて高橋が行った。
5. 第2章第2節の「地形と地質」は専門指導員である板垣直俊氏から原稿を賜った。
6. 第6章の科学分析のうち、第1節は学習院大学年代測定室、第2～5節はパリノ・サーヴェイ株式会社、第6節は株式会社ズコーシャに依頼したものである。
7. 土層注記中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』に掲った。
8. 掘図中の遺物番号は、土器と石器ごとにそれぞれ通し番号を付してある。
9. 掘図中の遺物の縮尺は、土器では2分の1・3分の1・4分の1、石器類は2分の1・3分の1で、各々の図中にスケールを付した。
10. 発掘調査及び本書の作成に際し、浅田知世、小山内透、木村謙次郎、高橋與右衛門、田舎康之、の各氏から御教示をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

## 凡 例

1. 検出された遺構には、検出順に番号と略号を付した。略号は以下の通りである。  
S I = 竪穴住居跡 S K = 土坑 S R = 土器埋設遺構 S K T = 陥し穴  
S X Q = 石器集中箇所 S N = 焼土遺構
2. 掘図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。



焼土



アスファルト



主に礫石器の磨り面

3. 石器観察表の単位は、長さ・幅・厚さがmm、重さがgである。

## 目 次

序 .....	i
例 言・凡 例 .....	ii
目次 .....	iii
表目次 .....	iv
挿図目次 .....	iv
図版目次 .....	v
 第1章 はじめに	
第1節 発掘調査に至るまで .....	1
第2節 調査の組織と構成 .....	2
 第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の位置と立地 .....	4
第2節 地形と地質 .....	6
第3節 周辺の遺跡 .....	12
 第3章 調査の概要	
第1節 遺跡の概要 .....	16
第2節 調査の方法 .....	16
第3節 調査経過 .....	19
 第4章 A・B区の調査の記録	
第1節 A・B区の概要と基本層序 .....	22
第2節 検出遺構と出土遺物 .....	25
第3節 遺構外出土遺物 .....	54
 第5章 C区の調査の記録	
第1節 C区の概要と基本層序 .....	65
第2節 検出遺構と出土遺物 .....	66
第3節 遺構外出土遺物 .....	146
 第6章 自然科学的分析	
第1節 年代測定 .....	169
第2節 層序対比・種実同定・炭化材の樹種 .....	170
第3節 脂肪酸分析 .....	178
第7章 まとめ	
第1節 A・B区について .....	190
第2節 C区について .....	191
抄 錄 .....	

## 表 目 次

第1表	河岸段丘の区分の比較	8
第2表	周辺の遺跡	15
第3表	A・B区石器観察表(1)	64
第4表	C区石器観察表(1)	165
第5表	C区石器観察表(2)	166
第6表	C区石器観察表(3)	167
第7表	C区石器観察表(4)	168
第8表	重鉱物および火山ガラス比分析結果	172
第9表	出土種実同定結果	174
第10表	樹種同定結果	176
第11表	土壤試料の残存脂肪抽出量	180
第12表	土壤試料に分布するコレステロールとシスステロールの割合	180

## 挿 図 目 次

第1図	小田V道路の位置	4	第31図	A・B区道構外出土石器(4)	60
第2図	橋手I・C以南の路線と遺跡	5	第32図	A・B区道構外出土石器(1)	62
第3図	対象地域	6	第33図	A・B区道構外出土石器(3)	63
第4図	対象地域の地図	8	第34図	C区基本土器図	66
第5図	調査地図の段丘区分図	10	第35図	C区灌漑配水図	67・68
第6図	小田V道路・周辺の遺跡	13	第36図	S I 2022壁穴住居跡	70
第7図	遺跡の推定範囲と発掘調査区	17・18	第37図	S I 2022壁穴住居跡出土遺物(1)	71
第8図	A・B区の基本土器図	22	第38図	S I 2022壁穴住居跡出土遺物(2)	72
第9図	A・B区道構配水図	23・24	第39図	S I 2060壁穴住居跡と遺物出土位置図	73
第10図	S I 05壁穴住居跡	25	第40図	S I 2060壁穴住居跡出土遺物(1)	74
第11図	S I 05壁穴住居跡出土遺物(1)	27	第41図	S I 2060壁穴住居跡出土遺物(2)	75
第12図	S I 05壁穴住居跡出土遺物(3)	28	第42図	S I 2074壁穴住居跡	77・78
第13図	S I 07壁穴住居跡と出土遺物	30	第43図	S I 2074壁穴住居跡出土遺物出土位置図	79・80
第14図	S I 1032壁穴住居跡と出土遺物	31	第44図	S I 2074壁穴住居跡出土遺物(1)	81
第15図	S K 01・08・10・12・22・7坑	32	第45図	S I 2074壁穴住居跡出土遺物(3)	82
第16図	S K 23・1001・1020・1021土坑	35	第46図	S I 2074壁穴住居跡出土遺物(3)	83
第17図	S K 01・10・12・23・1023土坑出土遺物	36	第47図	S I 2074壁穴住居跡出土遺物(4)	84
第18図	S K 1022・1023・1025・1026土坑	38	第48図	S I 2074壁穴住居跡出土遺物(5)	85
第19図	S K 1023・S K 1026土坑出土遺物	40	第49図	S I 2075壁穴住居跡	87
第20図	S K 1027・1028・1030・1036土坑	41	第50図	S I 2075壁穴住居跡出土遺物出土位置図	88
第21図	S K 1031・1034・1040・1041土坑	44	第51図	S I 2075壁穴住居跡出土遺物(1)	89
第22図	S K 1027・1028・1031・1040土坑出土遺物	45	第52図	S I 2075壁穴住居跡出土遺物(3)	90
第23図	S K 1058・1060土坑	46	第53図	S I 2075壁穴住居跡出土遺物(3)	91
第24図	S K T 01・11・13・15縫し穴	48	第54図	S I 2075壁穴住居跡出土遺物(4)	92
第25図	S K T 18・19・1014・1015縫し穴	51	第55図	S K 2001・2003・2004・2005土坑	93
第26図	S K T 1043・1044縫し穴と出土遺物	52	第56図	S K 2001土坑出土遺物	95
第27図	1042土坑遺構と出土遺物	53	第57図	S K 2003・2004・2005土坑出土遺物	97
第28図	A・B区道構外出土土器(1)	57	第58図	S K 2005・2007・2009土坑	99
第29図	A・B区道構外出土土器(2)	58	第59図	S K 2006・2007土坑出土遺物	100
第30図	A・B区道構外出土土器(3)	59	第60図	S K 2016・2019土坑	102

第61回	S K 2009・2016・2015・2019上坑出土遺物	103	第66回	S N 2002焼上遺構出土遺物	144
第62回	S K 2020・2021・2025・2030上坑、S N 2026土上遺物	106	第68回	S N 2071・2072土遺構出土遺物	145
第63回	S K 2015・2027・2028・2035上坑	107・108	第67回	C区遺構外出土土器(1)	149
第64回	S K 2020・2025・2027土坑出土遺物	110	第68回	C区遺構外出土土器(2)	150
第65回	S K 2027・2028・2030土坑出土遺物	111	第69回	C区遺構外出土土器(3)	151
第66回	S K 2034・2037・2041・2043上坑	113	第70回	C区遺構外出土土器(4)	152
第67回	S K 2030・2041・2043土坑出土遺物	114	第71回	C区遺構外出土土器(5)	153
第68回	S K 2044・2046・2057上坑	116	第72回	C区遺構外出土石器(1)	155
第69回	S K 2058・2059・2060・2061・2063土坑	119	第73回	C区遺構外出土石器(2)	156
第70回	S K 2044・2057・2063土坑出土遺物	120	第74回	C区遺構外出土石器(3)	157
第71回	S K 2065・2067・2075・2078・2079土坑	122	第75回	C区遺構外出土石器(4)	158
第72回	S K 2068・2069・2083・2084・2085・2087・2088・2089土坑	125	第76回	C区遺構外出土石器(5)	159
第73回	S K 2091・2092・2093・2096・2098上坑	128	第77回	C区遺構外出土石器(6)	160
第74回	S K 2064・2073・2078・2091・2092土坑出土遺物	129	第78回	C区遺構外出土石器(7)	161
第75回	S K 2097・2099・2100・2101・2102・2105上坑	131	第79回	C区遺構外出土石器(8)	162
第76回	S K 2092・2095・2099土坑出土遺物	132	第80回	C区遺構外出土石器(9)	163
第77回	S K 2104上坑	133	第81回	C区遺構外出土石器(10)	164
第78回	S R 2024土器埋設遺構と出土遺物	134	第82回	柱状隙、頂部物組成および火山ガラス比	173
第79回	S X Q 2045石器集中部と出土遺物	135	第83回	SK1023試料採取地図	179
第80回	S X Q 2055石器集中部と出土遺物	137	第84回	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	182
第81回	S X Q 2056・2077石器集中部と出土遺物	138	第85回	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	182
第82回	S X Q 2094・2095石器集中部と出土遺物	139	第86回	試料中に残存する脂肪のステロール組成	183
第83回	S X Q 2055石器集中部と出土遺物	140	第87回	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	188
第84回	S M 201・202・203・204・205・207・211土遺物	143	第88回	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による脂肪酸相図	188

## 図版目次

### 【A・B区】

- 図版 1 1.遺跡全景(西→東)  
 2.A・B区近景(西→東)  
 図版 2 1.A区調査風景(南東→北西)  
 2.S I O 5完縫(南東→北西)  
 図版 3 L S I O 7壳細(南西→北東)  
 2.S I I 1032完縫(北→南)  
 図版 4 1.S K 1 0調査状況(南西→北東)  
 2.S K 1 0土質断面(南西→北東)  
 3.S K 1 0完縫(西→東)  
 図版 5 1.S K 2 2土質断面(西→東)  
 2.S K 2 2完縫(西→東)  
 3.S K 2 3完縫(東→西)  
 図版 6 1.S K 1023確認状況(西→東)  
 2.S K 1023土質断面(南西→北東)  
 3.S K 1023完縫(西→東)

- 図版 7 1.S K T 1 9完縫(西→東)  
 2.S K T 1044(南→北)  
 3.S K T 1 8土質断面(西→東)  
 図版 8 1.遺構内出土土器(1)  
 2.遺構内出土土器(2)  
 図版 9 1.遺構内出土土器(3)  
 2.遺構内出土土器(4)  
 3.遺構内出土土器(5)  
 図版 10 1.遺構内出土土器(1)  
 2.遺構内出土土器(2)  
 図版 11 1.遺構外出土土器(1)  
 2.遺構外出土土器(2)  
 図版 12 1.遺構外出土土器(3)  
 2.遺構外出土土器(4)  
 図版 13 1.遺構外出土土器(5)  
 2.遺構外出土石器(1)

## 【C区】

- |                         |                     |
|-------------------------|---------------------|
| 図版14 1.C区近景（東→西）        | 図版24 1.遺構内出土石器 (3)  |
| 2.C区北西部の土坑群（南→北）        | 2.遺構内出土石器 (4)       |
| 図版15 1.C区中央部の土坑群（南西→北東） | 図版25 1.遺構内出土石器 (5)  |
| 2.S I 2075完掘（南西→北東）     | 2.遺構内出土石器 (6)       |
| 図版16 1.S K2003土層断面（北→南） | 図版26 1.遺構内出土石器 (7)  |
| 2.S K2003完掘（北→南）        | 2.遺構内出土石器 (8)       |
| 3.S K2003底面のpHと溝        | 図版27 1.遺構内出土石器 (9)  |
| 図版17 1.S K2004完掘（北→南）   | 2.遺構内出土石器 (10)      |
| 2.S K2007完掘（南→北）        | 図版28 1.遺構内出土石器 (11) |
| 図版18 1.S K2020完掘（南→北）   | 2.遺構内出土石器 (12)      |
| 2.S X Q2095・2094（南→北）   | 図版29 1.遺構外出土石器 (3)  |
| 図版19 1.S R2024地盤状況（真上）  | 2.遺構外出土石器 (2)の内面    |
| 2.S R2024土層断面（西→東）      | 図版30 1.遺構外出土石器 (3)  |
| 3.S R2024完掘（西→東）        | 2.遺構外出土石器 (4)       |
| 図版20 1.遺構内出土土器 (1)      | 図版31 1.遺構外出土土器 (5)  |
| 2.遺構内出土土器 (2)           | 2.遺構外出土土器 (6)       |
| 図版21 1.遺構内出土土器 (3)      | 図版32 1.遺構外出土土器 (7)  |
| 2.遺構内出土土器 (4)           | 2.遺構外出土土器 (8)       |
| 3.遺構内出土土器 (5)           | 図版33 1.遺構外出土石器 (1)  |
| 4.遺構外出土土器 (1)           | 2.遺構外出土石器 (2)       |
| 図版22 1.遺構内出土土器 (6)      | 図版34 1.遺構外出土石器 (3)  |
| 2.遺構内出土土器 (7)           | 2.遺構外出土石器 (4)       |
| 図版23 1.遺構内出土土器 (1)      | 図版35 1.遺構外出土石器 (5)  |
| 2.遺構内出土土器 (2)           | 2.遺構外出土石器 (6)       |
|                         | 図版36 垂鉛物および火山ガラス    |
|                         | 図版37 木材(1)          |
|                         | 図版38 木村(2)・昭和遺体     |

## 第1章 はじめに

### 第1節 発掘調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮と県内の陸上交通体系の改善など、地域の生産活動と住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的に計画された高速道路である。道路は、東北自動車道から岩手県北上市で分岐し、横手市一大曲市を経て秋田市に至る総延長108Kmに達する。このうち、秋田－横手間57.4Kmについては昭和53年11月の第8次施行命令によって具体化し既に平成3年7月に、平成7年11月には岩手県湯田町まで供用が開始されている。

秋田－横手間の道路計画路線内に存在する合計27遺跡の発掘調査は昭和60年～平成元年に実施され、それぞれに報告書が刊行されている。

横手インター・チェンジ(I・C)以東の横手－湯田間19.7kmについては昭和61年3月に第9次施工命令が下された。これに伴い昭和62年3月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和62年5月と同63年6月に遺跡分布調査を実施し、平鹿郡山内村の計画路線内に11遺跡が存在することを報告した。また、横手I・C以東の横手市分についての分布調査は、横手－秋田間の分布調査と同時に、昭和56年と同58年に実施され、4遺跡の存在することが報告されていた。これら計画路線上に存在する合計15遺跡の取り扱いについては、昭和60年の日本道路公団と秋田県教育委員会の合意を踏襲することとした。15遺跡は横手I・Cから北上市側に、柳田I・柳田II・小松原・新町遺跡(以上横手市)、茂竹沢・小田III・小田II・小田I・虫内II・虫内I・岩瀬・中島・相野々・上谷地・越上遺跡(以上山内村)である。

発掘調査に先立って、横手市分として昭和62年には柳田I・柳田II遺跡、平成元年には小松原遺跡西半部、平成2年には小松原遺跡東半部と新町遺跡南半部、平成3年には新町遺跡北半部の範囲確認調査を実施した。その結果、柳田I・柳田II・小松原遺跡については遺跡の範囲が計画路線に及んでおらず、また新町遺跡北半部については宅地造成などによる擾乱が著しく遺構等が遺存していないため、これらは発掘調査の必要がないと判断された。

山内村分の遺跡範囲確認調査は、平成2年に虫内I遺跡、平成3年に茂竹沢・虫内II・岩瀬・中島・力石II・越上遺跡、平成4年に小田V・小田IV・虫内III・相野々・上谷地遺跡について

実施した。その結果、中島・相野々・力石Ⅱ遺跡については遺跡の範囲が計画路線内には及ばないことから調査が不要となった。なお平成2年に、虫内Ⅰ遺跡の南東側と虫内Ⅱ遺跡の西側、及び上谷地遺跡の東側で縄文時代の遺物が採集され、この3つの地点にも遺跡の存在することが判明したことから、各々を虫内Ⅲ遺跡・小田Ⅳ遺跡・力石Ⅱ遺跡として登録し、範囲確認調査を行っている。これらのことから、横断道山内村分の発掘調査対象遺跡は、岩手県側から順に越上・上谷地・岩瀬・虫内Ⅲ・虫内Ⅰ・虫内Ⅱ・小田Ⅳ・小田Ⅴ・茂竹沢遺跡の9遺跡となつたのである。

横手市の1遺跡・山内村の9遺跡に対する発掘調査は、平成2年度の新町遺跡から開始され、平成3年には越上遺跡、岩瀬遺跡・虫内Ⅰ遺跡の一部、虫内Ⅱ遺跡、茂竹沢遺跡が、平成4年には上谷地遺跡、虫内Ⅲ遺跡、虫内Ⅰ遺跡の一部、小田Ⅳ遺跡、平成5年には小田Ⅴ遺跡、虫内Ⅰ遺跡の一部、岩瀬遺跡の残り部分が実施されている。また、これらの遺跡のうち、新町遺跡、茂竹沢遺跡、虫内Ⅱ遺跡、越上遺跡の発掘調査報告書が、平成5年3月に公にされている。

## 第2節 調査の組織と構成

遺跡名 小田Ⅴ遺跡

遺跡所在地 秋田県平鹿郡山内村土淵字小田111-2外

調査期間 平成5年5月6日～11月19日

調査面積 19,800m<sup>2</sup>

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 大野 憲司（秋田県埋蔵文化財センター調査第一科長）

築 一郎（ “ 学芸主事）

高橋 忠彦（ “ 文化財主査）

栗澤 光男（ “ 文化財主任）

太田 淳子（ “ 非常勤職員）

長谷川潤一（ “ 研修員）

調査協力者 矢野 健一（京都大学大学院研修員）

専門指導員 小林 達雄（國學院大學文学部教授）

林 謙作（北海道大学文学部助教授）

岡村 道雄（文化庁記念物課文化財調査官）

板垣 直俊（由利郡鳥海町立川内中学校教諭）

総務担当者 佐々木 真（秋田県埋蔵文化財センター主査）  
 佐藤 広文（秋田県埋蔵文化財センター主事）  
 調査協力機関 山内村・山内村教育委員会・横手市・横手市教育委員会  
 平鹿町・平鹿町教育委員会・雄物川町・雄物川町教育委員会

## 参考文献

- 1 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ～X』  
 秋田県文化財調査報告書第150・166・180・186・189・190・191・205・206・207・209集  
 1986～1991(昭和61～平成3年)
- 2 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第179集 1989(平成元年)
- 3 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第93集 1982(昭和57年)
- 4 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第201集 1990(平成2年)
- 5 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3年)
- 6 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第226集 1992(平成4年)
- 7 前述の小田Ⅰ・小田Ⅱ・小田Ⅲ遺跡については、横断道の分布調査の際に付した遺跡名が、既に別の遺跡として遺跡地図に登録されていたことが判明したこと、地形的には1遺跡とするのが妥当であること等から、これらをまとめて小田Ⅴ遺跡とした。
- 8 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI－新町遺跡－』  
 秋田県文化財調査報告書第232集 1993(平成5年)
- 9 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書－茂竹沢遺跡－』  
 秋田県文化財調査報告書第233集 1993(平成5年)
- 10 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書－虫内Ⅱ遺跡－』  
 秋田県文化財調査報告書第234集 1993(平成5年)
- 11 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書－越上遺跡－』  
 秋田県文化財調査報告書第235集 1993(平成5年)
- 12 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書－上谷地遺跡－』  
 秋田県文化財調査報告書第241集 1994(平成6年)
- 13 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書－虫内Ⅲ遺跡－』  
 秋田県文化財調査報告書第242集 1994(平成6年)
- 14 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書－小田IV遺跡－』  
 秋田県文化財調査報告書第243集 1994(平成6年)

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置と立地

小田V遺跡は、北緯 $39^{\circ} 16' 47''$ 、東経 $140^{\circ} 36' 38''$ を中心に所在する縄文時代の遺跡で、JR東日本北上線相野々駅の北西約1.1kmに位置する。

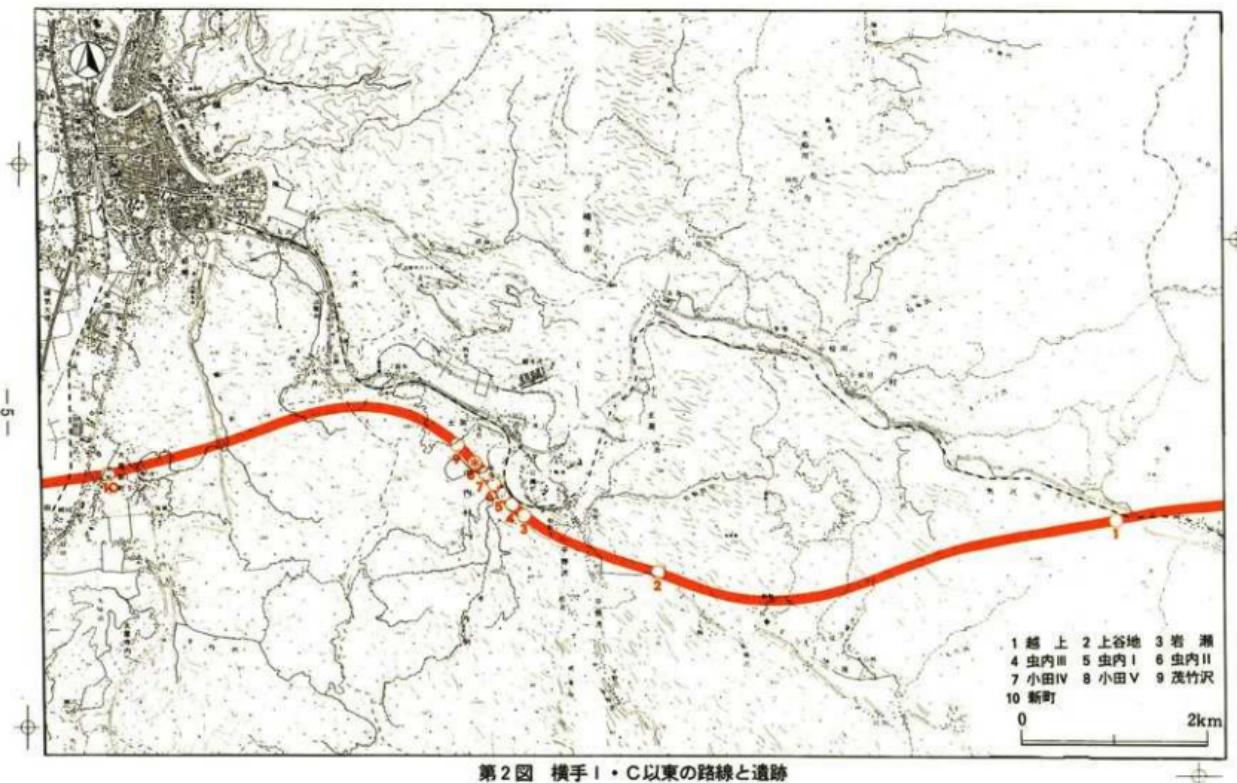
国道13号と107号が交差する横手市安田の交差点から、107号を岩手県北上市方向に5.5km進むと、平鹿郡山内村土渕のY字交差点に至る。この交差点の手前約500mの右手にはJR北上線の踏み切りがあり、これを渡ると山内村茂竹の集落である。茂竹集落の南側には、横手川によって形成された標高130m～140mの中位河岸段丘があり、この段丘面は、茂竹沢の開析によつて東・西に分断されている。小田V遺跡は、このうちの東側段丘上に立地している。

雄物川の一支流である横手川は、秋田・岩手両県の県境となつてゐる奥羽山脈の甲山一帯に源を発して、平鹿郡山内村の山間を縫うように西流し、横手盆地中央部東端に出る中規模の河川である。流域には、最低位から高位まで合計9面の河岸段丘面が形成されている。

小田V遺跡は、山内村南郷方面から西流して来た横手川が、土淵字虫内で流路をほぼ直角に北に変える屈曲部西側の河岸丘上に立地している。



第1図 小田V遺跡の位置



第2図 横手I・C以東の路線と遺跡

## 第2節 地形と地質

### 1 地形と地質の概況

#### (1) はじめに

調査地域を第3図の地域とする。本地域は山内村の西端に位置する、4km四方の地域である。本地域には33ヶ所の遺跡が確認されているが、その中で8遺跡が東北自動車道秋田線建設事業に係る発掘調査の対象となっている。



第3図 対象地域

#### (2) 地形の概況

本地域は雄物川の支流である横手川とその支流黒沢川・武道川の流域に位置し、地形的には山地と河岸段丘および氾濫原・谷底平野に区分される。

山地は河川によって区分され、秋田県(1976)によると、西部と南部の金峰山山地、南東部の大日向山山地、東部の大穴岬山地、北部の御岳山山地の4つに分けられる。いずれの山地も標

高250~350mの中起伏山地が大部分を占めている。本地域の最高峰は東端部にある天竺森（標高368m）である。

河岸段丘は横手川と黒沢川に沿って、500~1,000mの幅で分布しているが、武道川沿いでは発達が乏しい。（詳細は後述）

氾濫原は横手川と黒沢川の現河床沿いに僅かに分布する程度である。また、谷底平野は武道川沿いと小さな谷沿いにいくつか分布がみられる。

### （3）地質の概況

本地域の地質は、河岸段丘堆積物を除くと、古い順に山内層・相野々層・黒沢層（いずれも新第三紀中新世）に区分される。（第4図）

山内層は淡灰褐色～褐色の硬質泥岩で、層理が発達しており板状に割れる性質がある。横手市東方の山地に広く分布し、本地域では相野々よりも西方の山地を形成している地層である。

相野々層は主として黒色泥岩からなり、一部では石灰質の団塊や凝灰質砂岩を含む。また、最下部に灰白質～白色の石英安山岩質凝灰岩の薄い層をはさむ。山内層の上に不整合にのり、西は横手市の中山丘陵から、東は横手川・黒沢川の流域に広く分布する。本地域では相野々よりも東方に分布し、平野沢集落付近では、石英安山岩質凝灰岩がみられる。

黒沢層は主として青灰色～暗灰色の細粒砂岩、砂質シルト岩からなり、相野々層とは整合であり、若干指交関係をなすが、やや斜交して黒沢層が上位となる。横手川・黒沢川の流域に分布するが、相野々層よりは分布範囲が狭い。本地域では東南部の横手川沿いにみられる。

河岸段丘堆積物は横手川・黒沢川の河川沿いに発達し、礫・砂及び泥からなり、厚さは数m程度である。

本地域は断層と褶曲によって複雑な地質構造を示している。本地域の東部には、平野沢断層が南北に継続しており、さらにその東方には、断層と平行に背斜軸がみられる。また、南部にもいくつかの背斜・向斜構造がみられ、複雑な構造を物語っている。

### （4）河岸段丘について

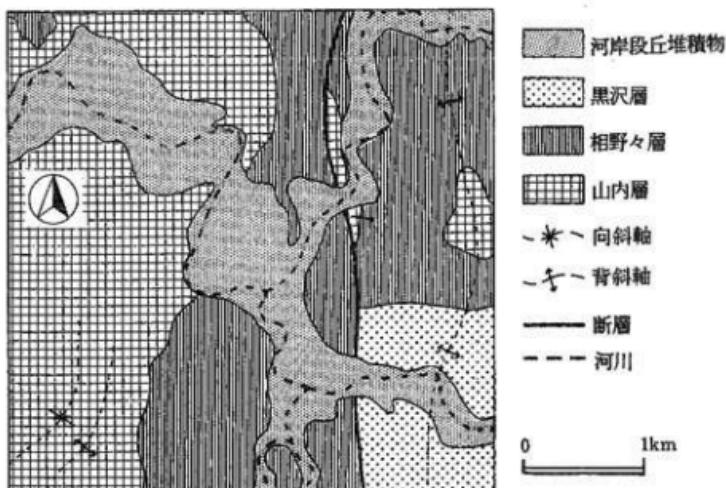
#### ①これまでの研究

本地域の河岸段丘については、これまでいくつかの研究例がある。（第1表）

中川ほか（1971）では、脊梁山脈とその両側の低地帯における第四紀の地変について考察を進めようと、横手川・黒沢川の河岸段丘と和賀川の河岸段丘の対比を行い、横手川・黒沢川流域では7つに段丘を区分している。（第5図）

秋田県（1976）では、ほぼ中川ほか（1971）の段丘区分を踏襲しながら、さらに詳細な段丘面区分図を作製し、最も新しい砂礫段丘Vを加えて、全部で8段丘に区分している。

TOYOSHIMA（1984）では、2万年以後の河岸段丘の発達過程を調査するために横手川・黒沢川流



第4図 対象地域の地質図

中川ほか(1971)	秋田県(1976)	TOSHIMA(1984)	本 稿
外 山 段 丘	砂礫段丘 I +		
相野々高位段丘	砂礫段丘 I	横手沢段丘	横手沢段丘
相 野々 段 丘	砂礫段丘 II	岩瀬段丘	岩瀬段丘
長 潛 段 丘	砂礫段丘 III +	板井沢段丘	板井沢段丘
土 潜 段 丘	砂礫段丘 III	南郷段丘	南郷(I~III)段丘
季 原 段 丘	砂礫段丘 IV +		土潜段丘
回 立 段 丘	砂礫段丘 V		

第1表 河岸段丘の区分の比較

域を取り上げ、板井沢段丘をfilltop terrace(砂礫堆積段丘)、南郷段丘を板井沢段丘を侵食したfillstrath terrace(砂礫侵食面段丘)であると考えた。さらには14Cの年代測定資料から、板井沢・南郷両段丘の形成年代を約23,000年前よりも新しく、約12,000年前よりも古いと考えている。

## ②段丘の区分と対比

本稿では、これまでの研究の中から、TOYOSHIMA(1984)の段丘の区分を踏襲しながらも、南郷段丘をさらにI~IIIの3つに区分し、現河床とほとんど同じ高度の最も低い段丘を「土潜段丘」と命名した。(第1表)

中川ほか(1971)の外山段丘と回立段丘及び秋田県(1976)の砂礫段丘Vは、調査地域内には分

布しないので、本稿では省略した。

#### a 横手沢段丘

調査地域内では最も高位の段丘で、模式地は横手市の横手沢両岸であるが、本地域では、相野々～落合の黒沢川左岸と横手川の大畠にわずかに分布する。標高は相野々付近では140～160mであるが、落合では高度を増し、180～200mとなる。かなり開析が進んだ段丘面がみられる。堆積物については不明である。

#### b 岩瀬段丘

調査地域中央鶴ヶ池付近とその対岸である小田遺跡周辺、及び相野々南西に分布する。標高は120～130mで段丘面の開析度は横手沢段丘よりも小さく、平坦面が残る。安山岩を主体とする最大直径50cmの風化した円礫層が5m以上堆積しており、その上に1～2.5mの角礫交じりの砂質粘土層が発達している。本段丘は中川ほか(1971)によると、下末吉面(約12～13万年前)に対比される。

#### c 板井沢段丘

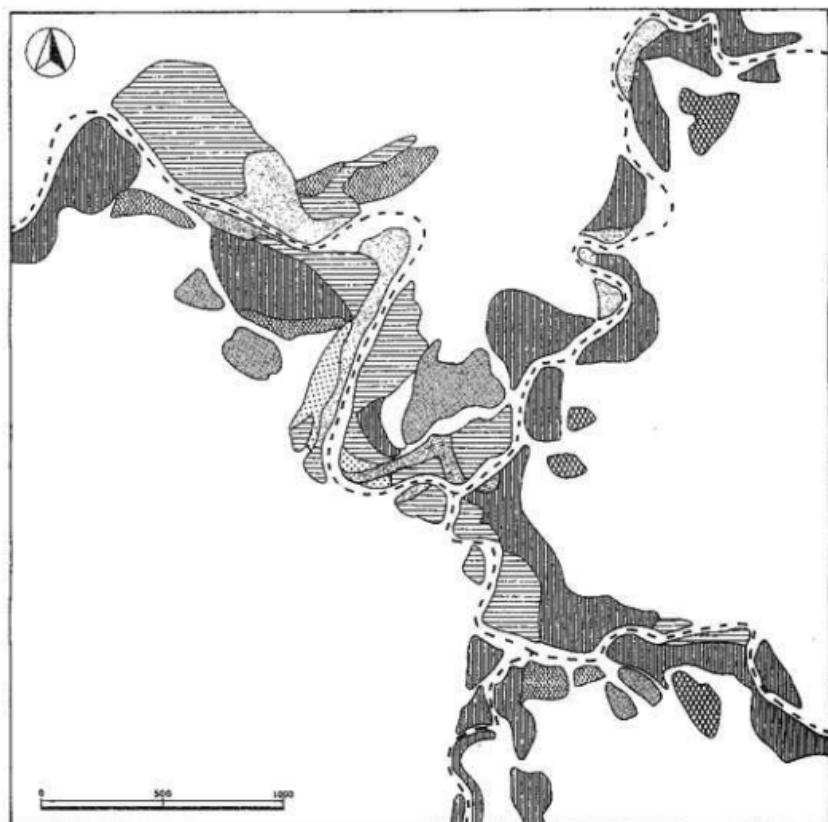
下位の南郷段丘の山沿いに断片的に分布し、板井沢東方、その対岸の茂竹沢付近、相野々南方などでみられる。段丘面が山側から河谷側に傾斜し、標高は110～140mに及ぶ。本調査では確認できなかったが、TOYOSHIMA(1984)によると、本段丘はfilltop terrace(砂礫堆積面段丘)でその構成層は砂やシルトが多く含む亜円礫・亜角礫からなり、層厚は10m以上にも達する。岡田ほか(1972)によると、本段丘に対比される横手川上流の三又付近の段丘堆積物の上部の泥炭から $23,200 \pm 1,000$  yr B.P.という<sup>14</sup>C年代が得られており、本段丘の堆積面は約23,000年以後に形成されたことが明らかになっている。

#### d 南郷段丘

本地域に最も広く分布する段丘で、横手川・黒沢川の沿って連続的に跡をたどることができる。TOYOSHIMA(1984)では同一の段丘と考えていたが、段丘崖がまとめられることや標高の違いから、本稿ではI・II・IIIの3段丘に細分した。標高は、岩瀬付近では南郷I段丘が107～110m、南郷II段丘が104～106m、南郷III段丘が101～103mである。

TOYOSHIMA(1984)によると、本段丘はfillstrath terrace(砂礫侵食面段丘)で、板井沢段丘を侵食して形成され、埋設堆積物の上に2～5mの薄い円礫層が堆積している。本調査では、埋設堆積物の上に薄い円礫層が堆積している露頭は発見できなかったが、南郷I～IIIのいずれの段丘にも厚さが5m以下の薄い円礫層が堆積していることを確認できた。

TOYOSHIMAは横手川上流で南郷段丘を覆う沖積堆に含まれる木片から $12,780 \pm 340$  yr B.P.という<sup>14</sup>C年代を得ている。したがって、南郷I段丘は少なくとも約12,000年前には形成されていたことが明らかである。TOYOSHIMAは、板井沢段丘と南郷段丘にみられる河谷の堆積



---- 河川  
[Hatched] 横手沢段丘  
[Hatched] 岩瀬段丘  
[Hatched] 板井沢段丘

[Vertical Lines] 南郷I段丘  
[Horizontal Lines] 南郷II段丘  
[Diagonal Lines] 南郷III段丘  
[Cross-Hatch] 土淵段丘

第5図 調査地域の段丘区分図

と侵食は、東北地方の山間地域の諸河川流域では数多くみられることを、現地調査によって確かめており、このような河岸段丘の形成が最終氷期後半に東北地方で一般的であったと考えている。

#### e 土瀬段丘

本地域で最も低位の沖積段丘で、土瀬から板井沢にかけてと、黒沢川の現河川沿いに断片的に分布する。標高は岩瀬付近で98～100mであり、相野々駅北では段丘面が旧河道として残っている。堆積物は現河床とおなじような円礫であるが、厚さは不明である。

## 2 遺跡の地形と地質

本遺跡は横手川左岸、標高135～138mの台地(台地A-A・B区)とその北西にある標高125～130mの小台地(台地B-C区)およびそれらの台地の西側斜面に位置している。

台地Aは岩瀬段丘に対比される横手川の河岸段丘で、横手川の河岸段丘の中では2番目に高い段丘である。岩瀬段丘は、中川ほか(1970)では下末吉面(約12～13万年前)に対比している。

段丘面の最南端にある露頭では、基盤の硬質泥岩(山内層)の上に、層厚1～1.2mの礫層を基底に含む層厚4～4.5mの砂礫層が堆積しているのを観察できる。礫層は最大直徑約20cmの円礫層で風化がすんでおり、岩瀬遺跡(南郷Ⅲ段丘)や小田IV遺跡の礫とは明瞭な違いがある。

台地Bは台地Aよりも10m程低く、小田IV遺跡が位置する標高130mの丘と同じ時期に形成されたものと推測されるが、露頭がなく詳細は不明である。

## 参考文献

秋田県「雄平仙中核都市建設計画地域土地分類基本調査 横手」(1976)

秋田県「秋田県総合地質図幅 横手」(1977)

中川久夫ほか「北上線沿線の段丘群」東北大地質古生物研報 No71 p47-59(1971)

岡田篤正ほか「奥羽山脈内秋田県平鹿郡山内村三又における堆積段丘の形成年代」地球科学26  
p263-264 (1972)

TOYOSHIMA,M. 「The Sequence of River Terrace Development in the Last 20,000 Years  
in the Ou Backbone Range,Northeastern Japan」 Reprinted from the  
Science Reports of the Tohoku University, 7th Series (Geography)  
34 2(1984)

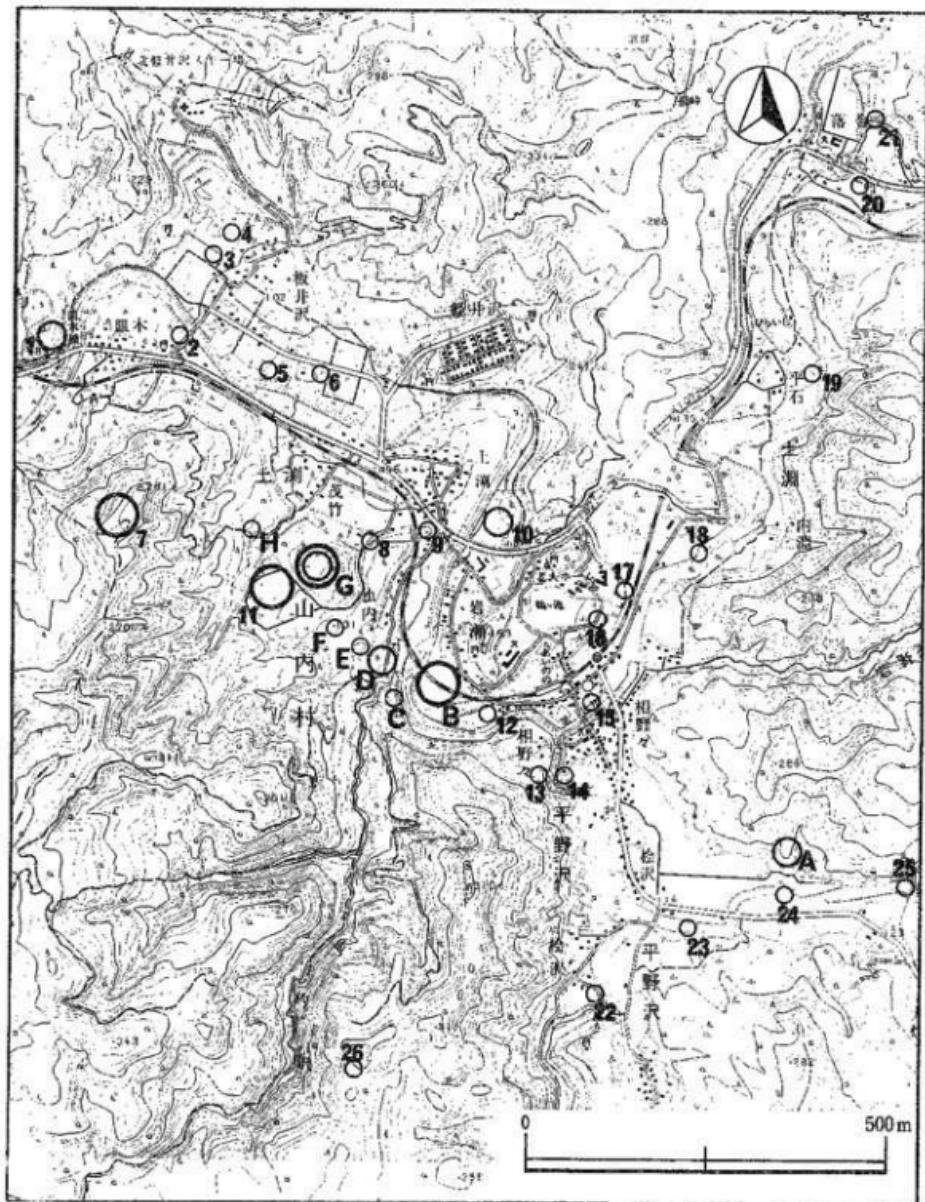
豊島正幸「過去2万年の下刻過程にみられる10年オーダーの侵食段丘形成」地形 10 4  
p309-321 (1989)

### 第3節 周辺の遺跡

小田V遺跡のある山内村管内には、「秋田県遺跡地図(県南版)」によれば41の遺跡が掲載されており、これに東北横断自動車道秋田線の建設に伴い新たに10遺跡が加わり51の遺跡が確認されている。これら遺跡のうち発掘調査が行われて時代や性格が明らかになっているのは、高速道路建設に係わって調査された9遺跡を除くと僅かに神成遺跡(22)と道地遺跡(10)だけである。旧石器時代の遺跡はこれまで確認されていない。縄文時代になると岩瀬遺跡(B)で草創期の爪形文土器に伴って石匙や両面調整石器などのほか、同時期の集石炉や石器製作跡も検出されている。岩瀬遺跡ではこれに後続する早期井草式期～貝殻文土器の時期の土器や石器のほか草創期と同様な遺構が調査されている。早期終末～前期初頭では、虫内I遺跡(D)・虫内III遺跡(C)・小田IV遺跡(F)で土器が確認されている。前期前半から前期の終末にかけては、茂竹沢遺跡(H)・虫内II遺跡(E)・虫内III遺跡・岩瀬遺跡・上谷地遺跡(A)で土器が出土していてこれに伴う石鏟を始めとする石器・剥片類が多く出土している。中期後半～後期初頭にかけては神成遺跡・道地遺跡・上谷地遺跡・虫内III遺跡・小田IV遺跡で竪穴住居跡が調査されている。神成遺跡は昭和34年に大和久慶平氏によって発掘調査が行われており、道地遺跡は昭和59年に山内村教育委員会により発掘調査が行われ、中期終末の大木10式期の竪穴住居跡5軒のほか土坑などが検出されている。また小田IV遺跡でも後期初頭の竪穴住居跡9軒が検出されている。後期前半から中頃にかけては越上遺跡(第2図-1)・茂竹沢遺跡がある。越上遺跡では後期中葉十腰内II式を中心とする捨て場が調査されており、茂竹沢遺跡でも2軒の竪穴住居跡が検出されている。縄文時代後期後半から晚期前半には虫内I遺跡を中心として小田IV遺跡・虫内II遺跡・虫内III遺跡をも含めた広大な墓域が形成されている。この墓域では土坑墓と土器棺墓から構成され、土坑墓はそれぞれの遺跡内でいくつかのまとまりがあり、また虫内I遺跡では墓域内に広い捨て場が形成されていて、膨大な量の遺物が出土している。この時期の集落遺跡がこれまでに確認されていないが、このほか晚期の遺跡として檜沢遺跡(21)・赤淵遺跡(5)・三明岡遺跡(12)・相野々遺跡(13)などがある。

弥生時代の遺物は越上遺跡・小田V遺跡で出土しているが、それ以降の時代の遺跡については、城館跡以外には明確ではない。しかしながら、茂竹沢遺跡では16～18世紀と考えられる建物跡が検出されていて、菅江真澄の『雪の出羽路』に見られる「此茂竹に寺ノ跡あり、・・・」でいうところの寺ノ跡に相当するものと考えられている。

山内村管内における遺跡には縄文時代の遺跡が圧倒的に多く、旧石器時代や弥生時代、平安時代の遺跡は確認されておらず、それ以降の時代の遺跡では城館跡13があるだけである。しか



第6図 小田V遺跡と周辺の遺跡

しながら今回の高速道路建設に伴う分布、範囲確認調査だけでも新たに10遺跡の発見があり、その中でも低位段丘上に縄文時代草創期の遺構が確認された岩瀬遺跡や虫内Ⅰ遺跡を中心とする縄文時代晚期の大規模な墓域が調査されるなど、この地域における歴史研究の貴重な資料が蓄積されることになる。こうしたことからも、いまだ不明な時代の遺跡についても今後数多く確認されるものと考えられる。

#### 引用・参考文献

- 1 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 2 高橋則夫「遺跡、ひとり歩き」「山内村郷土史年報」山内村郷土史編纂委員会 1983(昭和58年)
- 3 山田貞吉「道地遺跡発掘調査報告」「山内村郷土史年報」山内村郷土史編纂委員会 1984(昭和59年)
- 4 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地区(県南版)』1987(昭和62年)
- 5 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集 1989(平成元年)
- 6 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3年)
- 7 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第226集 1992(平成4年)
- 8 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第239集 1993(平成5年)
- 9 秋田県教育委員会『東北横断自動車道東和秋田線発掘調査報告書XⅢ-茂竹沢遺跡-』  
秋田県文化財調査報告書第233集 1993(平成5年)
- 10 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIV-虫内Ⅱ遺跡-』  
秋田県文化財調査報告書第234集 1993(平成5年)
- 11 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XV-越上遺跡-』  
秋田県文化財調査報告書第235集 1993(平成5年)
- 12 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVI-上谷地遺跡-』  
秋田県文化財調査報告書第241集 1994(平成6年)
- 13 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVII-虫内Ⅲ遺跡-』  
秋田県文化財調査報告書第242集 1994(平成6年)
- 14 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVIII-小田Ⅳ遺跡-』  
秋田県文化財調査報告書第243集 1994(平成6年)
- 15 内田武志・宮本常一「雪の出羽路 平鹿郡」『舊江真澄全集 第六巻 地誌II』 未来社  
1976(昭和51年)
- 16 秋田県農政部農地整備課『雄平仙中核都市建設計画地域土地分類基本調査 横手』1977(昭和52年)
- 17 秋田県埋蔵文化財センター「もうすぐ歴史が見えてくる-東北横断自動車道秋田線  
(秋田市-山内村間)発掘調査終了記念誌-』1994(平成6年)

編番	遺跡名	地図番号	在地	時代	文献番号
1	大沢館	63-15	山内村大沢字矢櫃	館跡	1・4
2	眞木	63-28	山内村土瀬字君ヶ原	縄文時代	4
3	板屋沢Ⅱ	63-29	山内村土瀬字板屋沢	縄文時代	4
4	板屋沢	63-1	山内村土瀬字板屋沢	縄文時代	2・4
5	赤瀬	63-3	山内村土瀬字板井沢	縄文時代晚期	2・4
6	板井沢	63-30	山内村土瀬字板井沢	縄文時代	4
7	眞木館	63-16	山内村土瀬字眞木上段	館跡	1・4・15
8	小田	63-31	山内村土瀬字小田	縄文時代	4
9	小田Ⅲ	63-33	山内村土瀬字小田	縄文時代	4
10	道地	63-1	山内村土瀬字道地	縄文時代中期	3・4
11	小田Ⅱ	63-32	山内村土瀬字小田	縄文時代	4
12	中島	63-34	山内村土瀬字中島	縄文時代	4
13	三明岡	63-5	山内村平野沢字三明岡	縄文時代晚期	4
14	相野々	63-8	山内村土瀬字相野々	縄文時代晚期	4・10
15	二瀬	63-7	山内村土瀬字二瀬	縄文時代	4
16	鶴ヶ池	63-6	山内村土瀬字鶴ヶ池	縄文時代	4
17	和田城	63-17	山内村土瀬字和田城	館跡	1・4
18	菅生	63-35	山内村土瀬字菅生	縄文時代	4
19	平石	63-36	山内村土瀬字菅生	縄文時代	4
20	霜燒野	63-37	山内村大松川字霜燒野	縄文時代	4
21	上台	63-10	山内村大松川字上台	縄文時代	2・4
22	檜沢	63-38	山内村平野沢字檜沢	縄文時代晚期	4
23	神成	63-9	山内村土瀬字神成	縄文時代中・後期	4
24	力石	63-39	山内村茂字力石	縄文時代	4
25	力石Ⅱ	63-45	山内村大松川字力石	縄文時代中期	10
26	谷地端	63-2	山内村土瀬字小貝	縄文時代	2・4
A	上谷地		山内村平野沢字上谷地	縄文時代前期～後期	5・10・12
B	岩瀬		山内村土瀬字岩瀬	縄文時代草創期～晚期	5・7
C	虫内Ⅲ		山内村土瀬字虫内	縄文時代早期～晚期	8・13
D	虫内Ⅰ		山内村土瀬字虫内	縄文時代早期・後期・晚期	2・4・5・6
E	虫内Ⅱ		山内村土瀬字虫内	縄文時代前期～晚期	4・5・7・10
F	小田Ⅳ		山内村土瀬字小田	縄文時代早期～晚期	8・14
G	小田Ⅴ		山内村土瀬字小田	縄文時代早期～晚期、弥生時代	8
H	茂竹沢		山内村土瀬字茂竹沢	縄文時代前期～晚期、中世、近世	4・5・7・9・15

登録番号は、秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』に登録されている番号である。

文献番号は前頁の引用・参考文献の番号に対応する。

第2表 周辺の遺跡

## 第3章 調査の概要

### 第1節 遺跡の概要

遺跡が立地する中位段丘面は、段丘面形成後の開析作用によって中小の沢が入り込み複雑な地形をなし、あたかも遺跡部分が独立丘状を呈する。この中位段丘面は、標高136～138mの面と、その西～南に広がる標高125～130mの2面(便宜上、前者を上位面、後者を下位面と呼ぶ)からなり、東西には北側から入り込む2つの沢がある。2つの沢のうち西側の茂竹沢からは東に入り込む小沢があり、この小沢によって北側の小田V遺跡と南側の小田II遺跡が分けられている。

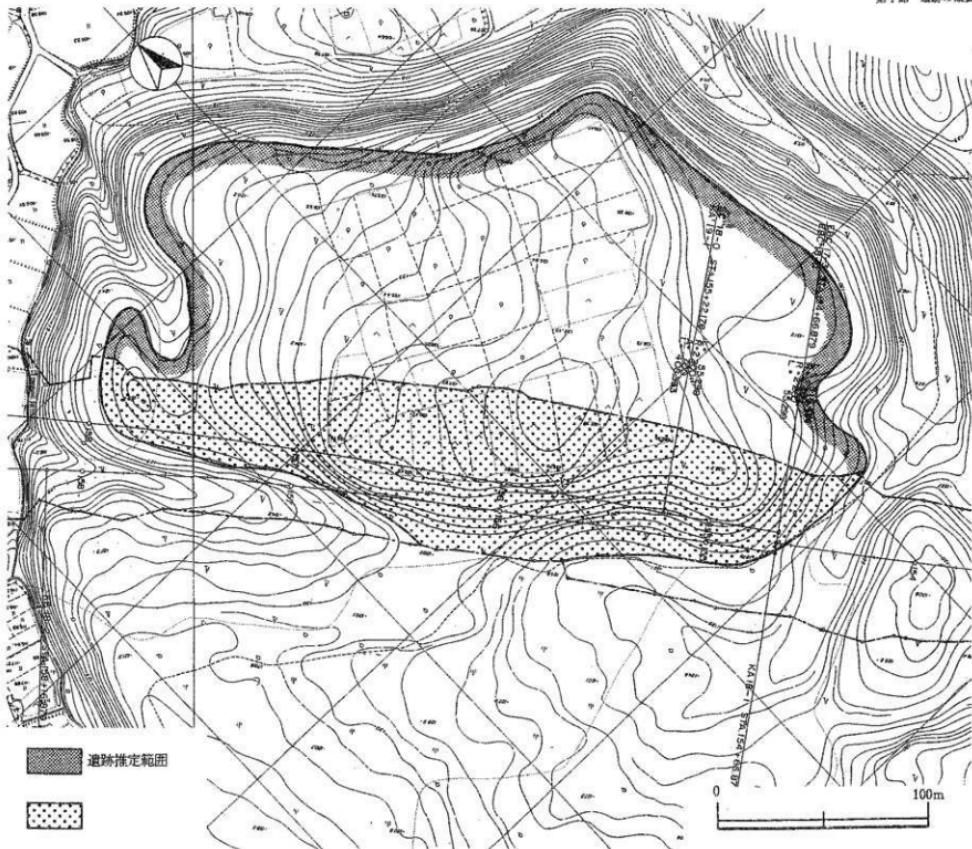
小田V遺跡は、標高136～138mの東西・南北約150mの平坦面とその西側の標高125～130mの平坦面及び上位平坦面の周囲の斜面とからなり、その推定面積は東西約300m、南北約200mの58,000m<sup>2</sup>である。このうち、今回の発掘調査対象区は、遺跡南西辺に当たる19,800m<sup>2</sup>である。今回は、調査区を地形から大きくA・B・Cの3区に分けて行った。東側から、上位平坦面南側斜面(A区)、上位平坦面とその西側斜面(B区)、下位平坦面及び上位平坦面に続く斜面(C区)である。

発掘調査前の現況は、B区の上位平坦面がブドウを主とする畠であった以外は、全て山林で、C区西側がコナラ・クリを主とする雜木林、他は植生されて数十年を経た杉林であった。

### 第2節 調査の方法

調査の方法はグリッド法を採用した。調査区内には工事用中心杭が20m毎に打設されており、このうちのSTA156+00を選定し、原点MA50とした。さらにMA50を起点として、国家座標第X系の座標に合わせて一辺4mのグリッドを設定した。座標軸のうち東西方向には東から西へアルファベット2文字の組み合わせ(LA→LT→MA→MT→NA)を、南北方向には南から北に昇順する2桁の算用数字を付し、各グリッド杭にはこの組み合わせ(MB50など)を記入した。グリッドの名称は、各グリッドの南東隅の杭の名称を与えている。

小田V遺跡の調査範囲は東西に連なる2つの段丘面を中心として、東西350mと広範になるため調査は、A区(40ライン以南)・B区(40～70ライン)・C区(70ライン以北)の3区に分割して行なった。



第7図 遺跡の推定範囲と発掘調査区

調査は、範囲確認調査の結果から耕作土の厚いB区については重機で表土を除去したが、A・C区については人力で掘り下げを行った。

遺構については可能な限り掘り込み面での確認に努めたが、A・B区では地山面まで削平された地域が多く、C区では木の根による擾乱などが著しく多くの遺構は地山面での検出となつた。遺構の調査は主に二分割法と四分割法を用い、記録については常に図面と写真を併用して行い、図面は平面図と断面図のはか遺構によってはエレベーション図を作成した。作図はグリッド杭を利用した造り方測量により1/20縮尺を原則としたが、土器埋設遺構など1/10縮尺で行った遺構もある。

確認した遺構にはその形態に応じて例言で示した略号と確認順に通し番号を付したが、精査や整理段階での検討結果から、遺構とは判断されなかったものは欠番に、略号が適切でなかつたものは略号を変更した。なお、A・B・C区の調査を並行して行うことによる遺構番号の混同をさけるため、遺構番号をA区は01～1000、B区は1001～2000、C区は2001～3000の番号を付すこととした。

遺物の取り扱いについては、遺構外出土の遺物については原則として各グリッド単位で可能な限り層位ごとに、また遺構から出土する遺物については出土地点と出土レベルを図面に記録した上で、各遺物には遺跡名・グリッド名・出土層位・出土年月日を記入したラベルを添えている。

写真は、原則として35mmのモノクロフィルム、リバーサルフィルム、カラーフィルムを併用して撮影した。整理作業は遺構については実測図をもとに第2原図を作成し、遺物については洗浄・注記の後選別し、実測図・拓影図を作成した上で写真撮影を行った。

### 第3節 調査経過

調査は平成5年5月6日から開始した。ベルトコンベア・発電機など発掘機材の搬入やブレハブハウスの設置もおよそ2週間ほどで終了する。この間、調査区内に排土場所を必要とするため、範囲確認調査によって遺構数・出土遺物量の最も希薄なB区の南西斜面を優先的に調査を進め、6月2日までに排土場所予定地の調査を終了している。その後排土の崩落を防止するための土留柵の設置を行った。

A・B区の調査は、調査区の南東側から北西に向かって表土除去を行い、遺構の検出に努めた。またC区は、範囲確認時のトレチ調査による盛土の撤出から作業を行っている。

5月20日 A区KS30グリッドでSK01、KS28・29グリッドにかけてSI05を確認し、これら遺構

の精査を開始する。

C区では、ベルトコンベアの設置や盛土と枯れ枝の除去などを終了し遺構の検出作業も開始する。

5月26日C区NH91グリッドで2基の土坑(SK2003・2004)を確認し、精査を行う。SK2003は断面がピーカー状を呈する大型の土坑であることが分かった。調査区の北側で多数の土坑を確認する。また焼土遺構や石器剥片の集中する箇所を確認する。

5月27日A区東南端の斜面上でSI07を確認し、半截した結果中央に地床炉があり、壁溝を有する竪穴住居跡であることが明らかになった。

6月7日A区で精査中のSI05とSI07の調査を終了する。両竪穴住居跡とも南側がすでに崩壊しており、またSI05は風倒木痕によって西側床面に地山跡が露頭していた。

6月24日遺構検出作業はA区からB区へと移行し、A区ではこれまで検出した土坑や陥し穴の精査を並行して行う。特に陥し穴は長軸を等高線にほぼ並行させて作られていることがわかる。6月30日C区ではすでに土坑を中心に、40以上の遺構を検出し精査を継続している。これら土坑には底面にピットや放射状の溝を有するものがあることが分かる。また遺構外からは、縄文時代前期や中期の土器片とともに石器などの石器や剥片が多く出土する。

7月15日A区の陥し穴を主体とする遺構の調査を終了し、B区の調査に主力を移行する。B区平坦部の南西端部の微高地にSI1032と円形や橢円形の土坑を検出し、精査を実施する。

SI1032は壁がすでに削平を受けていて柱穴のみが残っていたもので、柱穴からは縄文時代晚期の土器片が出土する。SI1032南西側の土坑には橢円形のものと円形の土坑があることがわかり、このうちSK1023は平面が円形で断面が袋状を呈する土坑であるが、土坑中央部に縄文時代後期後半の完形土器が正立していて中から骨粉が確認されたことから土坑墓の可能性が強いものと判断された。またSK1027・1028は橢円形を呈する深さ20cm前後の土坑で、縄文時代晚期の土器が出土していてSI1032と関連するものと考えられた。

7月21日NG85グリッドを中心に不整形な落ち込みを確認しSX2060として精査したところ竪穴住居跡であることが判かる。

8月初旬、3基の陥し穴をB区で確認し、先に検出した土坑とともに精査を継続し、これら遺構の調査を9月初旬に終了した。

8月3日林謙作専門指導員から現地にて、指導を受ける。C区の土坑で底面にピットや溝を有するのは岩手県内に類例が多いことや、C区出土土器は前期上川名II式～大木7式までと、続縄文の土器があり、特に前期大木式を中心であるなどの指導を受けた。

9月初旬からはB区の地山面における地形測量やこれまでに調査の終了した遺構の図面チェック

クなどを行い、C区の調査に合流する。

C区ではSI2074とSI2075の調査を終了する。SI2074では住居壁が明確でなく、柱穴も判然としないものの炉の状況から建て替える可能性のあることが判明し、SI2075では柱穴が明らかでないものの床面の堅さから全体プランを把握する。

9月16・17日岡村道雄専門指導員が来跡され種々指導を受ける。

9月中旬C区北西端部で重複のある多數の土坑を確認する。重複関係が複雑なため精査作業を慎重に進める。土坑には断面が円筒状やビーカー状を呈して、底面にピットや溝のある土坑が多い。

9月下旬C区北西端部の土坑群の精査を継続しながら、MT・NA76・77グリッドを中心とする地域でSK2101を初めとして10基ほどの遺構を確認し精査作業を進める。

9月28日遺跡の航空写真撮影を行う。

10月中旬精査作業を行っていた遺構の調査を終了し、図面のチェック・遺物の確認・撤収作業を行う>

11月19日出土遺物や発掘機材の搬出を行い小田V遺跡の調査を全て終了し、原因者である道路公団に遺跡地の引き渡しを行った。

## 第4章 A・B区の調査の記録

A・B区とも同一段丘面上にあることや、陥し穴など共通する遺構が確認されていることからここでは、一括して記述することとする。

なお、遺構番号については調査段階での番号をそのまま踏襲している。

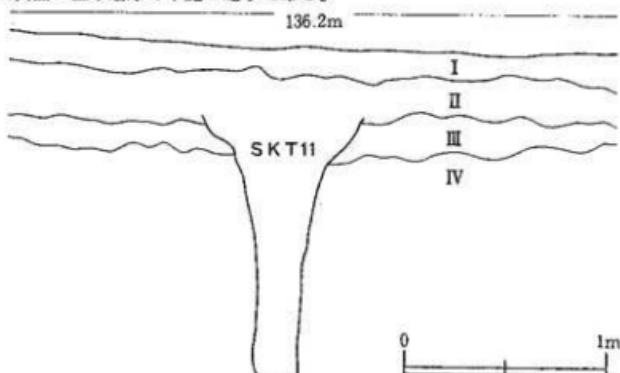
### 第1節 A・B区の概要と基本層序

#### 1 A・B区の概要

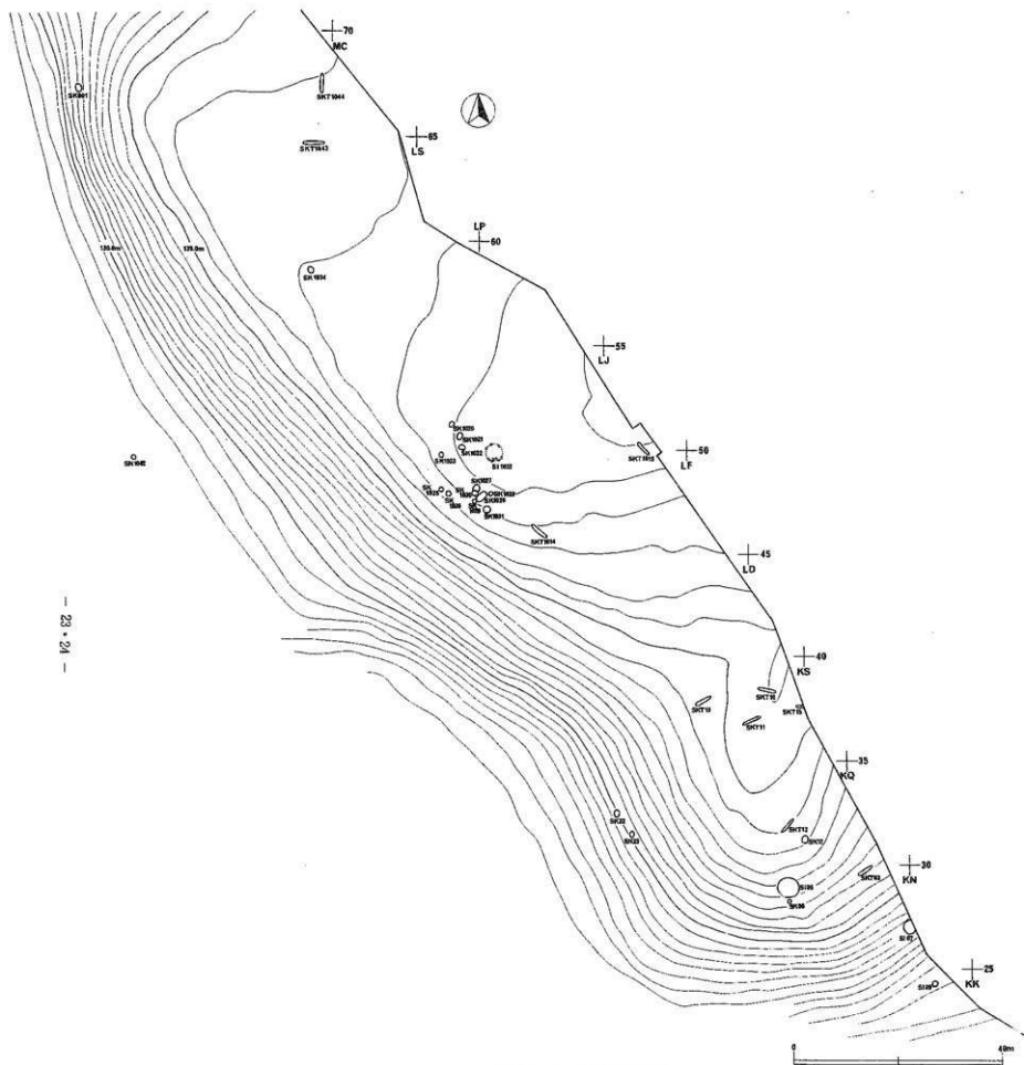
A・B区は、推定される遺跡範囲の南東側の地域で、標高135～137mの平坦部とその南側斜面一帯を含む地域である。A区の南側斜面は前年に調査された小田IV遺跡に面していて、この斜面では2軒の竪穴住居跡を検出したが、2軒とも住居南側は崩落している。またB区中央部の西側にわずかに張り出した平坦部には1軒の住居跡のほか10基の土坑がある。このほか南側斜面からB区の平坦部にかけて10基の陥し穴坑があり、南西斜面では標高130mの高さに2基の底面に柱穴を有し断面が円筒状の土坑を検出している。これらの遺構は、全て縄文時代に帰属するものである。

#### 2 基本層序(第8図)

A・B区は平坦部が幾度か造成されいて、薄い表土(腐食土)下に二次的に堆積した褐色土が存在するだけである。従って平坦部における遺構は全て地山面で検出している。南から南西部にかけての斜面の基本層序は下記の通りである。



第8図 A・B区基本土層図



第9図 A・B区測点配置図

I層 黒褐色土(7.5YR3/2) 植物根が多量に混入し、間隙の多い土で表土である。

II層 暗褐色土(7.5YR3/4) 堅くしまりのある土である。

III層 褐色土(7.5YR4/6) 漸移層でしまりのない土である。SKT11、SKT13などはこの層まで壁の立ち上がりのラインが明らかであり、遺構の掘り込み面はII層中と考えられる。

IV層 明褐色土(7.5YR5/6) 地山である。

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 1 竪穴住居跡

S105(第10~12図、図版2・8・10)

KS・KT28・29の4グリッドにかけて検出した。確認面は地山面で、北側から南側に傾斜しているため住居の南側床面と壁は崩壊したものと考えられ、また東側では風倒木痕によって地山跡が床面に露頭する部分もある。確認できた壁から推測すると住居の規模はおよそ直径400cmほど、住居壁の高さは北側で15cmほどで、床面は比較的軟らかい。

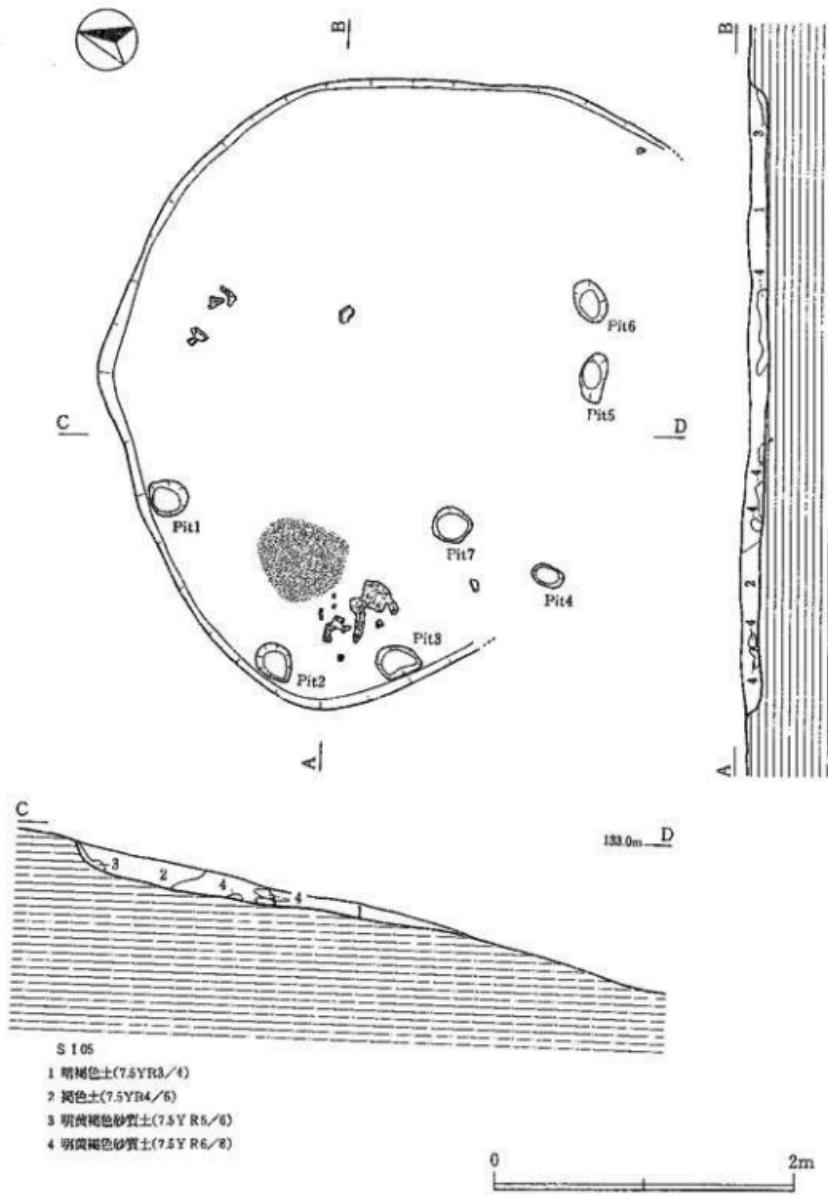
炉は地床炉で、西側に寄った部分で60×70cmの範囲に堅くしまった焼土があり、その南側には炭化材が床面よりわずかに浮いた状態で広がっている。柱穴は壁に沿うpit1~4が考えられそれぞれ床面からの深さは10cm前後である。

出土遺物はS5・S6・S7・S9・S10・S11は床面から、S1は炉の焼土から他は覆土中から出土していてS3・S4・S5は覆土の箇分けによって確認したものである。

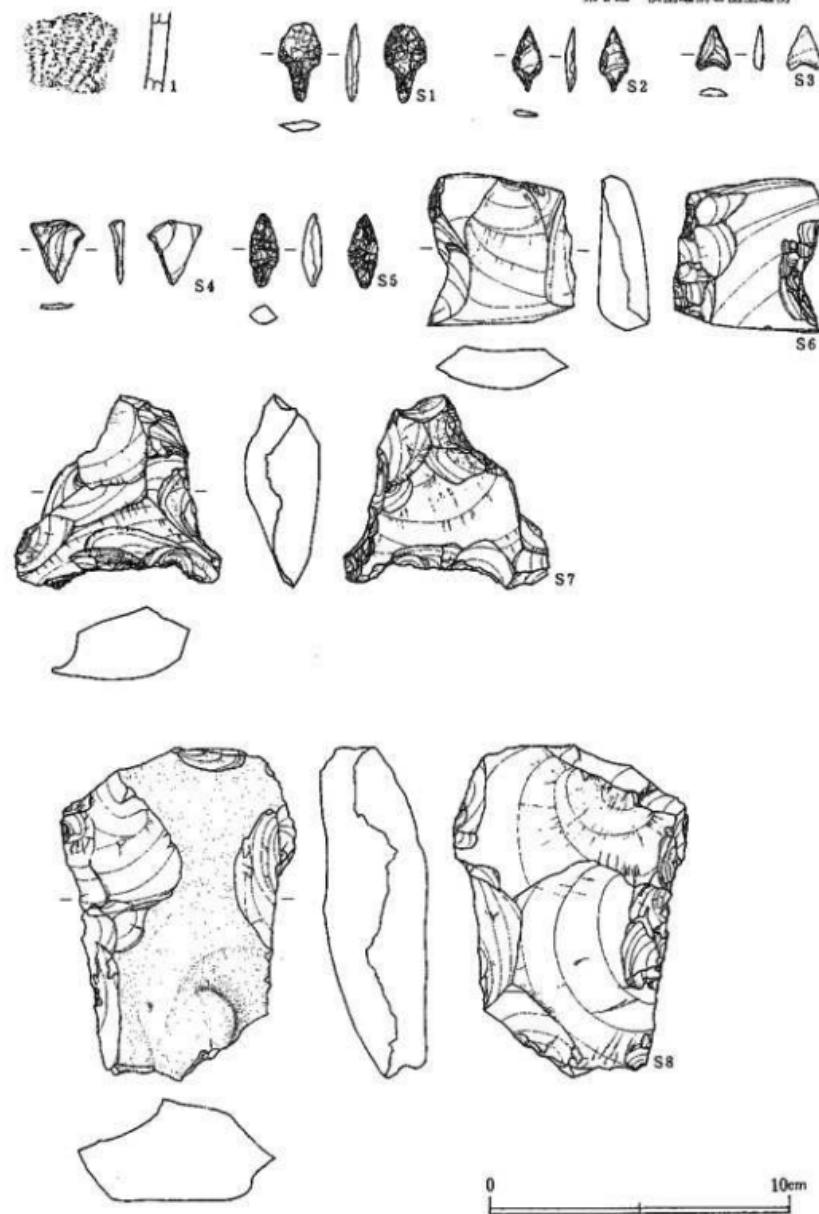
土器1はLR縄文が付され、胎土に砂粒を含むものの焼成は良好である。

石器の素材はいずれも頁岩で、S1は二次的に火熱を受けていて表面が剥落している。S2とS3は極めて小型の石鏟で両面に先行剥離面を広く残し、縁辺にのみ調整を加えており、未製品と思われる。S4・S5は石錐で前者は素材となる剥片の縁辺にのみ調整を加えていて、後者は全面に細かな剥離を加えたもので先端部は丸くなっている。S6・S7・S9・S10・S11は同一じ母岩から剥取されたものである。S7は3辺に加工痕跡のある剥片、S8は自然面の残る剥片である。S9とS11は石核で、S9では湾曲した面を作業面として片側から3枚の剥片が取られている。S11も同様で片側で3枚ほど剥片を得ていてS10はそのうちのひとつである。S10は打面とは反対の一端に細かな調整が見られる。S6も本来石核と考えられ両側縁に調整を施している。

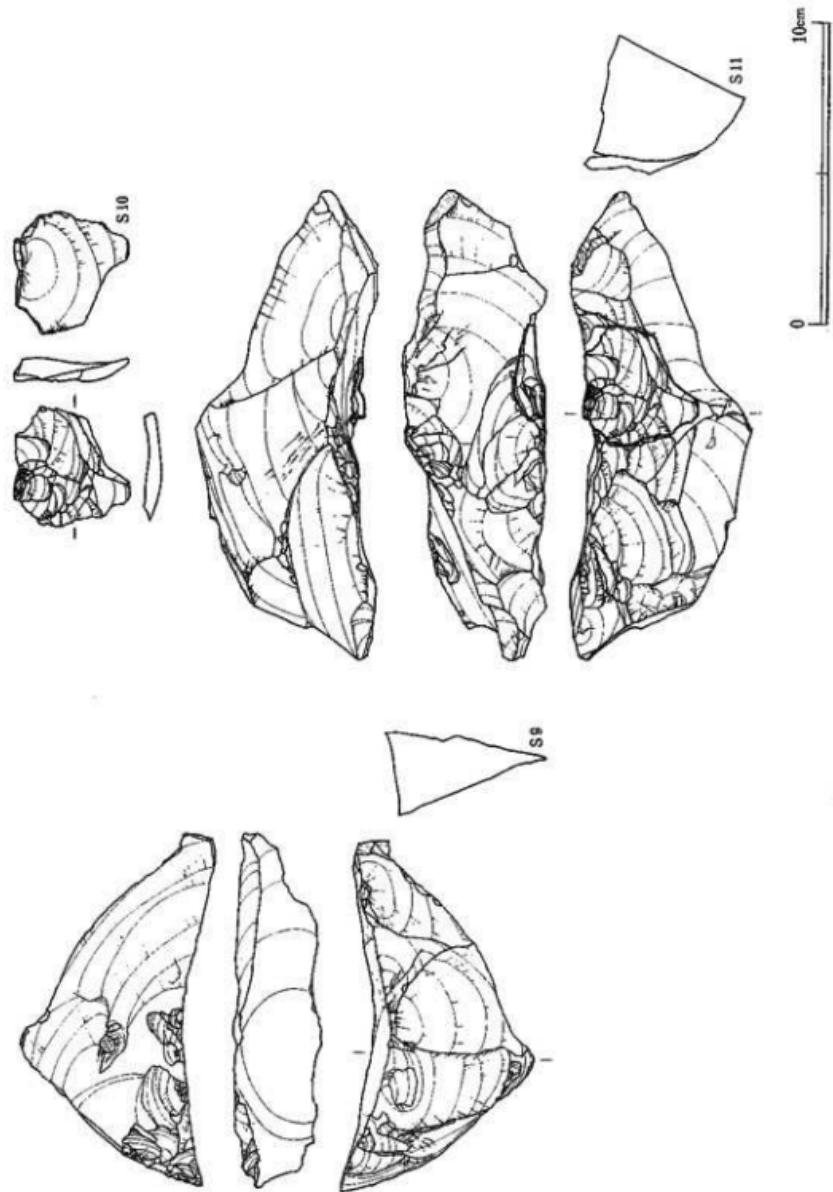
本住居跡の時期について土器が1点のみで明確にはできないが、炉の南側に広がる炭火材の年代測定からは2,910B.Cという年代が得られており、この結果からすればおよそ縄文時代中期と考えられる。また出土遺物に石核や未製品の石器があることから本住居内で石器製作が行



第10図 S 105整穴住居跡



第11図 S105竪穴住居出土遺物（1）



第12図 S105壁穴住居跡出土遺物（2）

われていた可能性がある。

さらに炭火材の樹種同定からはこの材木がコナラの一種で住居構築材とする結果が得られているが、本住居の床面が焼けていないことなどからもこの住居が焼失住居であったとする積極的な資料は得られていない。

#### S I 07(第13図、図版3・8)

KM・KN26・27グリッドにかけて地山面で確認したが、東側が調査区域外であり、また南側は斜面のため壁・床面とも崩落していて住居全体の1/4ほどを検出したことになる。住居の規模と形態は検出できた南西側の壁と炉の位置から直径約300cmの円形を呈するものと考えられる。

住居掘り込み面は基本層位のII層以下で、北西側の壁は地山を約50cm掘り下げていて、床面は炉を中心に堅くしまり、北西側では壁から内側に20cm離れて幅10~15cmの溝が巡るが柱穴は住居内外とも確認できなかった。

炉は地床炉で住居中央に位置し、厚さ5~10cm、40×80cmの範囲に広がる焼土下に直径15cmで断面が摺鉢状の浅い掘り込みがある。焼土南側からは壺形土器4が押し潰された状態で出土した。

出土土器2はR L繩文の付された体部片で、胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。3は無文で、外反する口縁部とR L繩文の付される体部が浅い沈線で画される。4は炉の南側から一括して出土した壺形土器で、丸みのある口唇から外反する口縁部、「く」の字に屈曲する頸部からそろばん玉状を呈する体部に至るもので、底部は平坦である。無文の口縁部には横ナデの整形痕が明瞭に残り、体部には太いL R繩文が条を横にして付されている。

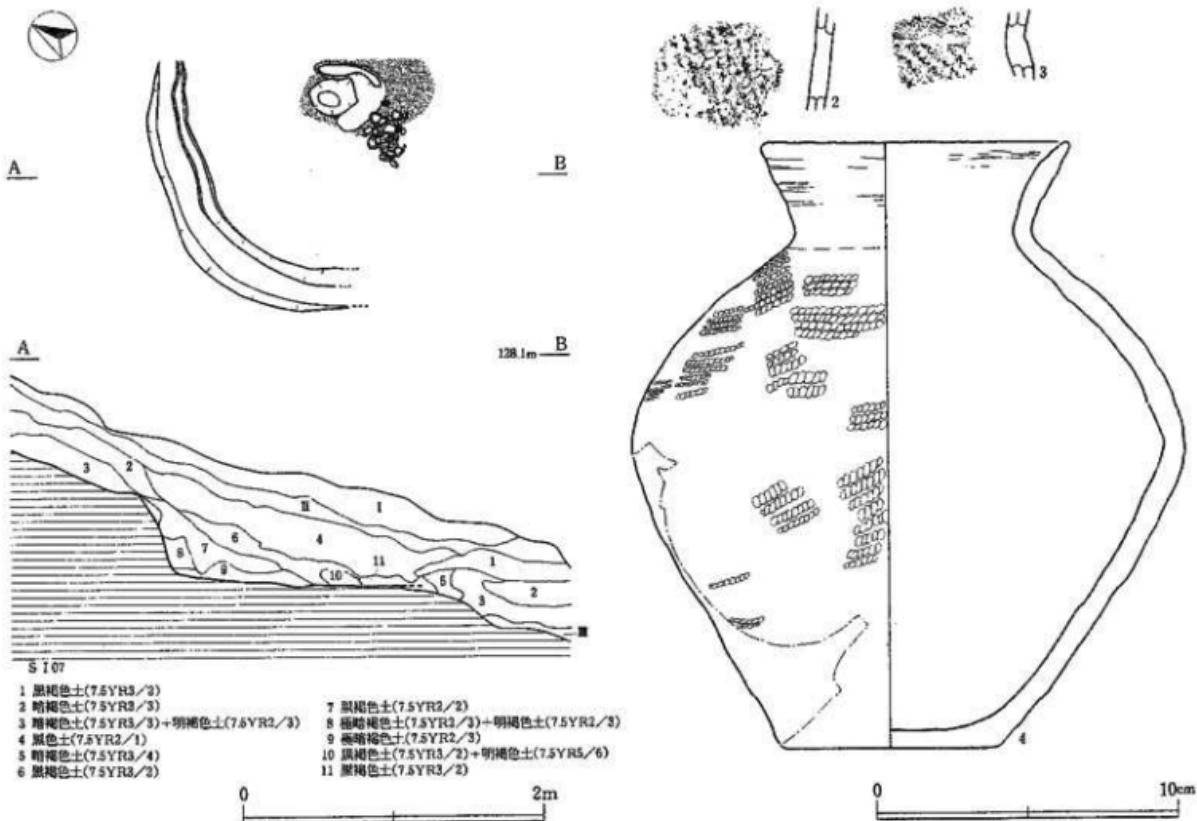
本住居跡の時期は、4の壺形土器から繩文時代晩期後半大洞A式期と考えられる。

#### S I 1032(第14図、図版3・8)

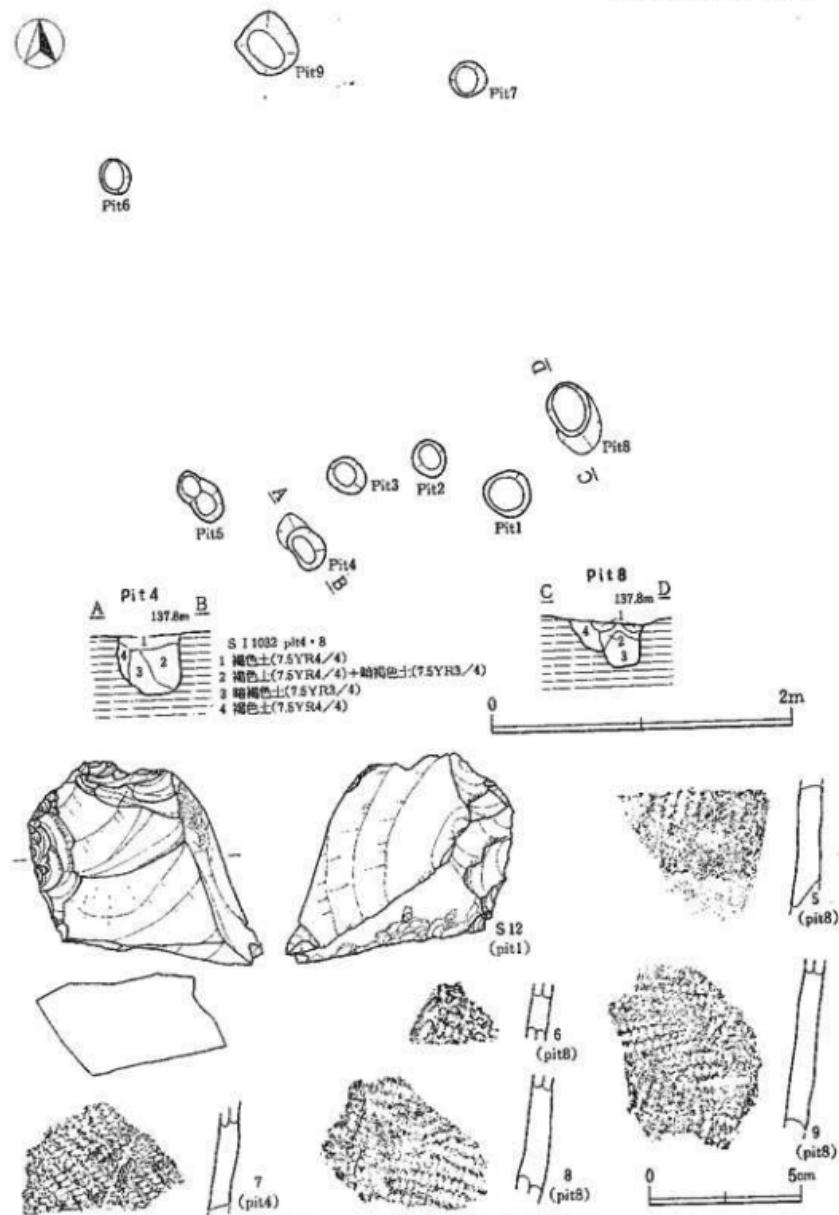
B区中央の西端部でS K 1023などの土坑がある地域で、LN・LO49・50にかけて地山面で確認したものである。住居の壁は既に削平されたものと考えられ、円形に廻る9つの柱穴をもって竪穴住居跡と判断したものである。住居の規模と形態は柱穴を結んだラインから想定すると、直径約300cmの円形を呈するものと考えられる。

柱穴は上面径で20~30cm、深さは確認面からいずれも30cmほどで、pit4・8では柱の抜き取りの痕跡(4層)が明瞭である。炉の痕跡は無かったが、住居中央部の地山は他とくらべて堅くしまり炭化物がわずかながら散布していた。

出土遺物は柱穴からのもので、土器5・6・8・9はpit8から出土した同一個体の体部破片である。外面にはL R繩文が付され、内面は横方向のナデによって調整されているが整形時の指頭状



第13図 S 107整穴住居跡と出土遺物



第14図 S 105堅穴住居跡と出土遺物

の凹凸が残る。肌理細かな胎土で焼成も良好である。土器7はpit4からの出土で体部にはL R 繩文が付されている。S12は自然面の残る剥片で、自然面の剥取された面に2方向からの剥離面を持つものである。

本住居の時期は、Pit4の4層からの出土炭化物の<sup>14</sup>C年代測定では300 B.C.の結果が得られている。

## 2 土 坑

### S K01(第15・17図、図版10)

A区南端で平坦部から斜面にかかる部分のKS・KT30グリッドにかけて地山面で確認したものである。上面形は直径120cmの円形を呈し、確認時には炭化物を含む黒色土の広がりが顕著に認められ、その周辺に炭化物混入の褐色土が広がっていた。深さは80cmで砂礫層上部まで掘り込まれ、底面には疊が露頭している。底面の規模は直径120cmほどの円形で西側では上面よりも外に張り出す。覆土は壁際に地山の崩壊土が流れ込み、ほかはⅢ層由来の褐色系の土がブロック状に入り込んでいる。

出土遺物S13は縦長剥片で打面の反対方向の縁辺に使用痕が認められる。

### S K08(第15・17図)

SI05南側の緩斜面、KS28グリッドの砂礫層の疊頭部が露頭する地山面で、炭化物の混入した褐色土の広がりが認められた。上面形は直径90cmの円形を呈し深さ20cmほどで、壁は丸みのある底面に向かって緩く傾斜している。北側にあるSI05の推定ラインの外側にあるが、出土遺物も無く時期は不明である。

### S K10(第15・17図、図版4・10)

A区南側平坦部LA32・33グリッドの地山面で、暗褐色土の円形の広がりを確認した。上面形は直径80cmの円形を呈し、深さ60cmで堅くしまった底面に達する。底面は直径120cmで断面形は底面から30cmほどで大きく外側に張り出す袋状を呈している。

覆土は壁際に壁の崩壊土である地山土がブロック状にあり、土坑底面中央部には使用中に流れ込んだと考えられる暗褐色土が厚く堆積し、基本層位のⅢ・Ⅱ層が存在する。

出土遺物はいずれも覆土からのもので、土器5は外反する口縁部から膨らみのある体部にいたる壺形土器である。丸みのある口唇部には刻みがあり、無文の口縁部とL R 繩文の施された体部とは浅い沈線で画している。SI07出土の土器3に類似する。

石器S14・15は打面の残る同一母岩から得られた縦長剥片で、二次的に火熱を受けている。

土坑の時期は土器5などからSI07と同時期の縄文時代晚期後半の大洞A式の時期と考えられ、3層中の炭化物の年代測定では230B.Cの年代が得られている。

#### S K12(第15・17図)

A区南側平坦部KR・KS32グリッドの地山面で、暗赤褐色焼土を中心として炭化物を含む褐色土の広がりを確認した。上面形は直径110cmの円形を呈し、深さ50cmで砂疊層の礫頭部が露頭する底面に達する。

底面は直径130cmで、断面形は底面付近が大きく張り出す袋状を呈している。

覆土は壁の崩壊土である4層のほか中央部にはしまりのない褐色土が厚く堆積しているが、確認面での焼土の性格は不明である。

出土遺物のS16は覆土中からの出土で、自然面が広く残る縦長剥片である。

#### S K22(第15図、図版5)

A区南西斜面中腹のLG・LH32グリッドの地山面で黒色土の円形プランを確認した。上面形110cm、深さ90cmで断面が円筒状を呈している。底面中央には直径20cm、深さ20cmのピットがある。覆土は生活面の土と考えられる暗褐色土上に地山土や黒色土が堆積している。

遺物は出土していない。

#### S K23(第16・17図、図版5)

A区南西斜面中腹のLG32グリッドの地山面で確認した土坑で、SK22から南側へ6m離れた地点に位置している。上面形は110cm、深さ110cmで断面は円筒状を呈している。底面中央には直径30cm、深さ20cmのピットがある。覆土の堆積状況はSK22と同様である。

出土遺物S17は土坑底面からの出土で、断面三角形の安山岩の一面に磨り面が認められるものである。

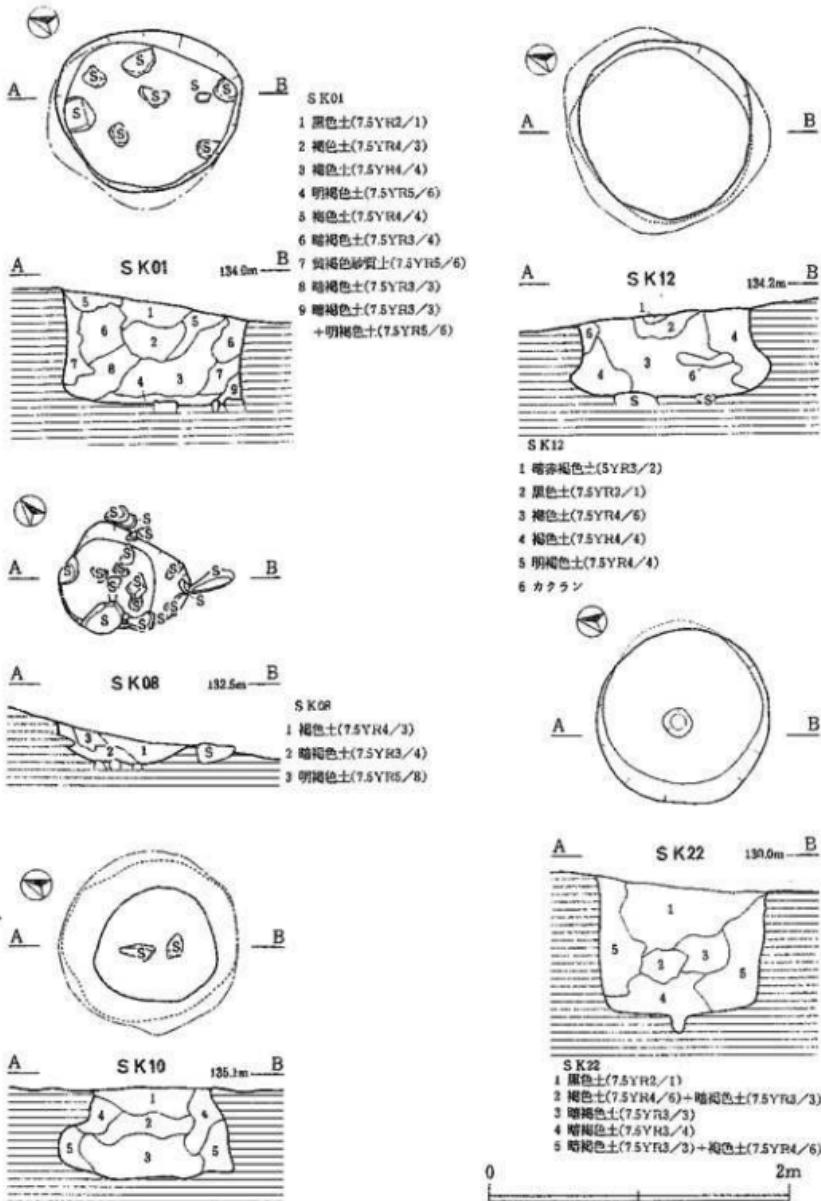
#### S K1001(第16図)

B区西側斜面中腹のMO67グリッドの地山面で確認したが、確認面で木根の影響を強く受けたため、上面プランは長軸(南北)140cm、短軸(東西)100cmの不整の楕円形を呈している。深さ40cmで壁は北側ではほぼ垂直に立ち上がり、底面には凹凸がある。

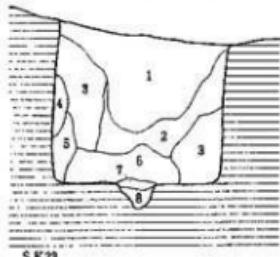
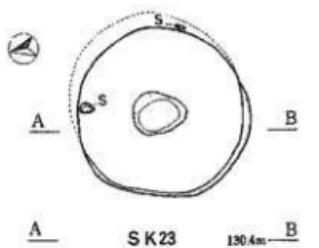
覆土上面の1・2層は木根の影響を受けた暗褐色土で、底面には褐色土が30cmの厚さで堆積し、壁際には褐色土がブロック状に存在する。覆土全体にしまりがなく自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

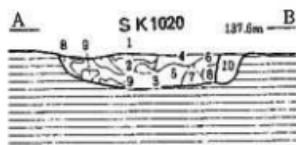
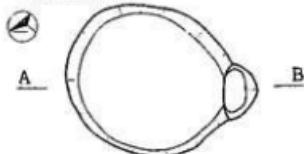
第4章 A・B区の調査の記録



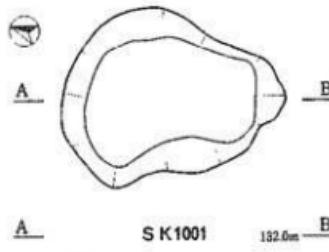
第15図 SK01・08・10・12・22土坑



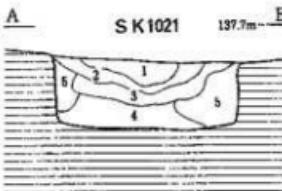
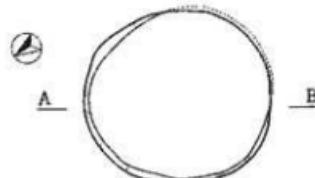
- 1 黒褐色土(7.5YR2/1)
- 2 褐褐色土(7.5YR3/3)
- 3 褐色土(7.5YR4/3) + 褐褐色土(7.5YR3/3)
- 4 褐色土(7.5YR4/6)
- 5 褐色土(7.5YR4/6) - 褐褐色土(7.5YR3/3)
- 6 褐褐色土(7.5YR3/3)
- 7 褐褐色土(7.5YR3/4)
- 8 褐色土(7.5YR4/4)



- 1 黒褐色土(7.5YR4/6)
- 2 褐褐色土(7.5YR3/4)
- 3 褐色土(7.5YR4/4)
- 4 褐褐色土(7.5YR3/4) - 褐色土(7.5YR4/4)
- 5 褐色土(7.5YR4/4)
- 6 褐褐色土(7.5YR3/2)
- 7 褐色土(7.5YR4/6)
- 8 明褐色土(7.5YR5/8) + 褐褐色土(7.5YR3/4)
- 9 明褐色土(7.5YR5/8)
- 10 褐色土(7.5YR4/4) + 褐色土(7.5YR4/4)



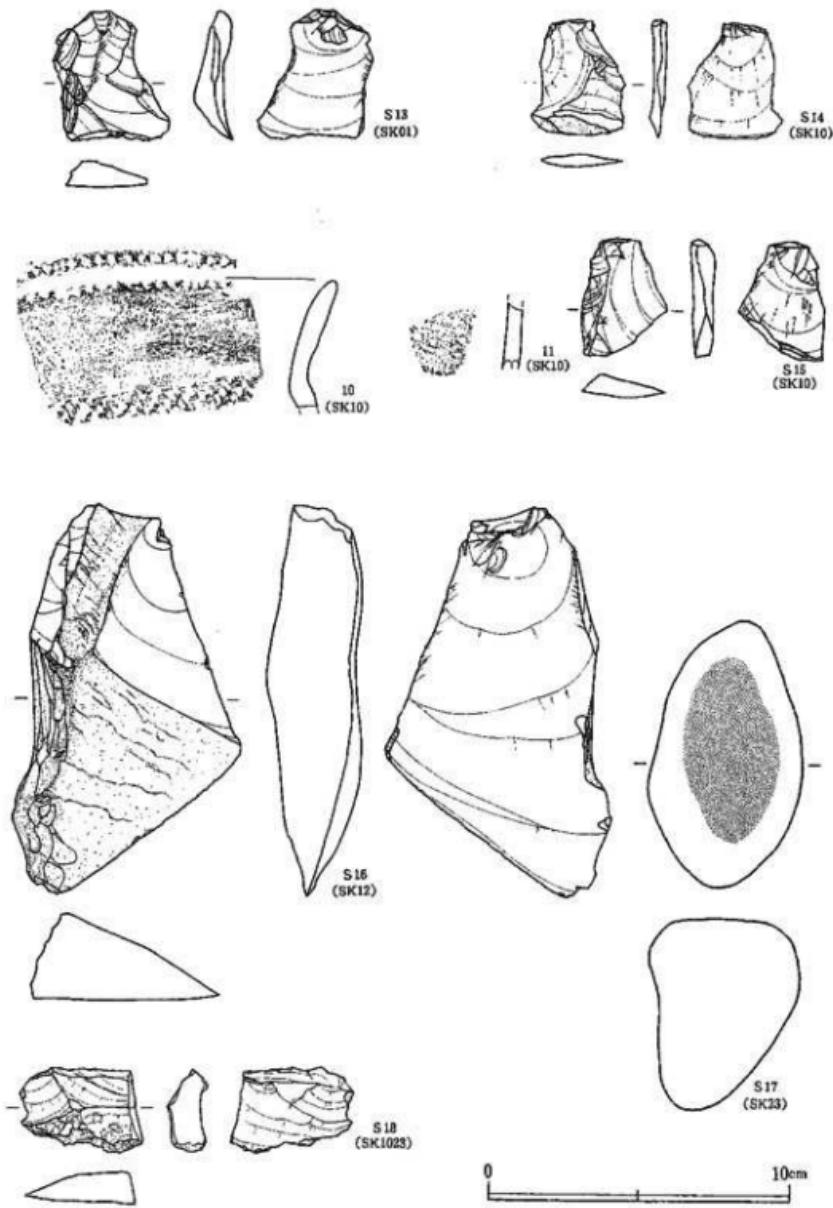
- 1 明褐色土(10YR3/4)
- 2 褐色土(7.5YR4/4)
- 3 褐色土(10YR4/6)
- 4 褐色土(10YR4/6)



- 1 黒褐色土(7.5YR4/6)
- 2 褐褐色土(7.5YR3/4) + 褐色土(7.5YR4/6)
- 3 褐褐色土(7.5YR3/4)
- 4 褐色土(7.5YR4/4)
- 5 明褐色土(7.5YR5/8)

0 2m

第16図 SK 23・1001・1020・1021土杭



第17図 SK01・10・12・23・1023出土遺物

## SK1020(第16図)

B区平坦部西端のLQ51グリッド、SI1032の北西側10mに位置している。確認は地山面で、炭化物の混入する褐色土の広がりが認められ、南西側はピットによって切られている。上面形は直径100cmの円形を呈し、深さ20cmほどで壁はゆるく立ち上がる。底面は中央に向かってわずかに傾斜しているが、堅くしまっている。

覆土は褐色土を主体として、暗褐色土や地山がブロック状に入り込んでいて全体にしまっており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は出土していない。

## SK1021(第16図)

SK1020の南東側でLP50グリッドに位置しており、確認は地山面で炭化物の混入する褐色土と暗褐色土の広がりが認められた。上面形は直径110cmの円形で、深さ45cm、断面は円筒状で底面は平坦で堅くしまっている。

覆土はしまっていて、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は出土していない。

## SK1022(第18図)

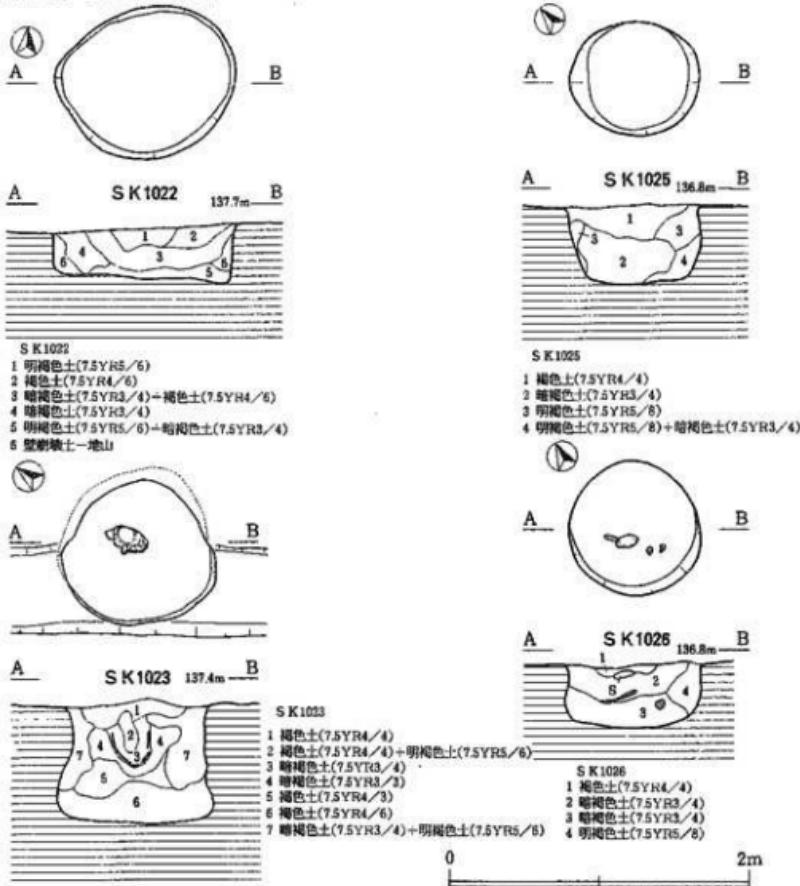
SK1021の南側でLP50グリッドに位置しており、確認は地山面で炭化物の混入する明褐色土と褐色土の円形の円形の広がりが認められた。上面形は直径100cmの円形を呈し、深さ30cmで壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。

覆土は1・2層が炭化物を含むしまりのある土で、地山の土が埋め戻されたものと考えられる。

遺物は出土していない。

## SK1023(第17・18・19図、図版6・9)

B区平坦部西端のLQ49グリッド、SI1032の西側10mに位置しているが、西側半分は境界の溝によって削平されていて底面が残る程度である。上面形は直径100cmの円形で、深さ90cm、断面形は底面が上面径よりやや外に張り出す袋状を呈している。底面は平坦で堅くしまっている。覆土中位から深鉢形土器がほぼ成立して出土しており、覆土の5・6層の堆積後に土器を埋設し、4層を間隙に埋め込んだものと考えられる。調査中に土器の中から骨と思われる灰白色の粉末が検出されたため土坑内の土の残存脂肪の分析を行ったが、6層からはヒト遺体を直接埋葬した際の脂肪が、2~4層からはヒトの骨のみを埋葬した際の脂肪が検出されるという特異な結果がもたらされた。



第18図 SK1022・1023・1025・1026土坑

出土土器12は平坦な口唇で大きく外反する口縁部から体部中央で一度くびれて、丸みを持ちながら高台状の底部にいたる深鉢形土器である。体部全体には細かなL R縄文が付され、その後口縁から体部中央までは2本一組の平行沈線が縄文帯を画していく、2本一組の沈線間には円形の刺突が施される。体部上半と下半を画している沈線は、2個一組の貼り付けされたコブに向かって一端せり上がるが、沈線の引き方は稚拙である。高台状の底部の端部は外側に張り出している。胎土には砂粒を含み、焼成は良く全体に赤褐色を呈している。

石器S18は横型剥片の一辺に使用痕がある。

土坑の時期は出土土器から縄文時代後期後半である。

## SK1025(第18図)

B区平坦部西端のLQ48グリッド、SK1026の北西側に隣接している。確認は地山面で炭化物の混入する褐色土が円形に広がっていた。上面形は直径90cmの円形で、深さ50cm、壁は北側では緩く傾斜し北側では丸く外に張り出してから直径64cmの底面に達する。底面は堅くしまっている。覆土は人為的に埋められたと考えられるしまりのある暗褐色土が底面から厚くあり、その上に褐色土が堆積している。

遺物は出土していない。

## SK1026(第18・19図)

B区平坦部西端のLQ47グリッド、SK1025の南東に隣接している。確認の状況はSK1025と同様である。上面形は直径90cmの円形で、深さ40cm、壁は底面近くでわずかに外に張り出していくて断面形は下膨らみの袋状を呈している。底面は堅く中央に向かって緩く傾斜している。覆土は人為的に埋められたと考えられるしまりのある暗褐色土が主体で、1層と3層まとめて土器片が出土し、また2層下位からは板状の炭化材を検出した。

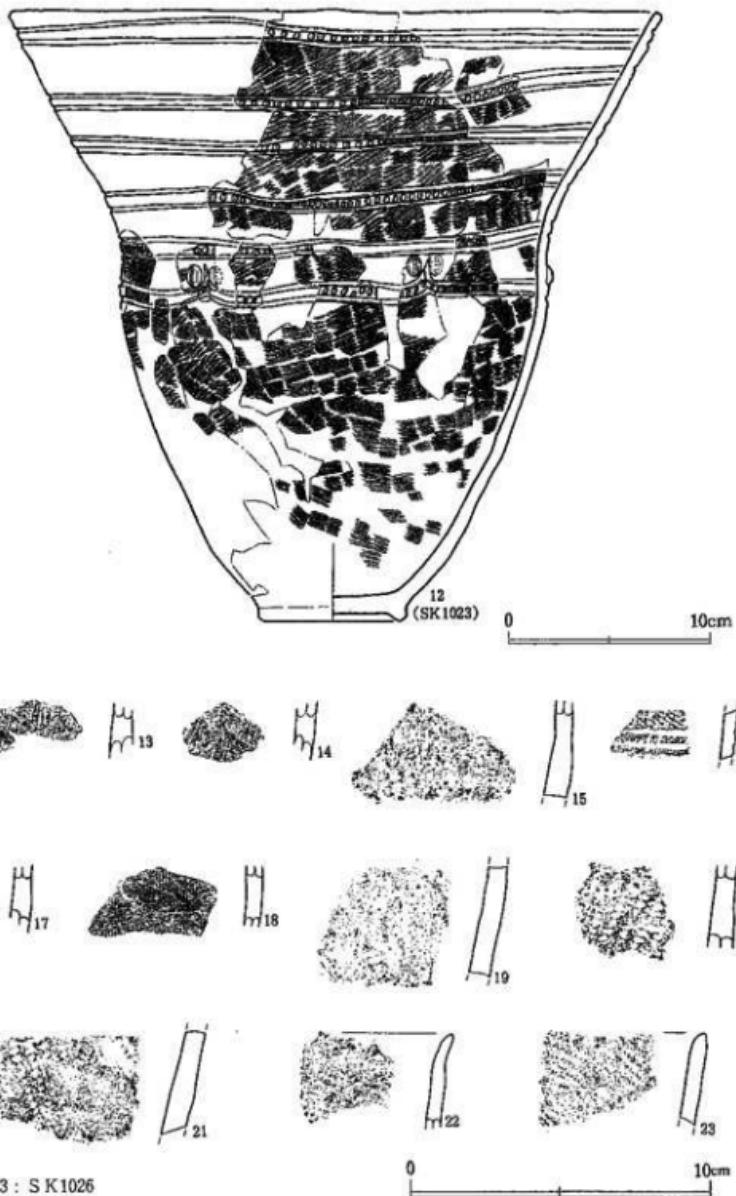
出土土器13・14・17は1層から出土したものでL繩文が付されている。16は細かなR L繩文に平行沈線の引かれた土器で胎土、焼成とも良好である。17・19~21は同一個体で3層から出土していて、20などからR L繩文が付された深鉢形土器の体部破片と考えられる。22は薄い口唇でわずかに外反する口縁部、23は丸みのある口唇で外反する口縁部である。22・23も3層から出土している。

土坑の時期は3層出土の土器から縄文時代後期と考えられるが、器面の摩滅が著しく詳細については不明である。なお、2層出土の板状炭化材の<sup>14</sup>C年代測定を行い、230B.C.の結果が得られていて、出土土器との時間差がある。またこの炭化材の樹種はカエデ属の一種であることがわかったが用途などについては不明である。

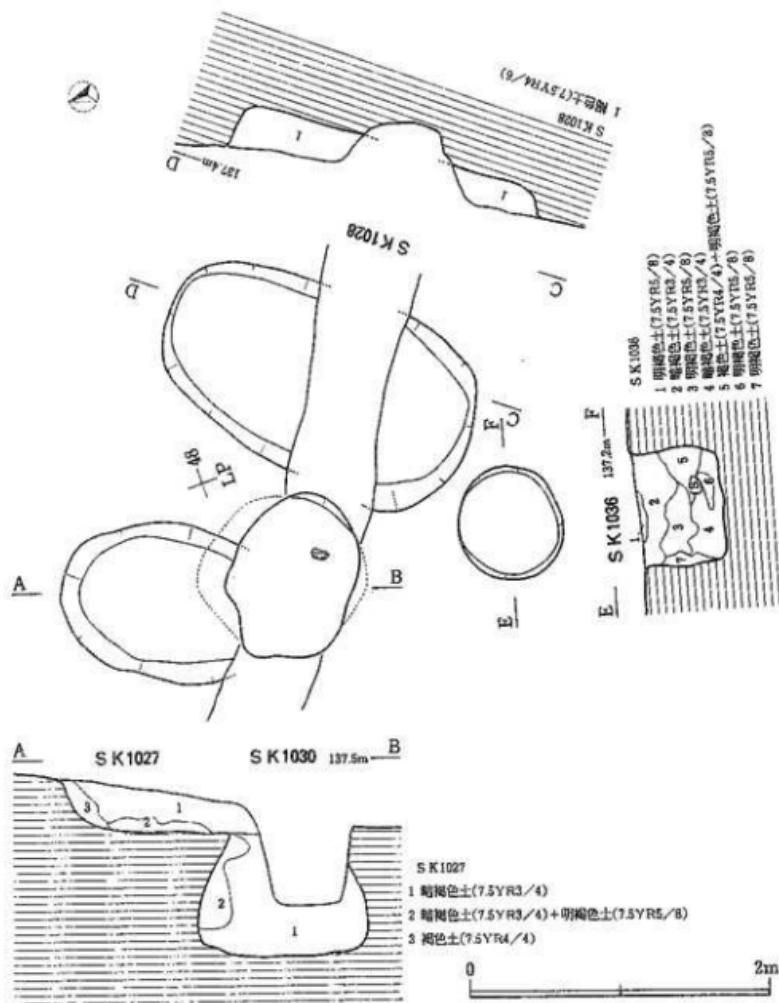
## SK1027(第20・22図、図版9)

B区平坦部西端のLP48グリッド杭を中心として4基(SK1027・1028・1030・1036)の土坑が集中する地域にあり、SK1030と重複している。確認は地山面で、暗褐色土が横円形に広がっていたが、南側は境界の溝によって切られている。上面形は短軸(西北-東南)100cm、長軸(北東-南西)は推定で150cmほどの横円形を呈し、深さ30cmで壁は外側に向かって緩く立ち上がる。底面は平坦で堅くしまっているが南側の底面はSK1030の覆土上位に造られていて比較的軟らかい。

覆土は全体的にしまっていて、2層は地山ブロックを含んでおり人為的に埋め戻されたものと



第19図 SK1023・1026出土遺物



第20図 SK1028・1028・1030・1036土坑

考えられる。

出土土器は1層下位(24)と2層上位(25・26)からのもので、24はL撚糸文の施された土器で胎土や色調などからSK1023出土の13・14と同一個体と考えられ、25・26はL R縄文の付された胎土、焼成とも良好な土器であるが、細片のため器形は不明である。

土坑の時期は撚糸文の付される24から弥生時代の可能性がある。

S K1028(第20・22図、図版9・10)

SK1027の東南に70cmほど離れて位置しており、確認状況はSK1027と同様である。土坑中央部は境界の溝によって壊されているが、残存する部分から長軸(北東-南西)220cm、短軸(西北-東南)110cmの橢円形を呈し、SK1027の長軸とはほぼ平行している。深さは30cmで壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で堅くしまっている。

覆土は焼土と地山ブロックを含む褐色土で、埋め戻されたものと考えられる。

出土土器27・28とも小片で28はR撚糸文が付されていて肌理細かな胎土であるが、27の器面は摩滅が激しく、付された繩文は不明である。

石器S19・S20は石核で、S19は一方向から小剥片を剥取しているが全体に節理が走っていて良好な剥片は得られていない。S20はやや凹凸のある剥離面を作業面として最大で長さ5cm、幅3cmほどの剥片が剥取されている。

土坑の時期はSK1027と同じく弥生時代と考えられる。

S K1030(第20図)

SK1027と重複していて、また確認面から60cmほどは境界の溝によって壊されている。残存する部分と溝の壁に現れた断面から、その規模は確認面で直径約80cmの円形を呈し、一度括れてから外側に大きく張り出し直径120cmの底面にいたるもので、断面形は袋状である。底面は平坦で堅くしまっている。

覆土は壁崩壊土の2層以外は、しまりがあり炭化物を含む褐色土が埋め戻されたものと考えられる。

遺物は出土していない。

S K1031(第21・22図、図版9)

B区平坦部西端のLO47グリッドで、SK1027・1028などが集中する地域の南側に位置しており、確認面は地山面で黒褐色土と暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径130cm、深さ130cmで、断面形は上面から一度緩く括れて外側に丸く張り出す袋状呈している。底面は堅くしまっていて、中央部から端に向かってわずかに傾斜している。

覆土は1・2層を除けば全体的にしまりがあり、黒褐色から暗褐色の土を主体としてこれに地山土(褐色から明褐色土)が含まれることから埋め戻されたものと考えられる。

出土土器29・30は底面直上から出土した同一個体の破片で、L R繩文の付された胎土に砂粒を含んだ土器である。

土坑の時期は29・30から繩文時代後期後半と思われるが、明確ではない。

## SK1034(第21図)

B区北西部の平坦部MD58グリッドで他の遺構とは離れて位置しており、確認面は地山面で暗褐色土と明褐色土の混合土の楕円形の広がりが認められた。上面形は80×110cmの楕円形で、深さ150cm、壁は直線的に底面に向かって広がり断面形はフ拉斯コ状を呈している。底面も90×140cmの楕円形で堅くしまっている。

覆土5・7・8層はしまりがなく、4・6層は壁の崩壊土であり全体的に自然堆積したものと考えられる。

出土遺物はないが、底面から板状の炭化材を検出し<sup>14</sup>C年代測定からは5,310 B.Cという結果が得られている。

## SK1036(第20図)

B区平坦部西端のLP47グリッドでSK1028の南側に位置しており、確認面は地山面で中央に明褐色土を含んだ暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径75cm、深さ55cmで、断面形は底面近くでわずかに膨らむ袋状を呈し、底面は平坦で堅い。

覆土は全体的にしまりがあり、2層には焼土ブロックが混入していて埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。

## SK1040(第21図)

B区南側斜面のLM40グリッドで、北東から南西に傾斜する標高132mに位置しており、確認面は地山面で暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径80cmの円形で、深さ50cm、断面形は確認面から20cmほど下で一度括れ、さらに外側に丸く張り出す袋状を呈している。底面はやや凹凸があるが、堅くしまっている。

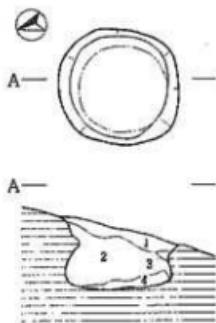
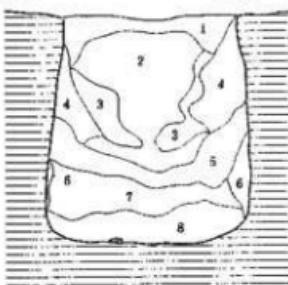
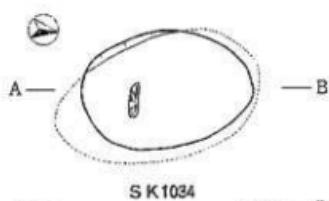
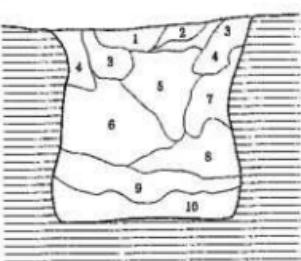
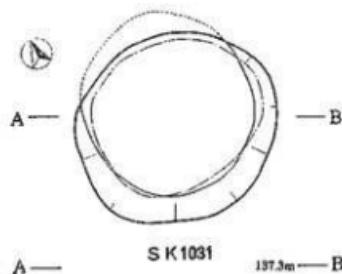
覆土1層は表土(I層)の自然的流入土で、2・4層も全体的にしまりがなく自然堆積によるものと考えられる。

出土土器31はR L繩文の付された、胎土・焼成とも良好な土器である。

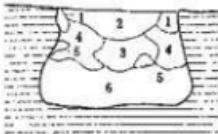
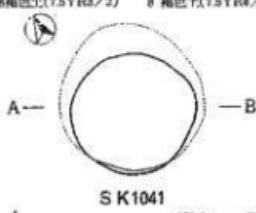
土坑の時期は土器31から繩文時代であるが、より詳細な時期については不明である。

## SK1041(第21図)

B区南西側斜面のMA42グリッドで、北東から南西に傾斜する標高129mほどの斜面に位置しており、確認面は地山面で地山土を含む暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径80cmの円形で、深さ60cm、断面形は底面付近で外側に大きく張り出すフ拉斯コ状を呈している。底面も直径100cmの円形で、西側に向かってわずかに傾斜している。



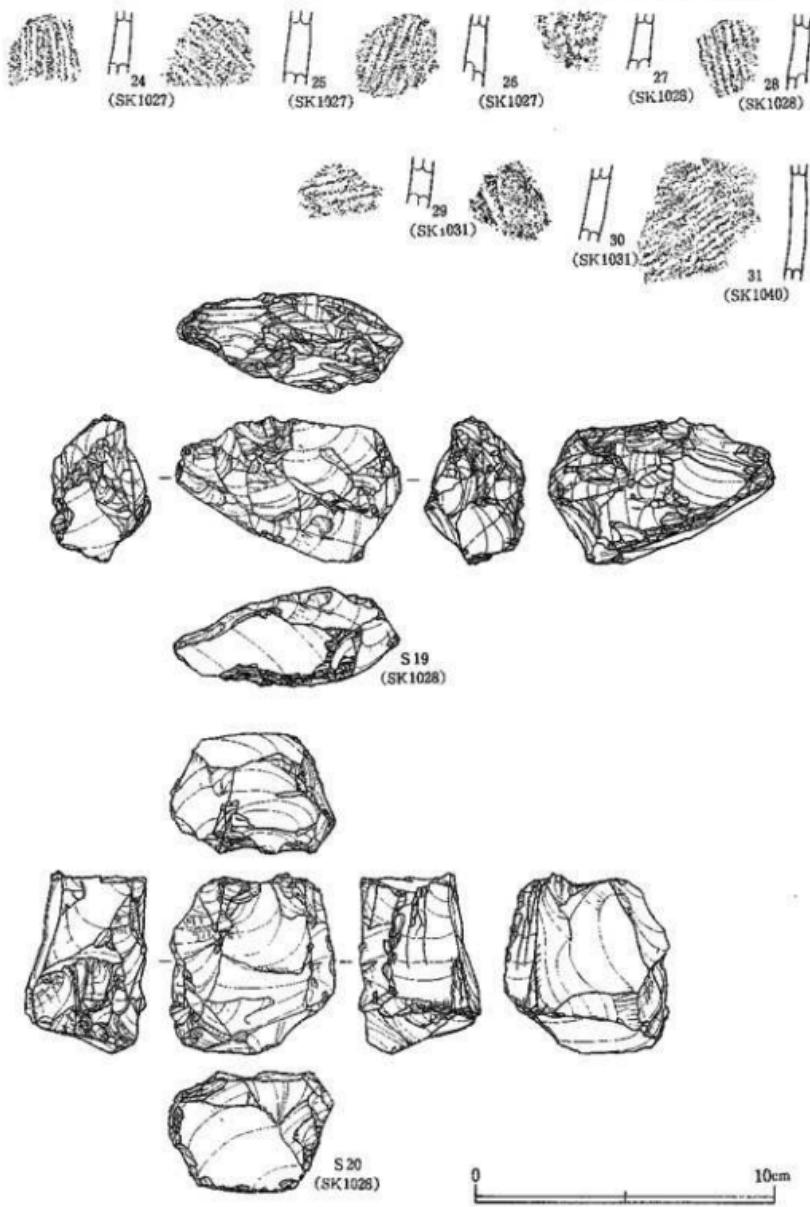
- 1 喀褐色土(7.5YR3/3)  
2 喀褐色土(7.5YR3/4)  
3 斜褐色土(7.5YR3/3) - 明褐色土(7.5YR5/8)  
4 褐色土(7.5YR4/6)



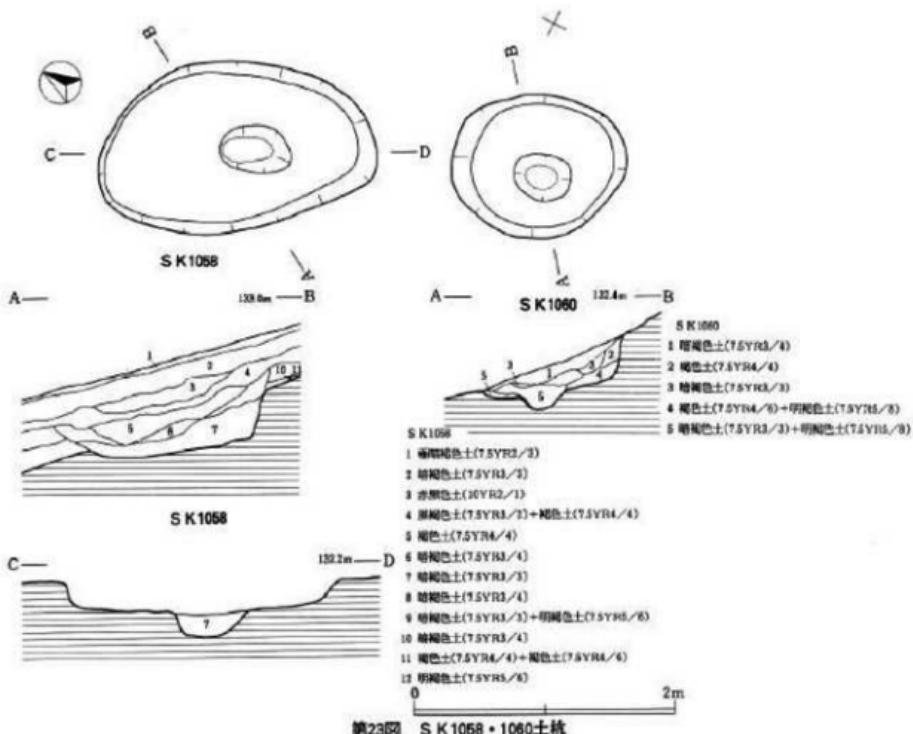
- SK1041
- 1 喀褐色土(7.5YR3/3) - 明褐色土(7.5YR5/8)  
2 喀褐色土(7.5YR3/3)  
3 喀褐色土(7.5YR3/3) - 明褐色土(7.5YR5/8)  
4 黒褐色土(7.5YR3/2)  
5 明褐色土(7.5YR5/8)  
6 喀褐色土(7.5YR3/3) + 黒褐色土(7.5YR3/2) + 明褐色土(7.5YR5/8)

0 2m

第21図 SK1031・1034・1040・1041土坑



第22図 SK1027・1028・1031・1040土坑出土遺物



第23図 SK 1058 + 1060 土坑

覆土6層は暗褐色土、黒褐色土、明褐色土(地山)がブロック状なっていて、2~4層は炭化物を含むしまりのある土であり、埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。

## SK 1058(第23図)

B区北西斜面のMJ56グリッドで、東から西に傾斜する標高131.5mほどの斜面に位置し、南側にはSK1060が隣接している。確認は土層観察用ベルトの断面で認めたものである。上面形は長軸(北西-南東)210cm、短軸(北東-南西)130cmの楕円形を呈し、深さは斜面上方の北東側で40cmで壁はわずかに傾斜して立ち上がる。底面は110×200cmの楕円形で、堅くしまり平坦で、中央には上面が30×50cm、土坑底面からの深さ20cm、底面が40×50cmのピットがある。

土坑掘り込み面は10層(基本層位のⅡ層)で、覆土5~7層は炭化物をわずかに含むがしまりが

なく、自然堆積と考えられる。土坑上面を覆う4層は基本層位のI層(表土)で、その上の1~3層は盛土と斜面上方からの再堆積土である。

遺物は出土していない。

#### S K 1060(第23図)

MJ55グリッドでSK1058の南側にあり、ほぼ同一標高に位置している。確認面は地山面で暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は110×130cmのほぼ円形で、深さは斜面上方の北側では30cmで壁は垂直に立ち上がる。底面は直径100cmの円形を呈し、東側から西側に傾斜しており、中央には上面が30×40cm、土坑底面からの深さ10cm、底面が10×20cmのピットがある。

覆土は暗褐色土主体で、それに地山が流れ込み全体にしまりがなく自然堆積と考えられる。  
遺物は出土していない。

### 3 陥し穴

#### S K T03(第24図)

A区南側斜面のKO・KP29グリッドで標高131.5mほどの斜面に位置しているが、この地域は最近の土取りによって地山も大きく削平を受けている。確認面は地山面で炭化物の混入する暗褐色土が溝状に認められた。上面は長さ320cm、幅30cmで長軸方向は北東ー南西方向で斜面に対してもほぼ直交する。確認面から底面までの深さは、土取りで上部が大きく削平されているため、わずか30cmほどだが疊層上面まで達している。底面は長さ300cm、幅20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土2層は地山の流入土で、1層は削平を受けた際に入り込んだ地山ブロック混じりの暗褐色土である。

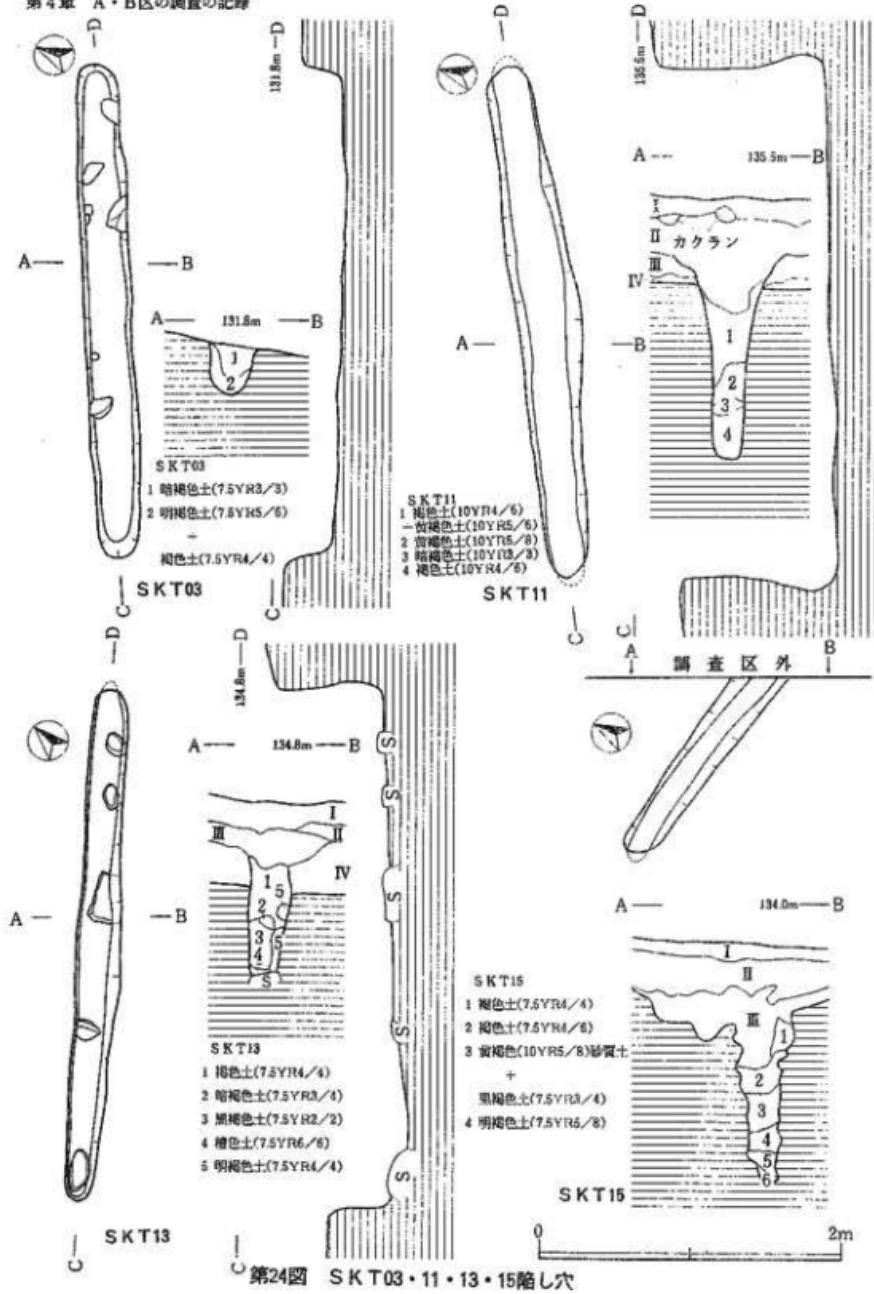
遺物は出土していない。

#### S K T11(第24図)

A区平坦面のLA36・37グリッドに位置し、確認面は地山面で褐色土と黄褐色土の混合土が溝状に広がって確認された。上面は長さ340cm、幅40cmで、長軸方向は北東ー南西でSKT19とほぼ一致している。確認面から底面までの深さは100cm前後、底面は長さ350cm、幅25cmで、壁は両側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、長軸方向の両端は底面近くで外に張り出している。

遺構掘り込み面は土層観察用ベルトから基本層位のII層であり、覆土は地山土を中心とする褐色土が自然堆積したものである。

遺物は出土していない。



第24図 SKT03・11・13・15陥し穴

## SKT13(第24図)

A区南側の斜面際KS・KT32グリッドに位置し、確認は地山面で褐色土が溝状に広がって確認された。上面は長さ330cm、幅30cmで長軸方向は北西-南東方向でSKT03とほぼ一致している。確認面から底面までの深さは65cmで礫層上面まで達しており、底面は長さ340cm、幅20cmでは両側壁は垂直に立ち上がるが、長軸方向の北西側底面近くでわずかに外に張り出している。遺構の掘り込みは基本層位のⅢ層から確認でき、覆土は遺構内中位に暗褐色土を含む他の上位には地山土が流入している。

遺物は出土していない。

## SKT15(第24図、図版7)

A区南側平坦部のKS37グリッドに位置しているが、遺構の一部は調査区外にかかっていて北西側のおよそ半分を検出している。確認は調査区境界壁の土層断面でなされ、検出部分の上面は長さ140cm、幅30cmで長軸方向は北西-南東方向で後述するSKT18とほぼ一致している。確認可能な遺構掘り込み面(Ⅲ層)から底面までの深さは120cmで、底面は検出部分で長さ150cm、幅10cmほどである。側壁は境界壁の断面では凹凸をもって立ち上がっているが、覆土堆積途中で自然の作用を受けて壁が崩壊した結果と考えられ覆土も地山土が中心である。北西側の長軸方向の壁は底面近くで外側に張り出している。本遺構は前述のとおり半分を検出したものと考えられ、実際の長さは200~300cmになるであろう。

遺物は出土していない。

## SKT18(第25図、図版7)

A区平坦部中央のKT・LA・38グリッドに位置し、確認は地山面で橙色~明褐色砂質土が溝状に広がって確認された。上面は長さ330cm、幅40cmで長軸は北西-南東方向でSKT15とはほぼ一致している。確認面から底面までの深さは130cm、底面は長さ360cm、幅20cm前後で両側壁は垂直に立ち上がるが、長軸方向の両端は底面近くで大きく外に張り出している。

覆土は下位に使用時の表土と考えられる暗褐色土があり、その上に地山土が堆積している。遺物は出土していない。

## SKT19(第25図、図版7)

A区平坦部北西側のLC・LD37・38グリッドに位置し、確認は地山面で暗褐色土が溝状に広がって確認された。上面は長さ320cm、幅60cmで長軸方向は北東-南西方向でSKT19とはほぼ一致している。確認面から底面までの深さは170cm、底面は長さ360cm、幅30cmで両側壁は垂

直に立ち上がるが、長軸方向の両端は底面に向かって外に張り出す。覆土は黒色土や黒褐色土と地山土の明褐色土が互層となって堆積している。

遺物は出土していない。

#### S K T 1014(第25図)

B区平坦部南側の斜面でLL・LM45・46グリッドに位置し、確認は地山面で炭化物の混入した褐色土が溝状に広がって確認された。上面は長さ360cm、幅20cmで長軸方向は北西-南東方向でSKT1015と一致している。確認面から底面までの深さは80cm前後、底面は長さ370cm、幅15cmほどで南東側に緩く傾斜している。両側壁は垂直に立ち上がるが長軸方向の両端は底面に向かってわずかに外に張り出す。覆土は下位に黒褐色土が薄くあるほかは、地山土が厚く流れ込んでいる。

遺物は出土していない。

#### S K T 1015(第25図)

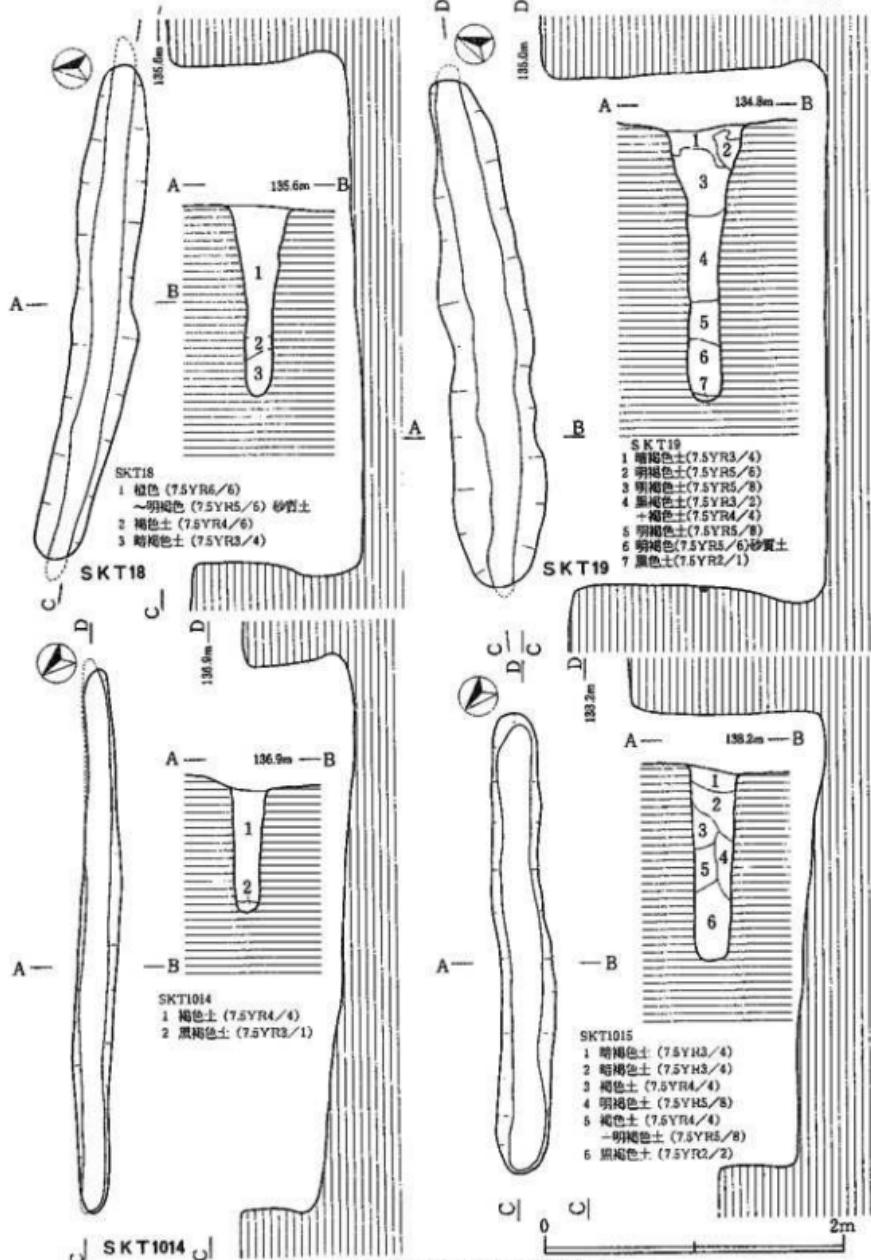
B区平坦部南側のLG・LH49・50グリッドに位置し、地山面で暗褐色土が溝状に広がって確認された。上面は長さ300cm、幅40cmで長軸方向は北西-南東方向でSKT1014とほぼ一致している。確認面から底面までの深さは130cm、底面は長さ290cm、幅20cmで南東方向に傾斜していて、壁は垂直に立ち上がる。覆土は下位に遺構使用時から廃棄後の表土と考えられる黒褐色土があり、その上に壁の崩落土の地山土がブロック状に入り込んでいる。

遺物は出土していない。

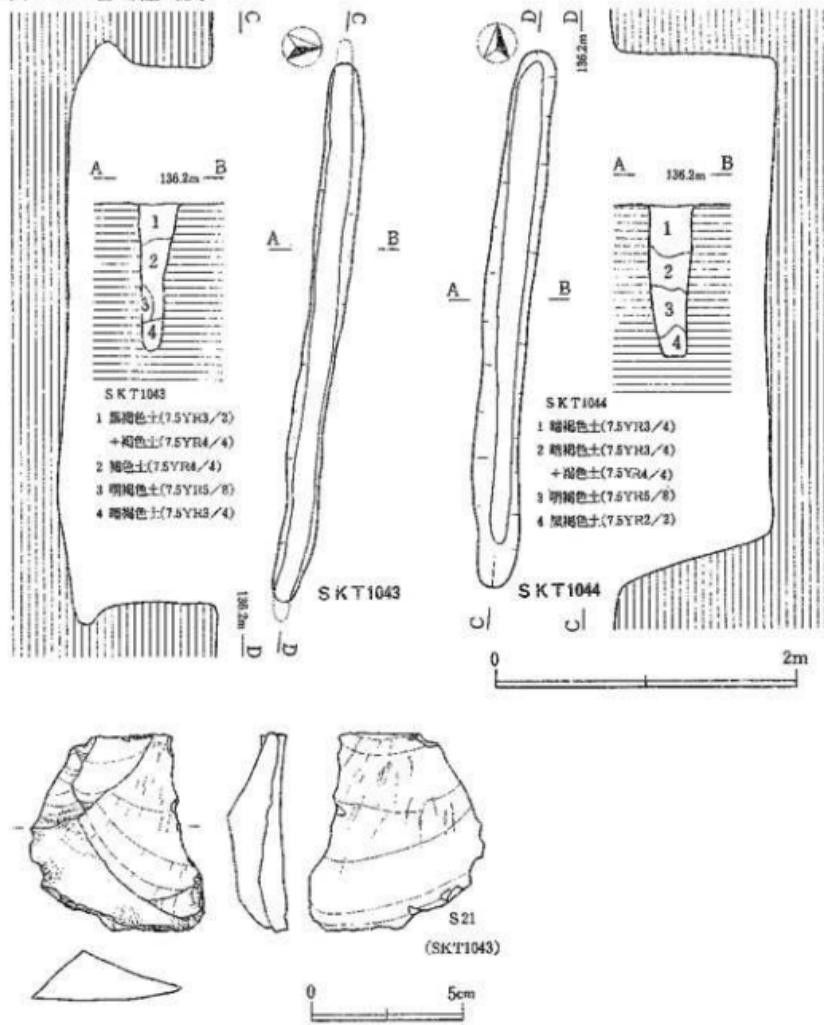
#### S K T 1043(第26図)

B区北側平坦部中央のMC・MD64グリッドに位置し、地山面で褐色土の混じる黒褐色土が溝状に広がって確認された。上面は長さ350cm、幅25cmで長軸方向は東-西方向で北側8mほどに位置しているSKT1044の長軸方向とはほぼ直行する。確認面から底面までの深さは110cm、底面は長さ400cm、幅15cmほどで長軸方向の両端に向かって緩く立ち上がる。両側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東西の両端は底面近くから大きく外に張り出している。覆土は下位に遺構使用時から廃棄後の表土と考えられる暗褐色土があり、その上に壁の崩落土の地山土がブロック状に入り込んでいる。

出土石器S21は1層からの出土で、自然面を広く残す縦型剥片の右側縁下端に、幅の短い調整を加えた搔器である。



第25図 SKT18・19・1014・1015陥し穴



第26図 SKT1043・1044陥し穴と出土遺物

SKT1044(第26図、図版7)

B区平坦部北端のMC67グリッドに位置し、地山面で暗褐色土が溝状に広がって確認された。上面は長さ360cm、幅30cm、長軸方向は北-南方向で確認面から底面までの深さは160cmである。底面は長さ320cm、幅15cmで中央部から南北の両端に向かってわずかに傾斜していて、壁は垂直に立ち上がるが、長軸方向の南側壁は緩く外に向かって開いている。覆土は下位に黒

褐色土がありその上に壁崩落土の地山土が流入している。遺物は出土していない。

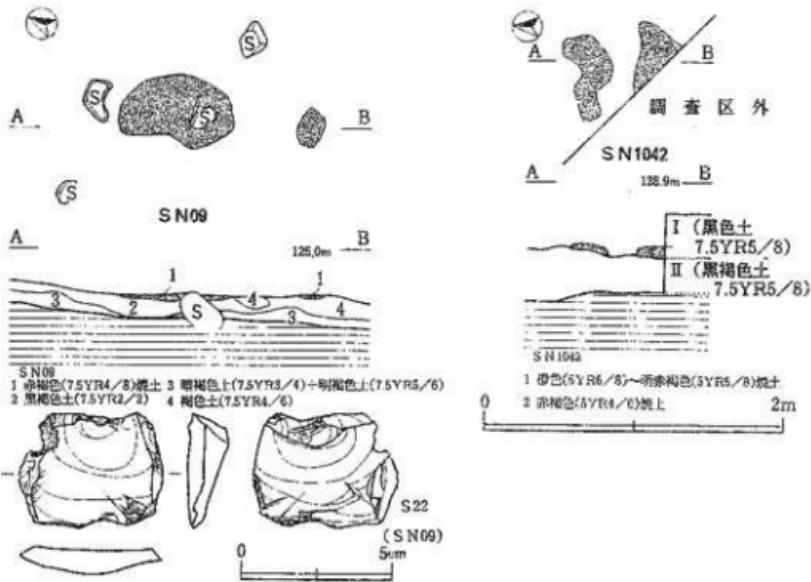
#### 4 焼土遺構

##### S N09(第27図)

A区南側斜面の裾部のKL42グリッドに位置し、表土下の黒褐色土上面で確認した。焼土は赤褐色を呈し、 $40 \times 80\text{cm}$ の指円形と直径30cmほどの円形に広がっていたもので、しまりがなく、周辺の礫も焼けていない。焼土周辺にも柱穴らしいピットもなく、焼土は斜面上方からの崩落したものと考えられる。出土石器S22は焼土上面からのもので、片側縁に自然面が残る剥片の右側縁下端から下縁にかけて使用痕が認められる。二次的火熱は受けていない。

##### S N1042(第27図)

B区北西斜面の裾部のMK49グリッドに位置し、表土下の黒褐色土の上面で確認した。焼土は橙色～赤褐色を呈し堅くレンガ状になっていたが、焼土周辺の精査でも柱穴などや遺物も検出されず性格・時期とも不明である。



第27図 S N09・1042焼土遺構と出土遺物

### 第3節 遺構外出土遺物

A・B区の遺構外から出土した遺物は、畑やブドウ園などの造成工事の影響が調査区平坦部の全域に及んでいることから良好な包含層もなく、大部分が表土やⅡ層と及び上方から転落したと考えられる斜面裾部から出土した遺物である。

#### 1 土 器(第28~31図、図版11~13)

土器については時期毎に群別し、施された文様や縄文と器形や胎土から類別して記載する。

##### 第I群土器(第28図)

縄文時代早期末葉から前期前葉の土器である。胎土に纖維を多く含み、付される縄文には0段多条や結束のない羽状縄文などがある。

1類(32・37・41・43・45・47・48)：胎土に多量の纖維を含む土器である。32は厚く丸みのある口唇で外反する口縁部には0段多条のRL縄文とLR縄文の結束のない羽状縄文が付けられている。異なる原体による羽状縄文は41・43・45にも付されているが、47はLR縄文である。43・45は底部付近の破片であり、43は丸底と考えられるものである。

2類(33~36・38~40・42・44・46・49~59)：胎土に含まれる纖維の量は1類よりも少なく、38・39では径1~3mmの白色の砂粒を多く含んでいる。口縁部破片では口唇が丸みのある33、平坦で外傾する34・40、内傾する35があり、36・40の口唇には縄文原体が深く押圧される。器面に付される縄文には、原体端部の結節による不整の綾縄文のある35、0段多条のLR縄文の36・52、0段多条で異なる原体による羽状縄文の42・53・57のほかは単節のRL縄文が付される。50・51では条の横走するRL縄文である。

##### 第II群土器(第28・29・31図)

縄文時代中期の土器である。

1類(60~70)：キャリバー形を呈する深鉢形土器を主体とするもので、胎土は肌理細かく、焼成も良好な土器であり、内面も平滑に磨かれている。体部に付される縄文は61~63がRL縄文、他はLR縄文である。66は鋭く内反する口縁部に粘土紐貼付の隆帯による上下一対の渦巻文があり、その下の縄文部を曲線的な沈線で区画している。67~69にも横方向に隆帯があり、67ではLR原体の側面圧痕が3条施される。70では3本一組の平行沈線がLR縄文を付した体部を矩形に画している。

本類は大木7b式である。

2類(71~90)：断面が三角形の隆帯や沈線によって、縄文部と無文部が画される土器や攢糸

文などの施される土器で、胎土には細かな砂粒を含むが焼成は良好である。72・73は曲線的な隆帯で縄文部が円形か精円形に画されるものと思われ、72の隆帯上には2個一対の刺突がある。71～73の縄文部の縄文は区画後に充填されたL R縄文である。

74～79は沈線によって縄文部と無文部を画すもので、無文部は丁寧に磨かれている。縄文は沈線区画後に充填し74はL R縄文、75～78はR L縄文であるが、75・76では縄文充填後に沈線に沿って刺突が施される。

80・81はL R縄文、82～87はR L縄文が付されているが、87では縄文施文後に粗いケズリが行われ縞状に無文部が表出されている。88～90はR撫糸文の施された土器である。

本類は大木10式である。

3類(141～144)：胎土や焼成などから本群2類に伴う底部と考えられる。網代痕(142)や管葉状圧痕(143)が外面に認められる。

#### 第Ⅲ群土器(第29・30・31図)

縄文時代後期の土器で、入組帶縄文や平行する帶縄文が施され、付される縄文はL R縄文が圧倒的に多い。器種には深鉢形土器や注口土器があり、内面の調整も丁寧に磨かれている。

1類(91～94、97～101・103)：入組帶縄文や平行する帶縄文が施される土器である。深鉢形土器では口縁部がほぼ直立し口唇は平坦に面取りされるが、92では肥厚して山形状の突起が付き、93・94には2個一対の突起が付されている。96はやや外反する小波状の口縁部で体部との屈曲部に小さい貼り瘤が巡っている。95・102は平行沈線で画される帶縄文が施されるもので無文部は磨り消しによる。97は大形の注口土器の注口部片で、注口の下には太い粘土紐による渦巻文貼り付けられたもので注口部体部には細かなL R縄文が付されている。注口の破損面にはアスファルトの痕跡が認められる。

2類(104～178)：体部に羽状縄文や条痕文の付される土器である。104・105は口唇部が平坦で104はR L原体を、105ではL R原体を回転方向を変えながら羽状縄文を表出している。107・108は縦方向に条痕の走る土器で、条痕は幅1cmほどの櫛齒状の工具により付されている。

3類(147・150)：本群に伴う底部である。2点とも高台様の底部で端部がわずかに外に張り出るもので、SK1023出土の深鉢形土器の底部に共通している。

本群は縄文時代後期末葉の土器と考えられる。

#### 第Ⅳ群土器(第30・31図107～121、134～139、146・147)

縄文時代晩期の土器で、鉢形土器・台付浅鉢形土器・壺形土器があり、いずれも胎土、焼成とも良好で内外面の調整も丁寧に行われている。

109～113・118は幅の広い平坦な口唇で、ほぼ直立する口縁部から丸みをもつて体部上半にいたる鉢形土器である。口唇部には一条の沈線を巡らし、端部には細かな刺突が施され107・112では突起が付く。口縁部には数条の沈線が引かれ109～111では沈線間に一条の刺突列があり、

112では沈線が口縁端部の突起に向かって迫り上がる。体部には107ではR L繩文が、110・112ではL R繩文が付されている。134～136・139は鉢形土器の体部破片で、146・147は底部である。134～136は異なる2種類の原体(LR・RL)による非結束の羽状繩文が付されている。

114～116・119・121は外反する口縁部、直線的に外傾する体部から台部にいたる台付浅鉢形土器である。114・116では幅広い口唇部と口縁端部に刺突が施され、2条の沈線下には沈線と磨り消し手法によって曲線的なモチーフが描かれる。119は口縁部に二個一対の突起が4単位配され口縁部下には2条の太い沈線がめぐる。外面とも平滑に磨かれて赤色塗彩の痕跡が認められる。121はこれらに伴う台部と考えられ、端部が外にわずかに張り出した無文の台部で、内外面とも丁寧に磨かれている。120は無文で内傾する壺形土器の口縁部破片である。

本群は大洞C1～A式と考えられる。

#### 第V群土器(第31図)

弥生時代の土器で条が縱方向に走る繩文に平行沈線が引かれるものや、直立ないしはやや外反する口縁部を有する土器などがある。

1類(122～124)：3点とも同一個体で、条が縱方向に走るR L繩文が付され平行沈線間の一つには磨り消しによる無文帶がある。沈線間の繩文は条が斜めに走る。胎土は細かな砂粒を含むものの焼成とともに良好である。

2類(125・126、127～133、140)：口唇部に細かな刺突を施すことによって小波状口縁を作出し、無文の口縁部が直立ないしは外反する土器である。125・126は口縁部上端に稚拙な2条の沈線を引き体部にはR繩文が付されていて、内面はケズリの痕跡が粗く残っている。

127～133は広い無文部をもつ口縁部破片で、127～129は小波状、130は口唇が平坦で外傾する。132・133では無文で外反する口縁からわずかに外に膨らむ体部にいたる鉢形土器と考えられ、体部にはR L繩文が付される。140では体部にL撲糸文が付される。

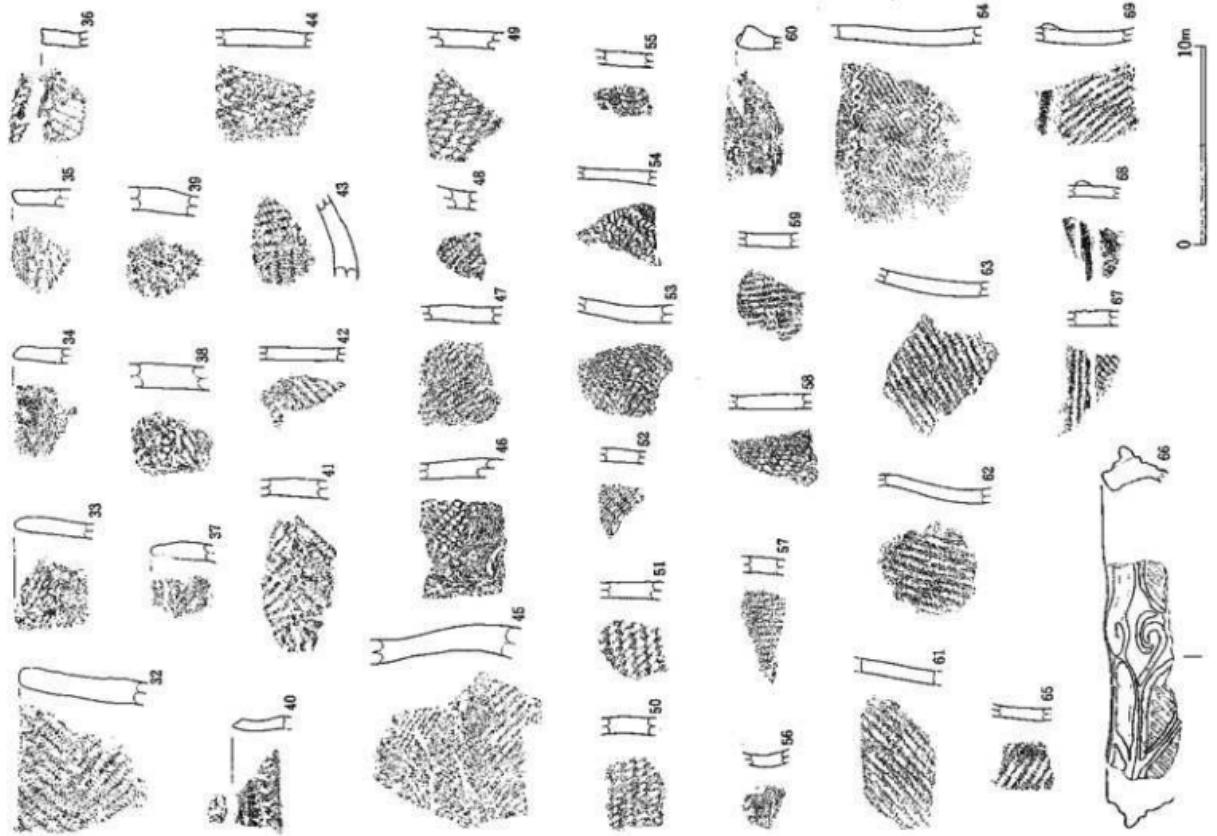
本群は湯ノ沢A遺跡や横長根A遺跡出土土器に並行するものと考えられる。

## 2 石 器(第32・33図、図版13)

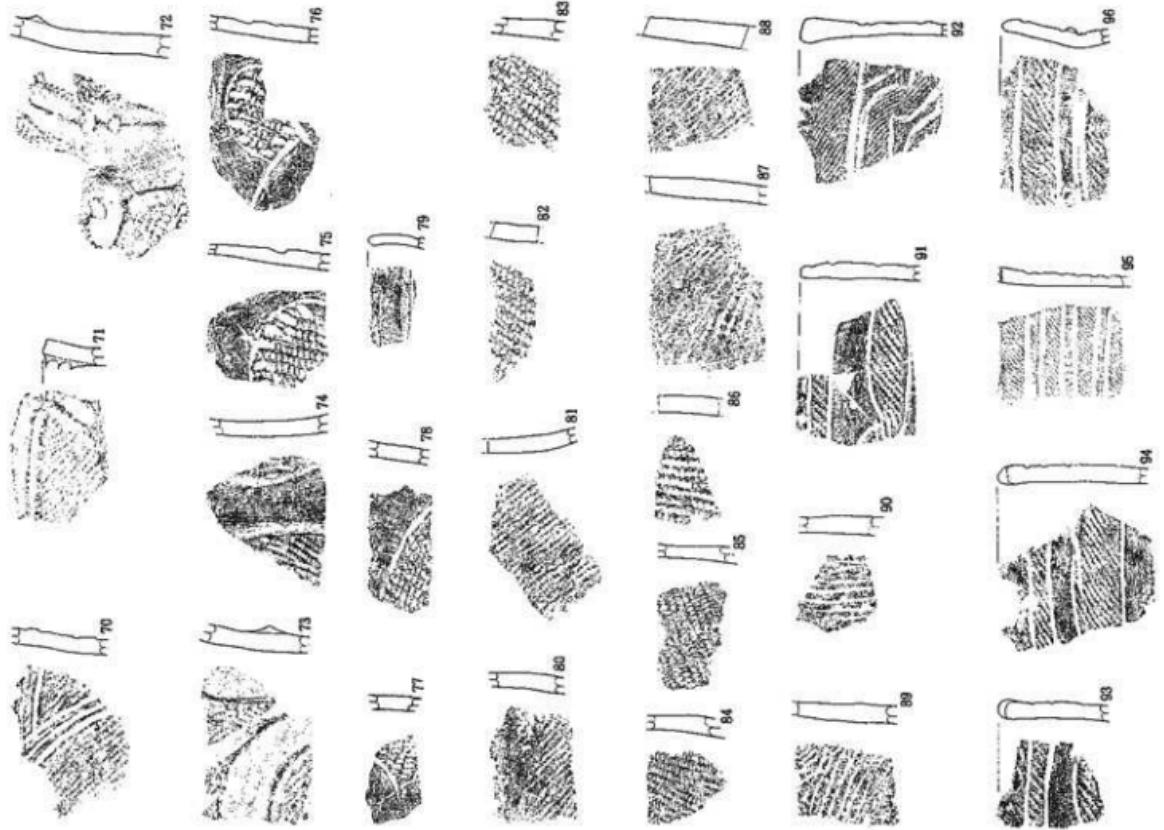
A・B区の遺構外から出土した石器は、剥片などを含めて総数1,210点であるが、土地造成と耕作などによって細片となったものが多い。また出土地点は全域に及ぶもののI層からの出土がほとんどで上記土器群に対応する時期毎の分別や製作技法については検討できなかった。

石鎌(S23・24)：2点出土していて、頁岩である。2点とも凸基有茎鎌で、二次加工は両面に細かに施され素材剥片の剥離面は全く残っていない。S23では使用によって先端部を欠損している。

石槍(S25)：1点の出土で頁岩である。二次加工は両面に行われるが背面中央には素材の剥離面がわずかに残っており、また主要剥離面中央には大きな剥離面があり、素材である横型剥片の打瘤を除去したものと考えられる。基端部には主要剥離面側からの剥取による剥離面が残



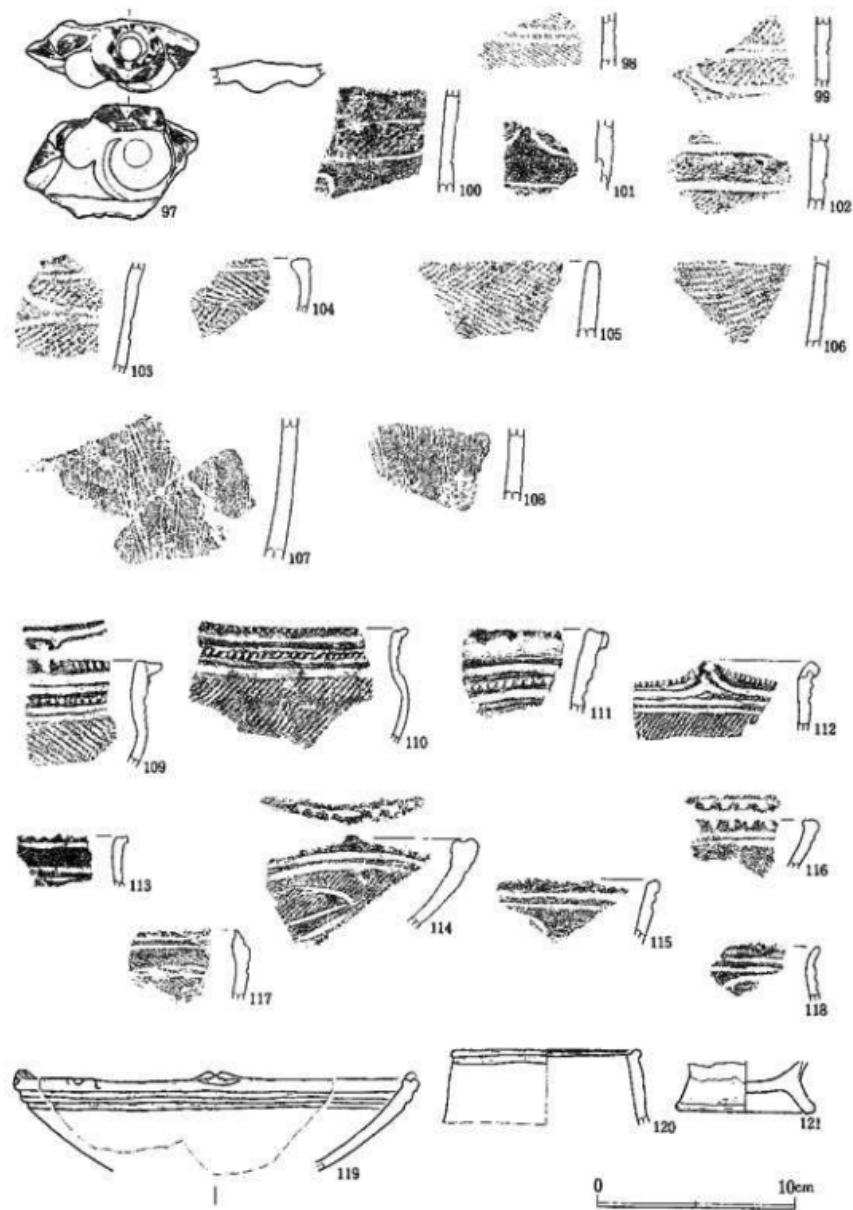
第28圖 A・B區遺都外出土土器(1)



第29図 A・B区遠縄外出土土器(2)

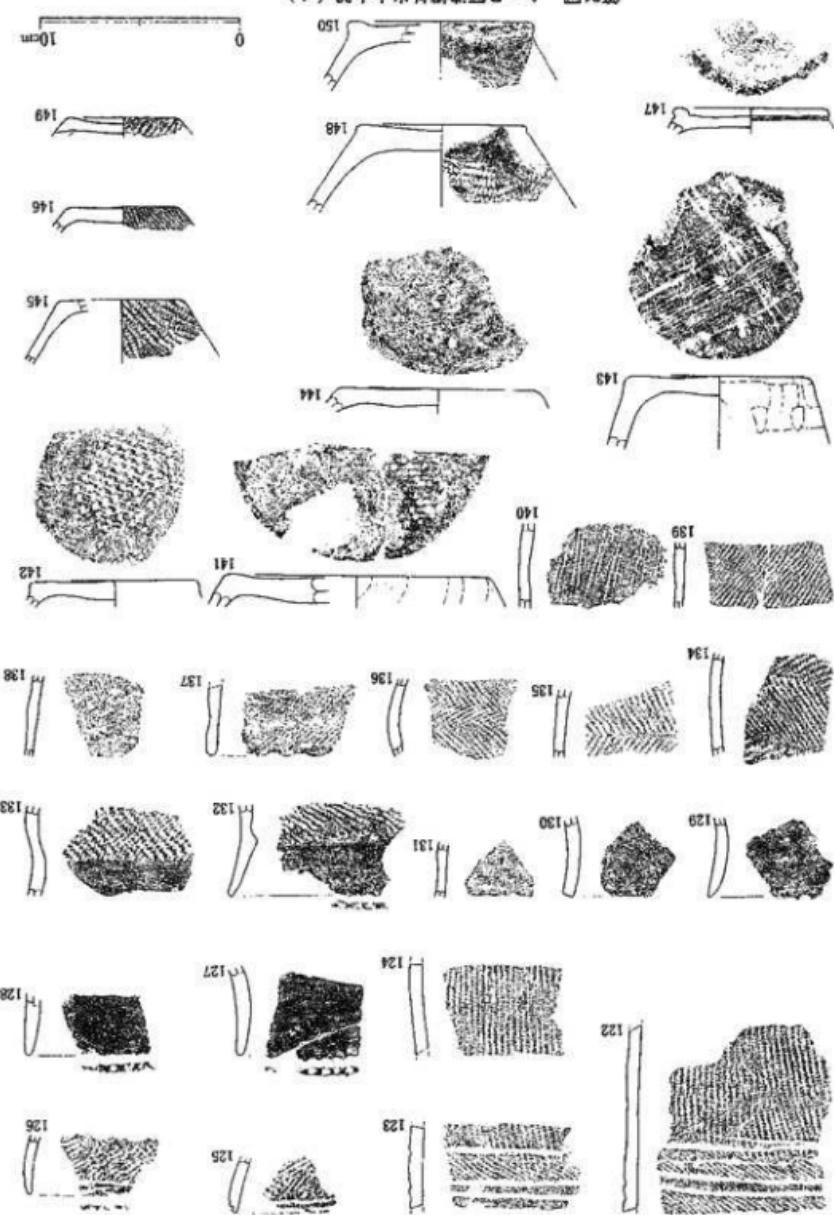
10m

0



第30図 A・B区遺構外出土土器（3）

第31図 A・B区遺構外出土土器(4)



第4章 A・B区の陶器の器種

離面がわずかに残っており、また主要剥離面中央には大きな剥離面があり、素材である横型剥片の打瘤を除去したものと考えられる。基端部には主要剥離面側からの剥取による剥離面が残される。

石匙(S26～S31)：6点の出土で頁岩である。いずれも縦型剥片を素材としたものでS31以外は刃部は背面の周縁に作出される。S26～29・31では背面に粗い二次加工を施して、素材剥離面を除去しているが、S30では背面に素材の剥離面が大きく残っている。

石錐(S32～S34)：3点の出土でいずれも頁岩である。3点とも剥片素材の形状を大きく変えることなく剥片の一端に錐部を設けている。S33・34では片側縁にのみ形状を整えるための二次加工を施し先端部では両面から加工を行っている。

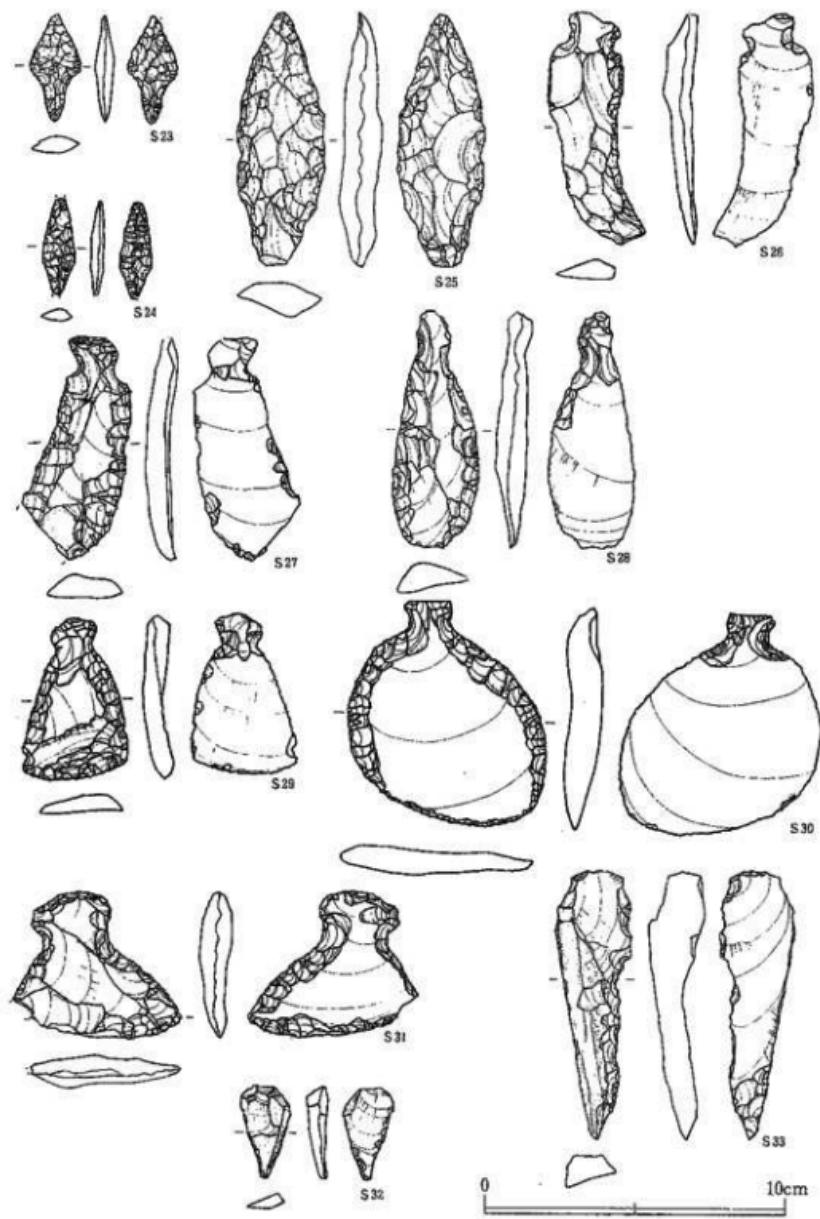
石麓(S35～S38)：4点の出土で頁岩である。S35・S36は縦長剥片を素材とするもので打面とは反対方向の側縁部に刃部を設けている。2点とも打面を残し、主要剥離面には素材の剥離面を広く残し両側縁に浅い二次加工を行い、背面には全面に二次加工を行っている。欠損部は石器本来の長さの1/2ほどの所であり、S36では刃部の再加工を行っている。

S37・38は縦長剥片の打面側の厚い部分を刃部にしたもので、素材の剥離面をわずかに残して両面に粗い二次加工を行って全体を短冊形に整形した後に、刃部を両面から作出する。刃角はS37は86°で、S38は61°である。

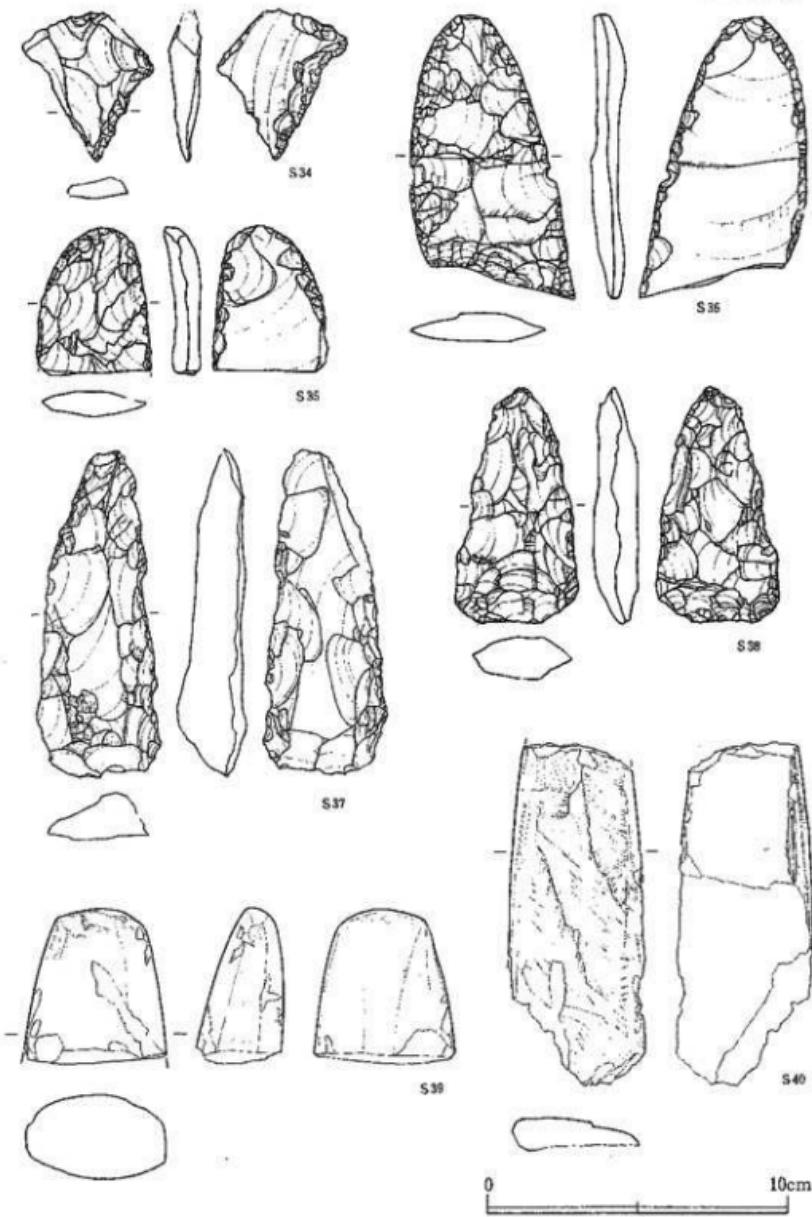
磨製石斧(S39)：1点だけの出土で緑色凝灰岩を素材とし、全体の2/3が欠損している。

### 3 石製品(第32図S40)

S40は粘板岩を偏平に研ぎ出したもので、破損が激しくて全体の形状は明確ではないが、石刀とも考えられる。二次的火熱を受けている。



第32図 A・B区遺構外出土石器(1)



第33図 A・B区遺構外出土石器（2）

石器番号	採取番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質
S 1	11	S I 05	石 鏁	26.0	14.0	4.5	1.0	頁岩
S 2	11	S I 05	石 鏁	21.5	10.0	3.0	0.5	"
S 3	11	S I 05	石 鏁	15.0	11.5	3.0	0.4	"
S 4	11	S I 05	石 鏁	21.0	18.0	5.0	0.9	"
S 5	11	S I 05	石 鏁	24.5	9.0	6.5	1.4	"
S 6	11	S I 05	剥片	51.0	49.0	17.0	46.7	"
S 7	11	S I 05	剥片	64.0	69.0	24.5	65.5	"
S 8	11	S I 05	剥片	109.5	79.0	35.0	240.7	"
S 9	12	S I 05	石 梢	61.5	117.0	27.5	119.6	"
S 10	12	S I 05	剥片	38.0	41.0	5.5	8.5	"
S 11	12	S I 05	石 梢	156.0	57.5	46.5	290.3	"
S 12	14	S I 05	剥片	69.0	77.0	36.0	166.3	"
S 13	17	S K 01	剥片	43.0	39.0	13.0	12.1	"
S 14	17	S K 10	剥片	38.0	31.5	5.0	4.4	"
S 15	17	S K 10	剥片	39.0	28.5	7.5	7.0	"
S 16	17	S K 12	剥片	129.0	76.0	31.5	212.4	"
S 17	17	S K 23	磨石	88.0	52.0	51.5	364.0	安山岩
S 18	17	S K 1023	剥片	27.5	41.0	13.0	12.6	頁岩
S 19	22	S K 1028	石 梢	49.0	75.0	33.5	102.3	"
S 20	22	S K 1028	石 梢	60.0	55.0	40.0	159.5	"
S 21	26	SKT1043	搔器	66.0	58.5	20.0	51.6	"
S 22	27	S N 09	剥片	38.0	45.5	13.5	19.6	"
S 23	32	L F 34	石 鏁	36.0	17.0	5.5	2.1	"
S 24	32	L F 34	石 鏁	33.0	11.0	4.0	1.0	"
S 25	32	K R 36	石 槍	84.0	29.0	12.0	27.8	"
S 26	32	-	石 錐	77.5	32.5	8.0	12.2	"
S 27	32	K Q 29	石 錐	74.0	36.0	7.0	18.2	"
S 28	32	K R 25	石 錐	79.0	29.0	10.0	17.9	"
S 29	32	L L 41	石 錐	54.0	35.5	6.0	12.5	"
S 30	32	L T 30	石 錐	74.0	67.5	9.0	46.8	"
S 31	32	L F 33	石 錐	49.0	57.0	10.0	19.2	"
S 32	32	L S 50	石 鏁	31.0	17.0	7.0	2.2	"
S 33	32	L D 36	石 鏁	89.0	25.0	17.0	18.4	"
S 34	33	L C 27	石 鏁	49.0	43.0	10.5	13.1	"
S 35	33	K R 32	石 鏁	49.0	38.0	9.0	17.4	"
S 36	33	K T 38	石 篓	93.0	55.0	11.0	50.3	"
S 37	33	L F 35	石 篓	107.8	41.0	22.0	78.5	"
S 38	33	-	石 篓	78.0	41.0	15.0	43.9	"
S 39	33	L H 42	磨製石斧	51.5	46.5	29.0	93.5	"
S 40	33	LM45	石 刀	113.5	45.0	11.0	58.7	"

第3表 A・B区石器観察表(1)

## 第5章 C区の調査の記録

### 第1節 C区の概要と基本層序

#### 1 C区の概要

C区はグリッド配置図(付図)では70ライン以北で、B区の平坦部に繋がる北西斜面から北西側の台地先端部にかけての地域である。B区平坦部の北西端は標高137m前後で、そこから比高差10mの北西側斜面を降りると東西を沢に挟まれた幅30mほどの鞍部があり、さらにその北西側に標高130m前後の平坦な台地先端部がある。この台地先端部は南北と西側を沢によって画されていて西側は茂竹沢を挟んで茂竹沢遺跡に面している。

C区の調査前の状況は平坦部ではクリやナラなどの落葉樹が繁茂していて、これらの樹根の除去が表土除去作業の段階から困難を極め、特に遺構内に入り込んだ根によって確認と精査作業は大きな影響を受けた。

調査ではこの台地先端の平坦部に4軒の竪穴住居跡と60以上の土坑群や焼土遺構を検出し、そのほか標高128mほどの鞍部になっている区域でも土坑など数基の遺構を検出している。

検出した遺構の時期は縄文時代前期の竪穴住居跡や土坑を中心として、晩期の土器埋設遺構や弥生時代の可能性のある竪穴住居跡など総数76で、各遺構の数は、竪穴住居跡4、土坑56、土器埋設遺構1、石器集中部5、焼土遺構10である。

遺物は縄文時代早期～晩期、弥生時代の土器があり縄文時代前期のものが主体を占める。また石器は土器に比べて圧倒的に多く、その中でも石器製作時に生じた剥片や細片が多い。

#### 2 基本層序

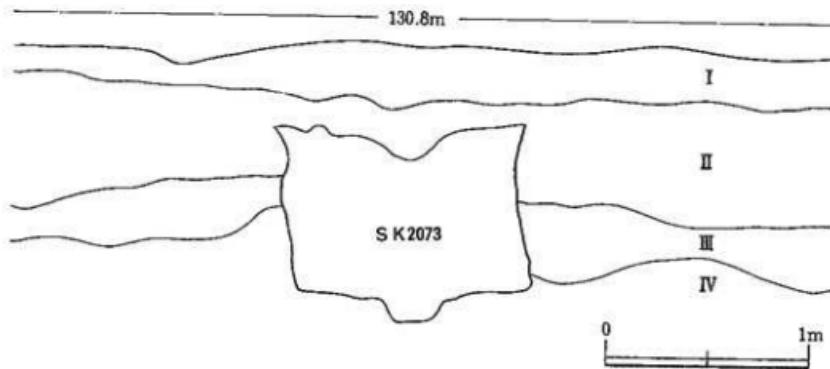
C区の基本層序は北西側平坦部とB区との中央部にある鞍部とでは相違があり、その両地域の層序について概略を記述する。

北西側平坦部の層序は基本的には第34図に示すとおりであるが、前項で述べたように樹根が多く、また風倒木痕が深く入り込んでいることもあって地域全体が均一な基本層序を示しているわけではない。そのため遺構についてはできるだけ掘り込み面を把握すべく確認作業から慎重を期したが、多数の土坑が重複する北西端部などでは土層観察で初めて確認した遺構もあり、平面プランを土層から復原した遺構もある。

- I層 黒褐色土(10YR2/3) 表土である。上位は腐葉土で樹根が入り込んでいて極めて軟らかく、下位では褐色(7.5YR4/4)砂質土と暗褐色土(10YR3/3)がブロック状に混在している。
- II層 褐色土(7.5YR4/6) 全体的に下位ほどしまりのある土で、炭化物を1%ほど含む。SK2059・2073など遺構によってはこの層中で確認されるものもある。
- 明褐色土(7.5YR5/6)
- ~
- III層 褐色粘質土(7.5YR5/6) 堅くしまっている土で、ほかに夾雜物を一切含まない。
- IV層 明黄褐色土(7.5YR7/6) 地山である。シルト質で下位ほど風化礫が混入する。土坑の多くは底面がIV層まで達している。

以上が基本層位の概略であるが、層厚は場所によって違いがあり、またII～IV層はいずれも褐色系の土のため各層の境界を明確に把握しにくい地域も多くあった。

C区北東部の鞍部の基本層序は上記I層が5～10cmで、その下がIV層の地山となる場所が多く、II・III層が存在していても分層できるほど厚く堆積している箇所はなく、この地域における遺構はすべてIV層で確認した。

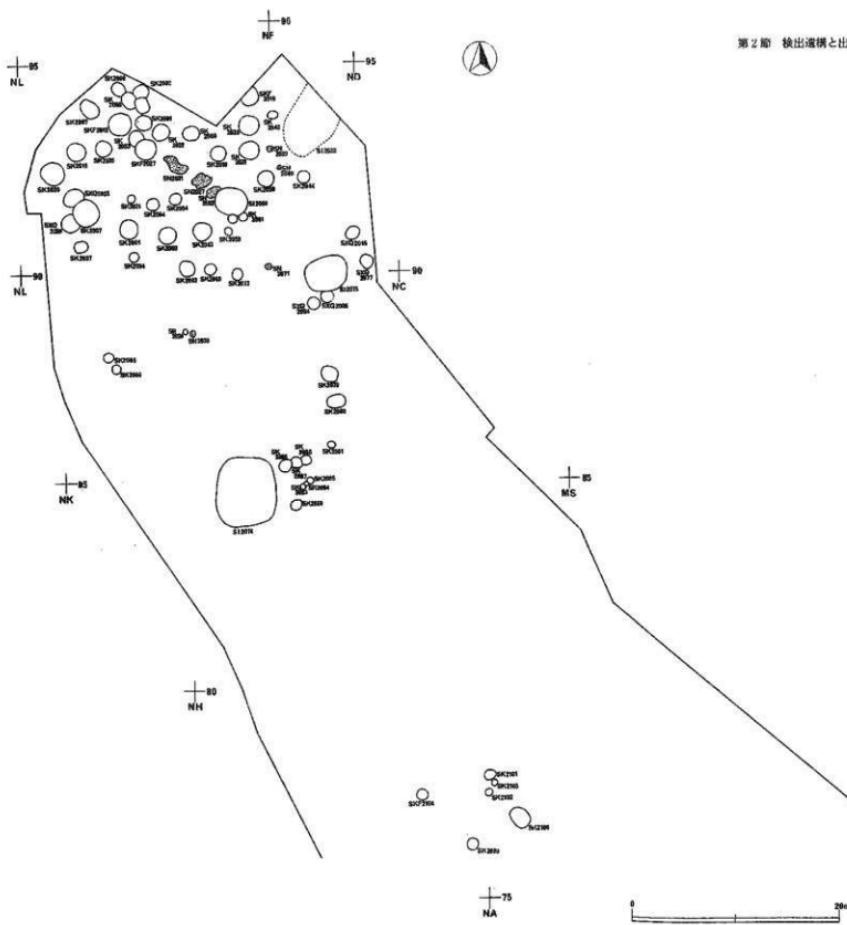


第34図 C区基本土層図

## 第2節 検出遺構と出土遺物

遺構総数76のうち、調査区の北端部には46基の土坑と竪穴住居跡2軒(SI2022・2060)、焼土遺構10、土器埋設遺構1、石器集中部5の計62遺構が集中しており、その中でも北西端部では多数の土坑の重複が見られる。この遺構集中部のSI2060から南東に10mにはSI2075とその周辺に石器集中部が4箇所ある。さらにこれより南15mほどにはSI2074と10基ほどの土坑が存在す

第2期 検出構造と出土遺物



る。またB区とC区の北西平坦部との中央にある鞍部では5基の土坑を検出している。

### 1 壁穴住居跡

#### S I 2022(第36~38図、図版23)

調査区北東端のND・NE93・94グリッドにかけてII層中で焼土の広がりを確認し、確認時にIはSXとして登録したが、土層観察によって一部壁の立ち上がりを認め住居跡としたものである。従って住居のプランは一部確認された壁から想定したものであり、また住居の北東部は調査区域外にかかっている。推定プランによる住居の規模は、長さ580cm以上、幅400cmで長軸方向が北東-南西の橢円形を呈する住居跡である。壁は確認できた部分で高さ20cmほどで緩やかに傾斜して立ち上がる。覆土はしまりのない褐色土で、住居北東側に広がる焼土Dをはじめ焼土E・Fは二次堆積したものと考えられ、明褐色を呈するしまりのない焼土である。

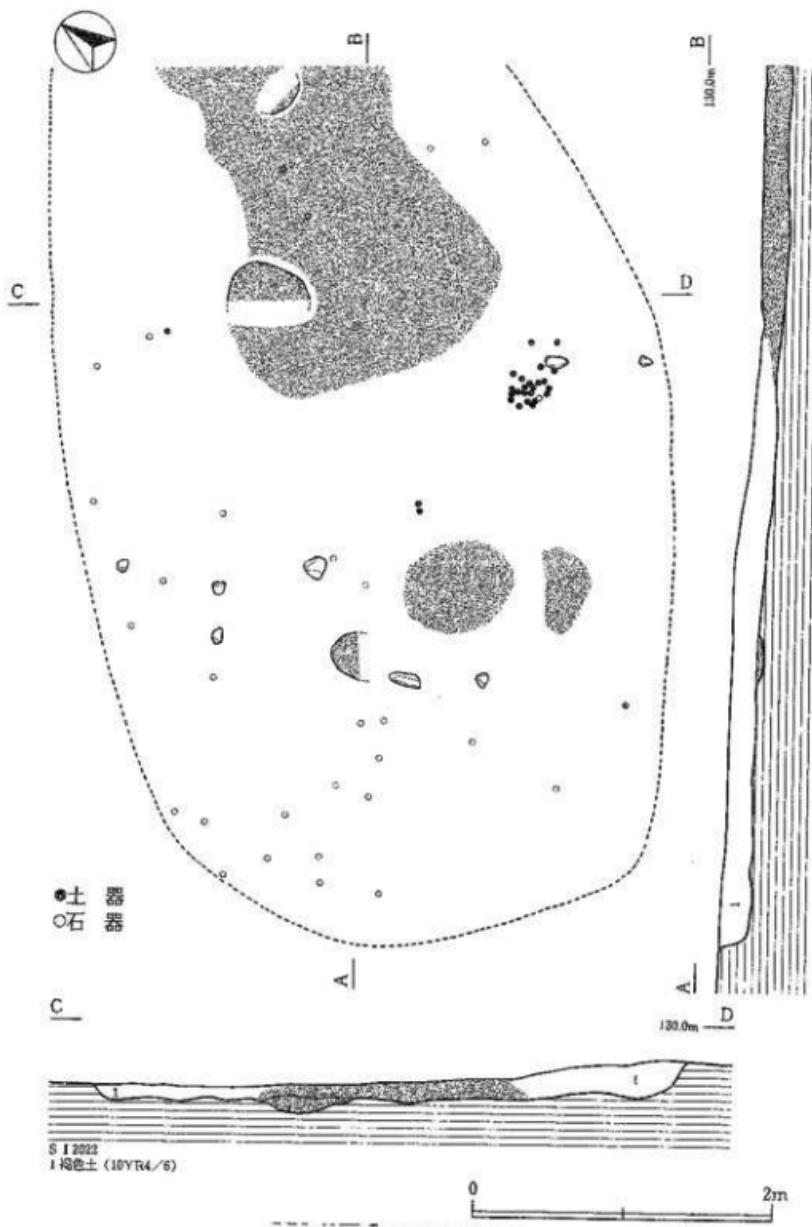
床面は比較的軟らかく、炉はほぼ長軸線上に並ぶ焼土A・B・Cで地床炉である。住居推定プランの内外に柱穴は検出できなかった。

遺物は土器片93、石器129点が出土しているが、土器については細片が多く石器もフレイク・チップ類が90%以上を占める。

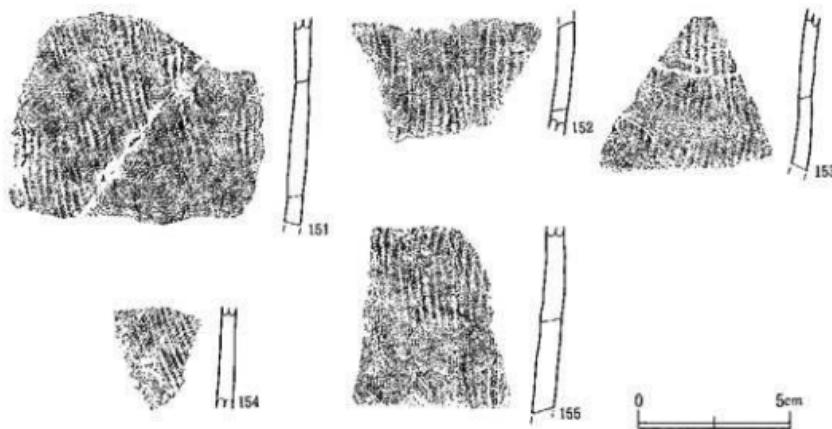
土器151~155は同一個体で焼土Dの南側で覆土上面から出土したものである。L撚糸文施文後に磨り消しが行われるもので、胎土は肌理細かく焼成も良好で褐色を呈する土器である。

石器S42・43・45・46・48は床面から、他は覆土中から出土している。S41は横型剥片を素材とする石箇で、二次加工は主要剥離面の両側縁と背面の右側縁にのみ行われ、刃部は所要剥離面の素材剥離面と背面に施される細かな調整で作出され。刃角は45°である。S42・45は自然面を残した剥片素材の一端に二次加工を行う石錐であるが、後者については石錐の未製品の可能性もある。石匙S43は打面を残す綫長剥片を素材とし、両面とも素材の剥離面を広く残して背面は両側縁に所要剥離面では片側縁にのみ二次加工を行っている。S46・47は搔器でS46は横型剥片の打面側に刃部を設けたもので、S47は剥片の片側縁の背面側に加工を行ったものである。S48は使用痕のある剥片である。石器はすべて頁岩である。

本住居跡の時期は、確認時に出土した撚糸文のある土器が小坂X式に並行するものと考えられることと床面から出土した石器などから、弥生時代か縄文時代と思われるがより詳しい時期については不明である。



第36図 S-1 2022堅穴住居跡



第37図 S1 2022堅穴住居跡出土遺物(1)

## S1 2060(第39~41図、図版20・23)

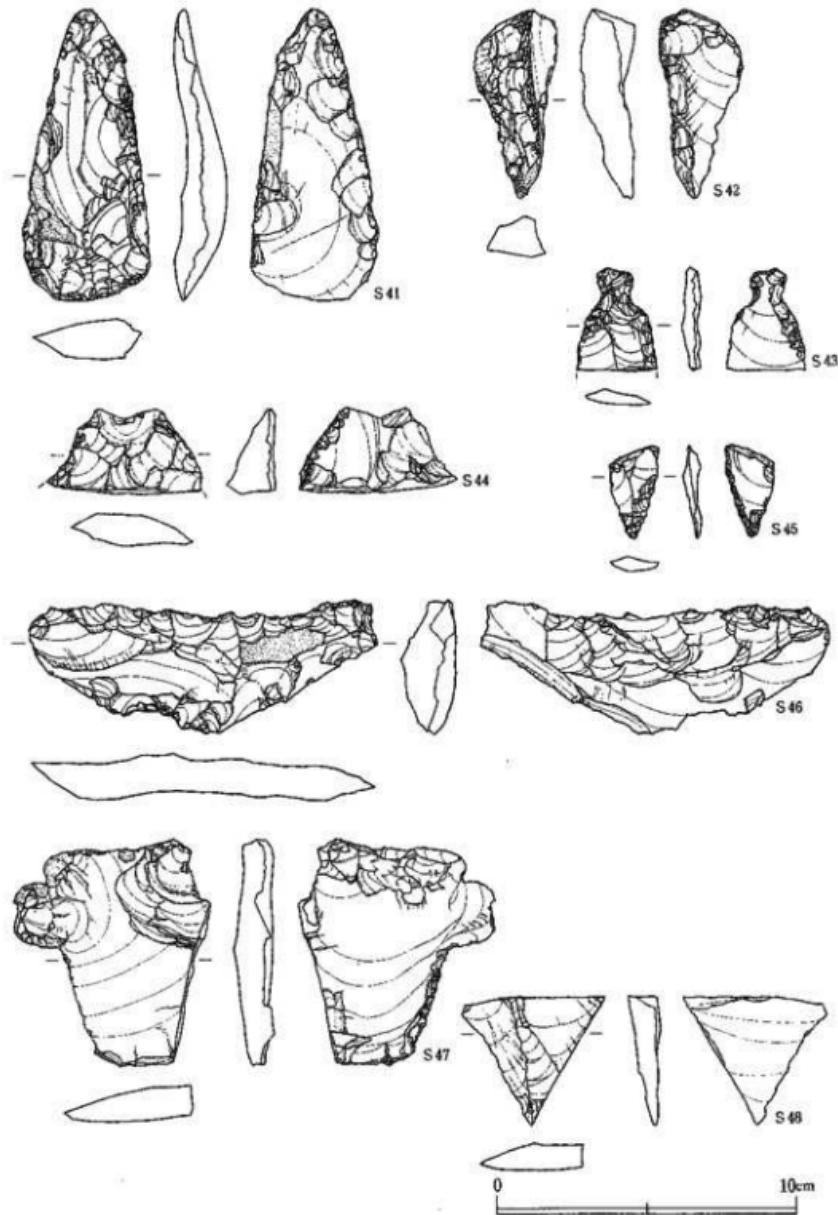
調査区北側のNF・NC91・92グリッドで北側遺構群の中では西南に位置しており、北東側ではSN2032と南側ではSK2059・2061と重複している。確認面はII層中で暗褐色土が円形に広がっていた。住居の規模と形態は直径270~300cmの円形を呈し、住居壁の高さは北側では30cmでやや傾斜して立ち上がり、床面は比較的堅くしまっている。

炉は地床炉で、中央部分で30×30cmほどの範囲に堅くしまった赤褐色(5YR4/8)焼土があり、その周辺には炭化物が広がっていた。柱穴はpit1~3でそれぞれ直径20cm前後、床面からの深さは10cmであり主柱穴と考えられる。重複する遺構の新旧関係は本住居がSK2059より古く、SN2032・2061よりは新しいことが土層観察から確認できた。

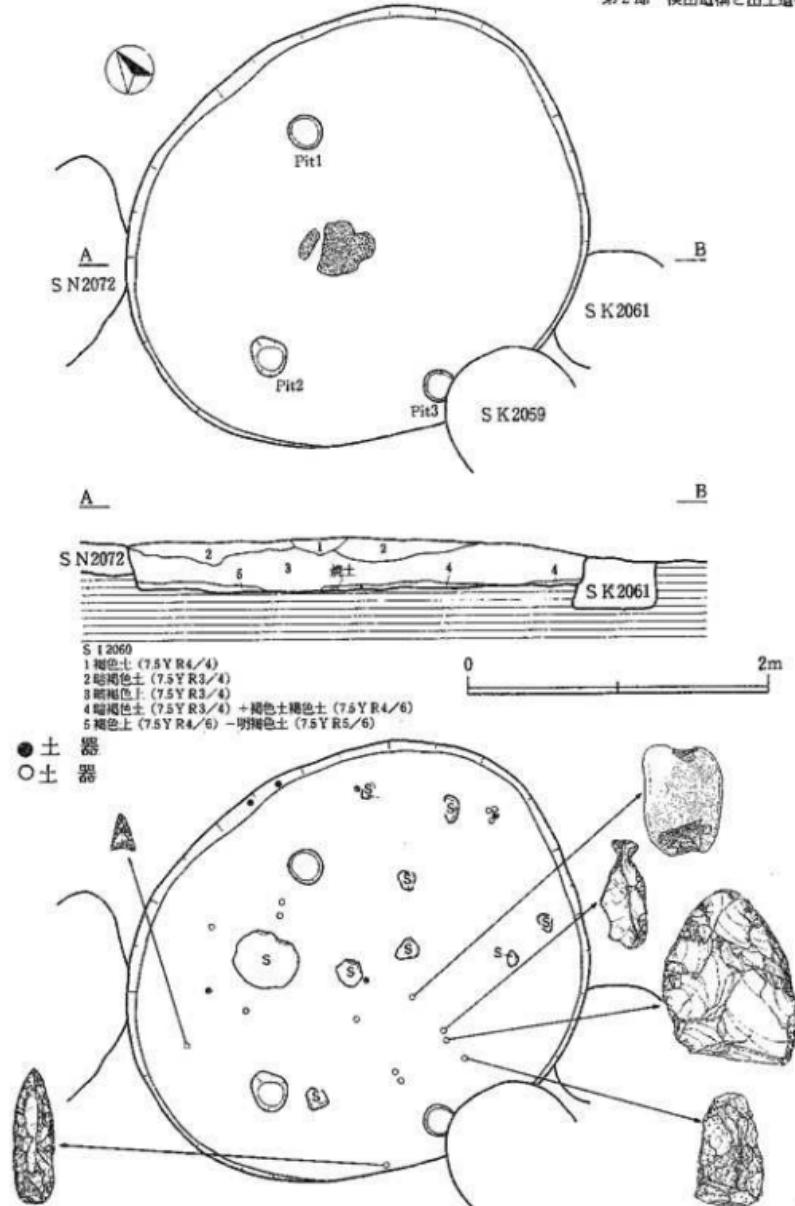
覆土は暗褐色土を主体とし、その下には暗褐色土とII層由来の褐色土や明褐色土の混合土厚さ5cmほどで堅くしまって堆積していて、貼床だった可能性がある。

遺物は土器7点、石器83点が床面から3層下位を中心として主に住居内の南側から出土している。土器156と158は同一個体で結節のあるRL繩文が付された胎土、焼成とも良好な土器である。赤褐色を呈していて、上記の特徴からS1 2075出土の土器168と同一個体の可能性がある。157・159は胎土に纖維をわずかに含んだ灰褐色を呈する土器で、これも結節のあるRL繩文が付されている。

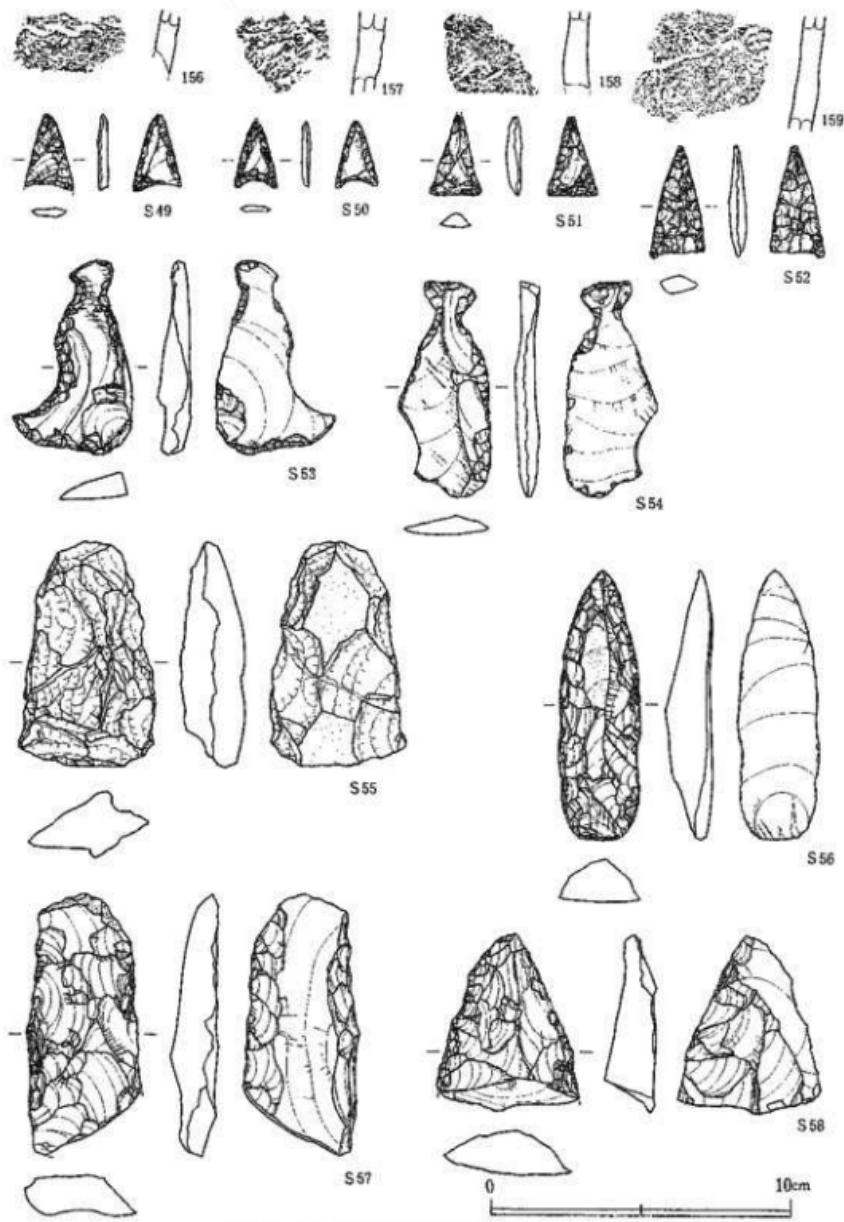
石器S49~S52の石鎌のうちS49~51は両面に素材剥片の先行剥離面を残していてS49・50は凹基無茎鎌で、S51は平基無茎鎌である。S52は両面に細かな押圧剥離を加えるもので基部両端を角状に突出させている。石匙S53・54は素材剥片の剥離面を広く両面に残していて、S53はつまみ部を打面とは反対方向の一辺に作出し、刃部は湾曲した背面の片側縁に設けられる。



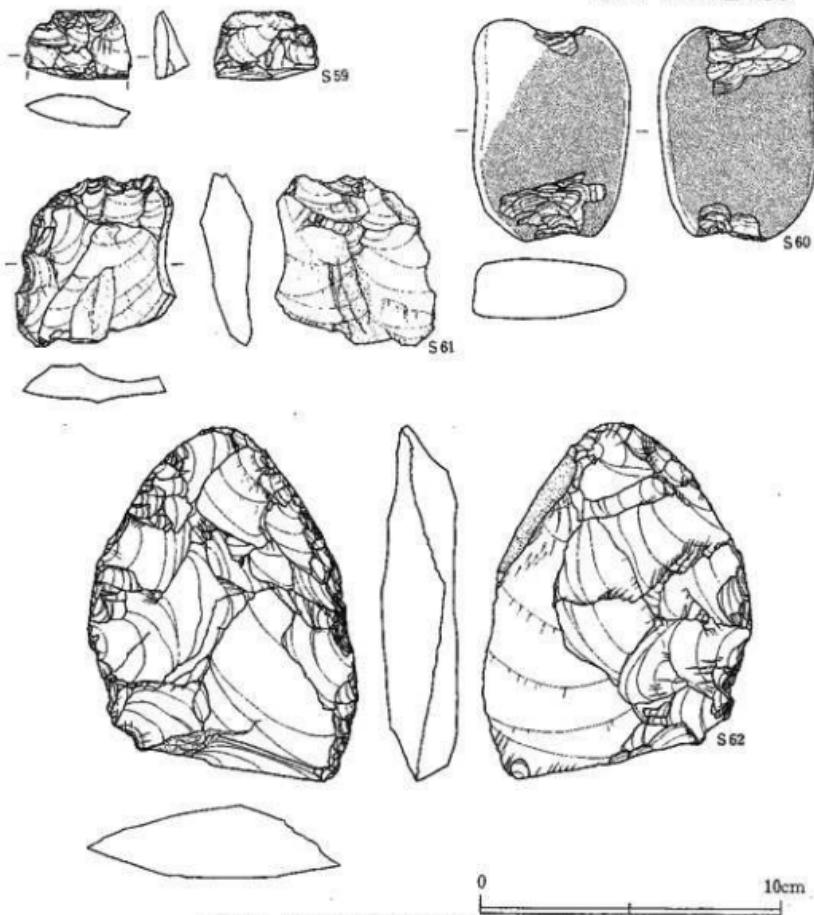
第38図 S1 2022堅穴住居跡出土遺物（2）



第39図 S I 2006整穴住居跡と遺物出土位置図



第40図 S1 2060堅穴住居跡出土遺物(1)



第41図 S1 2060堅穴住居跡出土遺物（2）

S54は打面を残す縦長剥片の背面両側縁にのみ浅い二次調整を加えて刃部を作り出している。石壺S55～58のうちS55は安山岩で背面側にのみ二次調整を加えて、主要剥離面の先行剥離面とで刃部が作られる。S56も素材となる縦長剥片の背面にのみ丁寧な調整を加えて、刃部は主要剥離面の先行剥離面とで形成される。S57・58は横型剥片を素材とするものでS57では背面全面に二次調整が行われるが、主要剥離面では素材の剥離面を広く残し両側縁にのみ剥離を施している。S58では主要剥離面の二次調整も全体に及んでいる。S59は剥片の下方に打面をもつ楔形石器で、S61は素材剥片の二縁に調整を加えた搔器である。S62は木葉形の両面調整石

つ楔形石器で、S61は素材剥片の二縁に調整を加えた搔器である。S62は木葉形の両面調整石器で、背面の右側縁に細かな押圧剥離を加えて搔器に似た刃部を設けていて主要剥離面には深い押圧剥離を一方向から加えているが先行剥離面も残っている。S60は偏平な凝灰岩の両端に調整を加えた石鎌で剥離が行われた後に両面が磨かれている。

本住居跡の時期は出土土器から縄文時代前期後半と考えられ、また炉周辺の炭化物の年代測定では3070B.Cという結果が得られている。

#### S I 2074(第42~48図、図版15・21・24・25)

調査区北側中央部のNF・NG83・84・85グリッドで、北側造構群からは南45mほどに位置している。確認はII層中で暗褐色土の精円形の広がりが認められた。住居の規模は長さ680cm、590cmで隅丸長方形を呈していて、壁は南側を除けば高さ30~50cmほどで傾斜して立ちあがかり、床面は平坦で比較的かたくしまっている。炉は住居中軸線より西側で、浅い掘り込みをもつて床炉が3箇所で南北に一列に並んでいる。この地床炉の東側にも床面の焼けている部分がこれも南北に並ぶように2箇所あるが、焼土はしまりがなく二次的に堆積したものと考えられる。

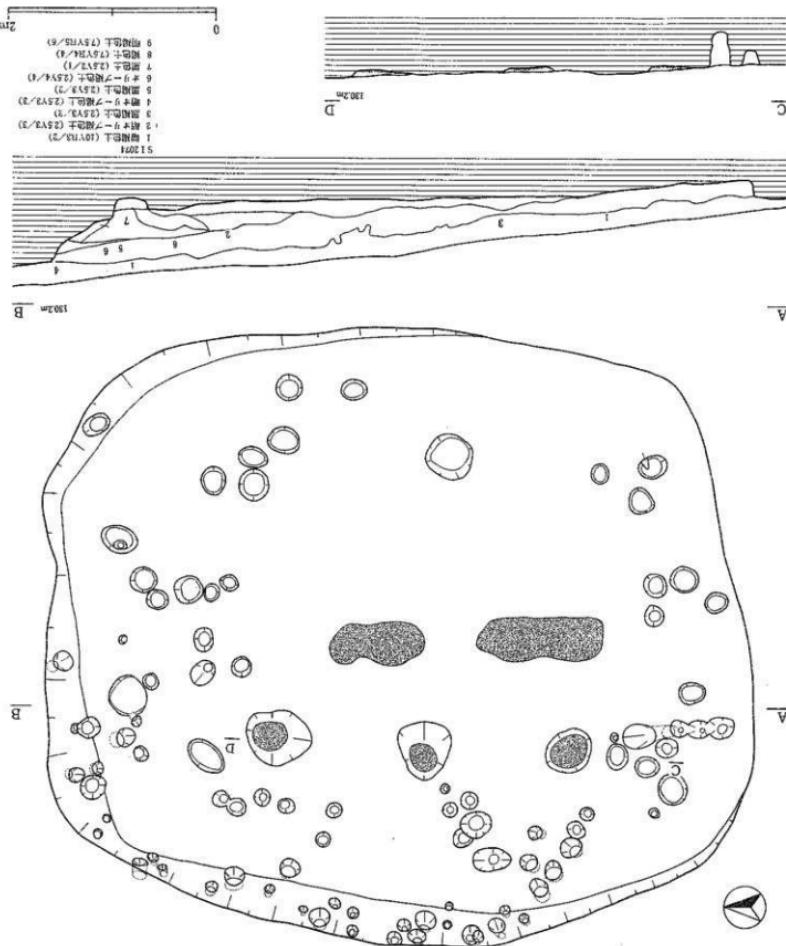
柱穴は住居壁の内側で大小確認しており住居壁に沿って柱穴が並ぶものであったと想定され、特に西側の小柱穴は住居内側に傾くものが多く垂木の柱穴と考えられるものである。なお住居内北側に直径30cmほどの浅い落ち込みがあり、住居に伴う施設と思われる。

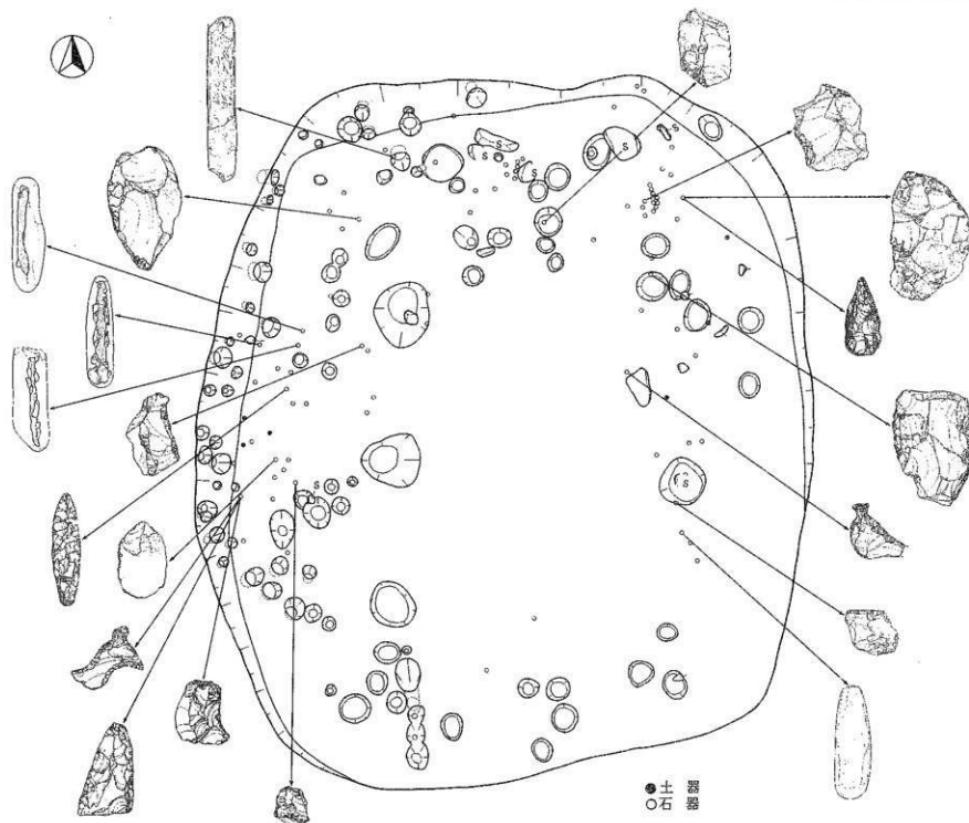
出土遺物は石器が多く358点出土していて第43図に示すように、住居中央部よりも壁に近い床面から出土している。石器に比べて土器は少なくいずれも破片である。土器160~164は住居西側の床面から出土しており、163を除く他の土器は同一個体である。160~162・164は胎土に砂粒を含むものの焼成の良好な土器でL R縄文が付されている。163は胎土がシルト質で肌理が細かく焼成の良好な土器であり、比較的径の小さい(直径7cm)底部からやや外傾して立ち上がっている。

出土した石器には石槍・石匙・石籠・磨製石斧・磨石などほかに二次加工のある剥片などがある。S63は両面に平坦剥離の行われた断面がカマボコ形の柳葉状の石槍である。石匙S64・66は打面を残した縦長剥片の両面に素材の剥離面を広く残し、背面の側縁に刃部を作出したものである。刃部作出の剥離はS66の左側縁では浅く細かな押圧剥離が行われる。S65・72は石鎌で、S65は横型の剥片の背面に刃部を設けていて主要剥離面には打瘤除去のための調整以外なら加工は行われておらず、刃角は40°である。S72は両面調整の行われた石籠の欠損品である。S69~71・74・76は素材となる縦型剥片の形状をそれほど変えることなく、一側縁に二次加工を施した搔器あるいは削器である。S77~79大型剥片の側縁に押圧剥離によって刃部を

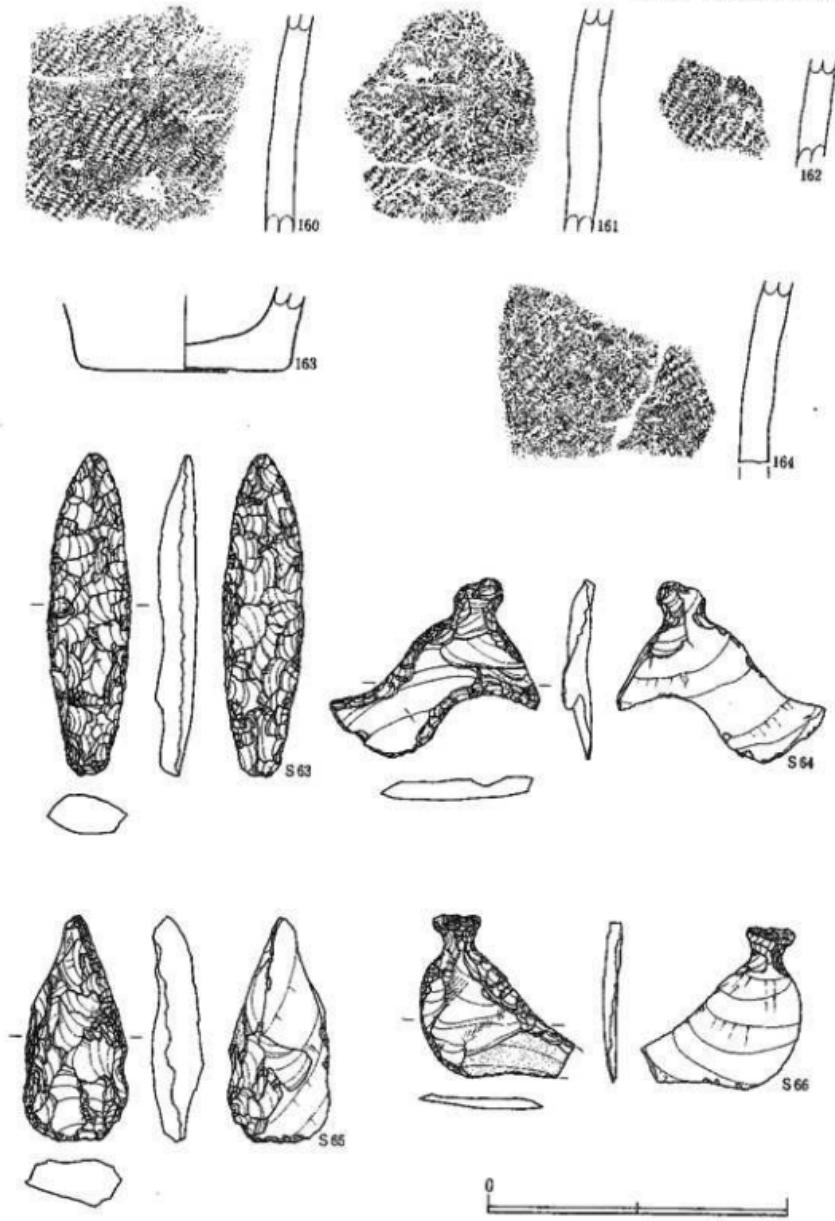
第42圖 S | 2074號穴狀器

- 77 • 78 -



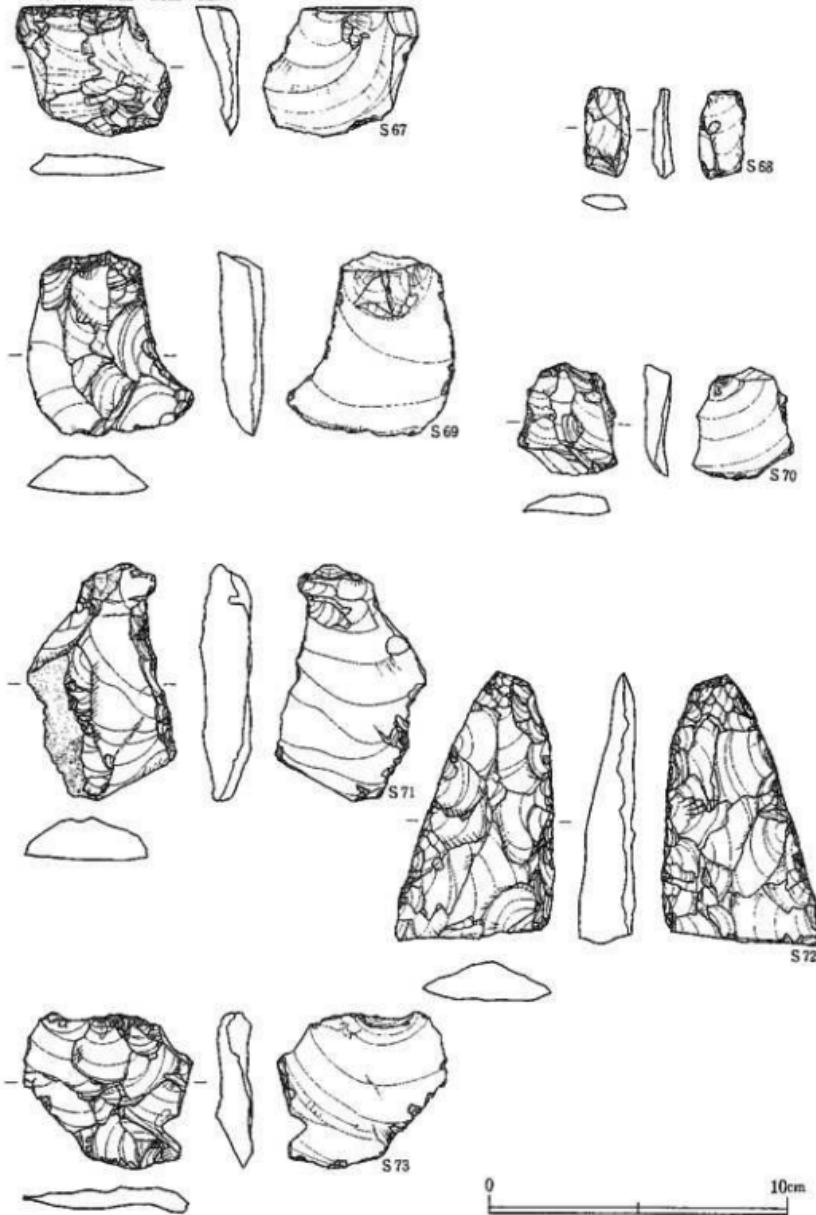


第43図 S-1 2074堅穴住居跡遺物出土位置図

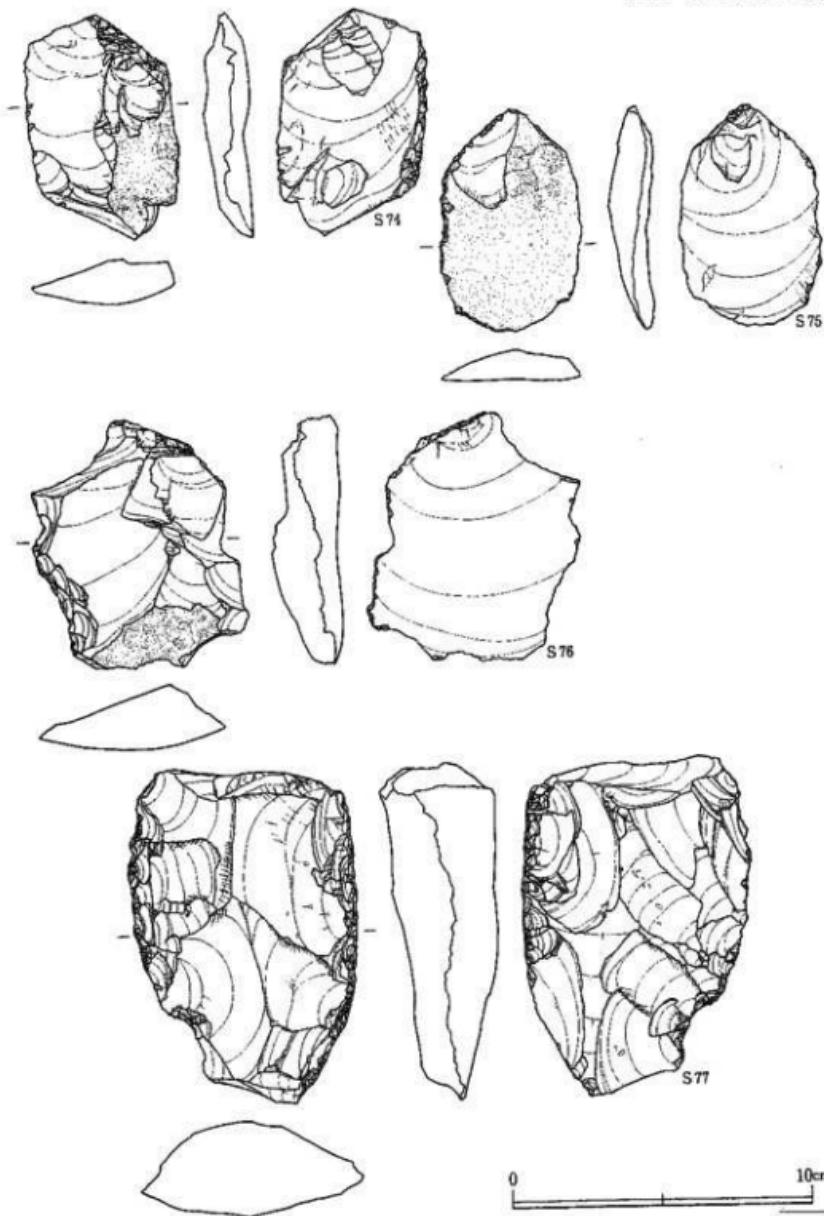


第44図 S1 2074堅穴住跡出土遺物（1）

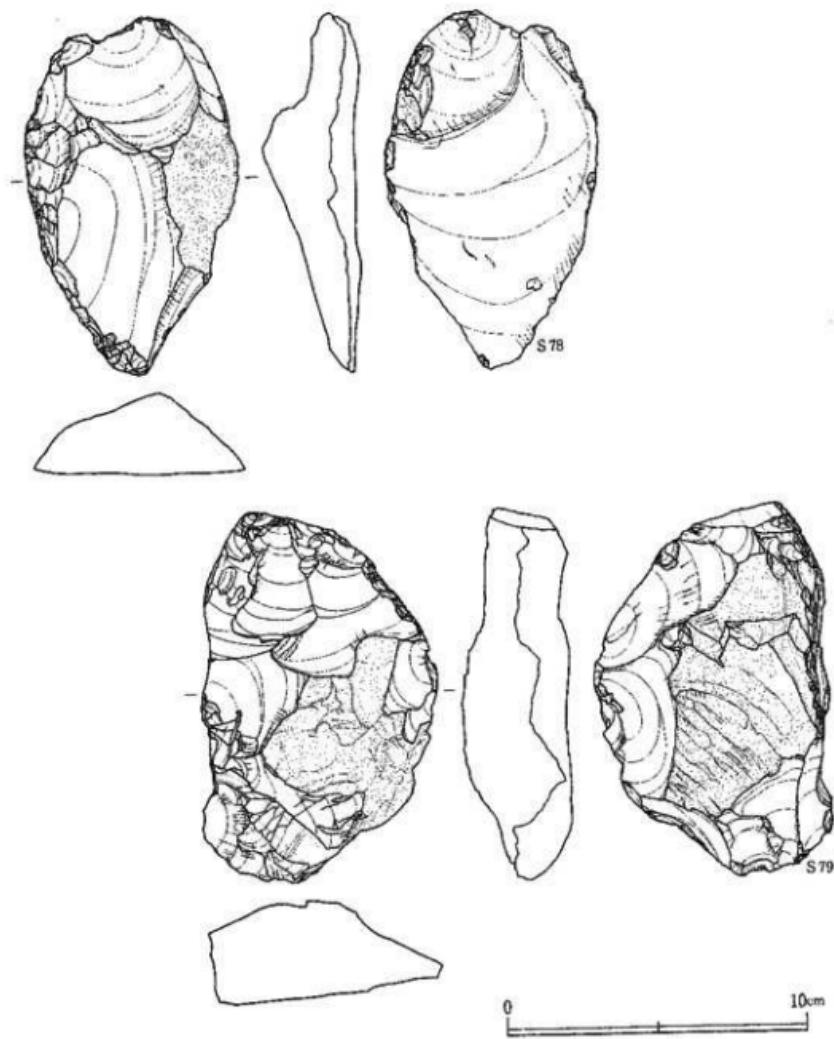
第5章 C区の調査の記録



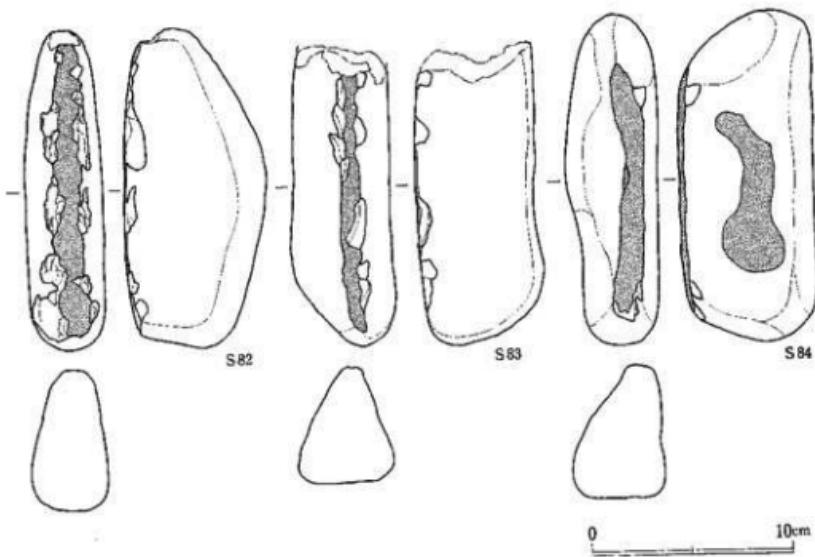
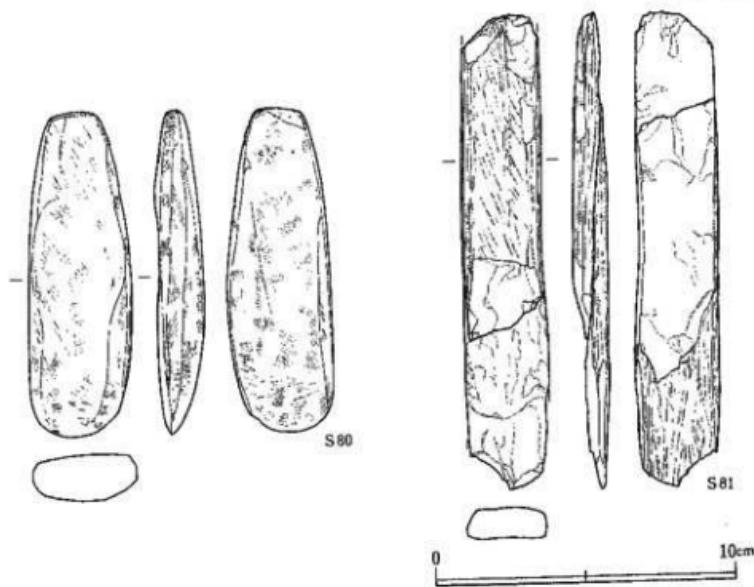
第45図 S-1 2074堅穴住居跡出土遺物（2）



第46図 S-2074竪穴住居跡出土遺物（3）



第47図 S I 2074堅穴住居跡出土遺物(4)



第48図 S1 2074堅穴住居跡出土遺物（5）

作出了した削器であり、S77では両面に大きな剥離を加えた後に刃部を、S78では自然面の残る縦型剥片の左側縁に刃部を設けているが、S79では節理面が広く残る剥片で右側縁の一部に幅3cmほどの刃部がある。

磨製石斧S80は緑色凝灰岩を素材としたもので全体に成形のための擦痕が残り、刃部は円刃であるが使用により一部偏している。S81は粘板岩を素材とした石劍か石刀と思われる。磨石S82~84は横断面が三角形の安山岩の一面を磨り面とするもので、この3点は住居内西側で隣接して出土している。S67~69・75は使用痕のある剥片である。

本住居跡の時期は出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。

#### S I 2075(第49~54図、図版21・25)

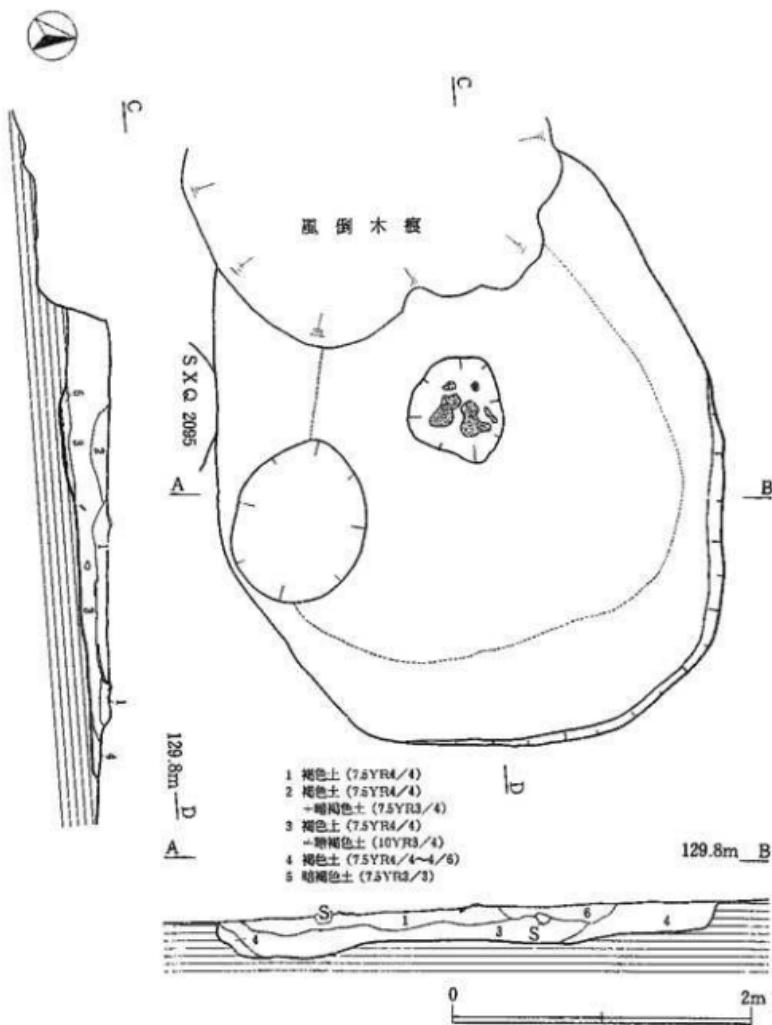
調査区北側でND・NE89・90グリッドで、北側遺構群からは10mほど南西に位置している。確認はⅡ層中で土器片や炭化物を含んだ褐色土が円形に広がっているのが認められたが、西側で大きく風倒木痕によって攪乱を受けている。また南側ではSXQ2095を切っている。

住居の規模と形態は、検出した南北と東側のプランから東西300cm以上、南北330cmの隅丸長方形を呈するものと推定される。住居壁は北側で20cmほどで傾斜しながら立ち上がり、床面は樹根が隨所に入り込んでいて凹凸があるが図中点線で囲まれた部分は堅くしまっていてその外側とは顕著な違いがある。炉は住居中央部にある60×70cmほどの浅い掘り込みを伴う地床炉である。住居南側には80×110cm、深さ15cmほどの楕円形の掘り込みを検出したが、この遺構については覆土などから本住居に伴うものと判断した。柱穴は検出できなかった。

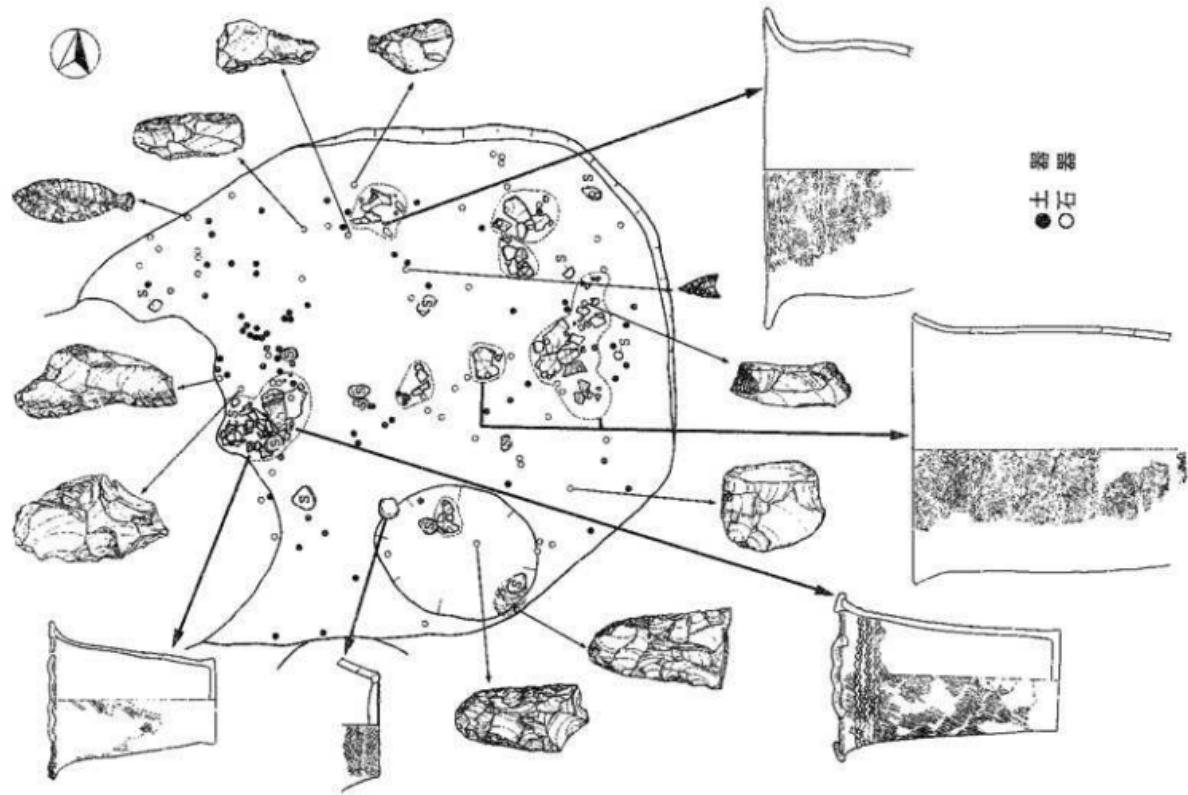
出土遺物は石器では石鎌・石匙・石椎・石籠などのほかフレイク・チップを含めると359点出土していて、土器では深鉢形土器5個体分が床面から出土している。

土器165は外反する口縁部から直線的に底部に向かって細くなる器形で、底部端部は外側にわずかに張り出している。口唇部には太い粘土紐をうねらせたものと渦巻き文をそれぞれ対置させてその間にうねりのある細い粘土紐を貼り付けている。体部には全面にL R繩文が付され、胎土は肌理細かく焼成も良好な土器である。166も165と同様な器形で口唇部の粘土紐による装飾も類似している。体部にはL R繩文が施文された後上半には3条のうねりのある細い粘土紐が貼付され、下段にはさらに半円形に粘土紐が付けられる。167はほぼ直角に外反する口縁部から上半に丸みのある体部にいたるもので、体部には結節のあるL R繩文が付される。胎土はシルト質で、165・166に比べて極めて軽量な土器である。168は外反する口縁部から一度ゆるく括れて体部下半に丸みのある大型の深鉢形土器である。体部には結節のあるL R繩文が付され、胎土、焼成とも極めて良好で全体に赤褐色を呈している。169は施文される繩文や胎土・焼成・色調などからも168の底部と考えられる。

石器は全て頁岩で、S85~87は凹基無茎縁でいずれも基部の両端が角状に突出していて、特にS87は鍔身の長い石鎌である。S85は両面に素材の剥離面を残すが、S86・87では先行剥離面



第49図 S1 2075竪穴住居跡



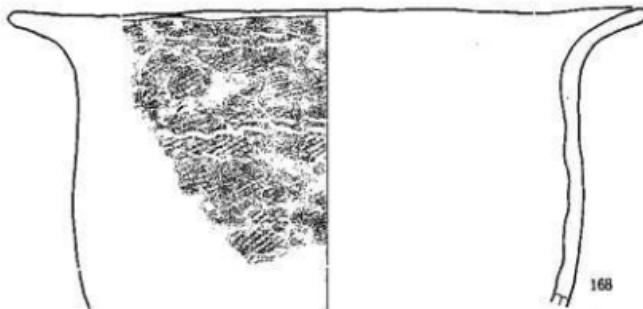
第50図 S-1 2075号穴居跡遺物出土位置図



165



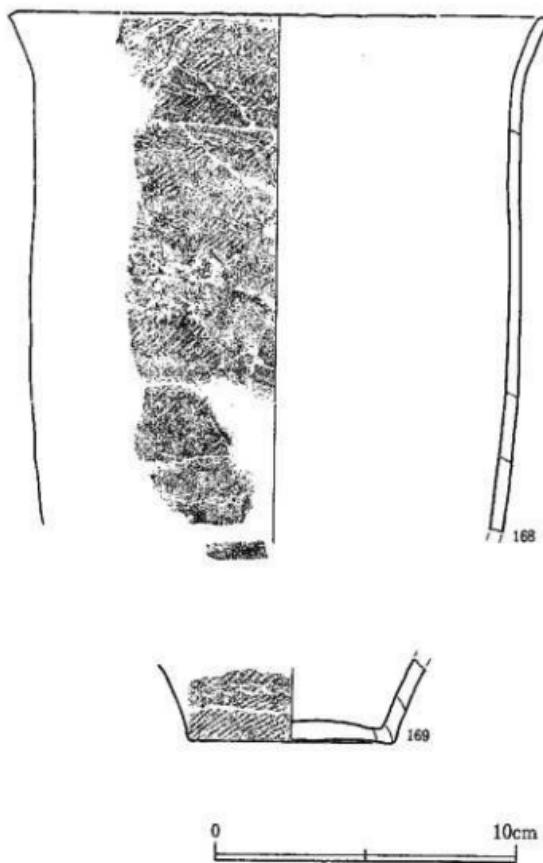
167



168



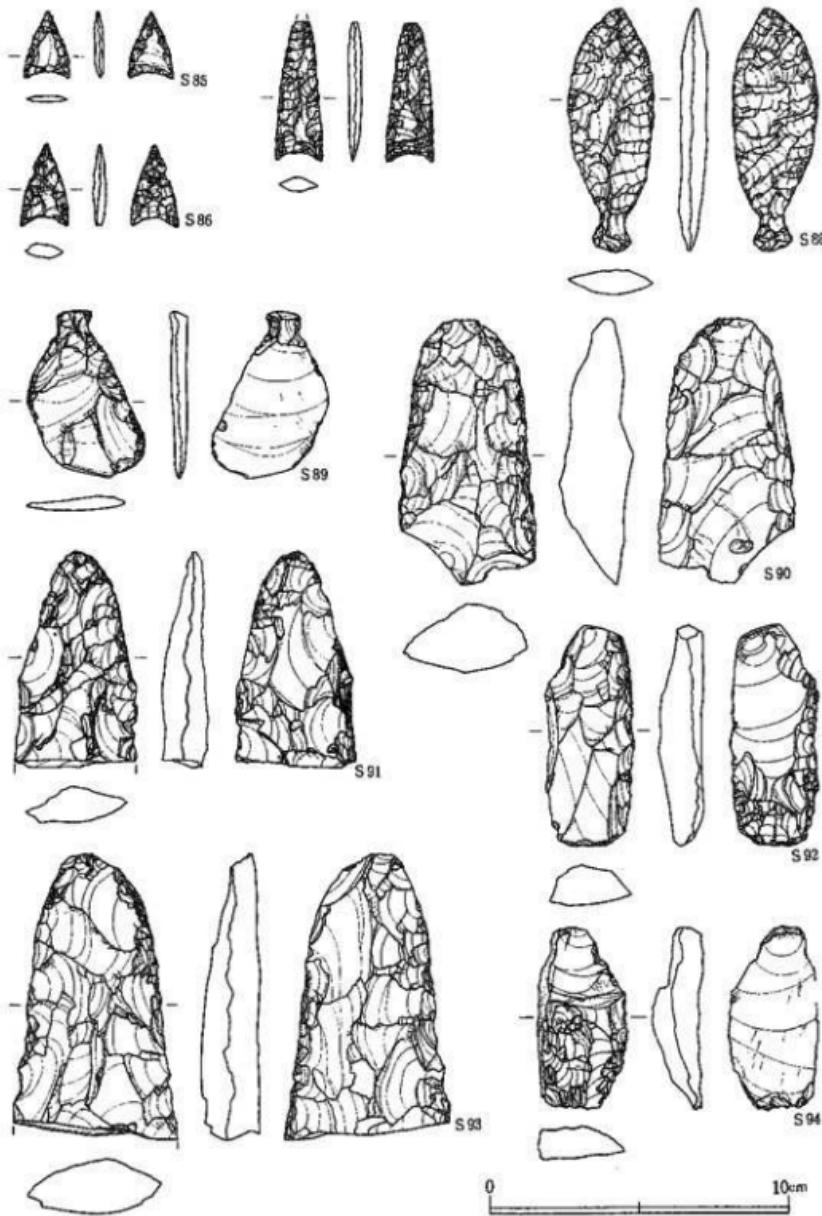
第51図 S 1 2075堅穴住居跡出土遺物（1）



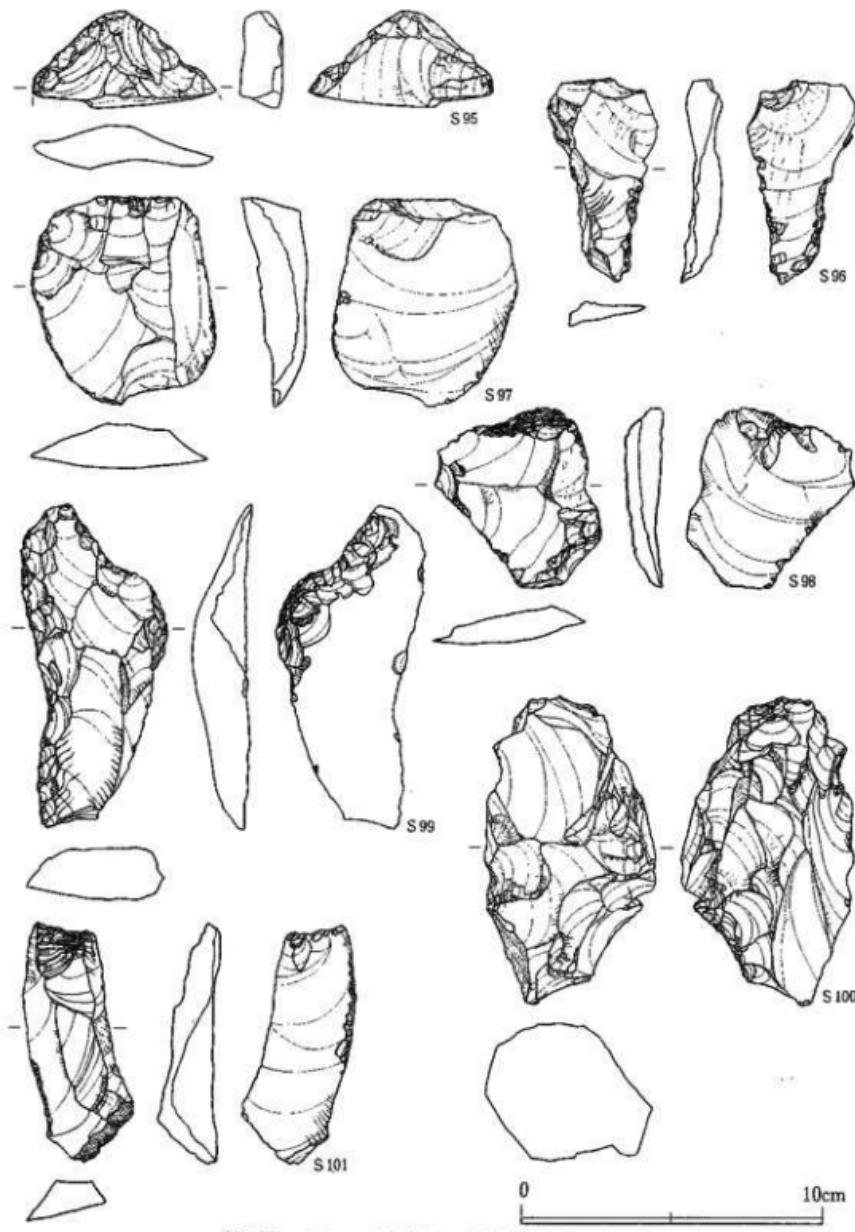
第52図 S1 2075堅穴住居跡出土遺物（2）

を残すことなく押圧剥離で調整している。S88は石匙と同様なつまみ部があるが両面に深い押圧剥離で調整した石槍である。S89の石匙は薄い縦型剥片の背面側の両側縁に刃部を設けるもので、剥片の下縁はヒンジーフラクチャーが残る。S90～93は石鎌でS90・91・93は両面調整されたものでいずれも使用により刃部方向の $1/2$ を欠損していて、S90では刃部再生のための調整が行われる。S92は縦型剥片で素材の形状をそれほど変えることなく主要剥離面側に急角度の刃部を作出している。S94・96・99は剥片の片側縁に急角度の刃部を設けた削器で、S97・98・101は使用痕のある剥片である。S100は3方向から剥片を剥取した石核である。

本住居跡は出土土器から縄文時代前期の大木4式の時期である。また床面から採取した炭化



第53図 S1 2075堅穴住居跡出土遺物（3）



第54図 S-1 2075堅穴住居跡出土遺物(4)

物の<sup>14</sup>C年代測定では3,120 B.Cという結果が得られている。

## 2 土坑

### S K2001(第55・56図、図版20・26)

北側遺構群の西側でNI90・91グリッドに位置し、確認面は表土下のⅡ層相当の褐色土中である。上面形は直径180~200cmの不整の円形で、深さ170cm、断面形は上面から土坑中位で一度直径140cmほどに括れ再び底面に向かって広がる袋状を呈している。底面はIV層中で堅くしまっていて、直径200cmの円形であるが東側は上面プランよりも外に張り出している。

覆土は3~5層が基本層位のⅡ・Ⅲ層由来の土だが、8層以下は褐色土がブロック状に入り込んでいて堅くしまっており人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土器170は5層から出土していて、体部上半から口縁部にかけて外反する深鉢形土器でS字状のR攢糸文が付されている。胎土・焼成は良好で色調は黄褐色を呈している。171・172もS字状の攢糸文が付される土器である。

石器は全て頁岩で4~5層から出土している。S102・104は素材となる縦型剥片の形状を変えることなく背面の側縁に浅い押圧剥離を加えた削器である。S103は二次調整のある剥片で、105・106は使用痕の認められる縦型剥片である。

土坑の時期は覆土出土土器170が大木2式であり、縄文時代前期前半と考えられる。

### S K2003(第55・57図、図版16・26)

S K2001の西側4mでNH90・91グリッドに位置し、Ⅱ層中で暗褐色土が円形に広がって認められた。上面形は直径160cmの円形を呈し、深さ100cmで、断面形は上面から直線的に底部にいたるビーカー状である。底面はIV層上位で堅くしまっていて、中央には直径20cm、深さ17cmのピットがあり、ピットからは5条の溝が放射状に走る。溝は幅10cmほどで底面は中央のピットに向かって傾斜している。覆土の2層はIV層の地山土が埋め戻されたもので堅くしまっており、また底面のピットの覆土はしまりのある明褐色土と橙色土の混合土である。

出土遺物は7層から出土していて、土器173は器面の摩滅しているが白色の砂粒を含む胎土である。石器S107は縦長剥片の打面とは反対方向に使用痕の認められるもので、S108は節理面を残す剥片で、左側縁に二次調整を加えている。

土坑の時期は縄文時代であるがより詳しい時期については不明である。

### S K2004(第55・57図、図版17・20・26)

SK2003の北側4mでNH91グリッドに位置し、Ⅱ層上面で地山の黄褐色土が堅くしまった状

態で円形に広がって認められた。上面形は直径100cmの円形で、深さ80cmで、断面形は上面からほぼ直線的に底面にいたるビーカー状を呈するが、東側の壁は底面近くでわずかに外に張り出している。底面はIV層上位で堅くしまっていて、中央に上面の直径が40cm、底面からの深さ40cmのピットがある。覆土は基本層位のⅢ・Ⅳ層が人為的に埋め戻されたもので、全体的に堅くしまっていて、またピットの覆土は炭化物を含んだ褐色土である。

出土遺物は覆土4層から出土している。土器174は器面が摩滅していて体部の縄文などは不明だが外反する口縁部の下に鉄状の隆起が巡り、丸みのある口唇部にはL R縄文が押圧されている。胎土には砂粒を含み焼成も脆い。

石器S109は打面の残る剥片の側縁に使用痕が認められる。石匙S110は湾曲した縦型剥片の打面方向につまみ部を設け、背面の両側縁にのみ調整を加えたものである。

土坑の時期は縄文時代であるがより詳しい時期については不明である。

#### S K2005(第55・57図、図版26)

調査区の西側で北側遺構群からは南に10mほどのNJ88グリッド杭下にあるが、土坑の底面近くで確認した。土層からは掘り込み面はⅡ層中で、検出段階での上面形は直径100cmの不整円形だが、底面で60×80cmの橢円形を呈している。底面はⅢ層中で比較的堅く東から西にわずかに傾斜している。壁は10cmほどだが緩く傾斜して立ち上がる。

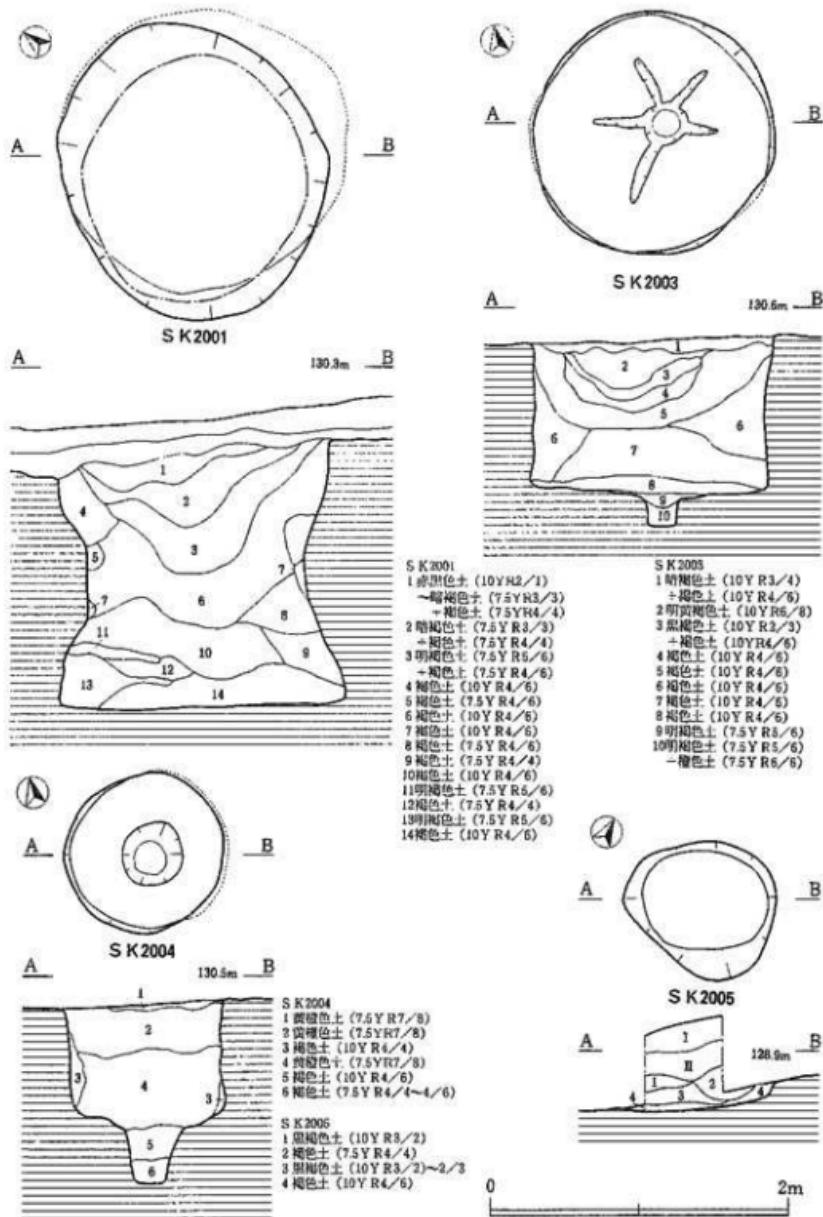
覆土は黒褐色土と褐色土だがグリッド杭下の土層からは、土坑の深さが少なくとも30cm以上あったと考えられる。

出土遺物はS111～113の石器で覆土中からのものである。S111は横型剥片の背面に刃部を設けたもので主要剥離面には打痕を除去するための剥離作業のみが行われるが、S112では両面に二次調整を加えた石箋である。それぞれ刃角は39°と53°である。S113は主要剥離面側に幅3cmの調整を行う削器である。

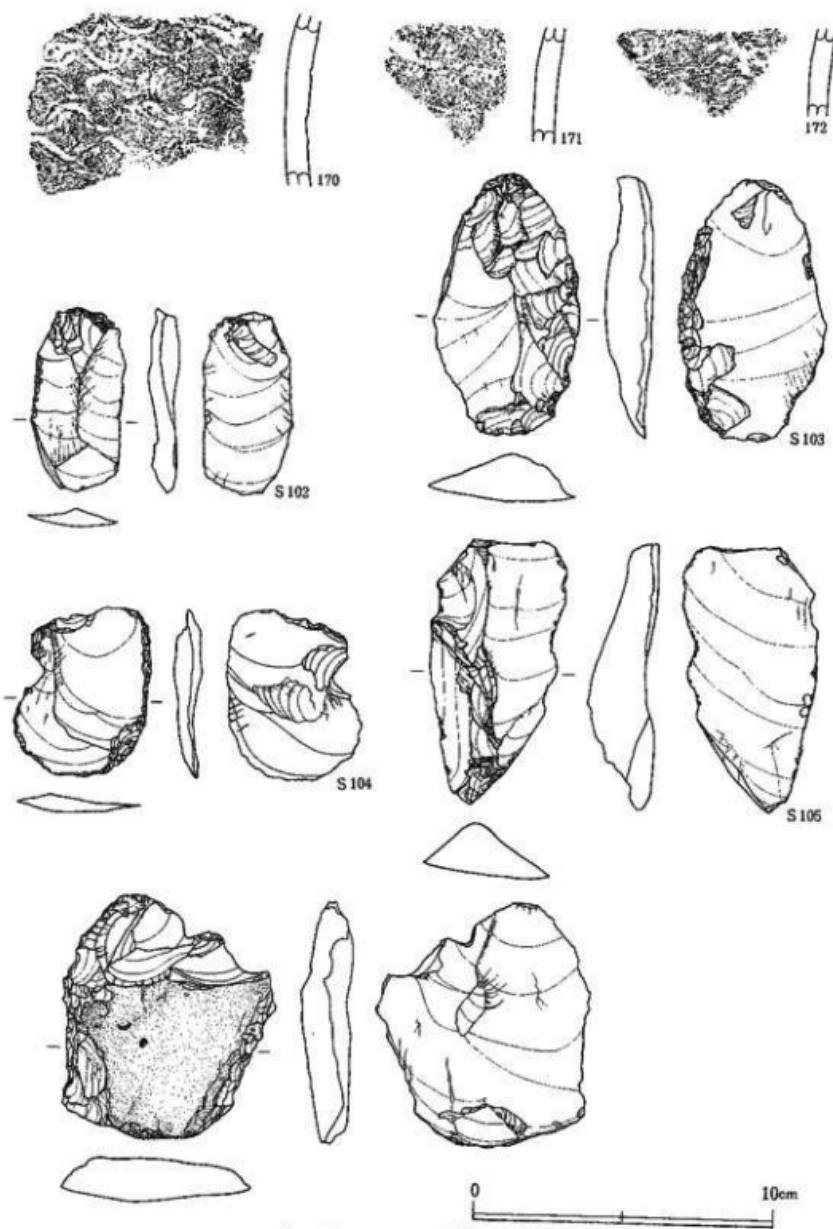
土坑の時期は、4層から採取した炭化物の<sup>14</sup>C年代測定では5,230B.Cの結果が得られており、縄文時代早期後半から前期前半に帰属するものと考えられる。

#### S K2006(第58・59図)

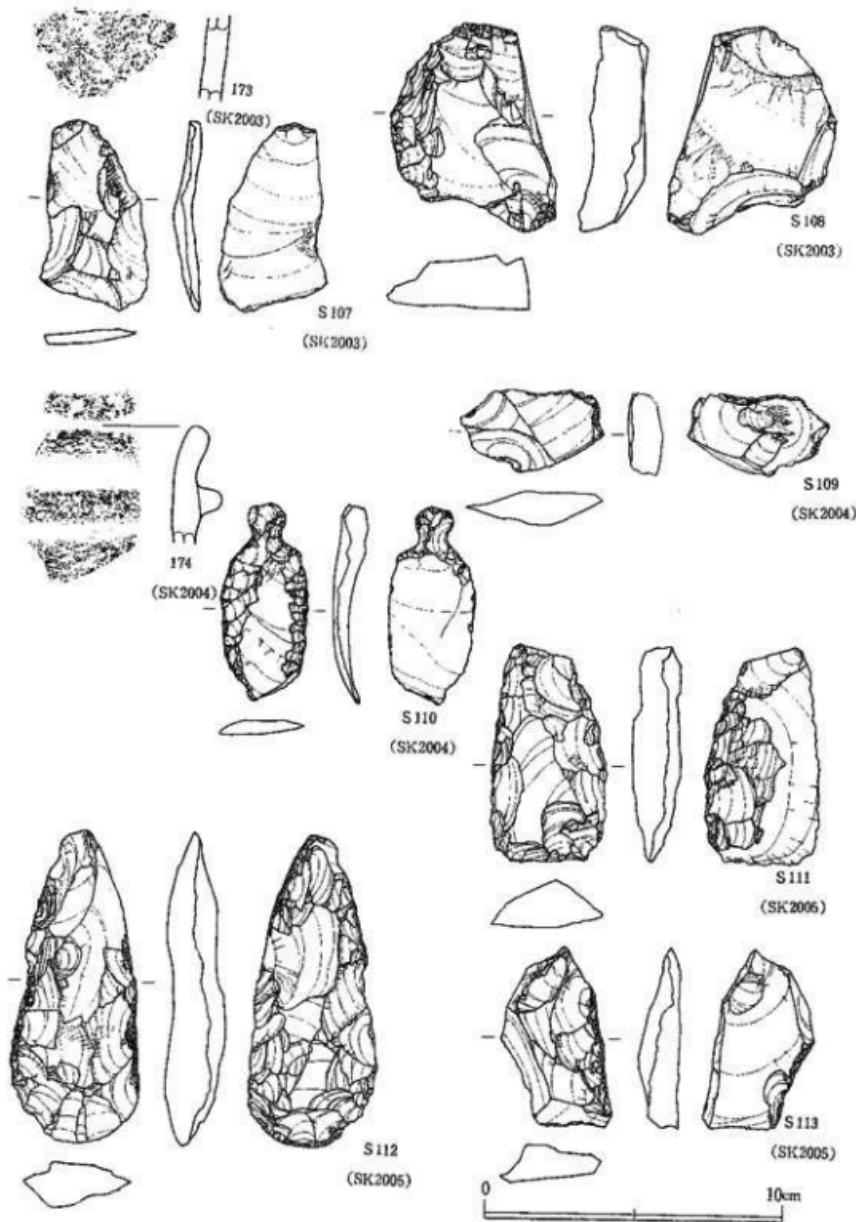
SK2005の南1mのNI87グリッドに位置している。確認面はⅢ層の北から南へ下がる斜面で炭化物を含む褐色土が円形に広がって認められたが、土坑の上部は掘り下げ過ぎてしまい底面近くで検出したものである。上面形は直径100cmの円形で、底面も直径75cmの円形で、IV層上面に作られ平坦で堅くしまっている。深さは確認面からわずか10cmで壁は北側ではほぼ垂直に立ち上がる。覆土の褐色土はしまりがあり、土器・石器の細片が混入している。



第55図 SK 2001・2003・2004・2005土坑



第56図 SK2001土坑出土遺物



第57図 SK 2003・2004・2005土坑出土遺物

出土土器175は内面に条痕が施され、外面には縄文が付される土器で胎土には白色砂粒を含んでいる。S114は頁岩で使用痕の認められる剥片である。

土坑の時期は、出土土器からは縄文時代早期後半から前期前半と考えられる。また覆土中の炭化物の<sup>14</sup>C年代測定では4,520 B.Cという結果が得られている。

#### S K2007(第58・59図、図版17・26)

北側遺構群の中では西側のNJ91グリッドでSK2001の北西2mに位置している。確認はⅡ層中で黒褐色土が広範囲に広がっているのを認めたため当初はSXとして登録した。上面形は直径260cmの円形で、深さ130cm、底面も直径270cmの円形だが西側を除いて上面プランよりも外側に張り出している。断面形は上面から外側に張り出す底面向かって直線的に広がるフラスク条を呈し、底面はIV層中に設けられて中央部から壁に向かって緩く傾斜している。

覆土は褐色土・明褐色土・黄橙色土などⅡ～IV層由来の土が全体的に堅くしまっていて、特に6層は堅さ・しまりとも顕著で地山が人為的に埋め戻されたものである。

遺物は覆土中から出土したもので、土器176は羽状縄文が付されているが摩滅が著しくて縄文原体などについては不明である。石器S115は縦型剥片の背面の全面に二次調整を加えて両側縁にさらに細かな調整で刃部を設けたもので、主要剥離面には先行剥離面が広く残っている。S116は横型剥片で両側縁に粗い剥離作業が行われる石壺の未完成品である。S117は打面とは反対方向の背面縁辺に細かな調整を加えた搔器である。S118・119は使用痕のある剥片である。

土坑の時期は縄文時代であり、底面から採取した炭化物の<sup>14</sup>C年代測定では2,910 B.Cという結果が得られている。

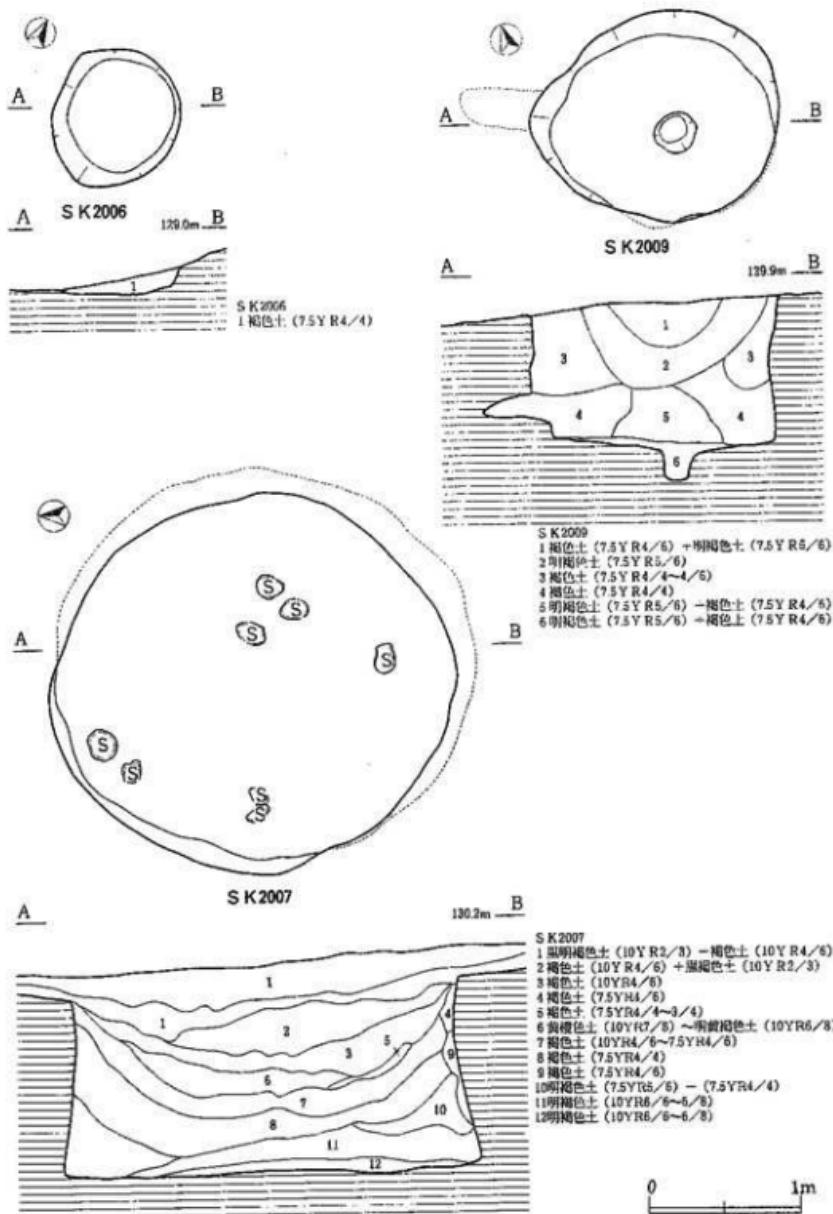
#### S K2009(第58・61図)

北側遺構群の中では北のNG・NH93グリッドに位置し、確認はⅡ層中で明褐色土が円形に広がっているのが認められた。上面形は直径140cmの円形で、深さ100cm、底面も直径250cmの円形で南側の一部は上面プランよりわずかに外に張り出している。断面形は上面からほぼ直線的に底面に達するピーカー状を呈するが、西側の壁の一部には大きく外側に突出する部分がある。

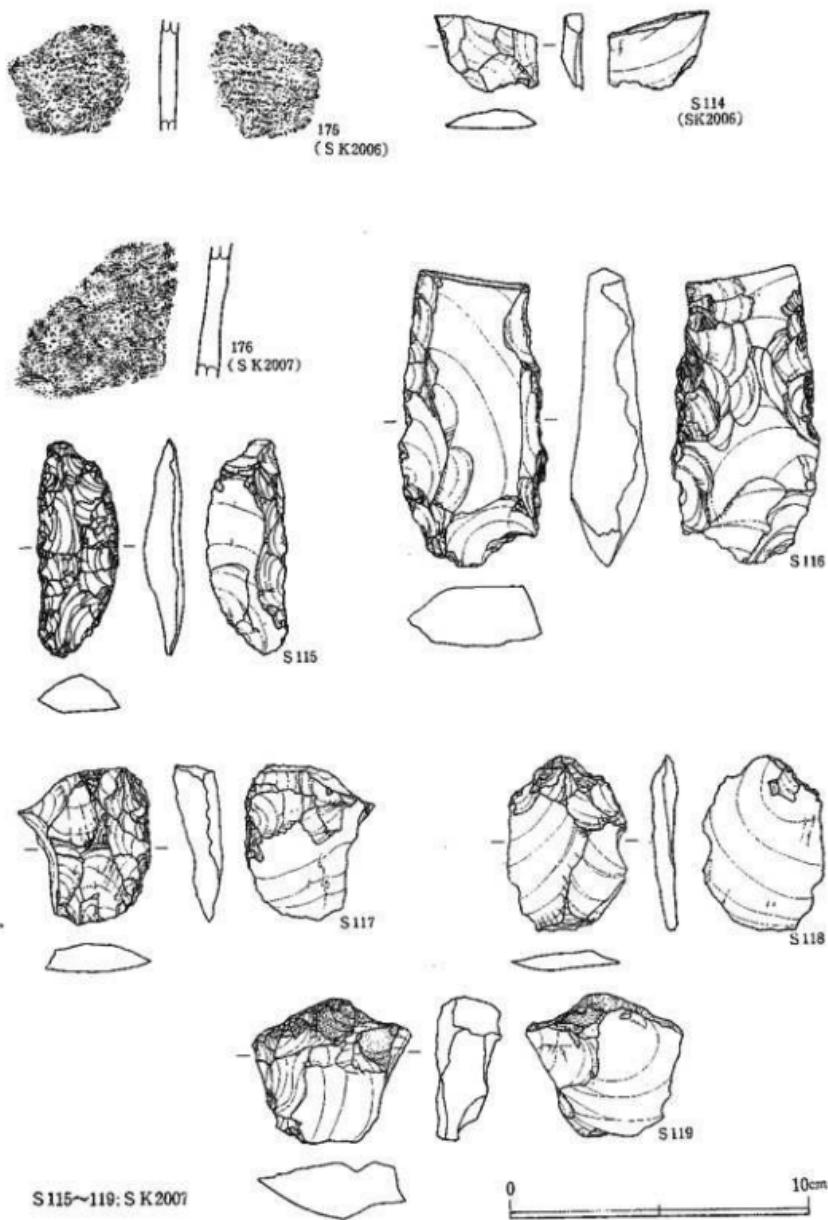
底面はIV層中に設けられていて堅くしまり、中央の直径20cm、深さ20cmのピットに向かって緩く傾斜している。覆土は地山の明褐色土を主体として埋め戻された土である。

遺物は覆土中から出土したもので、土器177は細いLR縄文の付される胎土・焼成とも良好で赤褐色を呈する土器である。S120は右側縁の一部に二次調整のある剥片である。

土坑の時期は縄文時代であるが、より詳しい時期については不明である。



第58図 SK2006・2007・2009土坑



第59図 SK2006・2007土坑出土遺物

## SK2015(第61・63図、図版26)

北側遺構群の中では北西のNI93グリッドに位置し、南側でSK2053を切っている。確認はⅢ層中で褐色土が大きく円形に広がっているのが認められた。上面形は直径230cmの円形で、深さ170cm、底面も直径280cmの円形で上面プランより外に大きく張り出している。断面形は上面からほぼ直線的に下がる壁が底面から50cmほどの高さから大きく外に張り出すフ拉斯コ状を呈している。底面は礫層上部に達していて風化礫が一部露頭しているが、比較的平坦で堅くしまっている。覆土は上位に、土坑開口時の表土と思われる褐色土が厚く堆積し、壁際には崩壊土が互層をなしている。中央の20～25層は人為的に埋め戻されたものでしりのある土である。

遺物は覆土中から出土していて、土器178は無文の胎・焼成とも良好なもので内面の湾曲状態から尖底土器の底部付近の破片と考えられる。S121・123は縦型剥片の縁辺に細かな調整を加えた搔器で、S121では素材の縁辺全周に、S123では打面と反対方向の一縁に調整を行っている。S124は使用痕の認められる剥片である。S127は横型剥片で打面とは反対方向の縁辺に二次調整を行っているだけだが形状から石箒の剥片素材と考えられる。

## SK2016(第60・61図)

北側遺構群の中では北西端のNJ92・93に位置し、確認はⅢ層中で褐色～明褐色土が円形広がっているのが認められた。上面形は直径180cmの円形で、深さ100cm、底面も直径140cm円形で断面形は壁が開口部から一度緩く括れて底部達するピーカー状を呈している。底面はIV層中でしまっていて、中央部には直径40cm、土坑底面からの深さ20cmのピットがある。ピットからは長さ40cmほどの溝が東西に走って、溝の底面は中央のピットに向かって緩く傾斜している。

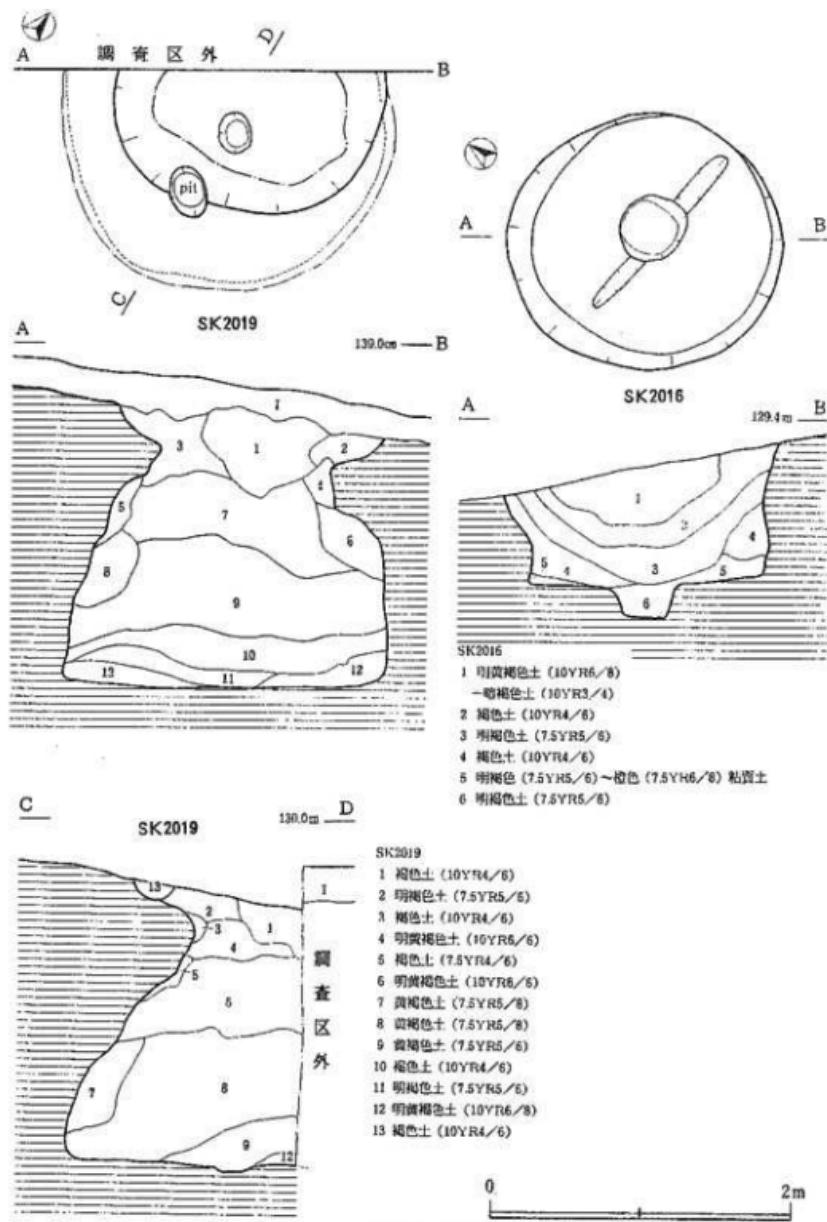
覆土はⅡ～IV層由来の土が自然堆積したものである。

遺物は覆土2層から出土している。土器179は外面にL R縄文、内面に条痕があり、粗い砂粒を含んだ胎土の土器である。S125は縦長剥片の所要剥離面側の片側縁に二次調整を加えた削器で、S126は使用痕のある剥片である。

土坑の時期は縄文時代であるが、より詳しい時期については不明である。

## SK2019(第60・61図)

北側遺構群の中では北東端のNF93・94グリッドに位置しているが、土坑の北側半分は調査区外にかかっている。確認は平面的にはⅡ層中でなされたが、調査区外の境界壁の土層からはⅡ層上面から掘り込まれたことが確認できた。調査された南側半分から上面形は直径180cmの円形で、深さ190cm、底面は直径220cmの円形で上面プランより大きく外側に張り出している。



第60図 SK2016・2019土坑

第2竪 検出遺構と出土遺物

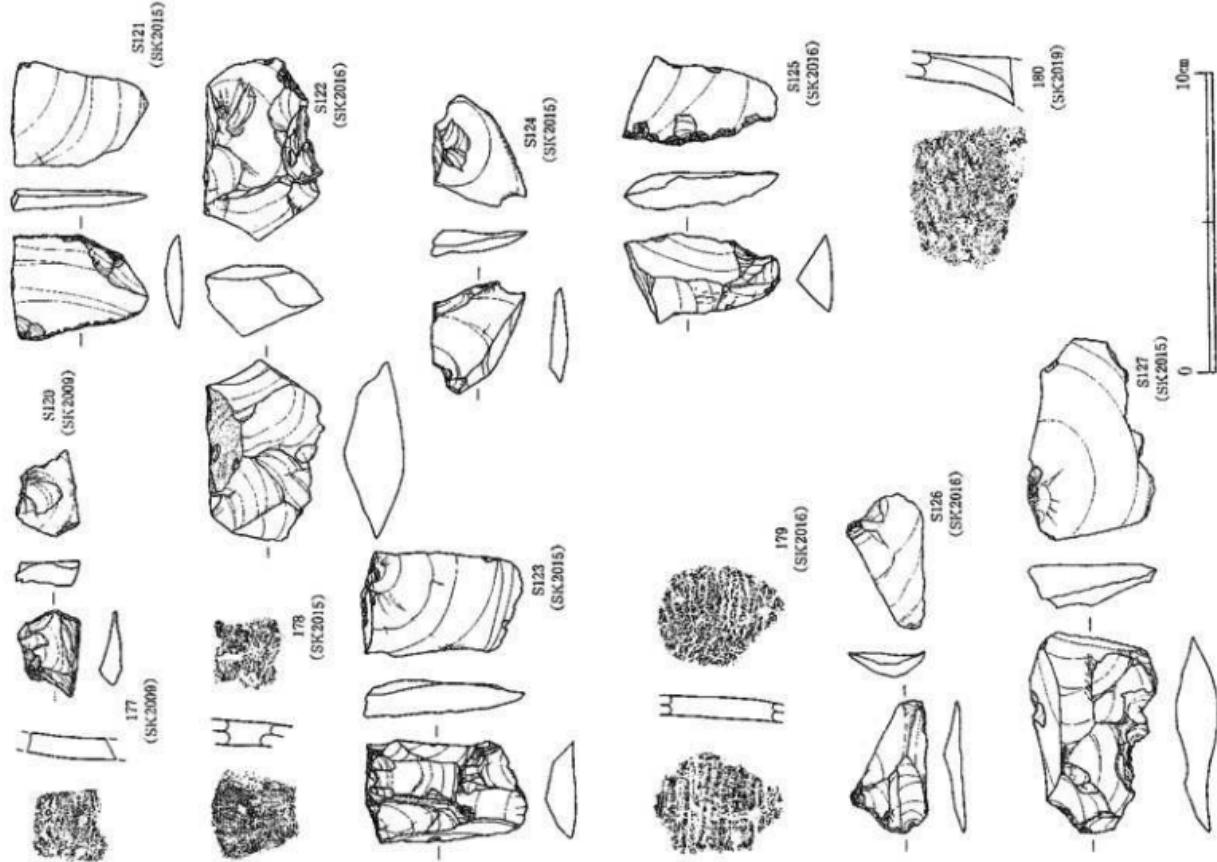


図61 SK2099-2016-2019出土遺物

断面形は外側に向けて大きく開口する上面から、深さ30cmで一旦直径110cmほどに括れてさらに大きく外に膨らみながら底面に達するフラスコ状を呈している。底面は砂礫層上位まで達していて堅くしまっており、中央にある直径30cm、深さ5cmのピットに向かって緩く傾斜している。覆土は中央部に厚く堆積する7・9層は地山土が埋め戻されたもので、その下の10～12層は土坑使用段階に堆積したものと考えられる。

出土土器180は12層からのもので、R L縄文の付された底部付近の破片で胎土、焼成とも良好である。

土坑の時期は出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。

#### S K2020(第62・64図、図版20・27)

北側遺構群の中では北東のNF93グリッドでSK2019から南へ1mほどに位置し、確認はⅡ層中で黄橙色土が円形に広がって認められた。上面形は直径1mの不整円形で、深さ1m、底面も直径140cmの円形を呈していて、断面形は上面が大きく外傾しほぼ直線的に底面に達する逆台形状である。底面はⅢ層中で堅くしまっていて、中央には直径30cm、深さ10cmほどのピットがあり、そこから5条の溝が放射状に走っている。溝の長さは60～30cmと一定ではなく、幅は10cm、深さは5cmほどで、溝の底面は中央のピットに向かって傾斜している。

覆土1層は地山の黄橙色土や明黄褐色土が堅くしまって埋め戻されたものである。

遺物は全て1層から出土していて、土器181・184はL R縄文の付され、胎土に砂粒を含むものの焼成の良好な土器であり、182ではR L縄文が付される。183は表面が摩滅しているが織維を多量に含む土器である。S128は横型剥片の背面全面に二次調整を行った後に急角度の刃部を作出する石鎧で、主要剥離面には打瘤除去のための剥離作業が行われている。S129は剥片の二つの側縁に細かな押圧剥離を行い、断面が三角形の石錐で先端部は使用により摩耗して円くなっている。

土坑の時期は出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。

#### S K2021(第62図)

北側遺構群の中では西のNI91グリッドでSK2001から北へ1.5mに位置し、確認はⅡ層中で風化礫の混入する褐色土が円形に広がって認められた。上面形は直径100cmの円形で、深さ30cm、壁はやや外傾してⅢ層中の底面に達する。底面は比較的堅く、中央の直径20cm、深さ5cmのピットがに向かってわずかに傾斜している。覆土は1層が基本層のⅡ層で埋め戻されていて、2層は壁の崩落土がブロック状になって堆積している。遺物は出土していない。

## SK2025(第62・64図、図版20・27)

北側遺構群の中では北東のNF92・93グリッドでSK2020の南側に隣接し、南側でSN2026を切っている。確認はⅡ層中で明黄褐色粘質土が円形に広がって認められた。上面形は直径200cm前後の不整円形で、深さ90cm、底面も直径130cmの円形を呈し、断面形は上面が大きく外傾してIV層中の底面に達する逆台形状である。底面中央には直径25cm、深さ40cmのピットがあり、底面はこのピットに向かって傾斜している。覆土1・5・8層はIV層が埋め戻されたものである。

遺物は覆土1層から出土していて、土器185は結節のあるR L繩文で胎土・焼成とも良好である。S130・132は使用痕のある剥片で、S131は二次調整のある剥片である。

土坑の時期は出土土器から繩文時代前期後半と考えられる。

## SK2027(第63～65図、図版20・27)

北側遺構群の中では北西のNI93グリッド杭下でSK2015の南東1mに位置し、北側でSK2035を切っている。確認はⅢ層中で炭化物を含む褐色土が広く円形に広がって認められた。上面形は110cmの円形で、深さ180cm、底面は直径100cmで東端は上面プランよりも外に張り出している。断面形は上面から直線的にIV層中の底面に達していてビーカー状である。

覆土5層はⅢ層の明褐色土が堅くしまって埋め戻されたもので、また12層は木の実を中心とする炭化物層である。

遺物は土器が3層から、石器が8層から出土している。土器187・188は胎土に纖維を含み、187にはL R繩文が、188には0段多条のL R繩文が付されている。S133は両面調整の石器で背面全面には二次調整を行い、主要剥離面には先行剥離面を中央に広く残している。石器の下端はSK2064から出土したものが接合している。

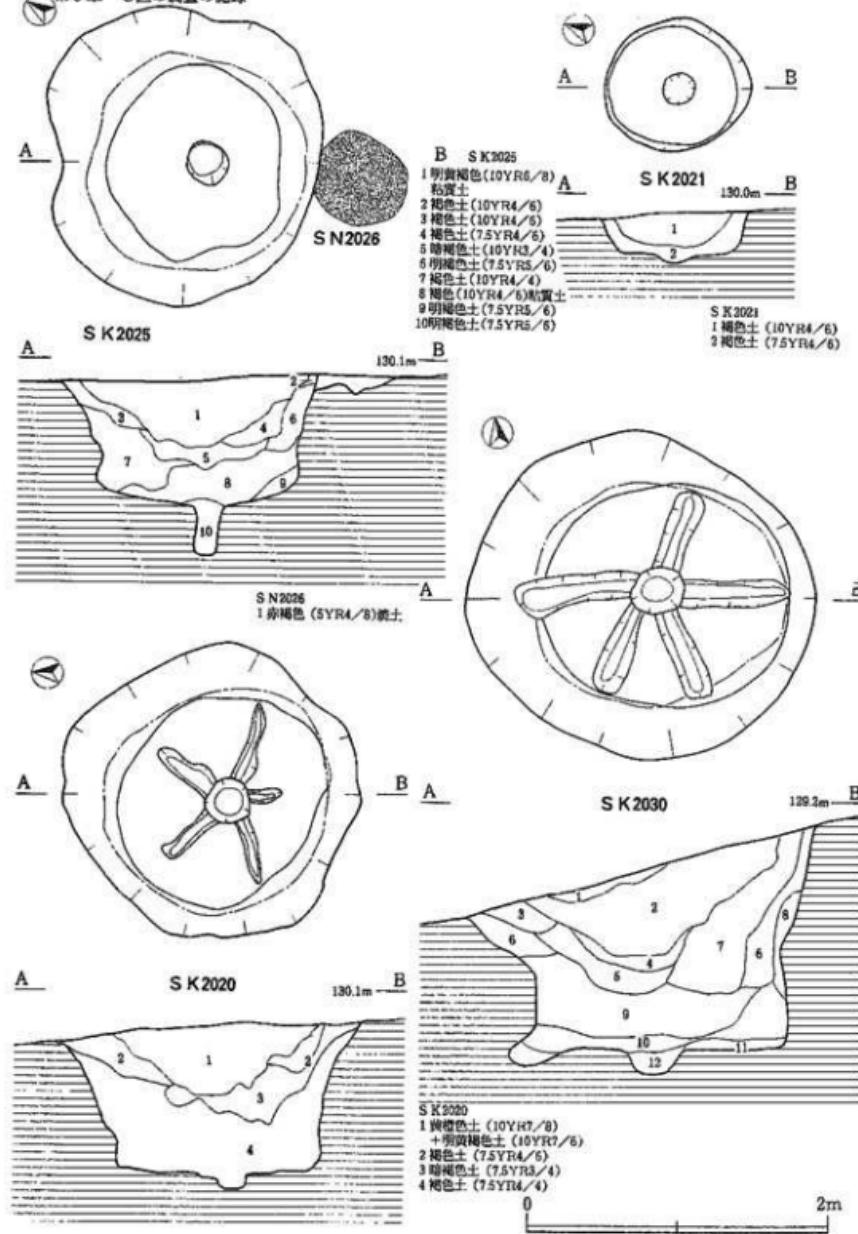
土坑の時期は出土土器から繩文時代前期と考えられる。

## SK2028(第63・65図、図版27)

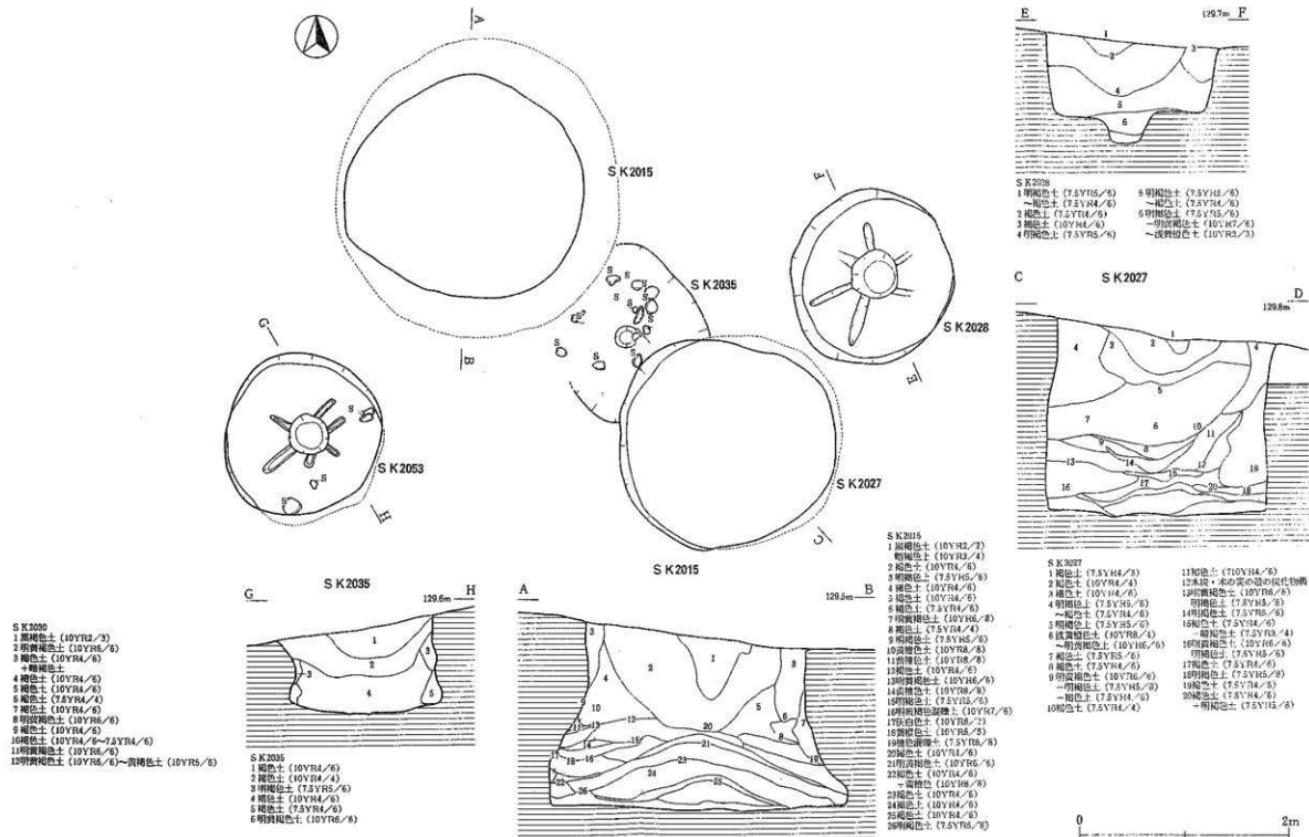
北側遺構群の中では北西のNH93グリッドで、SK2027の北東に隣接している。確認はⅢ層中で炭化物をわずかに含む明褐色土と褐色土の混合土が円形に広がって認められた。上面形は直径170cmの円形で、深さ80cm、底面も直径140cmの円形を呈し、断面形は上面から直線的に下がってIV層中の底面に達するビーカー状である。底面中央には直径20cm、深さ10cmほどのピットがあり、6条の溝が放射状に走っている。溝の深さは土坑底面から少し下がる程度だが、その底面は中央のピットに向かってわずかに傾斜している。覆土2・4層とピット内の5・6層はⅢ・IV層が埋め戻されたもので、堅くしまっている。

石器S134は覆土2層から出土していて、刃部を再加工途中の石鏽である。

第5章 C区の調査の記録



第62図 SK 2020・2021・2025・2030土坑、SN 2026焼土遺構



第63図 SK 2015・2027・2028・2035土坑

土坑の時期は縄文時代と考えられるが、より詳細な時期については不明である。

#### S K2030(第62・65・67図、図版20)

北側遺構群の中では最も西側のNJ・NK92グリッドで、SK2016の南西1mに位置している。確認はⅢ層中で明黄褐色～黄褐色土が円形に広がって認められた。上面形は直径130cmの円形で、深さ140cm、底面も直径180cmの円形を呈している。断面形は上面から深さ100cmほどの所で一度わずかに括れてIV層中の底面に達する逆台形状である。底面は堅くしまり、中央には直径30cm、深さ15cmほどのビットがあり、5条の溝が放射状に走っている。溝は幅20cmでその先端は壁まで達しており、特に西側に走る溝は壁を掘り込んで袋状に外側に延びている。溝の深さは土坑底面からわずか数cmほどだが、溝底面は中央のビットに向かって緩く傾斜している。

覆土2層以下は堅くしまり基本層のⅢ・Ⅳ層が埋め戻されたものである。

遺物はいずれも3層から出土したものである。土器189～191は同一個体と思われ、表面にはR L縄文が、内面には条痕が付される。胎土には纖維が含まれ、焼成は良好である。S135は平基石鏃の未製品と思われ、両面には広く先行剥離面を残している。S136は背面の縁辺に刃部を設けた搔器で主要剥離面には二次調整は施されない。S137の石核は打面を変えながら縦長剥片を剥取したものである。

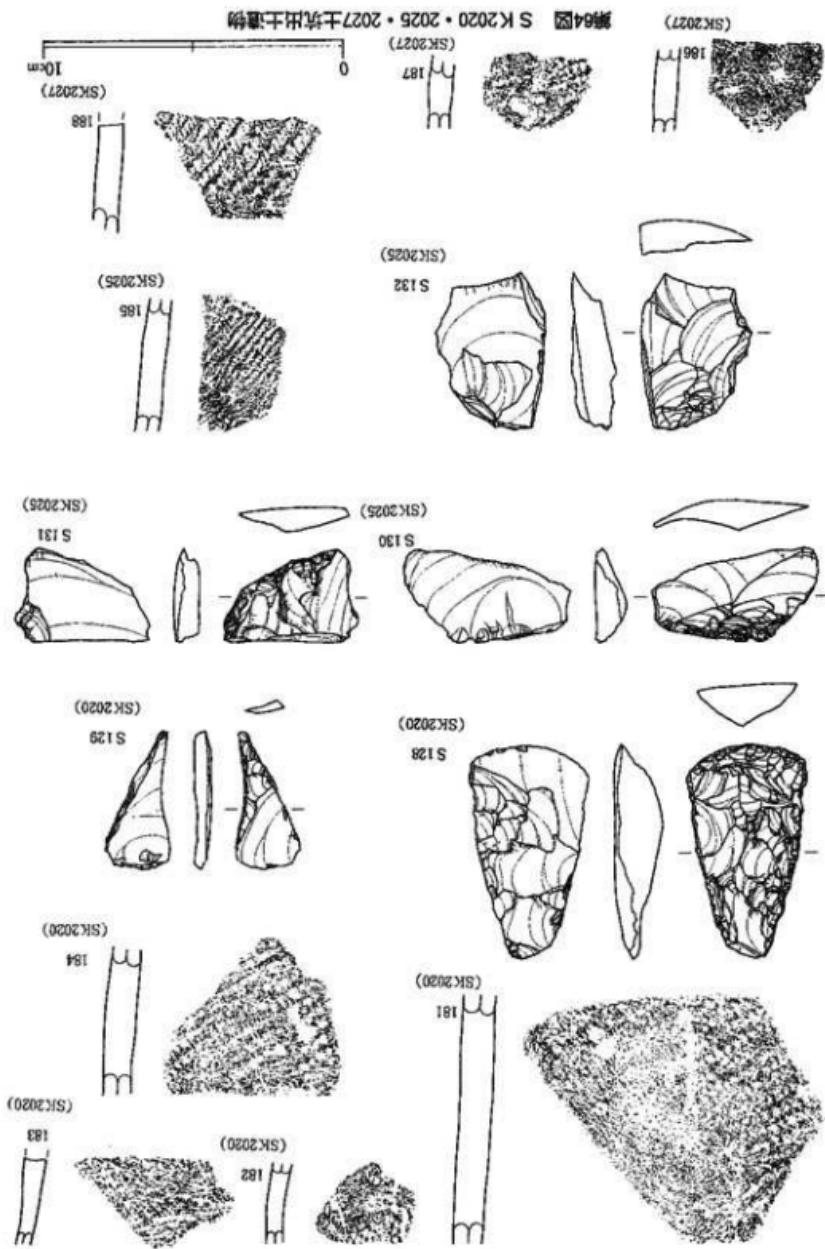
土坑の時期は出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。

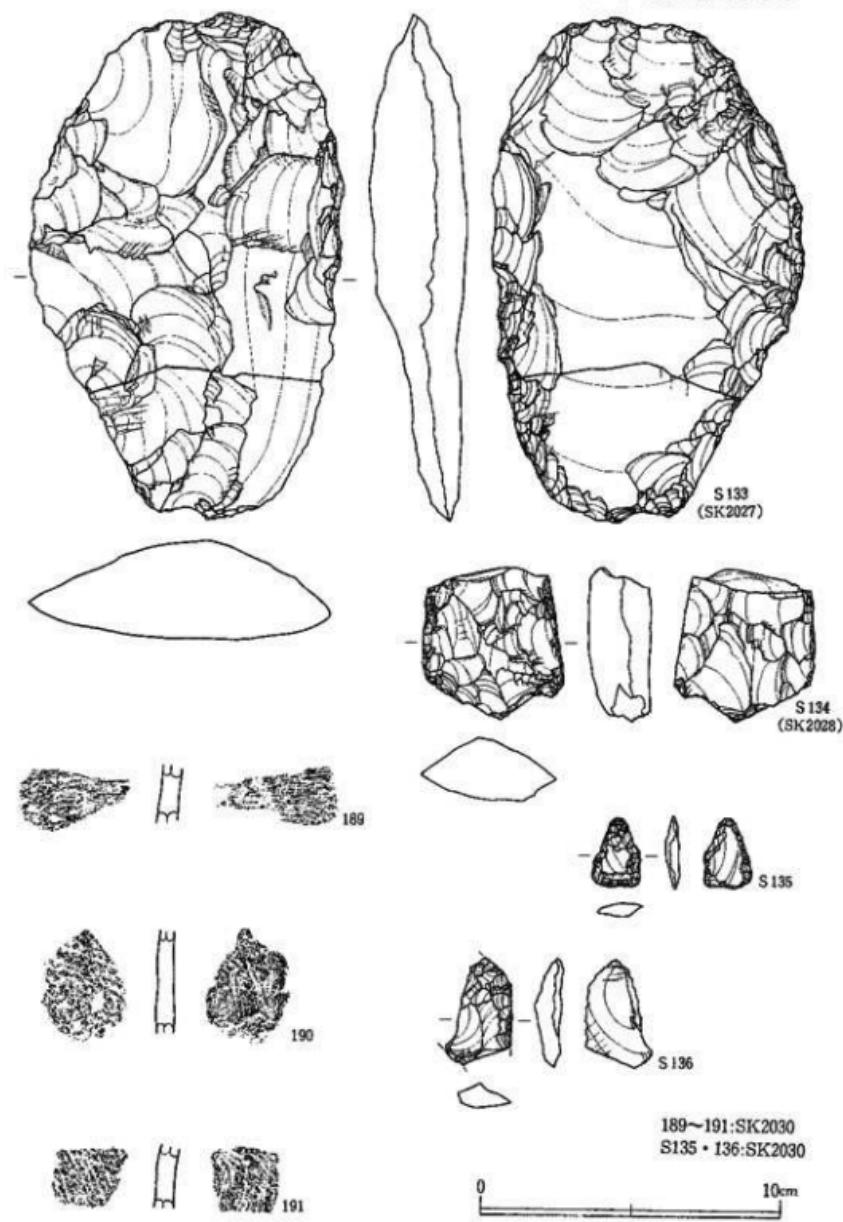
#### S K2034(第66図)

北側遺構群の中では南西のNI90グリッドで、SK2001の南2mに位置している。確認はIV層中で褐色土が円形に広がって認められたが、底面からわずかに10cmほど遺存しているにすぎなかった。上面形は直径110cmの円形で、深さ10cm、底面も直径100cmの円形を呈している。壁はわずかに外傾しながら立ち上がり、底面は比較的堅くしまり平坦で中央には直径25cmで深さ20cmのビットがある。覆土はⅢ・Ⅳ層が埋め戻されたもので、全体的に堅くしまっている。遺物は出土していない。

#### S K2035(第63図)

北側遺構群の中では北西のNI・NJ92・93グリッドで、SK2015の南西に隣接している。確認はⅢ層中で褐色土が円形に広がって認められた。上面形は直径170cmの円形で、深さ90cm、底面も150cmの円形を呈しているが、南側は上面プランよりもわずかに外に張り出している。断面形は西から南側の壁が一度括れて底面近くで外側に張り出すもののほぼ円筒状を呈している。底面はⅢ層中でかたくしまっていて、中央にあるビットに向かって緩く傾斜している。底面中央のビットは直径35cm、深さ15cmほどでそこから放射状に6条の溝が延びているが、溝





第65図 SK2027・2028・2030土坑出土遺物

は幅10cm、長さ40~15cmと短い。覆土4層はⅢ層が埋め戻されたもので、1・2層は自然堆積である。

遺物は出土していない。

S K2037(第66図)

北側遺構群の中では西端のNJ90グリッドで、SK2007の南2mに位置している。確認はⅢ層中で風化した礫を含む褐色土が円形に広がって認められた。上面形は直径130cmの円形で、深さ40cm、底面も直径110cmの円形を呈している。断面形は東側では壁がほぼ垂直で西側では外傾して立ち上がるが、本来はピーカー状を呈していたものと考えられる。底面はIV層中で堅くしまり、中央には上面形が直径30cmで断面が漏斗状のピットがある。覆土はⅢ・Ⅳ層が埋め戻されたもので、ピット内の覆土もⅢ層に由来するものである。

遺物は出土していない。

S K2041(第66図、図版27)

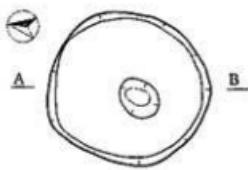
北側遺構群のほぼ中央のNG92・93グリッドで、SK2025の西2mに位置している。確認はⅡ層中で明褐色土が円形に広がって認められた。上面形は直径150cmの円形で、深さ100cm、底面は直径140cmの円形を呈している。断面形は上面からほぼ垂直に壁がIV層中の底面に達するピーカー状であるが、壁溝部分は下方に突出する。底面は堅くしまり、中央のピットは直径25cm、深さ20cmでそこから四方に延びる溝は、壁溝に達している。覆土は4~6層はⅡ・Ⅲ層の崩落土で全体的に自然堆積したものと考えられる。中央のピット内の覆土もⅡ層に由来するものである。出土遺物は石器のみで、いずれも2層から出土している。S138は素材剥片の両側縁に厚い刃部を作出するもので、両面に先行剥離面を広く残し打面調整の行われていて搔器と考えられる。S139は横型剥片を素材とする石箋で、S140は二次調整と使用痕の認められる剥片である。

土坑の時期は縄文時代であるが、より詳細な時期は不明である。なお7層出土の炭化物の<sup>14</sup>C年代測定からは1,890 B.Cの結果が得られている。

S K2043(第67図、図版20)

北側遺構群のほぼ中央のNG90・91グリッドで、SK2003の東3mに位置している。確認はⅡ層中で褐色土が大きく円形に広がって認められた。上面形は直径190cmの不整の円形で、深さ90cm、底面も直径180cmの不整な円形で、南側は上面プランよりも外側に張り出している。断面形は上面からほぼ垂直に下がる壁は底面付近でわずかに外に膨らむが、全体的にはピーカー状を呈している。底面は平坦で、中央のピットからは北と東に延びる溝があり、さらに西側の

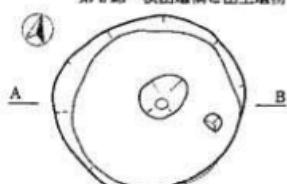
第2節 検出遺構と出土遺物



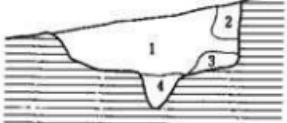
A SK 2034 130.0m B



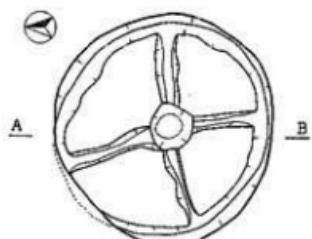
- SK 2034  
 1褐色土 (7.5YR4/6)  
 2褐色土 (7.5YR4/6)  
 +浅黄褐色土 (10YR8/3)  
 3褐色土 (7.5YR6/6)  
 褐色土 (7.5YR4/6)  
 4浅黄褐色土 (10YR8/4)  
 +褐色土 (7.5YR4/6)



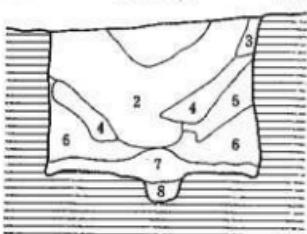
A SK 2037 129.7m B



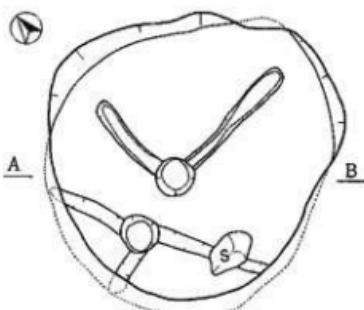
- SK 2037  
 1褐色土 (10YR4/6)  
 2明褐色土 (7.5YR5/6)  
 3褐色土 (10YR4/6)  
 4棕色土 (7.5YR6/6) ~明褐色土 (7.5YR5/6)



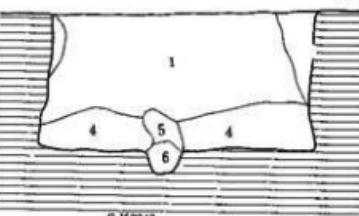
A SK 2041 130.2m B



- SK 2041  
 1上部には明褐色土  
 (7.5YR5/6) +褐色土 (7.5YR4/4)  
 2褐色土 (7.5YR4/6)  
 +褐色土 (7.5YR4/4)  
 3褐色土 (7.5YR4/4)  
 4暗褐色土 (7.5YR3.3~3/4)  
 5暗褐色土 (7.5YR3/4)  
 6明褐色土 (7.5YR5/6)  
 +褐色土 (7.5YR4/6)  
 7褐色土 (7.5YR4/4)  
 +暗褐色土 (7.5YR3/4)粘質土  
 8暗褐色土 (7.5YR3/4)粘質土



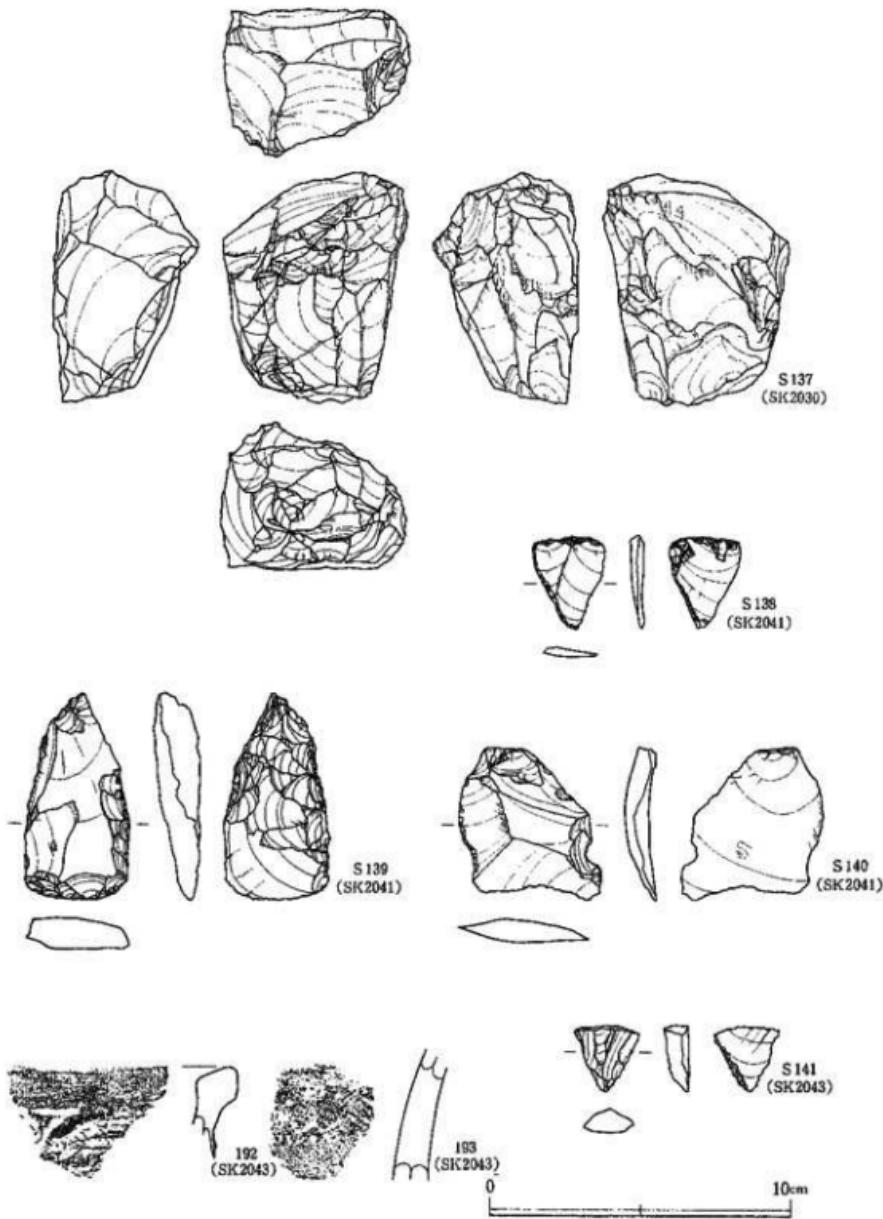
A SK 2034 129.5m B



- SK 2034  
 1褐色土 (7.5YR4/4)  
 2にぼい褐色土 (7.5YR5/6)  
 3明褐色土 (7.5YR5/6)  
 4褐色土 (7.5YR5/6)  
 5褐色土 (10YR4/6)  
 6明褐色土 (7.5YR5/6)

0 2m

第66図 SK 2034・2037・2041・2043土坑



第67図 SK2030・2041・2043土坑出土遺物

ピットからも南北と西方向に3条の溝が壁際まで延びている。二つのピットは直径25cm、深さ15cmほどで、溝の深さは土坑底面から5~10cm程度で底面はそれぞれのピットに向かって緩く傾斜している。覆土1・4層は基本層のⅡ~Ⅳ層が埋め戻されたもので、5・6層は柱痕の流入土と考えられる。出土遺物は1層からのもので、土器192は肥厚した口縁部で、内傾し平坦な口唇部からL R原体の側面圧痕文と隆帯が施される口縁部にいたる深鉢形土器である。内外面とも器面は丁寧に磨かれている。193は器面が摩滅していて表面の繩文は不明だが胎土に砂粒を多く含むものの焼成の良好な土器である。石器S141は素材剥片の両側縁に細かな二次加工を施した搔器と考えられる。

土坑の時期は出土土器から縄文時代中期前半の大木7b式の時期と考えられる。

#### S K2044(第68・70図、図版20)

北側遺構群の東側のNE92グリットで、SI2022の南西2mに位置している。確認はIV層上面で褐色土が円形に広がって認められた。上面形は直径120cmの不整の円形で、深さ60cm、断面形は摺鉢状を呈している。底面は40×60cmの楕円形で堅くしまっているものの南側に向かってわずかに傾斜している。覆土3層はⅢ層と地山土との混合土で埋め戻されたものである。

土器194は覆土2層から出土したもので、R L繩文が付され胎土にわずかに纖維を混入するものの焼成は良好である。

土坑の時期は出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。

#### S K2046(第68図)

北側遺構群の東側のNE・NF93グリットで、SI2022の北西1mに位置している。確認はIV層中で風化蝶や炭化物を含む褐色土が楕円形に広がって認められた。上面形は東西110cm、南北75cmの楕円形で、深さ30cm、断面形は底面付近でわずかに外側に膨らむ袋状を呈している。

覆土は地山粒子を含む褐色土が中心で埋め戻されたものである。

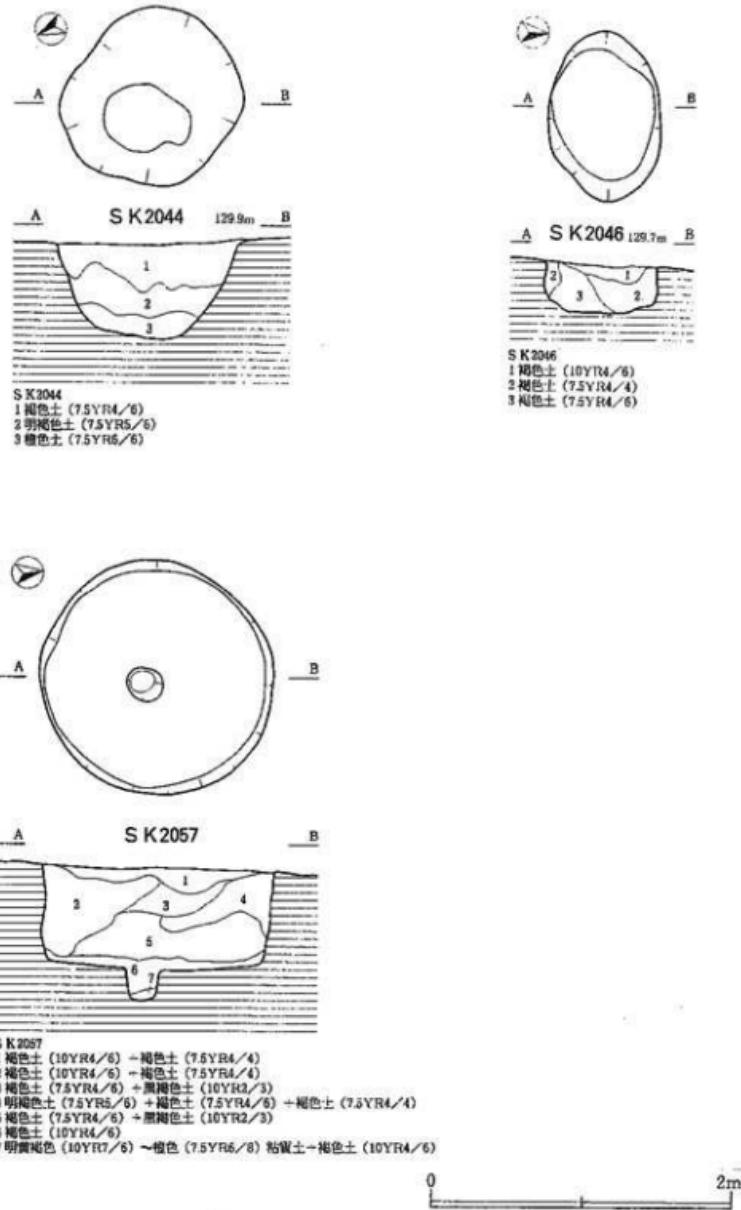
遺物は出土していない。

#### S K2053(第63図)

北側遺構群の北側のNI93グリットで、北西側をSK2015に南東側でSK2027によって切られている。周辺の土坑群の精査中に土坑底面のみを確認したので、底面規模は直径140cmの円形を呈するものと推定され、底面中央には直径20cm、深さ10cmほどのピットがある。

遺物は出土していない。

第5章 C区の調査の記録



第68図 SK2044・2046・2057土坑

## SK2057(第68・70図)

北側遺構群の東側のND・NE92グリッドで、SI2060の北東2mに位置している。確認はⅡ層中で堅くしまりのある褐色土が円形に広がって認められた。上面形は直径155cmの円形で、深さ65cm、底面も直径150cmの円形を呈している。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり断面形はピーカー状である。底面はⅢ層中で堅くしまっていて、中央には直径20cm、深さ20cmのピットがあり底面はこのピットに向かって緩く傾斜している。覆土の2~6層は地山ブロックを含みしまりがあり、埋め戻されたものである。

土器195は胎土に繊維を混入し、縄文が付されているが原体は不明である。石器S142は横型剥片を素材とする石箇で、主要剥離面には二次調整が片側縁にのみ施されている。

土坑の時期は縄文時代前期と考えられる。

## SK2058(第69図)

北側遺構群の南側でNG91グリッド杭下にあり、SK2043の東2mに位置している。確認はⅡ層中でなされたが、北側は掘り過ぎており上面プランについては一部推定したラインである。上面形は直径80cmの円形で、深さ45cm、底面も直径70cmの円形を呈している。底面は緩く凹凸があるものの堅くしまっていて、壁は底面からわずかに外に膨らむがほぼピーカー状を呈するものと考えられる。覆土は褐色土を主体として全体にⅡ層の暗褐色土が混入していて、しまりがなく自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

## SK2059(第69図)

北側遺構群の南側でNF・NG91グリッドにあり、SI2060の南側を切っている。確認は東側に隣接するSK2061とともにⅡ層中でSI2060の精査中になされ、Ⅰ層の暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径90cmの円形で、深さ70cm、壁は途中でわずかに外に膨らみながら底面に達するが、断面形はほぼピーカー状を呈するものと考えられる。底面は直径85cmの円形で堅くしまっているが東側の一部がわずかに窪んでいる。覆土2層は堅くしまりのある褐色土で埋め戻されたものである。

遺物は出土していない。

## SK2061(第69図)

SK2059の東側でNF91グリッドにあり、北側の一部をSI2060によって切られている。確認はⅡ層中で、地山ブロックの混入する褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径85cmの円形で、深さ40cm、底面は80×90cmの精円形を呈している。壁は北側では垂下し他では底

面近くでわずかに外側に膨らむが、断面形はほぼビーカー状を呈するものと考えられる。

覆土は褐色土を主体とし、全体に地山土である明褐色土のブロックが混入して堅くしまりがあることから埋め戻されたものである。

遺物は出土していない。

S K2063(第69・70図、図版20)

北側造構群の南端でNH・NI89・90グリッドにあり、南側の上面はSN2033によって切られている。確認は、II層上面で検出したSN2033の精査中になされ、褐色土とII層と考えられる暗褐色土との混合土の円形の広がりが認められた。上面形は直径140cmの円形で、深さ80cm、壁は底面近くでわずかに外に膨らむものの全体の断面形はビーカー状を呈している。IV層中に掘り込まれた底面は直径130cmの円形で堅くしまっており、中央と東側の壁際には直径20cm、底面からの深さが15cmほどのピットがある。中央のピットからは北側と西側に細い溝が延びていて、その底面は中央のピットに向かって緩く傾斜している。覆土は褐色土と明褐色土が主体で、6層中には人頭大の礫が投げ込まれている。

出土遺物のうち土器196は1層から、4点の石器は3層から出土している。土器196は入組文の施された鉢形土器で、細かなR L縄文が付されている。S143は縦長剥片を素材とした両面調整の石鏟で、横断面はカマボコ形を呈している。S144・146は素材剥片の片側縁に、細かな押圧剥離によって刃部を設けた削器である。S145の石核は調整の行われた打面と節理面を作業面としたものである。

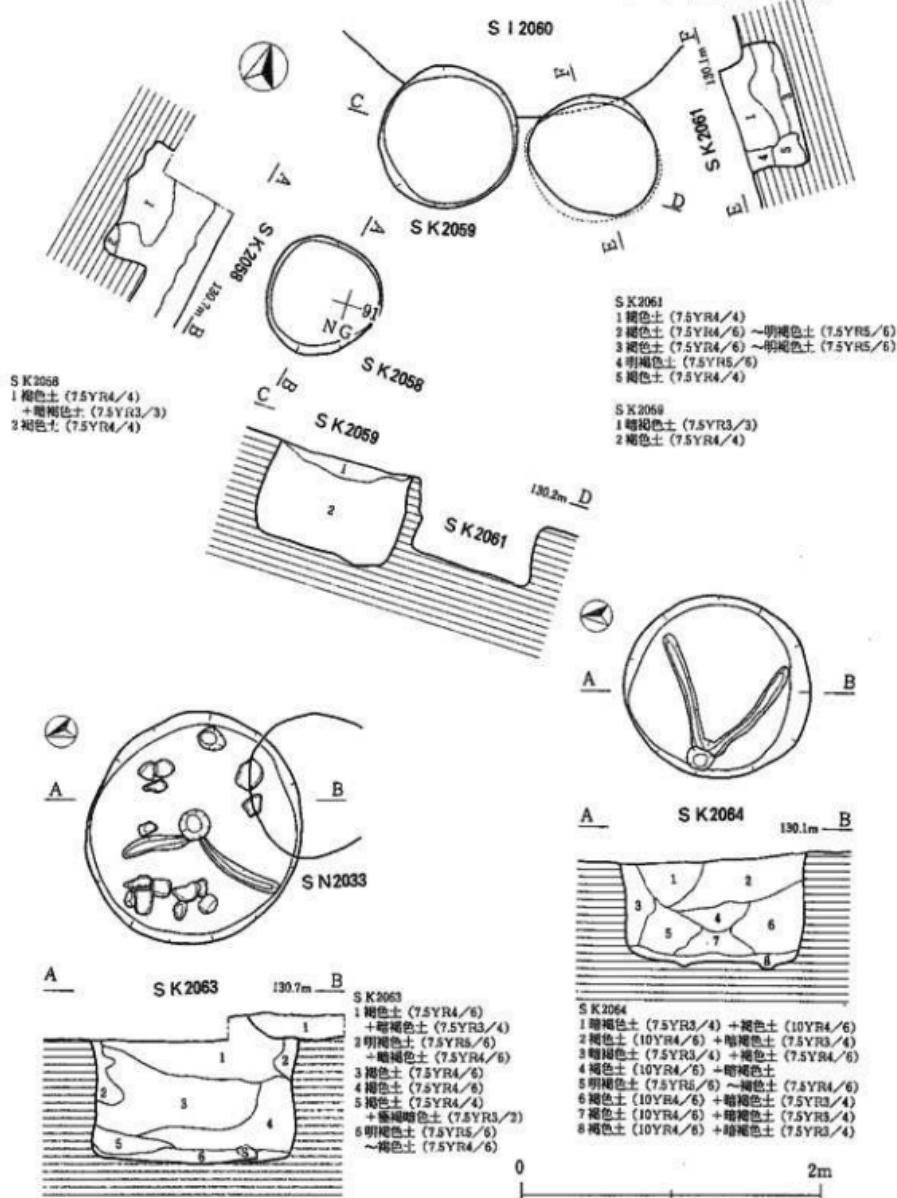
S K2064(第69・74図)

北側造構群のほぼ中央のNH91グリッドにあり、東側のSK2004と西側のSK2021とのほぼ中に位置している。確認はII層上面で褐色土の混在する暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径125cmの円形で、深さ75cm、壁はほぼ垂下して断面形はビーカー状を呈している。

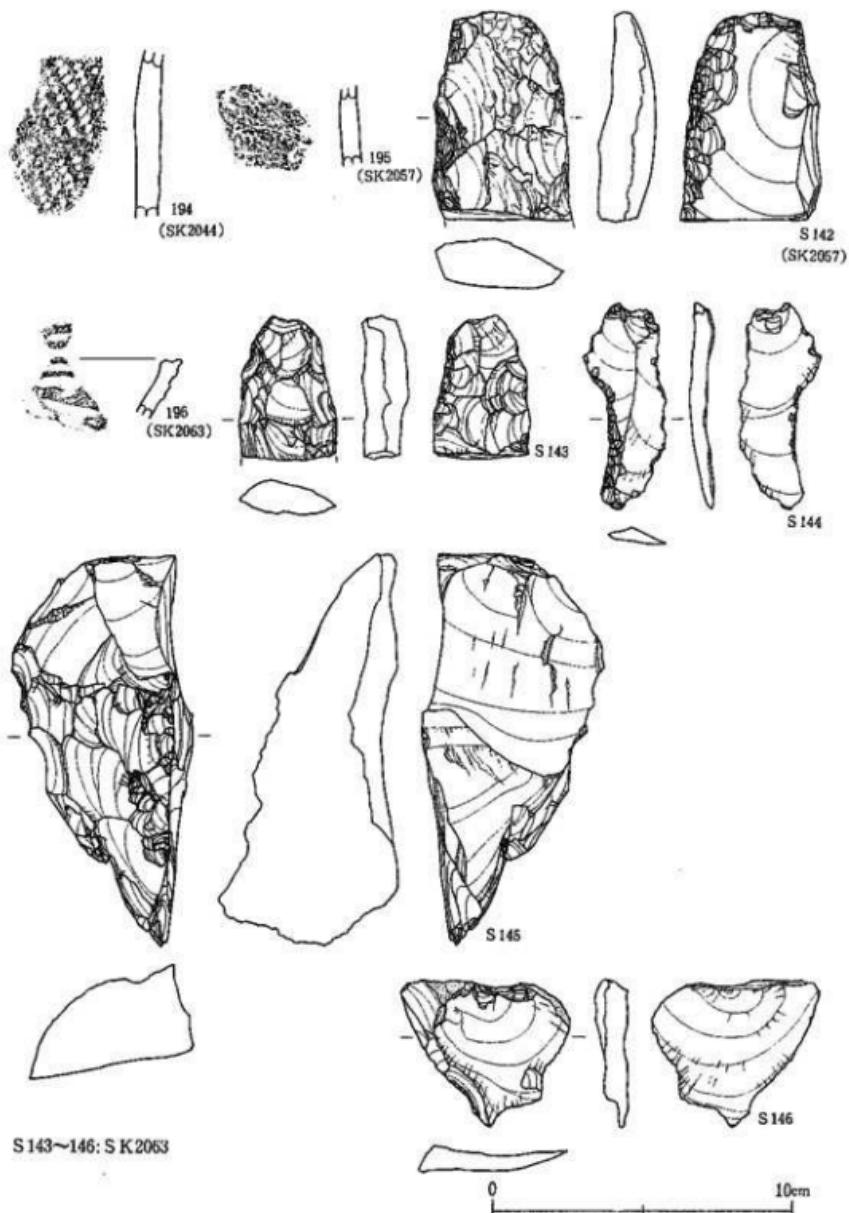
IV層上面に達している底面は堅くしまり、北西壁際の直径15cmのピットからは溝が北東と南東方向にV字状に延びている。溝は幅10cm、土坑底面からの深さは5cmほどで底面はピットに向かって緩く傾斜している。土坑覆土は暗褐色土の混入する褐色～明褐色土がブロック状に堆積していて、全体的にしまりがあり埋め戻されたものである。

遺物は4・5層から出土しており、土器197は結節のあるL R縄文によってS字状沈文が施される深鉢形土器で、198は両面にL R縄文が付されている。いずれも胎土は肌理細かく繊維は含まれず、焼成の良好な土器である。S147は打面調製の行われた剥片で、左側縁に二次調製が見られる。

土坑の時期は出土土器から縄文時代前期の前半と考えられる。



第69図 SK2058・2059・2061・2063・2064土坑



第70図 SK2044・2057・2063土坑出土遺物

## SK2065(第71図)

北側遺構群南側のNG89・90グリッドにあり、SK2063の東側1mに位置している。確認面はⅡ層中で明褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径120cmの円形で、深さ70cm、底面はⅢ層中に達していて直径100cmの円形を呈している。壁は確認面からほぼ垂下して底面付近でわずかに外に膨らむが断面形は全体としてピーカー状を呈している。覆土は3層の明褐色土と褐色土との混合土が主体で堅くしまっていて、埋め戻されたものである。

遺物は出土していない。

## SK2067(第71図)

調査区南西側のNE82グリッドにあり、SI2074の南東3mに位置している。確認面はⅢ層中で明褐色土を中心にして褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は100×90cmの楕円形で、深さ40cm、壁は確認面から15cmほどは垂下し一度括れ底面に達する。底面は直径45cmの円形を呈し、東側から西側に向かって傾斜している。覆土はⅢ・Ⅳ層が埋め戻されたものである。

遺物は出土していない。

## SK2073(第71・74図、図版27)

北側遺構群南側のNF89・90グリッドにあり、SK2065の東側2mに位置している。基本土層面の精査中に確認されたもので、その結果土坑の掘り込みはⅡ層中から行われていることがわかった。Ⅱ層確認面における上面形は直径110cmの円形で、深さ80cm、底面は直径120cmで北側を除いて上面形のプランよりも外に張り出す。壁は一度わずかに括れてからⅣ層中の底面に達していて、断面形はピーカー状を呈している。堅くしまった底面中央には直径25cm、深さ15cmのピットがあり、そこから四方に幅5cm、長さ30cmの溝が延びている。覆土はⅡ～Ⅳ層が埋め戻されたもので全体的に堅くしまっていて、ピット内の覆土もⅣ層の明褐色土である。

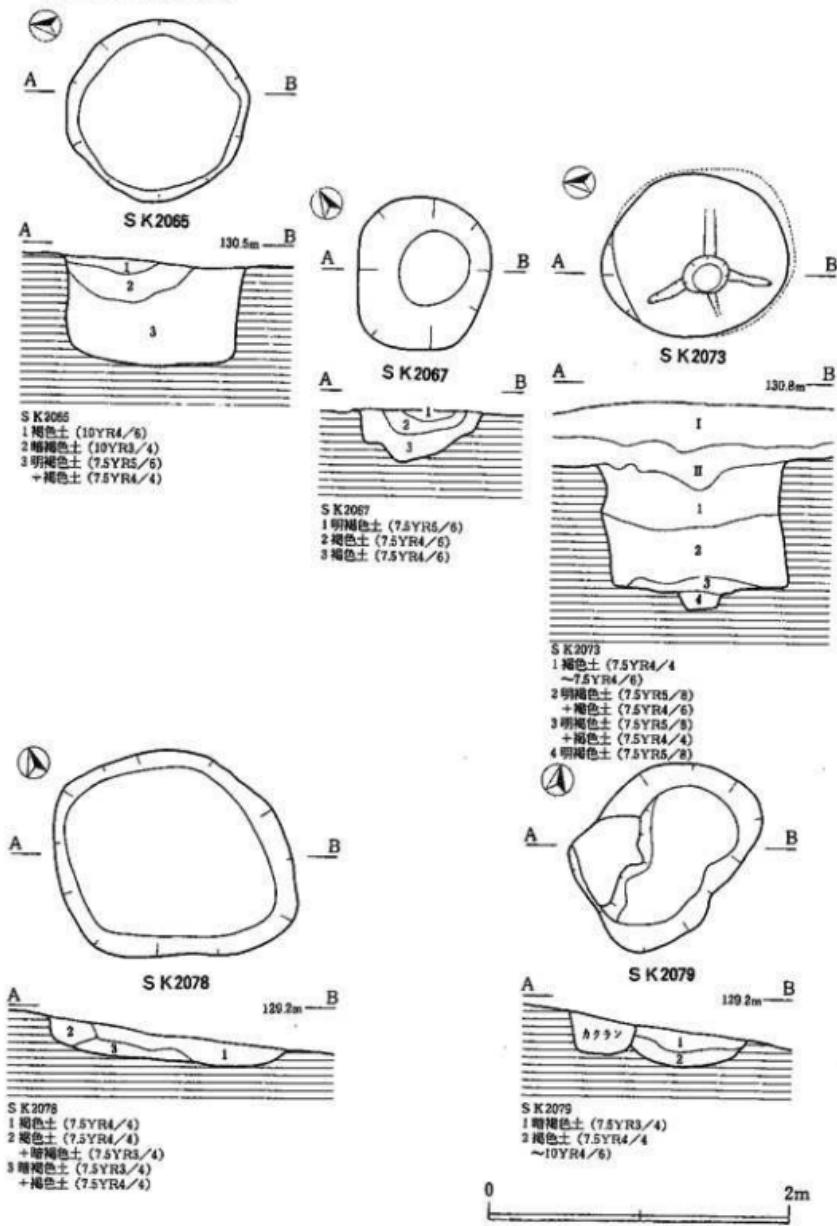
出土遺物S148は横型剥片を素材とする石鏟で、刃部は背面に作出され主要剥離面の両側縁には細かな二次調製が施される。

## SK2078(第71・74図)

北側遺構群南側のND87グリッドにあり、SI2075の南側10mに位置している。確認面はⅡ層中で褐色土の楕円形の広がりが認められた。上面形は140×160cmの不整な楕円形で、深さ20cm、壁は西側では垂下するが東側では傾斜して底面に達する。底面は110×130cmの隅丸方形を呈し、比較的軟らかく西から東へ緩く傾斜している。覆土は全体的にしまりのない褐色土が中心で自然堆積と考えられる。

出土遺物の土器190は1層から出土していて、胎土は繊維が混入しているものの緻密で、焼成

第5章 C区の調査の記録



第71図 SK 2065・2067・2073・2078・2079土坑

も良好で外面にはL R縦文が付されている。

#### SK2079(第71図)

北側遺構群南側のND87・88グリッドにあり、SK2078の北側1mに位置している。確認面はII層中で西側を木根によって擾乱を受けた暗褐色土の楕円形の広がりが認められた。上面形は90×120cmの楕円形で、深さ15cm、底面も60×100cmほどの楕円形を呈するものと推測される。断面形は底面中央部が最も深くなる中華鍋状である。覆土は全体的にしまりがなく自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土していない。

#### SK2080(第72図)

北側遺構群の南側のND86・87グリッドにあり、SK2078の南側1mに位置している。確認面はIII層中で褐色土の楕円形の広がりが認められた。上面形は130×180cm楕円形で、深さ20cm、壁は丸みを持って傾斜して底面に達する。底面も120×160cmの楕円形を呈し平坦ではあるが、西から東へ緩く傾斜している。覆土はしまりのない褐色土で自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土していない。

#### SK2081(第72図)

北側遺構群南側のND85グリッドにあり、SK2080の南側4mに位置している。確認面はII層中で褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径80cmの不整円形で、深さ20cm、壁はほぼ垂下し底面に達する。底面は50×70cmの楕円形を呈し、平坦で堅くしまっている。

覆土はしまりのない褐色土で自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土していない。

#### SK2083(第72図)

調査区北側中央部のNE84グリッドでSI2074の東側3mに位置し、北東側はSK2084によって切られている。確認面はIII層中で褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は55×75cm、底面は50×70cmの楕円形を呈するものと推測される。確認面からの深さは15cmほどで底面には凹凸があり、断面形は中華鍋状である。覆土はしまりのない褐色土で自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土していない。

S K2084(第72図)

西側でSK2083を東側でSK2085を切っている。確認面はⅢ層中で暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径50cmの不整の円形で、深さ20cm、底面は直径40cmの円形を呈し平坦で堅くしまっている。断面形は逆台形状である。覆土は暗褐色土でしまりがなく自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土していない。

S K2085(第72図)

西側をSK2084によって切られている。確認面はSK2083・2084と同様にⅢ層中で明褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は55×75cm、底面は40×55cmの楕円形を呈するものと推測される。確認面からの深さは15cmほどで底面は緩くうねり、断面形は中華鍋状である。覆土は明褐色土でしまりがなく自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土していない。

S K2086(第72図)

調査区北側中央部のNE84グリッドでSI2074の北東1mに位置し、後述するSK2087・2088と東西に並んでおり、上面東側ではSK2087によって切られている。確認面はⅢ層中で褐色土と明褐色土との混合土の不整な円形の広がりが認められた。上面形は120×130cmの不整の楕円形で、深さ15cm、底面も100×110cmの不整楕円形を呈している。壁は緩やかに傾斜し、底面はあまりしまりがなく凹凸がある。覆土は褐色土でしまりがなく自然堆積によるものと考えられる。

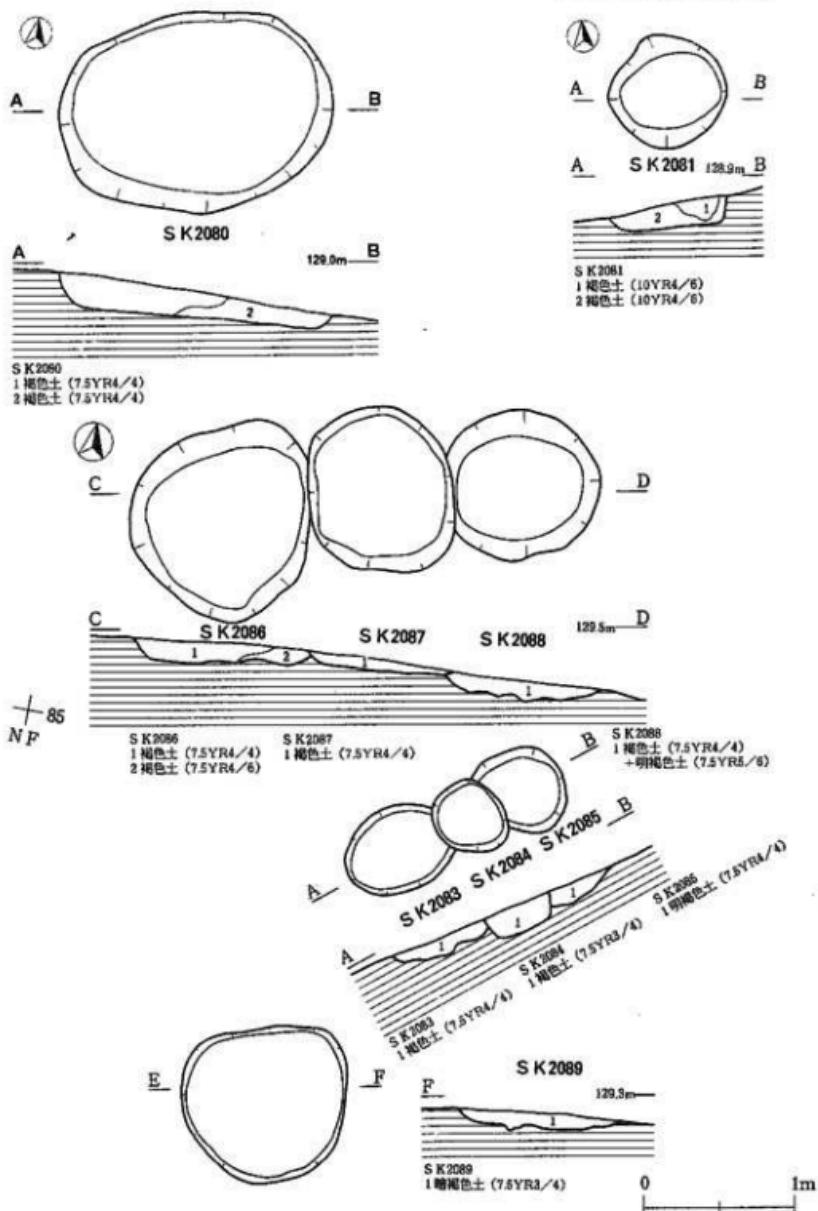
遺物は出土していない。

S K2087(第72図)

西側でSK2086を東側でSK2088を切っている。確認面はⅢ層中で褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径100cmほどの不整の円形で、深さは10cm前後で浅く、底面は直径90cmの円形を呈し比較的の平坦である。覆土は褐色土でしまりがなく自然堆積によるものと考えられる。 遺物は出土していない。

S K2088(第72図)

西側をSK2087によって切られている。確認面はⅢ層中で褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は100×110cmの楕円形で、深さは15cm、底面は70×85cmの楕円形を呈しまりがなく凹凸がある。覆土は褐色土でしまりがなく自然堆積によるものと考えられる。



第72図 SK2080・2081・2083・2084・2085・2086・2087・2088・2089土坑

遺物は出土していない。

S K2089(第72図)

調査区北側中央部のNE84グリッドにあり、SI2074の東側2mに位置している。確認面はⅢ層中で暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径110cmの不整の円形で、深さは10cm前後で浅く、底面は100cmの円形を呈して平坦であるが中央部は木根よって搅乱を受けていて凹凸がある。覆土は暗褐色土でしまりがなく自然堆積によるものと考えられる。

遺物は出土していない。

S K2090(第73図)

北側遺構群の北端NI94グリッド杭下にあり、北側でSK2092・2093を切っている。本土坑については当初上部にあった木根の搅乱として掘り下げてしまい、底面近くで遺構と確認したものである。土坑の規模と形態は120×160cmの隅丸方形を呈し、覆土は明黄褐色土のブロックが混入する明褐色土である。

遺物は出土していない。

S K2091(第73・74図)

北側遺構群の北端NH・NI93グリッドにあり、西側でSK2015によって切られている。確認面はⅣ層中で褐色土を中心にしてその外側に明褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径155cmの円形で、深さ40cm、壁は北側ではほぼ垂下し南側では張り出した底面に向かって大きく外に開いていて断面形はフラスコ状を呈していたと推定される。底面は直径130cmの円形で北側を除いた部分では上面プランよりも外側に張り出していく、また平坦で堅くしまっている。覆土は全体的にしまりのある褐色土と明褐色土を主体とし、地山土である黄褐色土がブロック状に混入していく埋め戻されたものである。

石器S149は覆土1層から出土した凹石で、安山岩の円錐の両面に凹部がある。

S K2092(第73・74・76図)

NH・NI94グリッドにあり、南西側をSK2090とSK2093によって切られている。確認面はⅢ層中で褐色土を中心にしてその外側に明褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径170cmほどの円形で、深さ80cm、壁は垂下して底面に達していく断面形はビーカー状を呈している。底面は直径160cmの円形で平坦で堅くしまっている。覆土はしまりのある褐色土と明褐色土を主体とし、地山土である明黄褐色土が混入していく埋め戻されたものである。

石器S150～S152はいずれも2層から出土している。S150の凹石は断面が三角形の凝灰岩の一

面に凹部がある。S151は断面が菱形で両面に粗い剥離のある石器の未製品と考えられ、S152は平坦打面を残す縦長剥片の両側縁に刃部を設けた削器である。

#### S K2093(第73図)

NI93・94グリッドにあり、北西側でSK2096を北東側ではSK2092を切っているが、南東側ではSK2090によって切られている。確認面はⅢ層中で褐色土を中心にしてその外側に明褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は165×180cmの橢円形と推測され、深さ40cm、壁はほぼ垂下して底面に達していく断面形はビーカー状を呈し、底面も130×170cmの橢円形である。平坦で堅くしまった底面の北壁際には直径25cm、土坑底面からの深さが5cmほどのピットがあり、このピットから南東と西方向にL字形に溝が延びている。溝の底面はピットに向かって緩く傾斜している。

遺物は出土していない。

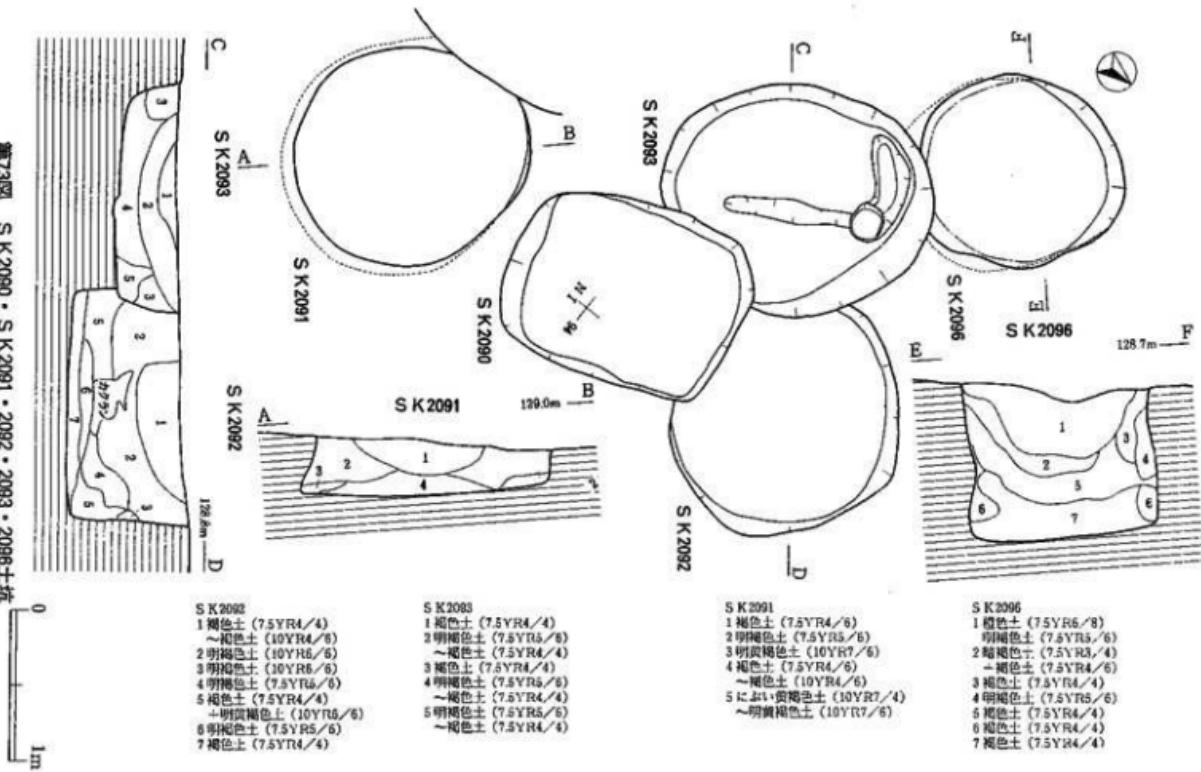
#### S K2096(第73・76図、図版21)

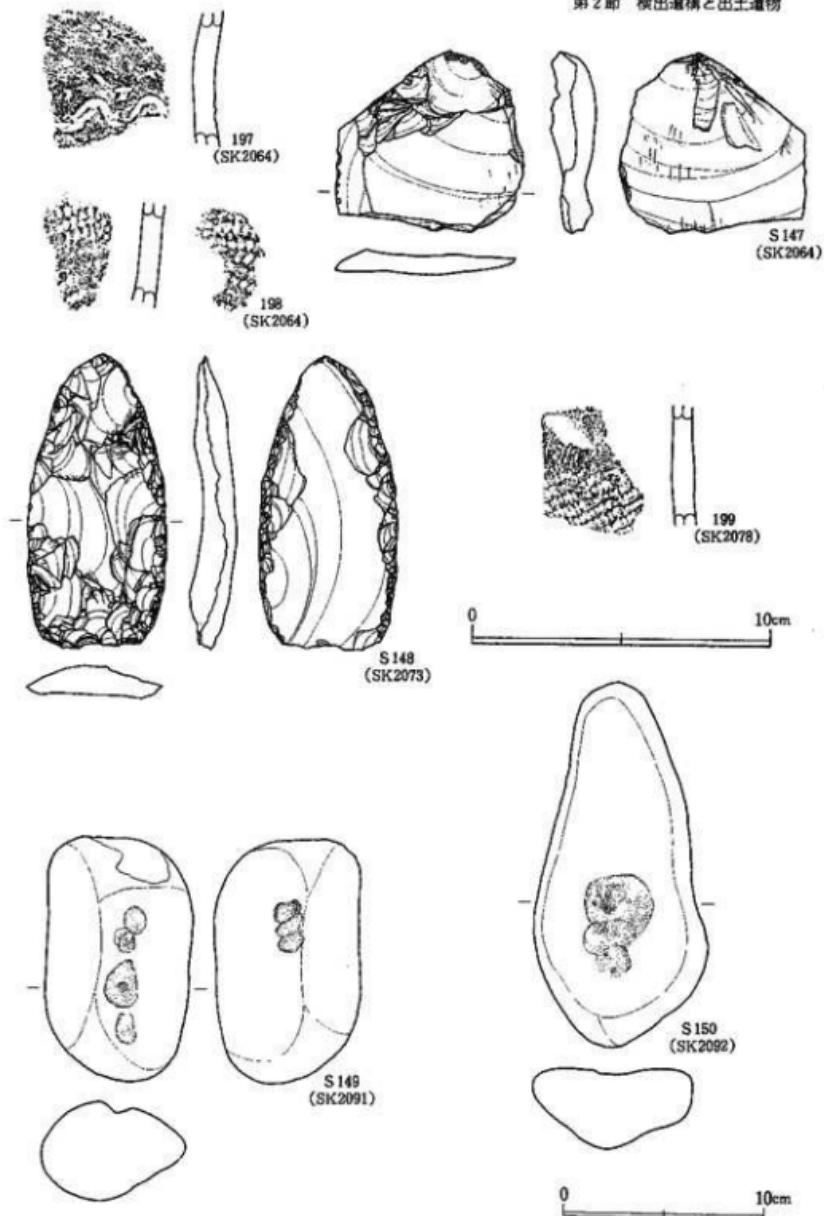
NI94グリッドにあり、南東側をSK2093によって切られている。確認面はⅢ層中で橙色土と明褐色土の混合土の円形の広がりが認められた。上面形は直径140cmの不整円形で、深さ100cm、上面から垂下する壁は一度緩く括れてわずかに外に膨らみながら底面に達し、断面形はビーカー状を呈する。底面は直径125cmの円形で南東側では上面プランよりも外側に張り出し、平坦で堅くしまっている。覆土は地山粒子を含んで全体にしまりがあり埋め戻されたものである。

石器S153は5層から出土していて縦長剥片の打面側に刃部を作出した石器で、主要剥離面には二次調製は行われない。土器200は土坑南東側の確認面から出土しており、本土坑に伴うものかどうか明確ではない。白黄色を帯びた器厚の薄い鉢形土器で、鋭く内径した口唇と直立する口縁部から上半に最大径のある体部にいたる器形で、底部は小さく上げ底気味である。口縁部の文様帶は4条の平行沈線が4ヶ所で溝を巻くように収束するものと考えられるが、摩滅が著しく判然としない。口縁部と体部の境には二個一対の突起が貼付され、体部には条が短く幅の細いLR縄文が付される。

#### S K2097(第75図)

北側遺構群の北西端NI93・94グリッドにあり、SK2015の北西2mに位置している。確認面はⅢ層上面で明褐色土と褐色土との混合土の円形の広がりが認められた。上面形は150×220cmの橢円形で、深さ60cm、壁は底面に垂下し断面形はビーカー状を呈する。IV層中に掘り込まれた底面は140×210cmの橢円形で平坦で堅くしまっている。底面北側には上面の直径30cm、底面の直径15cmで、土坑底面からの深さが20cmほどのピットがある。覆土は褐色土と地山土





第74図 SK2064・2073・2078・2091・2092土坑出土遺物

である明褐色土からなり、全体的にしまっていて埋め戻されたものである。

遺物は出土していない。

S K2099(第75・76図)

調査区南側のNA76グッリドにある。確認面はIV層中で黒褐色土と暗褐色土の混合土の円形の広がりが認められた。上面形は直径110cmの円形で、深さ15cm、壁は垂下して、平坦で堅くしまりのある底面に達する。底面も直径100cmの円形を呈している。覆土は暗褐色土と黒褐色土が主体でI・II層の自然堆積によるものである。

石器S154は2層からの出土で、縦長剥片の背面の両側縁に二次調製を加えた削器である。

S K2100(第75図)

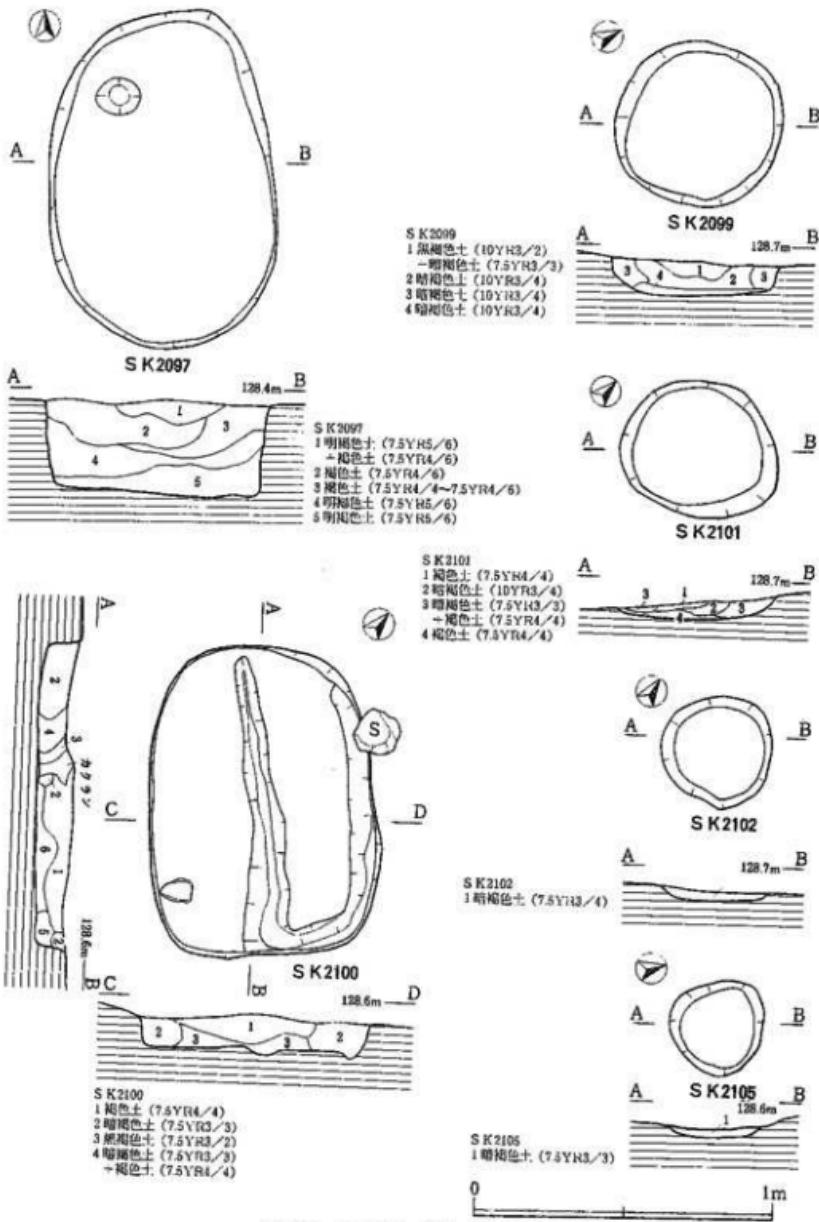
調査区南側のMT76・77グッリドにあり、SK2099の北東4mに位置している。確認面はIV層中で褐色土を中心にしてその外側に暗褐色土の楕円形の広がりが認められた。上面形は150×200cmの隅丸方形で、深さ25cm、壁は垂下して底面の規模・形態は上面形とほぼ同じである。平坦で堅くしまりのある底面には幅20cm、深さ10cmの溝が、北側から東側の壁に沿いさらには底面中央部で主軸方向に平行して西壁まで延びている。覆土は1層がIII層に由来し堅くしまっており埋め戻されたものである。

遺物は出土していない。

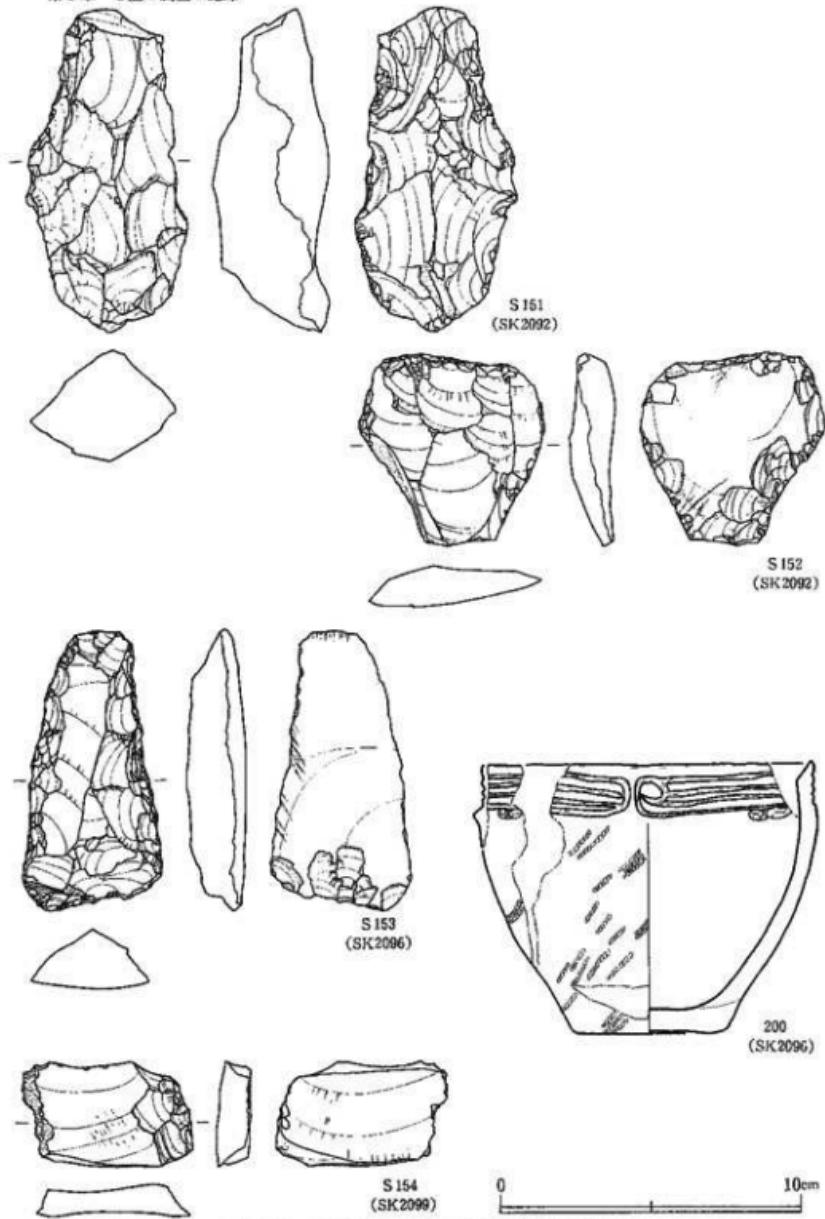
S K2101(第75図)

調査区南側のNA78グッリド杭下にあり、南東側にはSK2105が隣接している。確認面はIV層上面で褐色土を中心にしてその外側に暗褐色土と黒褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径105cmの不整円形で、深さ15cm、底面も直径90cmの不整な円形を呈し平坦で堅くしまっている。覆土は1層褐色土の他は暗褐色土と黒褐色土が主体てしまっていて埋め戻されたものである。

遺物は出土していない。



第75図 SK2097・2099・2100・2101・2102・2105土坑



第76図 SK2092・2096・2099土坑出土遺物

## S K2102(第75図)

MT・NA77グッリドにあり、SK2102の南側1mに位置している。

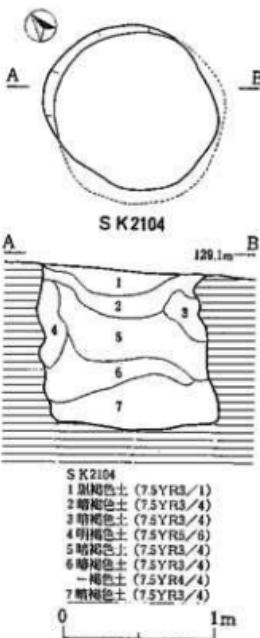
確認面はⅢ層上面で暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径75cmの円形で、深さ5cmほど、底面も直径60cmの円形を呈し平坦である。覆土の暗褐色土は比較的軟らかくしまりがなく、自然堆積によるものである。

遺物は出土していない。

## S K2104(第76図)

調査区南側のNB77グッリドにある。確認面はⅢ層中で黒褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径110cmの円形で、深さ105cm、壁はほぼ垂下して断面はビーカー状を呈している。底面は直径120cmの円形で北側を除く他の部分は上面プランよりも外側に張り出し、平坦で堅くしまっている。覆土はしまりのない暗褐色土が主体で、自然堆積によるものである。

遺物は出土していない。



第77図 S K2104土坑

## S K2105(第75図)

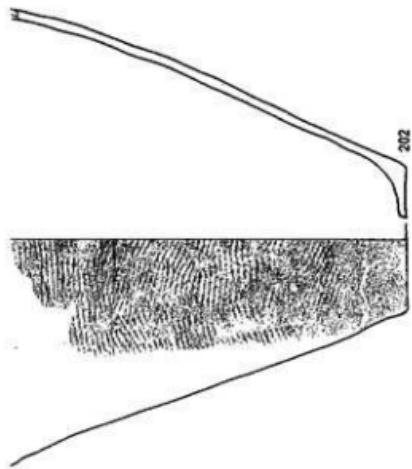
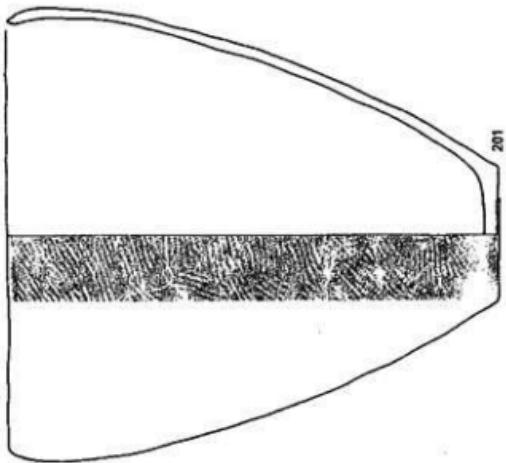
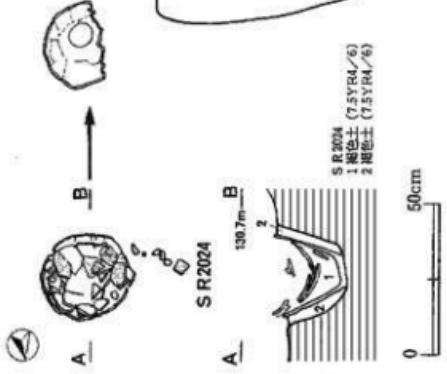
MT77グッリドにあり、SK2101の南側に隣接している。確認面はⅢ層上面で暗褐色土の円形の広がりが認められた。上面形は直径60cm、深さ5cm、底面は直径50cmの円形を呈し平坦で堅くしまっている。覆土はしまりのない暗褐色土で、自然堆積によるものである。

遺物は出土していない。

## 3 土器埋設遺構

## S R2024(第78図、図版19・22)

北側調査区のほぼ中央部NH88グッリドにあり、Ⅱ層上面で確認した。土器埋設用の掘形は上面の直径が32cm、深さ20cm、埋設された土器の大きさとほぼ同じ規模で、断面が逆台形状を呈している。埋設された深鉢形土器(第78図202)は正立して置かれ、中には別の深鉢形土器(第78図201)一個体分の破片が折り重なっていたが、これら破片は正立した土器の上部を覆っていたものと考えられる。土器内の覆土(1層)は粘性・しまりのない褐色土で、掘形覆土の褐色土(2層)は1層よりもわずかに粘性がある。



20cm  
0

第78図 SR2024土器埋設遺構と出土遺物

土器201は突出した口唇で、内窩する口縁部からわずかに丸みを持ちながら底部に至る器形で、202は体部が直線的に底部に至るものである。2点とも外面には条の太いLR縦文が付され、内面は平滑に調製されていて、胎土には砂粒を含むものの焼成は良好である。

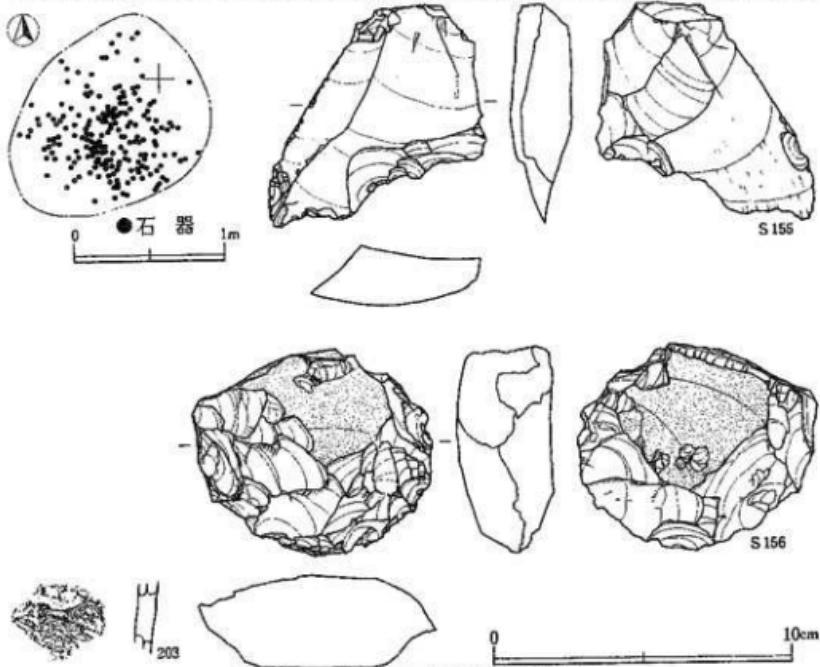
縄文時代晩期前半の時期と考えられる。

#### 4 石器集中部

ここで扱う石器集中部とは、石器製作時に生じるフレイク・チップなどが集中した場所を言うもので、調査結果からは特別に掘り込みを持たず自然の崖地などに一括廃棄されたものと考えられる。出土した石器については接合作業を試みたがほとんどが細片で、石器製作技術などについて言及できる資料は無かった。

S X Q2045(第79図)

北側遺構群の東端ND91グリッド杭下にあり、SI2075の北東2mに位置している。石器は110×140cmの楕円形の範囲から出土し、402点、総重量3kgである。土器203はS字状の結節文が付され、胎土にはわずかに纖維を含む焼成の良好な土器である。石器S155は縦長剥片の側縫



第79図 S X Q2045石器集中部と出土遺物

に使用痕のあるもので、S156は両面調製の石器で広く自然面と摺理面を残している。

S X Q2055(第80図、図版27)

北側遺構群の西端NJ91・92グッリドにありSK2007の北側に隣接しているが、石器の出土面がSK2007の確認面よりも50cmほど下の面であることから、SK2007の構築前に廃棄されたものと考えられる。石器は140×180cmの椭円形の範囲から出土し31点、総重量0.3kgと少ないが、これらには4点の石箇が含まれる。石箇S157～S159は横長剥片を、S160は縦長剥片を素材とし、両面に調製を加えるが、刃部は背面にのみ施される細かな調製で作出される。刃角はいずれも75°前後である。S161・S162は使用痕の認められる剥片である。

S X Q2056(第81図)

NJ91グッリドでSXQ2055の南側1.5mにあり、石器の出土面からSK2007の構築前に廃棄されたものと考えられる。石器は直径120cmの不整な円形の範囲から出土し24点、総重量0.2kgである。石器S163は打面の除去された縦長剥片の両側縁に刃部を設けた削器で、主要剥離面には側縁にのみ短い剥離を加えるだけで先行剥離面を広く残している。

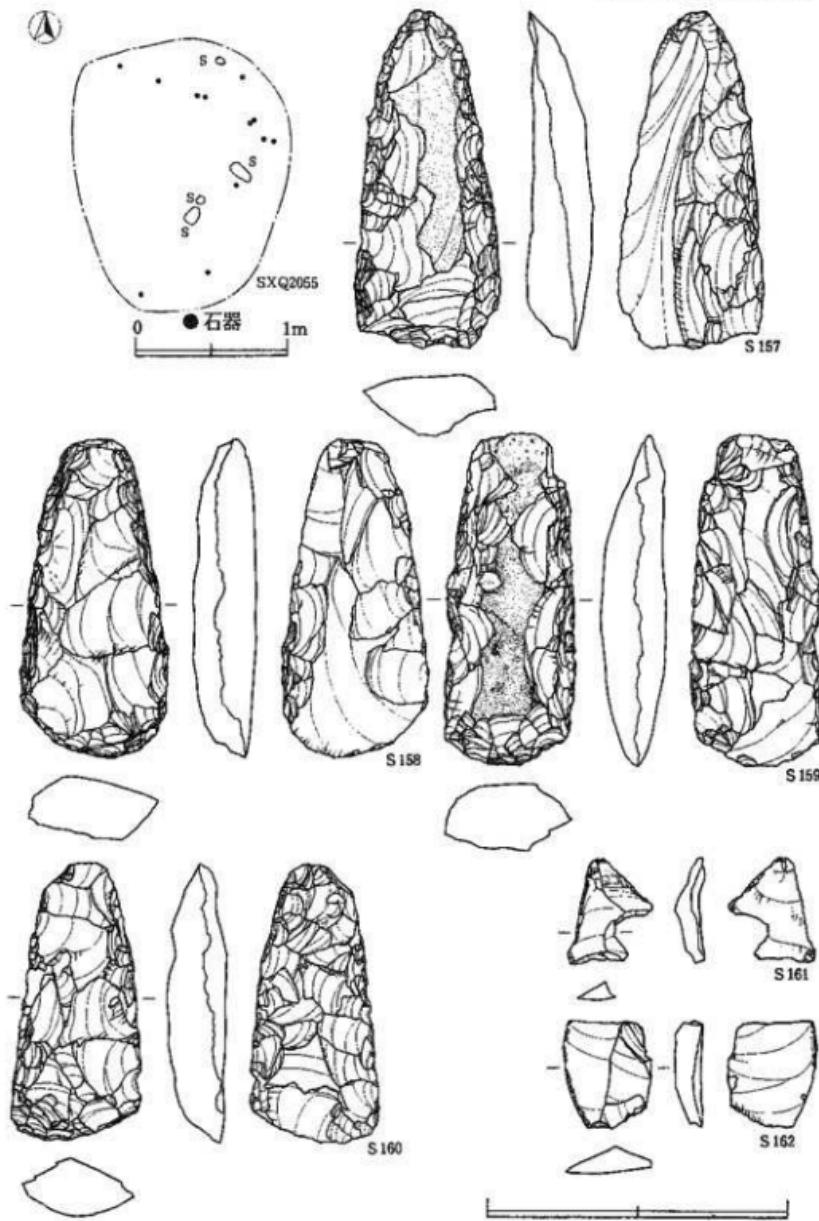
S X Q2077(第81図)

NC90グッリドでSXQ2045から南東2mに、S12075からは北東1.5mに位置している。石器は110×200cmの不整な椭円形の範囲から出土し、土器8点とともに石器42点、総重量は1kgである。

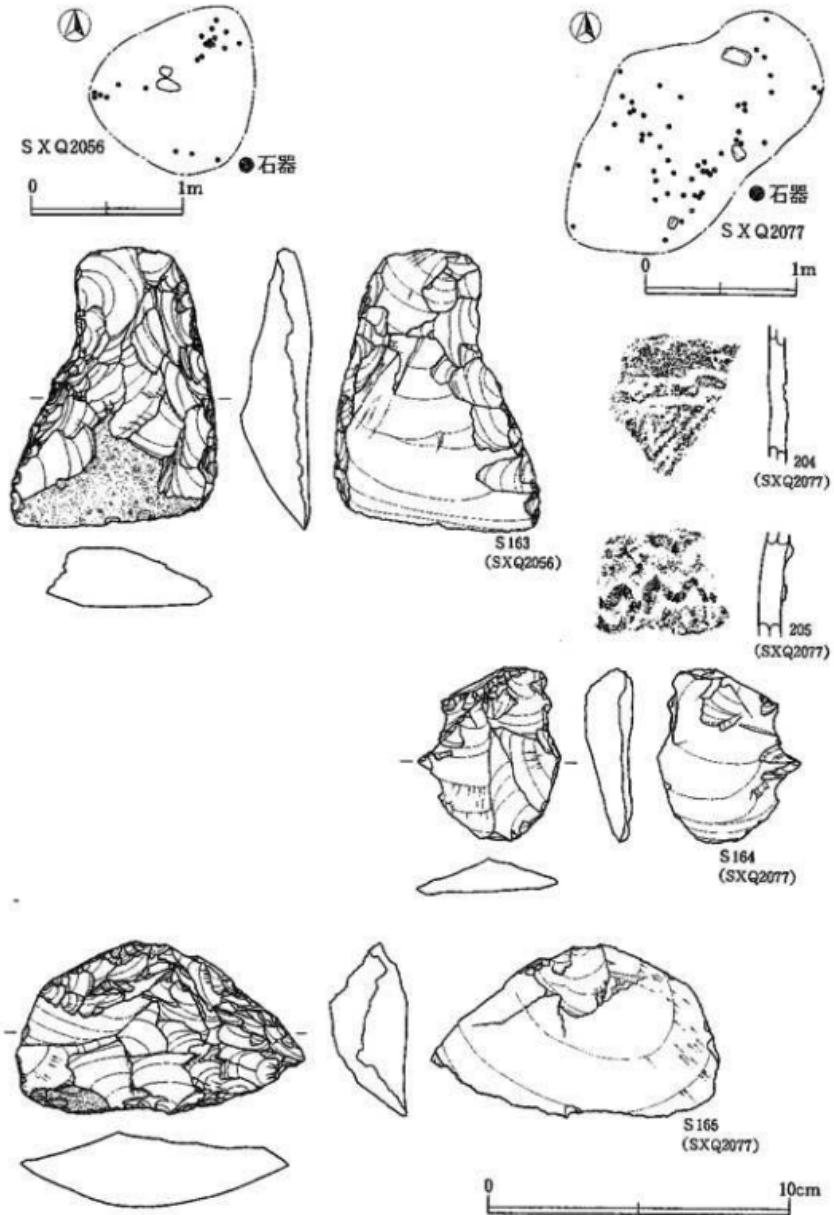
土器204は2条のS字状結節文とL R繩文が付され、205は条の太いL R繩文を地文としてその上に波状に粘土紐を貼付している。2点とも胎土には少量の纖維を含んでいる。石器S164は使用痕の認められる剥片で、S165は二方向から素材剥片を剥取した石核である。

S X Q2094(第82図、図版18・28)

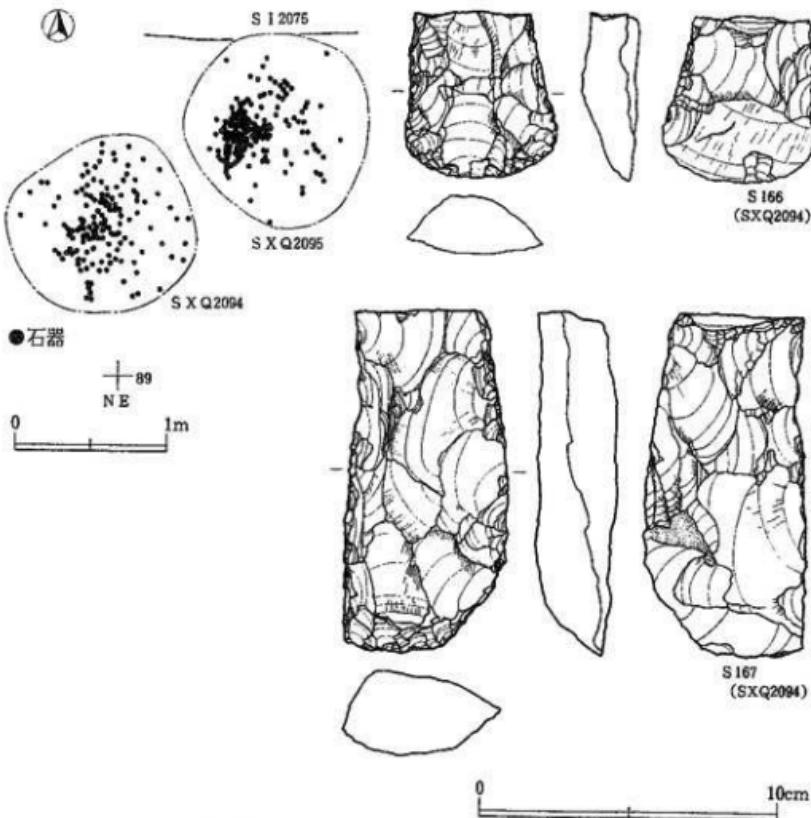
北側遺構群の南西端NE・ND89グッリドにあり、SK2095の南西側に隣接している。石器は直径120cmの円形の範囲から出土し、1,941点、総重量7kgである。S166は縦長剥片を素材とする石箇で、両面に調製を加えるが、刃部は背面にのみ施される細かな調製で作出される。刃角は40°である。S167は横長剥片を素材とする以外は二次調整や刃部の作出方法はS166と同様であり、刃角は67°である。



第80図 SXQ2055石器集中部と出土遺物



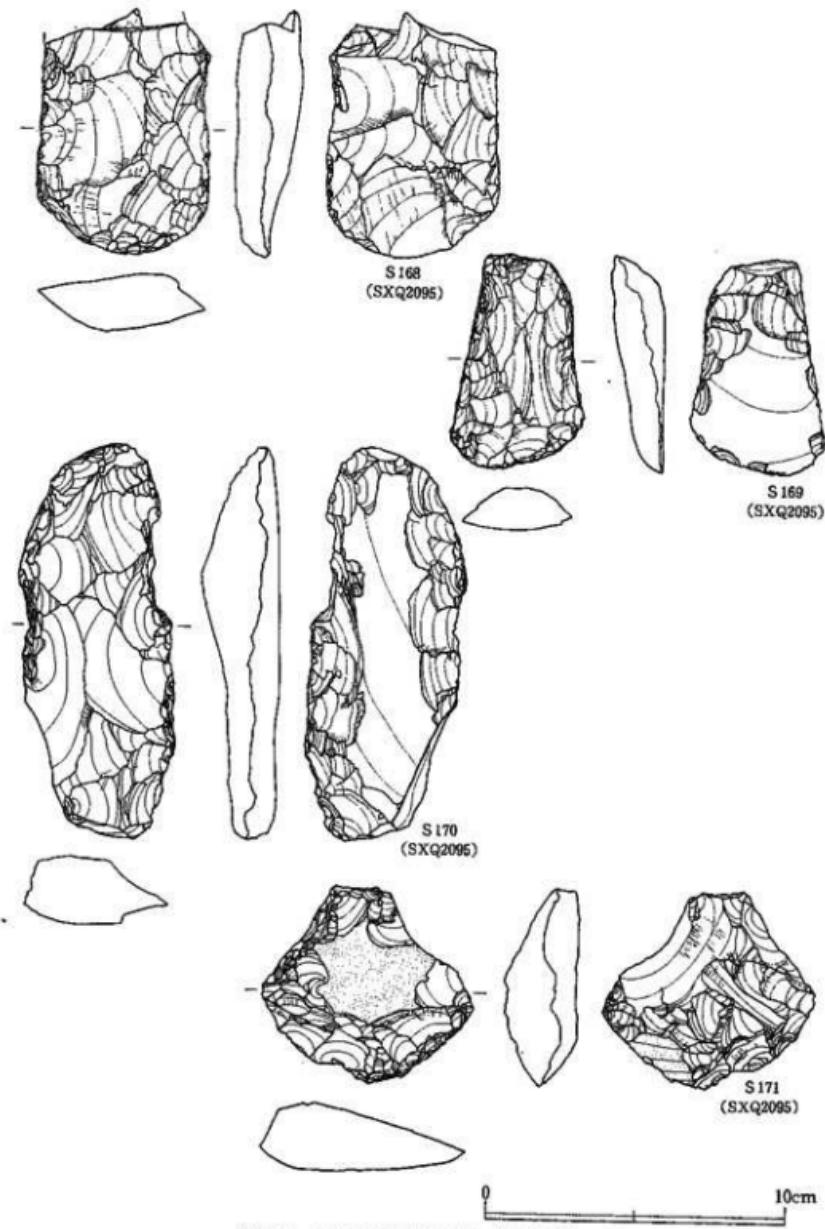
第81図 SXQ2056・2077石器集中部と出土遺物



第82図 SXQ2094・2095石器集中部と出土遺物

SXQ2095(第82・83図、図版28)

ND89グッリドにあり北東側にはSXQ2094が並んでいて、北側ではSI2075と重複しているが両遺構の新旧関係は不明である。石器は直径130cmの不整円形の範囲から出土し、458点、総重量5kgである。S168・S169は基部を欠損した石笠で、S168は両面に調整が行われ、刃部は主要剥離面の先行剥離面と背面の一端に施される急角度の押圧剥離によって作出される。刃角は55°である。S169は縦長剥片を素材とし主要剥離面には基部に近い部分にのみ二次調整が施され、刃部は背面の剥離により刃角は55°である。S170は横型剥片を素材とし、背面全面と主要剥離面の側縁に粗い剥離を行っていて石笠の未製品と考えられる。S171は両面に二次調整が行われ、一側縁に細かな剥離で刃部を設けた搔器である。



第83図 SXQ2095石器集中部出土遺物

## 5 焼土遺構

10基の焼土遺構のうちSN2112を除く9基は北側遺構群の中央部から南側に点在している。確認面は周辺の遺構と同じかそれよりもやや上位で、焼土下には不整平面形の浅い掘り込みが検出された遺構もある。

### S N2026(第62図)

NG92グリッドにあり、SK2025によって北側の一部を切られている。確認面はⅡ層で明褐色焼土が直径80cmの円形の範囲に広がっていた。焼土の厚さは12cmほどで掘り込みは伴わず、遺物も出土していない。

### S N2029(第84図)

NG88グリッドにあり、SR2024の東側1mに位置している。確認面はⅡ層で、明褐色焼土が50×60cmの範囲に広がっていて南側には木炭片が多く混入している。焼土下の掘り込みは深さ15cmで断面は漏斗状を呈しており、覆土の主体は炭化物、焼土を含んだしまりのある褐色土である。遺物は出土していない。

### S N2031(第84図)

NH92グリッドで、SI2060の北西側にSN2031・2072とともに直線上に並んでいる。確認面はⅡ層上面で赤褐色焼土が110×230cmの不整楕円形の範囲に広がっていた。焼土の中央部は明赤褐色で外側に向かって赤褐色に変化していて、焼土の厚さは確認面から15cmほどで掘り込みは伴わない。遺物は出土していない。

### S N2032(第84・85図、図版28)

NG91・92グリッドにあり、北西側でSI2060と接しているが新旧関係は不明である。確認面はⅡ層上面で赤褐色の焼土が90×150cmの楕円形に広がっていた。焼土は赤褐色から明褐色を呈し、深さは20cmほどで掘り込みは伴わない。遺物は焼土上面と周辺から土器78点、石器16点が出土しているがいずれも二次的な火熱は受けていない。

土器206～209は深鉢形土器の同一個体で、体部外面には2条の綾織文のあるL R織文が付されていて、内面は横方向のナデが行われて平滑である。底部は外に張り出し、体部下端とは「く」の字状の断面を呈している。胎土には纖維を含むが焼成は良好である。

石器S172は自然面の扱る縦型剥片の下縁に細かな剥離調整を加えた削器である。S173も打面と向かい合う下縁に深い抉りのあるもので、S157は使用痕の認められる剥片である。S174は粘板岩を素材とする燕尾形石製品で、全体を研磨して上端は磨製石斧の刃部様に、下端も二

般に作出したものである。

S N2033(第69図)

NG・NH89グリッドでSK2063を切っている。確認面はⅡ層上面で南側は調査段階で掘り下げてしまったが、赤褐色焼土が直径90cmほどの円形の範囲に広がっていた。焼土の厚さは12cmで掘り込みは伴わず、遺物も出土していない。

S N2039(第84図)

NF93グリッド杭下にあり、確認面はⅡ層で赤褐色焼土が50×60cmの範囲に広がっていた。焼土の厚さは20cmで、下位に行くにつれて褐色に変化している。焼土下には掘り込みは伴わず、遺物も出土していない。

S N2040(第84図)

NE92グリッドにあり、SI2022の南西側3mに位置している。確認面はⅢ層上面で赤褐色焼土が直径40cmの円形の範囲に広がっていた。焼土の厚さ8cmほどで掘り込みは伴わず、遺物も出土していない。

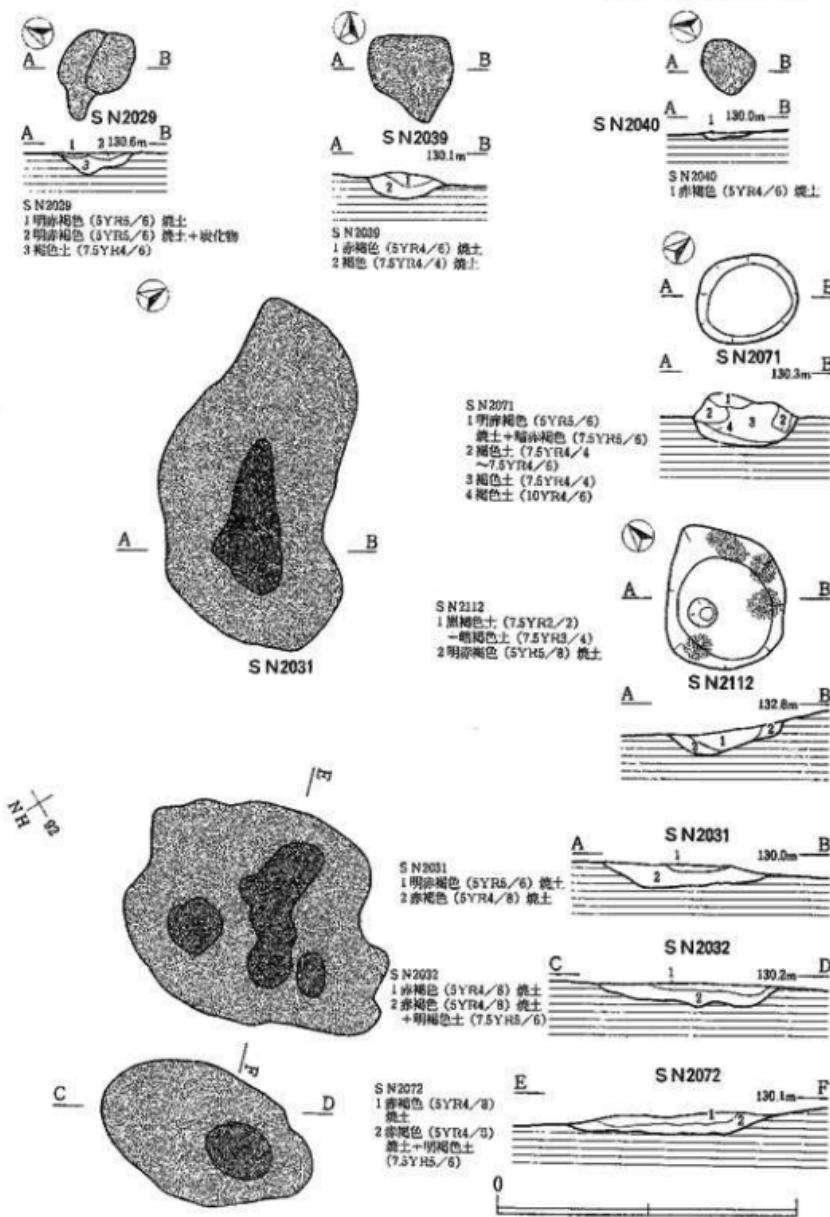
S N2071(第84・86図)

NF90グリッドにあり、SI2075の西側4mに位置している。確認面はⅡ層上面で暗褐色土ブロックの混入する明赤褐色土と褐色焼土が直径80cmの円形のマウンド状になっていた。焼土下には直径90cmの円形で、深さ20cmの掘り込みが伴っていて、掘り込み内の褐色焼土は全体的にしまりがない。出土遺物は土器2点で1層上位から出土している。土器210は台付鉢形土器で大きく外反する体部に外開きの台部が付くもので、外面にはLR縄文が体部下端まで付され、台部下端にも同一原体によって幅8mmほどの縄文帯が施されている。体部、台部の内面には丁寧なミガキに似た調整が行われる。211は壺形土器の体部上半の破片で、頸部と体部とは浅い沈線で画され体部外面にはLR縄文が付されている。

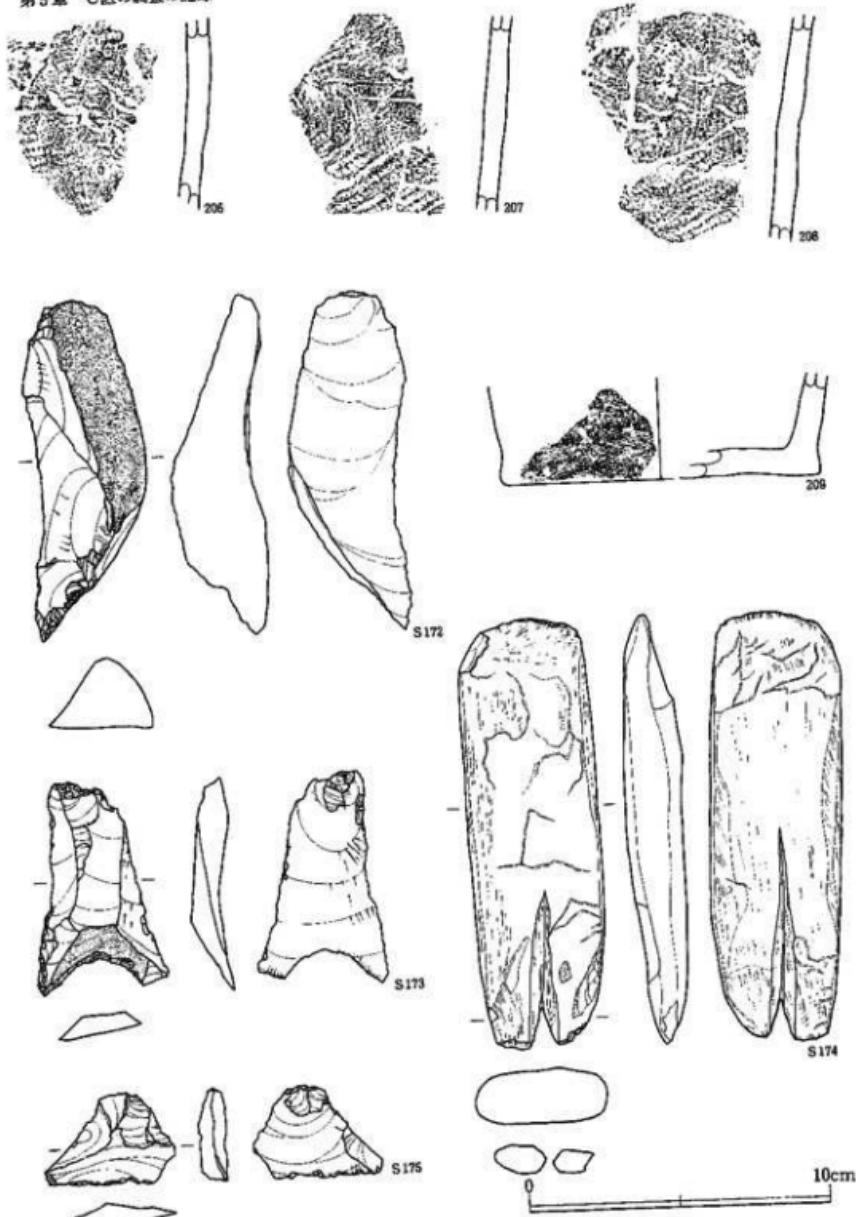
S N2072(84・86図)

NG92グリッドにあり、SN2031・2032の中間に位置している。確認面はⅡ層上面で赤褐色焼土が160×180cmの不整方形の範囲に広がっていた。焼土の厚さは10~20cmでしまりがなく、焼土下には掘り込みは伴わない。出土遺物は土器2点で確認面から出土している。土器212・213は同一個体で外面にLR縄文が付され、胎土には纖維を含んでいてSN2032出土の206~209と同一個体である。

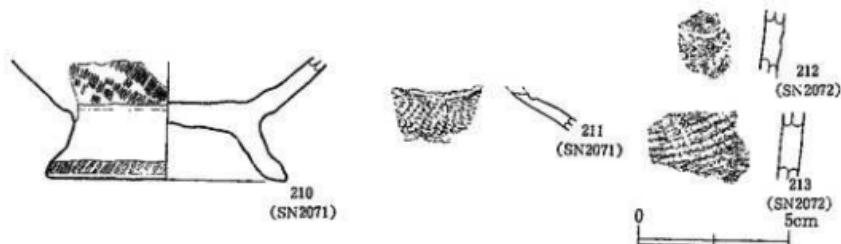
第2節 検出遺構と出土遺物



第84図 SN2029・2031・2032・2039・2040・2071・2072・2112焼土構造



第85図 SN2032焼土遺構出土遺物



第86図 S N2071・2072焼土遺構出土遺物

## S N2112(第84図)

調査区東側のMJ74グリッドにあり、C区の遺構群の中では最も東側に位置している。確認面はⅢ層上面で黒褐色土と暗褐色土との混合土を中心として、その周辺に明赤褐色焼土が直径85cmの円形の範囲に広がっていた。焼土下には上面形が直径80cm、底面が直径70cmの円形の掘り込みがあり、底面の西側には直径20cm、深さ15cmのピットがある。壁は底面から緩く立ち上がり一部は火熱によって赤変している。掘り込み内の覆土は1・2層ともしまりがない。

遺物は出土していない。

### 第3節 遺構外出土遺物

#### 1 土 器(第87~91図、図版29~32)

遺構外から出土した土器は縄文時代早期~晚期、弥生時代のものであるが、調査区全域が木根などの影響を強く受けていることと基本各層の厚さにも場所によって大きく相違があったことから以下に述べる土器の時間的位置付けについては必ずしも層位的に確認したものではない。従って、土器については内外面に施される縄文や文様、胎土、器形などを中心に分類し、これを現在汎用されている東北地方の各土器型式に照合して時期を把握した。

#### 第I群上器(第87・88図)：縄文時代早期後半～前期前半の土器

1類(214~221)：内外面に縄文の付される土器である。214・215は小波状で外反する口縁から体部上半が外にわずかに膨らむ器形で内外面にはR L縄文が付されている。外面の縄文は原体の横位回転によるが、内面の口縁部には斜位回転により条が縦方向に付され、その下の縄文は縦回転によって表出される。216・217も同一個体で口縁部が平坦であることを除くと214・215と器形や付される縄文などは同じである。219は肥厚して外反する口縁部、220はわずかに外反する口縁部で、いずれもL R縄文が付されている。胎土は緻密で纖維を含まず、焼成も良好で色調は黒褐色を呈する。

2類(222~234)：内面に条痕のある土器である。外反する口縁部から直線的に体部上半にいたる器形で、口唇部は222・234とも浅い刺突で小波状を呈する。外面の縄文はL R縄文が付され、内面は整形時の凹凸を残した上に条痕が施される。外面の色調は灰褐色から褐色を呈し、胎土は少量の纖維を含むものの緻密である。

3類(235~254、257~273)：胎土に纖維を含み、斜行縄文や羽状縄文の他に葺瓦状文・S字状沈文などの撚糸文が施される土器である。斜行縄文の施される236~240は多量の纖維を含み、口唇部は丸みを持ち、外反ぎみの口縁部から体部上半にかけてはほぼ直線的な器形である。内外面とも器面調整は顕著でなく、内面には纖維束の痕跡を残し凹凸がある。縄文は236・237はL R、238~240がR Lである。241~249・253・254・257~263も斜行縄文が施されるが、胎土に含まれる纖維が少なく、器面の調整が丁寧であることなどに前者との違いがある。241~249の胎土は細砂粒を含み緻密で、内面は纖維束の痕跡が残るものとの比較的平滑に調整されている。253・254・257~263は纖維や砂粒も少なく極めて緻密な胎土で、内面には光沢がある。縄文はL Rが多用され、R Lが施されるのは244~246・249・253である。

羽状縄文の施される250~252の胎土は241などと同じで内面も平滑である。羽状縄文は前段多条のR LとL Rの結合によるものである。264ではL R縄文とR撚糸による葺瓦状文が併用

される。

265～273はR捻糸によるS字状沈文が施される。口唇部は薄く突出ぎみで、外反ぎみの口縁部と底部が張り出す深鉢形土器である。胎土は細砂粒を含み緻密で、内面も平滑に調整される。

3類土器は大木2式である。

#### 第II群土器(第89・90図)：縄文時代前期後半の土器

1類(274～293)：多段の結節回転文の施される土器である。口唇部は平坦な274～278と刺突による小波状となる279～284があり、器形的には外反する口縁部から体部上半で膨らむ深鉢形を呈する。縄文はR Lの289・293以外はL Rが多く用され、結節回転文には結節部を交互に逆結びにする285もある。胎土には砂粒を含むものの焼成は良好である。

2類(294～302)：体部上半に粘土紐を小波状や同心円状に貼付する土器である。口唇部は平坦で、口縁部上半が大きく外反し、膨らみのある体部から径の長い底部にいたる深鉢形土器である。口縁部上半まで條の太いL R縄文が地文として付され、その上に幅5mmほどの粘土紐が貼付される。内外面の調整は丁寧だが体部の上・下端部には粗いケズリの痕跡が顕著に認められ、底部外面は繊物状の圧痕がわずかに確認できる程度まで磨かれている。胎土は砂粒を含むものの緻密で、焼成も良好である。本群は大木4～5式の土器である。

#### 第III群土器(第90図)：縄文時代中期の土器である。

303～312の土器で、口縁部文様帶に平行状あるいは弧状の押圧縄文が施される。303・304は肥厚して外反する口縁部で、307の口唇には押圧縄文が付される隆帶が貼付される。305～312はキャリバー形を呈する深鉢形土器の口縁部片で、横走する隆帶に沿って押圧縄文が施されている。縄文はいずれもL Rで、胎土は緻密で焼成も良好である。本群は大木7b式である。

#### 第IV群土器(第90図、図版32)：縄文時代後期の土器である。

平行沈線によって画される縄文帯があるが、315では縄文帯と平行する無文帯があり入組文が施されたものと考えられる。縄文はL Rで、胎土には白色砂粒を含み焼成は脆い。

#### 第V群土器(第90・91図)：縄文時代晩期の土器である。

器種には鉢・浅鉢・皿・壺・注口土器などがある。316は台付土器の台部で沈線によって入組状三叉文が下位に施され、中位には透かしのある文様が表されている。317・318の浅鉢形土器では口縁部上端には2個1対の山形状の突起が巡り、体部には浮き彫り的なX字状文が描かれる。319の皿形土器にも浮き彫り風の文様が体部と底部外面に施され、内面下端には2本の隆帶を巡らす。壺形土器323は球形の体部上半に平行沈線を引き、沈線間には隆帶状を呈していて、4個の突起が付く。320は注口土器の体部で、浮き彫り手法による文様が描かれる。鉢形土器321・324～327は外反する口縁部に幅広の沈線によって弧状文や曲線文が施され、斜行縄文の付される体部とは沈線で画される。本群は大洞B C～C1式である。

第VI群土器(第91図)：弥生時代の土器である。

1類(328～341)：沈線文の施される土器で、328・329は同一個体で口縁部文様帶に連結する弧状文が描かれるが、沈線間には刷毛目調整の痕跡が残る。330では鉤齒状文の三角に区画される部分にLR繩文が充填される。332・336では斜行する多条の沈線が施される他、332ではLR繩文が口縁部の内外面と口唇部に回転施文される。313～335・337～341は口縁部と体部を画する2・3条の平行する細沈線が引かれるが、335では沈線下に列点文が、337では沈線間に交互刺突が行われている。体部の繩文はRSLが付される。

2類(342～354)：条痕の施される土器で、343～346・349では口唇部に繩文が回転施文され、345・346の内面口縁部上端には2条の平行沈線が巡る。

3類(355～359)：短い原体によって条の交差する繩文を施す土器である。

本群は山王團式や天王山式に併行する土器が中心と考えられる。

## 2 石 器(第92～101図、図版33～35)

C区の遺構外出土の石器には石鎌・石槍・石匙・石甕などがあり、いずれも頁岩である。

石鎌(S176～S181)

11点出土している。いずれも両面調整された無茎鎌で、湾曲する基部の両端は角状に突出する。形状から以下に2分する。

a類(S177・S178)：長軸が基部の2倍以下で、基部幅は広く全体の形状は正三角形に近い。

b類(S176・S179～181)：長軸が基部の2倍以上あり、全体の形状は二等辺三角形に近い。

石槍(S182～S205)

54点出土している。形状から大きく3分する。

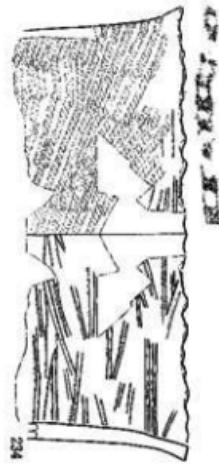
a類(S182～S193)：形状は柳葉状を呈して、断面は凸レンズ状かカマボコ形で厚みがある。S182は両面調整は幅の広い平坦剥離が連続し、基部は円く断面は凸レンズ状を呈している。

S183～S189は細みの柳葉形で、断面は凸レンズ状で最大幅は上半にある。縦型剥片を素材として両面調整を行うが基部に打面を残している。S190・S191も基部に打面を残し、主要剥離面には先行剥離面を広く残り刃部は片側縁に設けられる。S192・S193は最大幅の大きな石槍と考えられ、両者とも最大幅のある位置で折損している。刃部は両側縁に細かな調整で設けられるが両面の先行剥離面は広く残る。

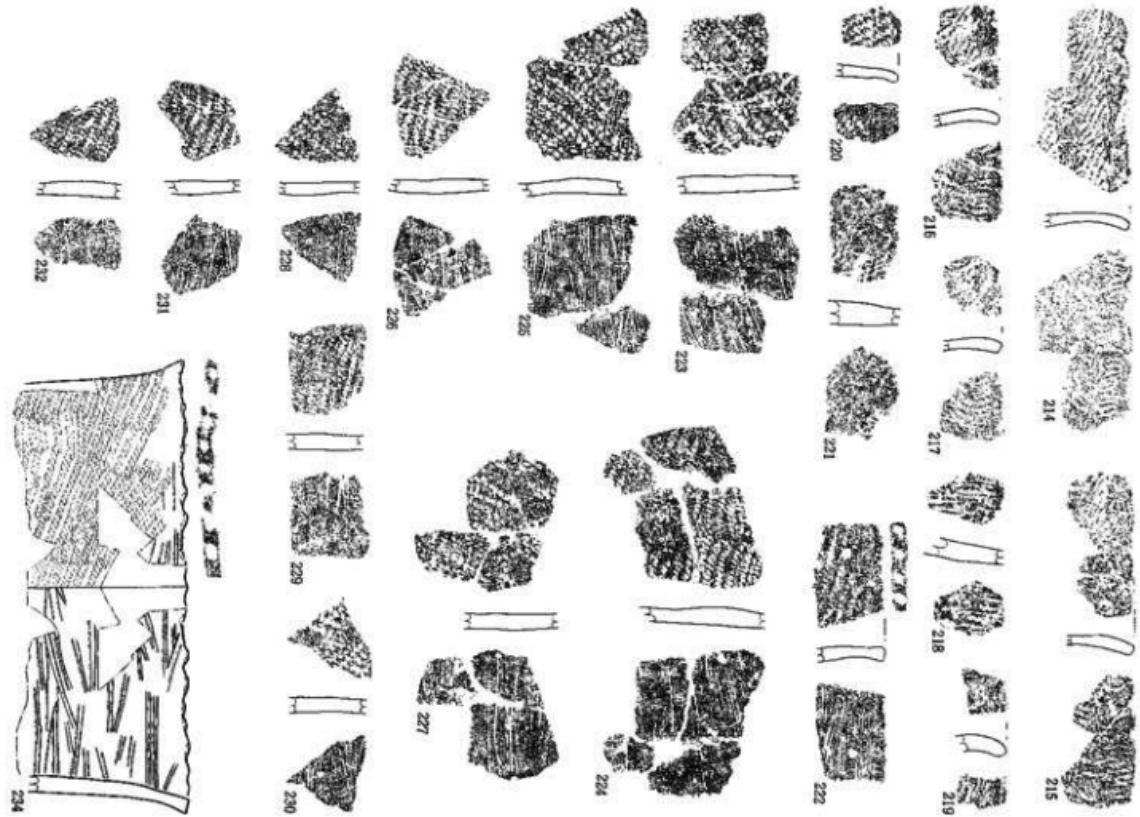
b類(S195～S202・S204・S205)：形状は逆ハート形で断面は薄い凸レンズ状を呈している。素材剥片の形状はそれほど大きく変えることなく両側縁に細かな調整で刃部を設ける他は、背面に広い平坦剥離を行い、主要剥離面には先行剥離面を広く残すものが多い。

c類(S203)：基部につまみのある断面が菱形の細みの石槍である。両面に細かな剥離を行っている。

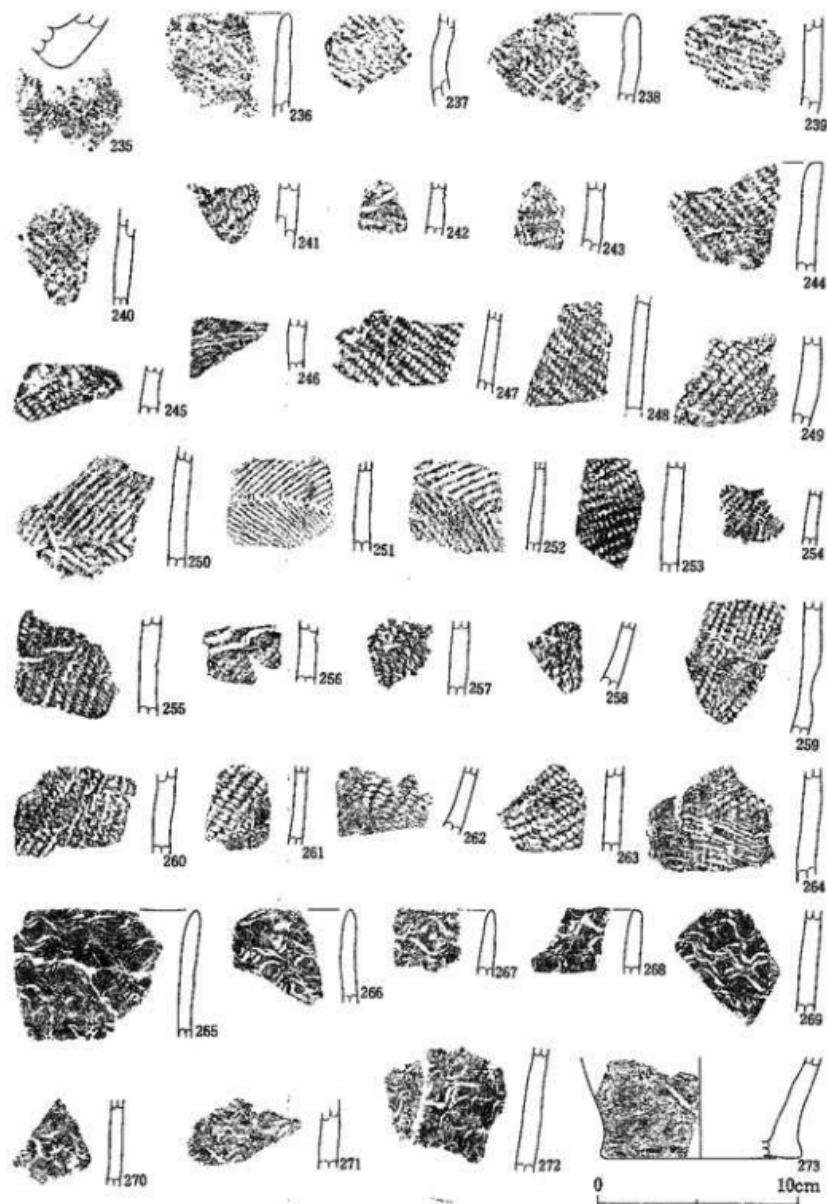
第3節 遺構外出土遺物



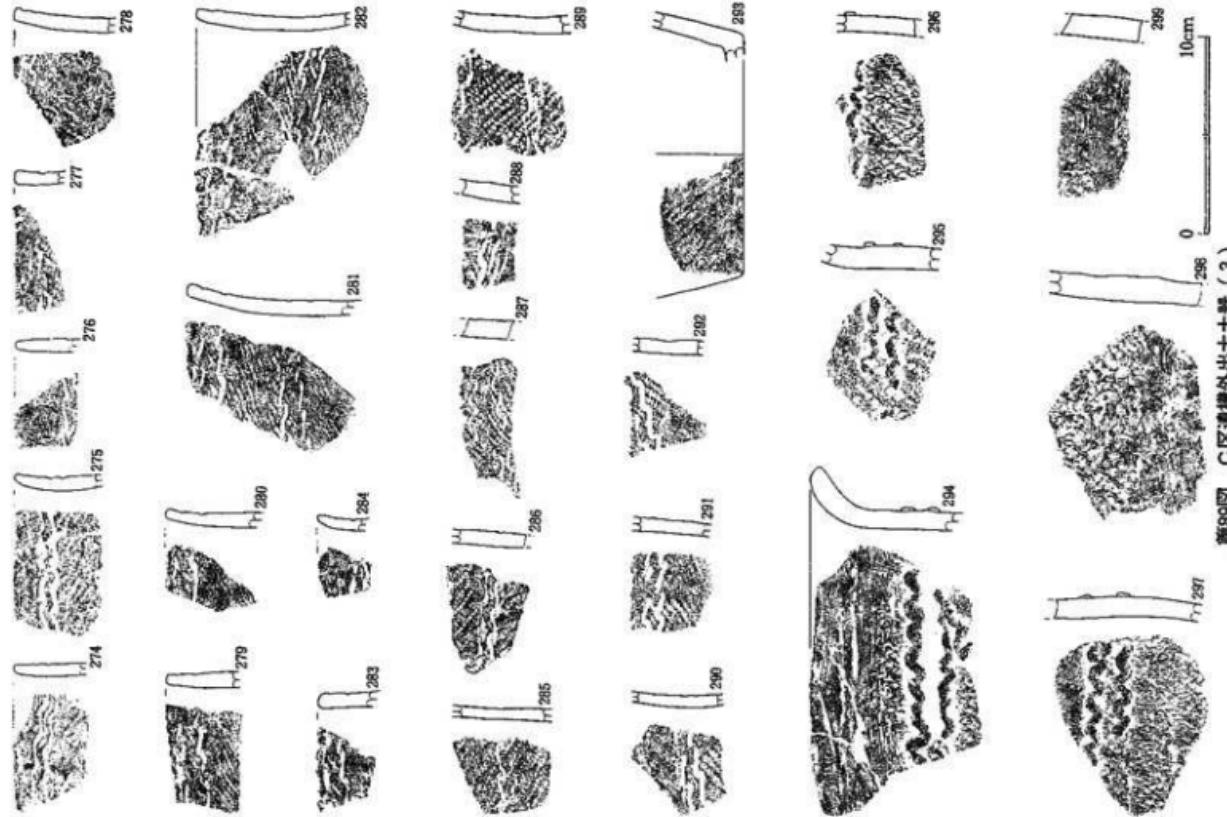
10cm



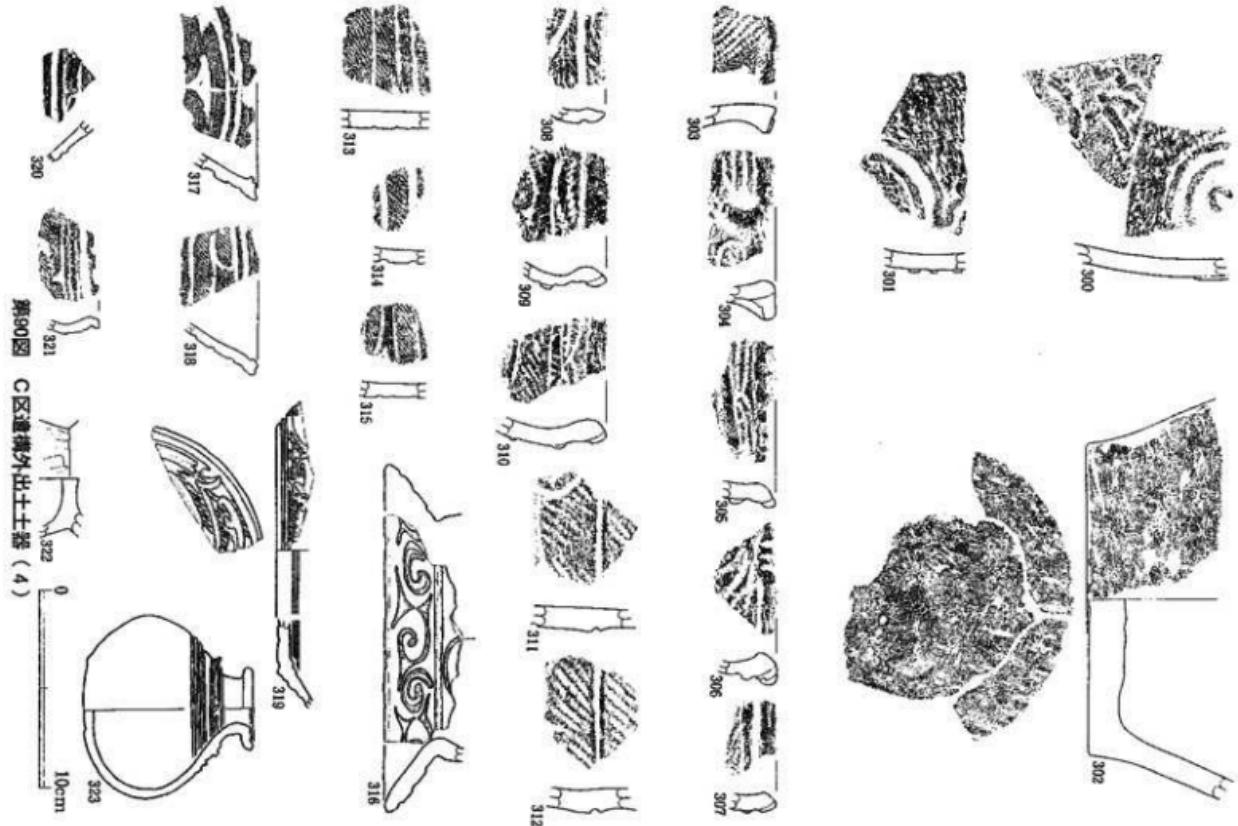
第87圖 C区遺構外出土器 (1)

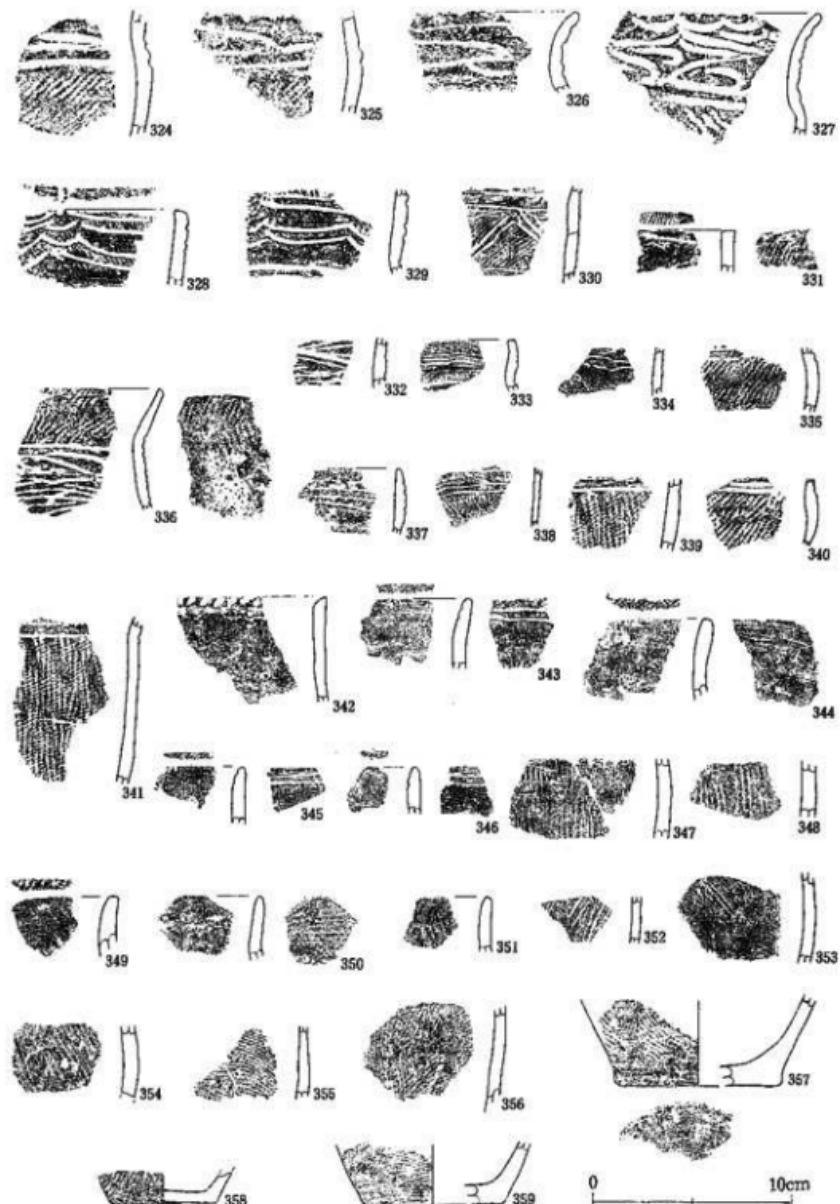


第88図 C区遺構外出土土器（2）



第69圖 C區遺構外出土土器(3)





第91図 C区遺構外出土土器（5）

石匙(S206～S218)

34点出土している。縦型の石匙が圧倒的に多く、横型の石匙は1点だけである。

a類(S206～S217)：縦型の石匙で全て打面方向につまみ部を設けており、主要剥離面には広く先行剥離面を残している。S206・208～211の背面には丁寧な平坦剥離を施すが、その他では背面の側縁に浅い剥離によって刃部を設ける他は先行剥離面を広く残す。

b類(S218)：横型の石匙で打面側につまみ部を設け、両面に先行剥離面を残し調整は剥片の下側縁とつまみ部周辺に主要剥離面側からの押圧剥離が行われる。

石錐(S219・S220)

8点出土している。いずれも素材剥片の一端に錐部を設けるもので、錐部のみ両面からの調整で作出される。

トランシェ様石器(S221～S223)

3点だけの出土である。刃部は主要剥離面と背面の先行剥離面とで作出される。S221・S222は横型剥片を素材として背面には粗い剥離を行い、主要剥離面の両側縁には打面除去の剥離調整が施される。

石籠(S224～S257)

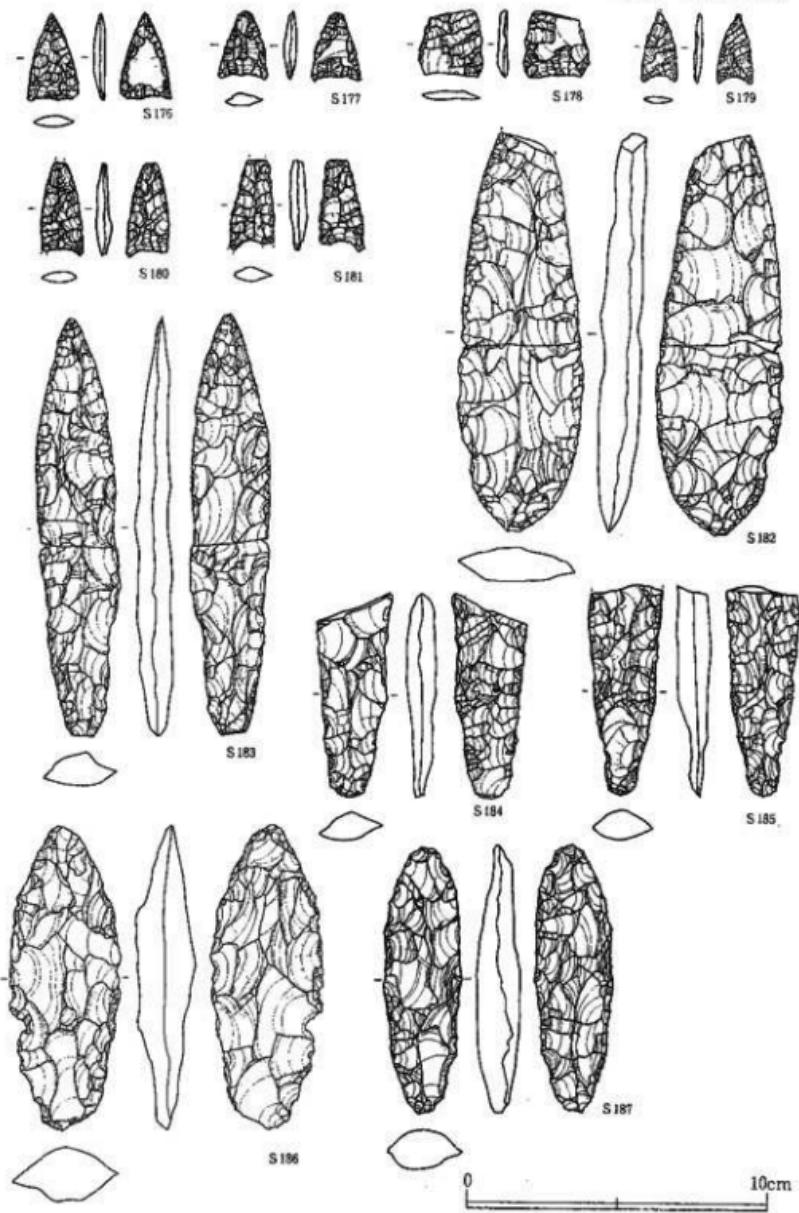
113点出土している。素材となる剥片の形状や剥離調整の違いから3分する。

a類(S224～S227)：縦型剥片を素材とし、剥離調整は背面に行われる。いずれも刃部は打面の反対側に作出される。S224・S226では背面の側縁部に細かな押圧剥離が施されるが中央部には先行剥離面が広く残る。S225・S227の打面は除去される。

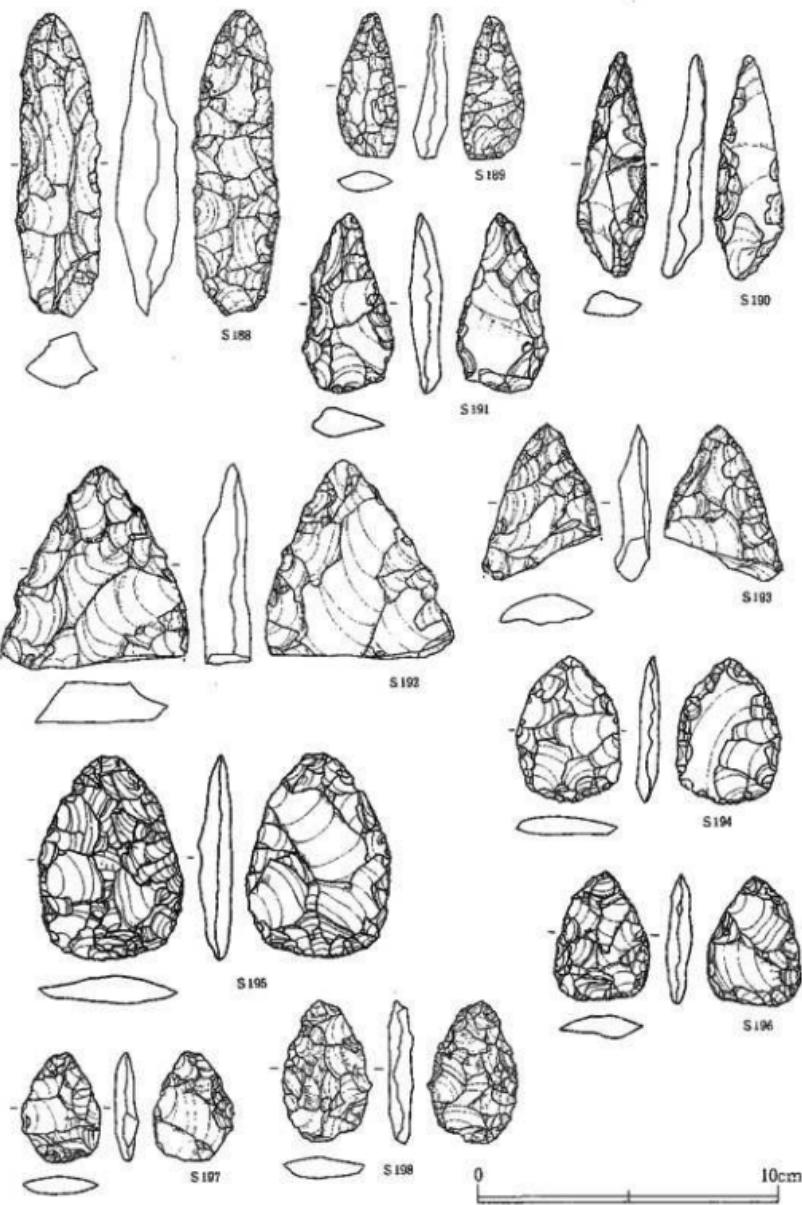
b類(S228～S233・S237・S238・S250)：素材となる縦型剥片の形状を変えて、打面側に刃部を設けている。背面には広く先行剥離面を残し、二次調整は全側縁に行われるが、刃部は打面方向からの押圧剥離で打面側の厚みを利用して急角度に作出される。主要剥離面には調整は行われない。

c類(S234～S236・S239～S249・S251)：素材となる横型剥片の形状を短冊形に変え、片側縁に位置する打面の除去作業が比較的丁寧に行われる。刃部は下方からの押圧剥離で作出されるが、刃部角度はb類よりも小さい。背面の二次調整は全面に及び、主要剥離面には打面除去のための押圧剥離の他は側縁に浅い調整が巡るS246・S247がある。

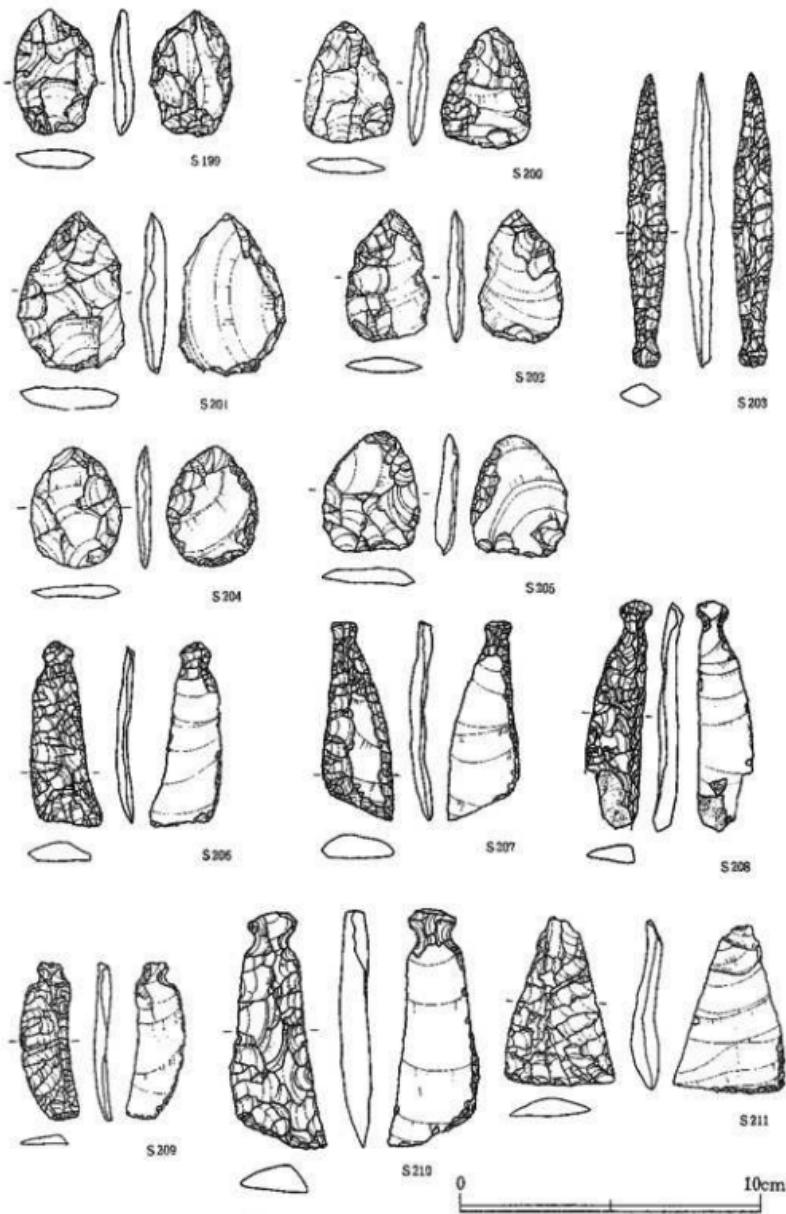
d類(S252～S257)：素材剥片の形状を変え、両面に二次調整が施され、打面も除去される。



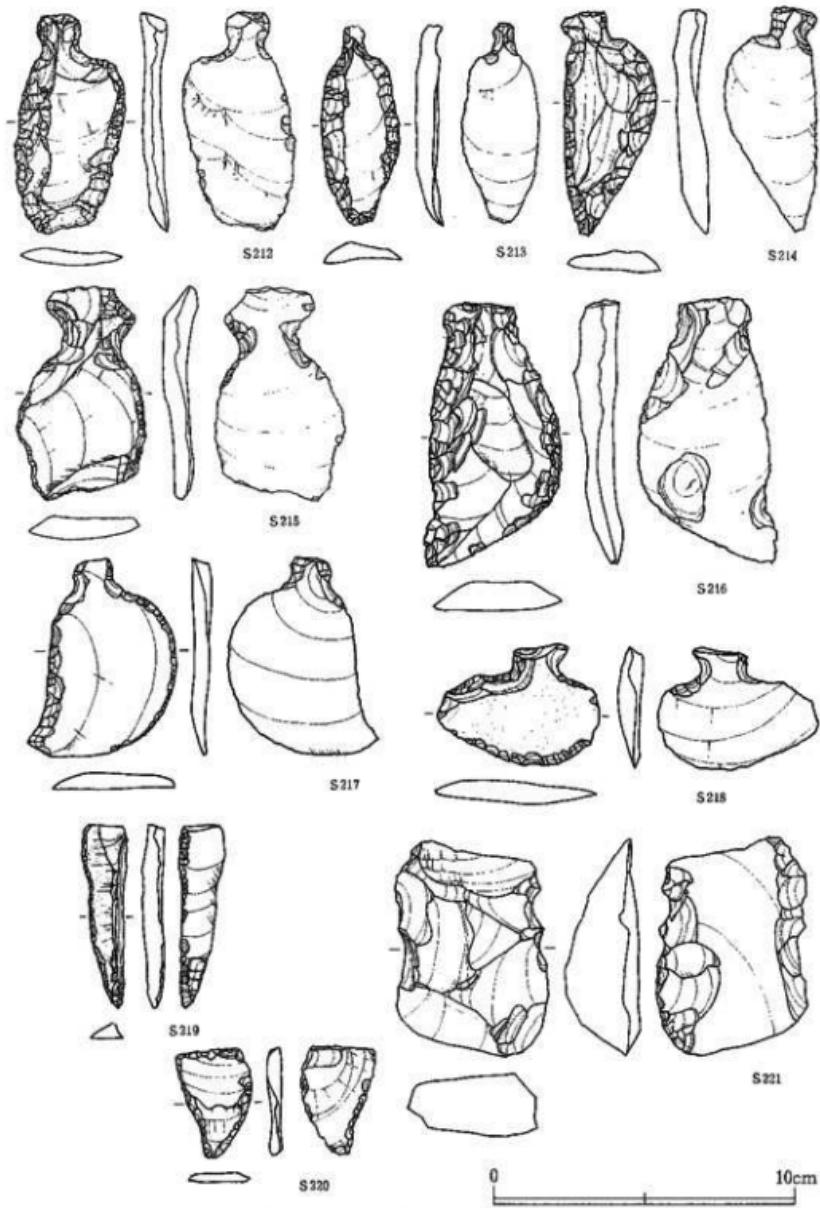
第92図 C区造構外出土石器（1）



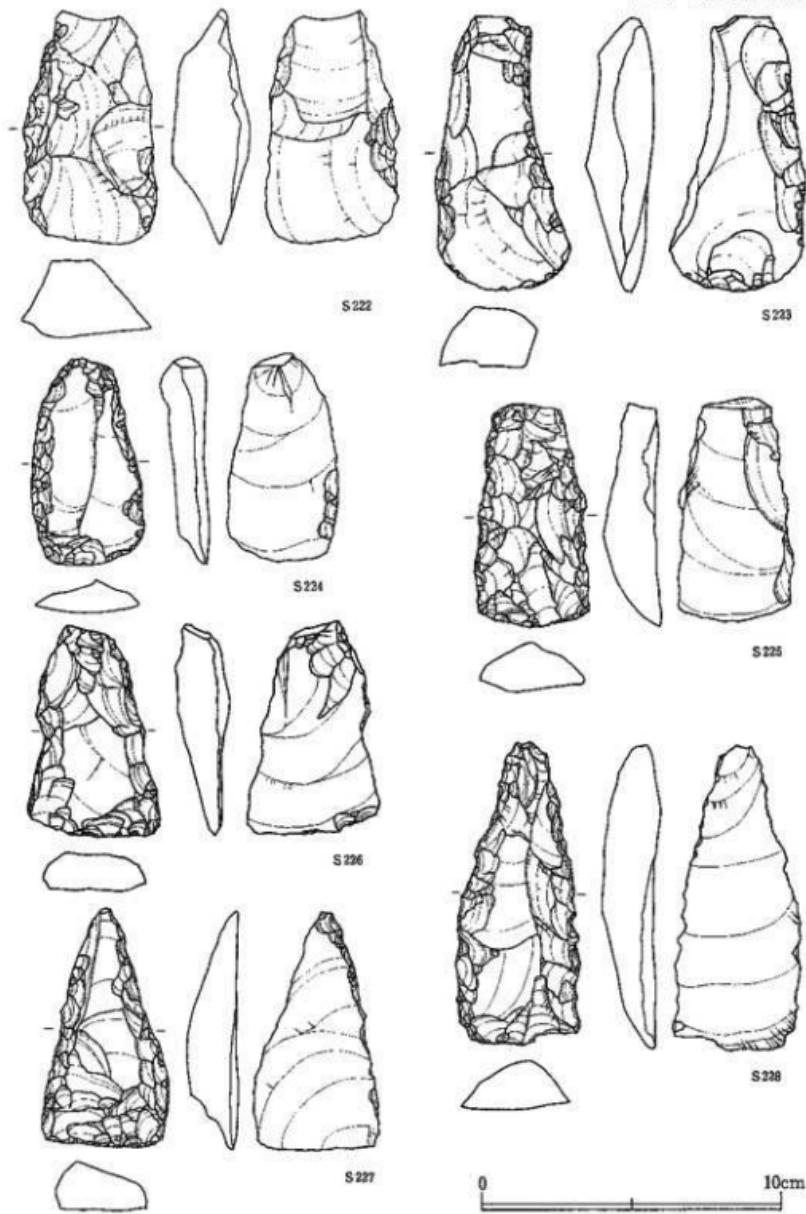
第93図 C区遺構外出土石器（2）



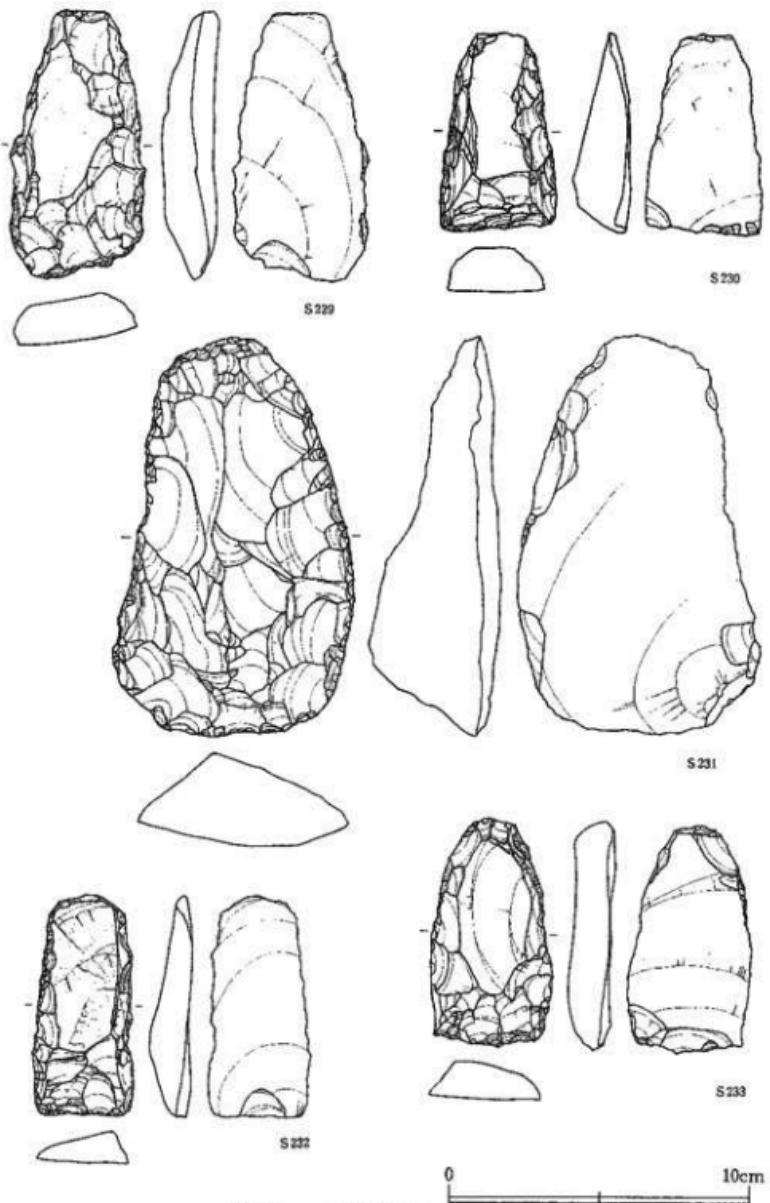
第94図 C区遺構外出土石器（3）



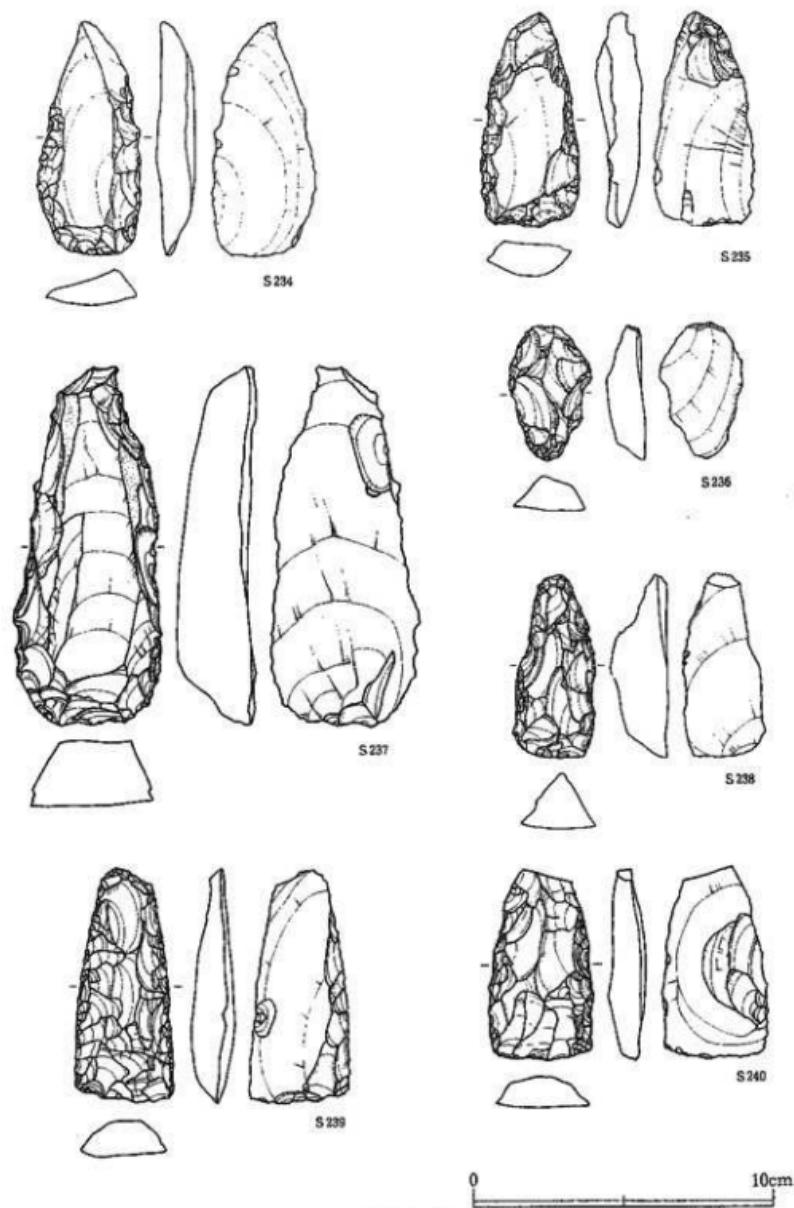
第95図 C区遺構外出土石器(4)



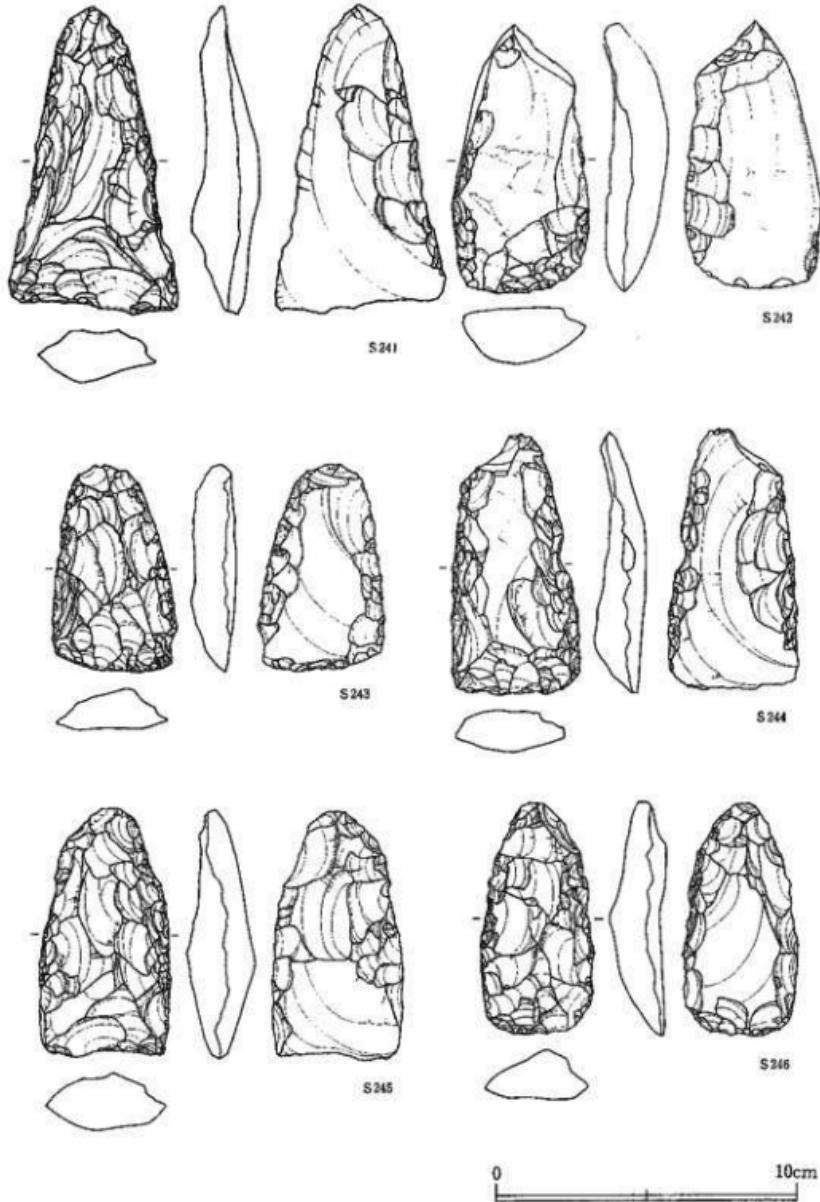
第96図 C区遺構外出土石器（5）



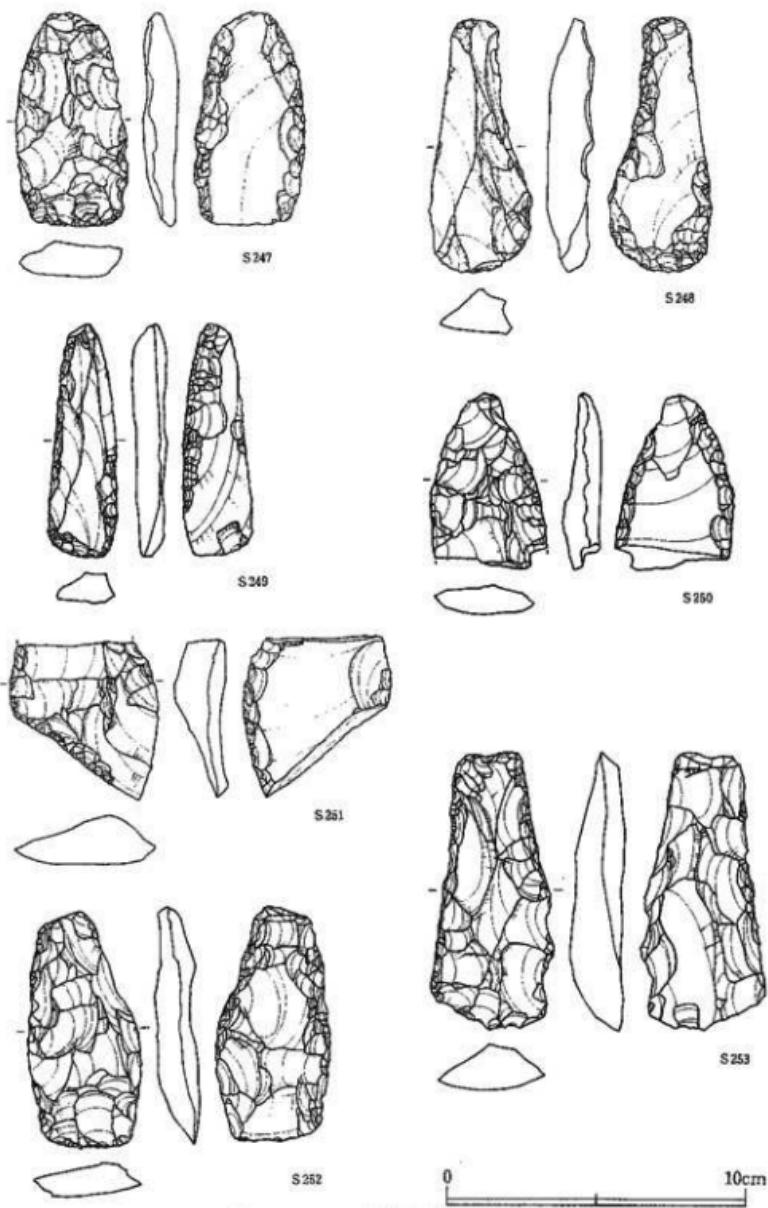
第97図 C区遺構外出土石器 (6)



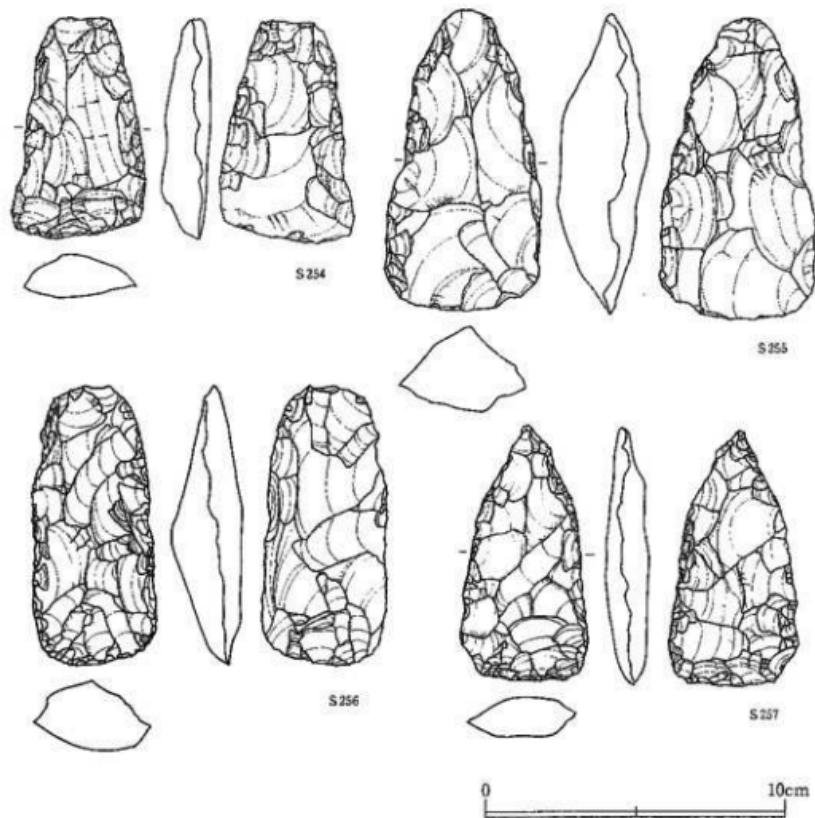
第98図 C区遺構外出土石器(7)



第99図 C区遺構外出土石器 (8)



第100図 C区遺構外出土石器（9）



第101図 C区遺構外出土石器 (10)

石器番号	捕送番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重証(g)	石質
S 41	38	S 12022	石盤	96.5	42.5	17.5	50.1	頁岩
S 42	38	S 12022	石鋸	62.5	27.0	18.0	22.0	頁岩
S 43	38	S 12022	石匙	34.0	26.5	6.0	4.1	頁岩
S 44	38	S 12022	石鋸	28.0	51.5	16.0	18.5	頁岩
S 45	38	S 12022	石鋸	30.5	26.0	6.0	1.6	頁岩
S 46	38	S 12022	石鋸	44.5	115.5	18.0	67.8	頁岩
S 47	38	S 12022	石鋸	74.5	65.0	13.0	46.7	頁岩
S 48	38	S 12022	剥片	42.0	47.0	10.0	11.1	頁岩
S 49	40	S 12060	石鍛	25.0	16.0	3.0	1.2	頁岩
S 50	40	S 12060	石鍛	22.0	14.0	3.0	0.9	頁岩
S 51	40	S 12060	石鍛	26.5	17.0	5.0	1.6	頁岩
S 52	40	S 12060	石鍛	37.0	18.0	6.0	3.0	頁岩
S 53	40	S 12060	石匙	64.0	40.0	11.0	14.8	頁岩
S 54	40	S 12060	石匙	71.5	31.0	8.0	13.1	頁岩
S 55	40	S 12060	石匙	75.0	45.0	22.0	68.9	安山岩
S 56	40	S 12060	石匙	89.5	27.5	16.0	34.1	頁岩
S 57	40	S 12060	石匙	86.5	37.5	16.0	52.1	頁岩
S 58	40	S 12060	石匙	59.0	47.5	17.0	36.1	頁岩
S 59	41	S 12060	楔形石器	22.5	34.5	11.5	7.9	頁岩
S 60	41	S 12060	石鋸	73.0	52.0	20.0	91.4	凝灰岩
S 61	41	S 12060	石鋸	57.0	61.0	17.0	40.1	頁岩
S 62	41	S 12060	石鋸	118.0	90.0	25.5	247.6	頁岩
S 63	44	S 12074	石槍	107.5	27.5	14.0	37.3	頁岩
S 64	44	S 12074	石匙	59.5	69.0	10.0	15.3	頁岩
S 65	44	S 12074	石匙	74.6	34.0	17.0	35.6	頁岩
S 66	44	S 12074	石匙	53.5	(52.5)	6.0	10.1	頁岩
S 67	45	S 12074	剥片	42.5	50.5	14.5	23.9	頁岩
S 68	45	S 12074	剥片	30.0	15.0	7.0	2.7	頁岩
S 69	45	S 12074	石器	60.5	55.0	15.5	42.7	頁岩
S 70	45	S 12074	石器	37.5	33.0	9.0	10.7	頁岩
S 71	45	S 12074	石器	78.0	49.5	17.0	57.6	頁岩
S 72	45	S 12074	石匙	89.0	53.0	19.0	66.5	頁岩
S 73	45	S 12074	剥片	51.5	64.0	12.0	23.0	頁岩
S 74	46	S 12074	石器	75.0	51.0	16.0	40.8	頁岩
S 75	46	S 12074	剥片	73.5	47.5	15.0	50.1	頁岩
S 76	46	S 12074	刮削器	82.5	71.5	23.0	104.1	頁岩
S 77	46	S 12074	刮削器	112.0	76.0	39.0	286.7	頁岩
S 78	47	S 12074	刮削器	119.0	71.0	32.0	168.7	頁岩
S 79	47	S 12074	刮削器	123.0	78.5	36.0	362.6	頁岩
S 80	48	S 12074	磨製石斧	107.5	34.0	16.0	98.3	砂砾岩
S 81	48	S 12074	石劍?	157.0	27.5	12.0	63.1	粘板岩
S 82	48	S 12074	磨石	159.0	38.5	70.5	584.1	安山岩
S 83	48	S 12074	磨石	150.0	51.5	63.0	647.8	安山岩
S 84	48	S 12074	磨石	164.5	47.0	67.5	755.8	安山岩
S 85	53	S 12075	石匙	22.0	15.0	3.5	0.9	頁岩
S 86	53	S 12075	石鍛	27.0	15.5	4.5	1.3	頁岩
S 87	53	S 12075	石鍛	45.5	16.0	5.0	3.4	頁岩
S 88	53	S 12075	石槍	80.5	29.0	9.5	18.1	頁岩
S 89	53	S 12075	石匙	55.5	39.0	6.0	9.6	頁岩
S 90	53	S 12075	石匙	88.0	46.5	25.0	75.7	頁岩
S 91	53	S 12075	石匙	72.0	40.5	15.5	32.0	頁岩
S 92	53	S 12075	石匙	73.5	29.5	15.0	35.9	頁岩
S 93	53	S 12075	石匙	94.5	54.5	19.5	91.5	頁岩
S 94	53	S 12075	石槍	60.5	31.0	16.5	23.8	頁岩
S 95	54	S 12075	石匙?	(32.5)	(61.0)	(14.0)	21.9	頁岩

第4表 C区石器觀察表(1)

## 第5章 C区の調査の記録

石器番号	標図番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質
S 96	54	SI2075	削器	67.5	37.0	13.0	15.9	頁岩
S 97	54	SI2075	剥片	69.0	61.0	22.0	67.9	頁岩 使用痕
S 98	54	SI2075	剥片	59.5	56.0	12.5	23.8	頁岩 使用痕
S 99	54	SI2075	削器	107.0	49.0	20.0	72.4	頁岩
S 100	54	SI2075	石核	102.5	57.0	48.5	208.3	頁岩
S 101	54	SI2075	削器	79.5	38.0	20.0	27.8	頁岩
S 102	56	SK2001	削器	61.0	31.5	10.5	14.3	頁岩
S 103	56	SK2001	剥片	86.5	49.0	16.0	57.4	頁岩 二次調整
S 104	56	SK2001	削器	55.5	44.5	8.5	18.6	頁岩
S 105	56	SK2001	剥片	88.0	44.0	22.0	55.3	頁岩 使用痕
S 106	56	SK2001	剥片	80.0	71.0	17.0	87.3	頁岩 使用痕
S 107	57	SK2003	剥片	63.0	36.5	10.0	11.9	頁岩 使用痕
S 108	57	SK2003	剥片	68.0	55.0	21.2	66.9	頁岩 使用痕
S 109	57	SK2004	剥片	27.0	48.0	12.0	13.4	頁岩 使用痕
S 110	57	SK2004	石匙	65.5	29.0	11.0	11.4	頁岩
S 111	57	SK2005	石匙	72.0	39.0	16.0	45.5	頁岩
S 112	57	SK2005	石匙	109.5	43.0	20.0	70.2	頁岩
S 113	57	SK2005	削器	60.0	37.0	14.0	23.2	頁岩
S 114	59	SK2006	剥片	25.0	34.0	7.0	4.3	頁岩 使用痕
S 115	59	SK2007	石匙	71.5	25.5	13.0	21.5	頁岩
S 116	59	SK2007	石匙	98.5	49.0	25.0	122.2	頁岩
S 117	59	SK2007	搔器	52.0	43.0	15.5	28.7	頁岩
S 118	59	SK2007	剥片	58.0	40.0	9.0	15.8	頁岩 使用痕
S 119	59	SK2007	剥片	48.0	53.0	22.0	38.5	頁岩 使用痕
S 120	61	SK2009	剥片	21.0	29.0	8.5	4.1	頁岩 二次調整
S 121	61	SK2015	搔器	45.0	35.0	7.0	10.2	頁岩
S 122	61	SK2016	剥片	45.5	60.5	23.5	45.7	頁岩 二次調整
S 123	61	SK2015	搔器	53.5	35.0	12.0	22.1	頁岩
S 124	61	SK2015	剥片	31.0	37.0	9.0	6.6	頁岩 使用痕
S 125	61	SK2016	削器	51.0	30.0	12.0	14.2	頁岩
S 126	61	SK2016	剥片	25.5	45.0	8.0	5.1	頁岩 使用痕
S 127	61	SK2015	剥片	42.0	67.0	14.5	32.0	頁岩 二次調整
S 128	64	SK2020	石匙	71.0	39.5	16.0	36.5	頁岩
S 129	64	SK2020	石鍬	46.0	21.5	6.0	3.0	頁岩
S 130	64	SK2025	剥片	31.0	55.5	10.5	11.2	頁岩 使用痕
S 131	64	SK2025	剥片	31.0	44.5	8.5	12.2	頁岩 二次調整
S 132	64	SK2025	剥片	52.0	37.0	15.0	23.7	頁岩 使用痕
S 133	65	SK2007	両面調整	178.0	105.0	33.5	514.0	頁岩
S 134	65	SK2028	石匙	56.5	46.5	21.0	51.8	頁岩
S 135	65	SK2030	石鍬	24.0	17.0	4.0	1.8	頁岩
S 136	65	SK2030	搔器	36.0	22.5	9.0	4.6	頁岩
S 137	67	SK2030	石核	76.0	61.5	48.0	230.1	頁岩
S 138	67	SK2041	搔器	31.0	24.0	5.0	2.8	頁岩
S 139	67	SK2041	石匙	68.0	35.0	15.0	32.5	頁岩
S 140	67	SK2041	剥片	51.0	47.5	10.5	16.2	頁岩 使用痕
S 141	67	SK2043	搔器	22.0	23.0	8.5	3.1	頁岩
S 142	70	SK2057	石匙	59.0	47.0	19.0	66.8	頁岩
S 143	70	SK2063	石匙	48.0	32.0	15.5	25.9	頁岩
S 144	70	SK2063	搔器	68.5	27.5	8.5	8.4	頁岩
S 145	70	SK2063	石核	129.5	50.0	59.5	265.6	頁岩
S 146	70	SK2063	搔器	49.0	54.5	11.0	17.4	頁岩
S 147	74	SK2064	剥片	60.0	62.5	15.0	45.5	頁岩 二次調整
S 148	74	SK2073	石匙	97.0	46.0	16.0	56.3	頁岩
S 149	74	SN2091	回石	121.0	73.5	50.5	564.8	安山岩
S 150	74	SK2092	回石	182.0	86.5	42.5	754.9	凝灰岩

第5表 C区石器観察表(2)

石器番号	部品番号	出土地区	器種	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	石質
S 151	76	SK2092	石 路	106.5	53.5	38.5	165.3	頁岩
S 152	76	SK2092	削 磨	63.5	61.5	15.0	52.9	頁岩
S 153	76	SK2096	石 路	93.0	46.5	20.0	71.8	頁岩
S 154	76	SK2099	削 磨	34.5	57.0	11.5	27.5	頁岩
S 155	78	SK2045	剥 片	73.0	72.5	20.0	77.0	頁岩
S 156	79	SK2045	面調整	66.0	80.0	31.0	203.1	頁岩
S 157	80	SXQ2055	石 路	111.1	48.5	22.0	104.6	頁岩
S 158	80	SXQ2055	石 路	106.0	44.0	21.5	115.4	頁岩
S 159	80	SXQ2055	石 路	110.0	43.0	22.0	99.8	頁岩
S 160	80	SXQ2055	石 路	92.0	43.0	19.5	78.4	頁岩
S 161	80	SXQ2055	剥 片	35.0	28.0	10.0	4.4	頁岩
S 162	80	SXQ2055	剥 片	35.5	29.5	9.0	9.3	頁岩
S 163	81	SXQ2066	削 磨	93.0	68.0	23.0	99.3	頁岩
S 164	81	SXQ2077	剥 片	57.5	47.0	16.0	29.6	頁岩
S 165	81	SXQ2077	石 槌	57.0	95.5	25.5	105.7	頁岩
S 166	82	SXQ2094	石 鏊	55.0	50.5	18.5	53.4	頁岩
S 167	82	SXQ2094	石 鏊	115.0	55.0	28.0	202.3	頁岩
S 168	83	SXQ2095	石 鏊	81.5	57.5	22.5	103.3	頁岩
S 169	83	SXQ2095	石 鏊	71.5	46.0	18.5	49.2	頁岩
S 170	83	SXQ2095	石 鏊	130.5	52.5	27.0	146.3	頁岩
S 171	83	SN2032	掃 罩	54.5	28.0	12.0	87.7	頁岩
S 172	85	SN2031	削 磨	112.5	40.0	31.0	86.4	頁岩
S 173	85	SN2032	削 磨	70.5	44.0	13.0	20.3	頁岩
S 174	85	SN2032	燕尾形石製品	142.0	45.0	19.0	193.1	頁岩
S 175	86	SN2032	剥 片	30.5	43.5	9.0	8.0	頁岩
S 176	92	NE89	石 鏊	29.0	12.0	3.5	1.4	頁岩
S 177	92	NH90	石 鏊	23.0	17.0	3.5	1.1	頁岩
S 178	92	NF92	石 鏊	22.0	21.5	2.0	1.5	頁岩
S 179	92	NG97	石 鏊	23.0	12.0	2.5	6.0	頁岩
S 180	92	NG92	石 鏊	31.0	14.0	5.0	1.7	頁岩
S 181	92	NH93	石 鏊	30.0	15.0	5.0	2.0	頁岩
S 182	92	NG86	石 槌	132.0	42.0	13.0	71.4	頁岩
S 183	92	NP91	石 槌	138.0	27.5	11.5	36.5	頁岩
S 184	92	NG91	石 槌	68.0	25.0	9.5	14.3	頁岩
S 185	92	NG92	石 槌	69.5	24.5	11.0	15.8	頁岩
S 186	92	NB85	石 槌	100.0	37.0	17.0	44.9	頁岩
S 187	92	NK92	石 槌	68.0	26.0	13.8	29.4	頁岩
S 188	93	NF92	石 槌	100.0	28.0	20.0	45.7	頁岩
S 189	93	NC81	石 槌	48.0	23.0	10.0	8.1	頁岩
S 190	93	NP74	石 槌	74.0	23.0	11.0	14.3	頁岩
S 191	93	MST6	石 槌	60.0	30.0	9.0	13.8	頁岩
S 192	93	-	石 槌	67.0	62.0	16.0	55.2	頁岩
S 193	93	NE88	石 槌	51.8	39.0	11.7	14.7	頁岩
S 194	93	MNT2	石 槌	49.0	35.0	6.5	11.7	頁岩
S 195	93	MRT3	石 槌	68.0	48.0	13.0	32.3	頁岩
S 196	93	MQ70	石 槌	43.0	32.0	9.0	9.4	頁岩
S 197	93	MO71	石 槌	36.0	26.0	6.0	6.4	頁岩
S 198	93	NE84	石 槌	47.0	29.5	6.0	9.2	頁岩
S 199	94	NF83	石 槌	41.5	28.0	6.0	7.1	頁岩
S 200	94	MPT2	石 槌	40.5	20.5	5.0	6.6	頁岩
S 201	94	MNT2	石 槌	53.0	35.5	8.0	14.4	頁岩
S 202	94	MPT1	石 槌	44.0	28.0	5.5	6.0	頁岩
S 203	94	NF91	石 槌	97.0	14.0	7.0	8.3	頁岩
S 204	94	MQ70	石 槌	40.0	30.0	6.0	6.2	頁岩
S 205	94	MNT2	石 槌	41.0	33.0	6.5	8.7	頁岩

第6表 C区石器觀察表(3)

## 第5章 C区の調査の記録

石器番号	採取番号	出土地区	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質
S 206	94	NF87	石匙	61.5	24.0	5.0	6.0	頁岩
S 207	94	NE86	石匙	66.0	24.0	5.0	7.5	頁岩
S 208	94	NE83	石匙	76.0	20.0	5.5	7.9	頁岩
S 209	94	NG89	石匙	52.0	20.0	4.0	4.0	頁岩
S 210	94	NH91	石匙	79.0	31.5	8.5	17.2	頁岩
S 211	94	NG87	石匙	56.0	36.8	8.0	12.3	頁岩
S 212	95	NG91	石匙	73.0	37.0	8.0	15.7	頁岩
S 213	96	-	石匙	66.5	27.0	6.0	8.6	頁岩
S 214	96	NE93	石匙	74.5	36.0	8.0	16.3	頁岩
S 215	96	NK91	石匙	71.0	43.0	9.5	20.6	頁岩
S 216	95	NH92	石匙	88.0	46.0	12.0	43.7	頁岩
S 217	95	NH88	石匙	66.0	50.0	5.0	16.5	頁岩
S 218	95	ND89	石匙	41.0	54.0	9.0	11.5	頁岩
S 219	95	NJ91	石鏟	61.0	15.0	6.5	5.1	頁岩
S 220	95	NJ86	石鏟	36.0	25.0	4.0	3.4	頁岩
S 221	95	NC89	トランシェ	72.0	51.0	23.0	79.7	頁岩
S 222	96	ML70	トランシェ	77.0	45.0	24.5	79.4	頁岩
S 223	96	-	トランシェ	90.5	45.0	19.5	71.3	頁岩
S 224	96	ND86	石鏟	68.0	27.5	11.0	30.4	頁岩
S 225	96	ND89	石鏟	74.0	37.0	17.0	47.7	頁岩
S 226	96	NF88	石鏟	70.0	44.0	15.0	39.3	頁岩
S 227	96	NC92	石鏟	100.0	43.0	18.0	60.8	頁岩
S 228	96	NH92	石鏟	78.5	41.5	16.0	43.1	頁岩
S 229	96	NE87	石鏟	89.0	45.0	17.0	62.8	頁岩
S 230	97	NH93	石鏟	66.0	39.0	18.0	41.5	頁岩
S 231	97	NP86	石鏟	132.0	80.0	41.0	297.2	頁岩
S 232	97	ND91	石鏟	76.0	41.0	13.5	52.9	頁岩
S 233	97	NL90	石鏟	73.0	34.0	13.0	33.3	頁岩
S 234	98	ND81	石鏟	77.0	34.0	12.0	27.5	頁岩
S 235	98	NL83	石鏟	71.0	33.0	14.0	27.4	頁岩
S 236	98	ND89	石鏟	45.0	28.0	11.0	12.1	頁岩
S 237	98	ND91	石鏟	119.0	49.0	25.0	165.7	頁岩
S 238	98	NE91	石鏟	61.0	27.3	18.0	23.8	頁岩
S 239	98	NH92	石鏟	77.5	33.0	14.0	35.7	頁岩
S 240	98	NF92	石鏟	63.0	35.2	11.0	25.5	頁岩
S 241	99	ND89	石鏟	102.0	55.0	19.0	66.1	頁岩
S 242	99	NE88	石鏟	88.5	21.0	27.5	78.9	頁岩
S 243	99	ML77	石鏟	69.0	41.3	14.5	41.5	頁岩
S 244	99	NB87	石鏟	86.5	42.5	14.5	54.0	頁岩
S 245	99	NG91	石鏟	82.5	44.0	20.5	69.4	頁岩
S 246	99	NG83	石鏟	77.0	38.0	16.0	47.1	頁岩
S 247	100	-	石鏟	71.0	37.0	11.0	36.4	頁岩
S 248	100	NF92	石鏟	84.0	34.0	12.6	31.8	頁岩
S 249	100	NG92	石鏟	77.0	23.0	11.0	20.7	頁岩
S 250	100	NE88	石鏟	58.0	39.0	11.2	23.3	頁岩
S 251	100	NH90	石鏟	53.0	50.0	15.5	31.9	頁岩
S 252	100	NP90	石鏟	92.0	41.3	16.0	56.6	頁岩
S 253	100	NJ92	石鏟	78.0	38.0	13.0	39.3	頁岩
S 254	101	NL82	石鏟	73.0	44.0	14.8	45.5	頁岩
S 255	101	NP81	石鏟	99.0	52.0	27.0	108.7	頁岩
S 256	101	NE93	石鏟	93.5	42.0	23.0	81.8	頁岩
S 257	101	NC90	石鏟	84.3	43.0	13.0	46.1	頁岩

第7表 C区石器観察表(4)

## 第6章 自然科学的分析

## 第1節 年代測定

## 学習院大学放射性炭素年代測定結果

年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\alpha$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\alpha$ 以下のときは、 $3\alpha$ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また、試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が $2\alpha$ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

## 記

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
G a K -17758	炭化材 from 小田V遺跡 S I 05	$4,860 \pm 100$
	N o. 1	2,910 B.C.
G a K -17759	炭化材 from 小田V遺跡 S K 10	$2,410 \pm 90$
	N o. 2	460 B.C.
G a K -17760	炭化材 from 小田V遺跡 S K 1026	$2,180 \pm 90$
	N o. 3	230 B.C.
G a K -17761	炭化材 from 小田V遺跡 S I 1032	$2,250 \pm 90$
	N o. 4	300 B.C.
G a K -17762	炭化材 from 小田V遺跡 S K 1034	$7,260 \pm 120$
	N o. 5	5,310 B.C.
G a K -17764	炭化材 from 小田V遺跡 S K 2005	$7,180 \pm 110$
	N o. 7	5,230 B.C.
G a K -17765	炭化材 from 小田V遺跡 S K 2006	$6,470 \pm 110$
	N o. 8	4,520 B.C.
G a K -17766	炭化材 from 小田V遺跡 S K 2007	$4,860 \pm 100$
	N o. 9	2,910 B.C.
G a K -17767	炭化材 from 小田V遺跡 S K 2009	$4,100 \pm 90$

	N o.10	2,150 B.C.
G a K -17768	炭化材 from 小田V遺跡 S K 2041	3,840±90
	N o.11	1,890 B.C.
G a K -17771	炭化材 from 小田V遺跡 S I 2060	5,020±120
	N o.14	3,070 B.C.
G a K -17773	炭化材 from 小田V遺跡 S I 2075	5,070±120
	N o.16	3,120 B.C.
G a K -17775	炭化材 from 小田V遺跡 S X Q 2095	7,650±130
	N o.18	5,700 B.C.
G a K -17777	炭化材 from 小田V遺跡 S K 2100	2,170±80
	N o.20	220 B.C.

## 第2節 層序対比・種実同定・炭化材の樹種

### 1 はじめに

小田V遺跡は、横手川左岸の低位段丘上に立地する。これまでの発掘調査により、縄文時代前期～晩期の竪穴住居跡や土坑などが検出されており、それに伴う自然科学分析調査も行われてきた。

今回の自然科学分析調査では、造構構築面や段丘形成の年代を知ることを目的とし、遺跡の基本層序の確立を行う。そのために重鉱物分析および火山ガラス比分析を行う。火山ガラス比分析では、土壤中に混交する指標テフラ由来の細粒の火山ガラスの座状を調べることにより、その降灰層準を推定する。また、重鉱物分析では重鉱物組成の層位的変化を調べる。重鉱物分析は南関東の武藏野台地の立川ローム層では対比資料が比較的多いため、とくに有効な手段となっている。本遺跡周辺では対比資料は少ないが、今後の周辺地域における層序対比のための基礎資料とすることができる。

また、当時の植物利用に関する情報を得るために、性格不明造構、焼土造構、造構外より出土した炭化種実の種類同定、木材の用材選択に関する情報を得るために、竪穴住居跡および土坑から出土した炭化材の樹種同定を行う。

### 2 層序対比

#### (1) 試料

NG89グリッド基本層序の地層断面が作成され、上位から I a 層・I b 層・II 層・III 層・IV

層に分層されている。分層時の観察では、I a層・I b層は暗褐色～褐色の砂混じりシルト、II層・III層は明褐色の粘土または砂混じり粘土、IV層は浅黄橙色砂混じり粘土である。また、III層下部以下には白色の粘土粒子が含まれる。この中で、I a層・I b層は黒色火山灰土層(いわゆる黒ボク土層)、II層～III層上部は褐色火山灰土層(いわゆるローム層)と考えられる。

試料はI a層から試料番号①②、I b層から試料番号③④、II層から試料番号⑤～⑧、III層から試料番号⑨⑩、IV層から試料番号⑪が採取されている。以上の試料、合計11点の重鉱物分析および火山ガラス比分析を行う。

### (2)方法

#### ①重鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステート(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黑色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

#### ②火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の碎屑物を250粒を計数し、碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉱物にいれ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

### (3)結果

#### ①重鉱物分析

斜方輝石と単斜輝石の両輝石は、試料番号③に量比の極大層準が認められる。角閃石は、いずれの試料にも少量しか含まれず、やや不明瞭であるが試料番号⑤に極大層準が認められる。カンラン石は、試料番号①・⑨に少量、②・⑦に微量含まれるのみである。

#### ②火山ガラス比分析

試料番号④では、軽石型火山ガラスの濃集が認められる。本遺跡の地理的な位置およびその産出層準と形態からこの軽石型火山ガラスは、十和田八戸テフラ(Tō-H P: Hayakawa, 1985)に由来する可能性が高い。Tō-H Pは十和田カルデラを起源とし、降灰年代は約1.2～1.3万年前と考えられている(町田・新井, 1992)。一般に、土壤中に特定のテフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い(早津, 1988)。これに従えば、

本地点におけるTō-HPの降灰層準は、試料番号④の採取層準付近と考えられる。

また、試料番号①～③の軽石型火山ガラスの中には、下位のTō-HPに由来する火山ガラスの上位への拡散のほか、十和田中微軽石(Tō-Cu:町田ほか,1984)、十和田aテフラ(Tō-a: Hayakawa,1985)、白頭山苦小牧テフラ(B-Tm:町田ほか,1981)などに由来するものも混在する可能性がある。さらに試料番号①および③では、やや厚手のバブル型火山ガラスや中間型火山ガラスが下位よりもやや多い。火山ガラスはほとんどが無色透明であるが、褐色を呈するものも微量認められる。これらはTō-aやB-Tmに由来する可能性がある。Tō-CuおよびTō-aは十和田カルデラを給源とし、Tō-Cuの降灰年代は約5,500年前、Tō-aの降灰年代はA.D.915年と考えられている(町田・新井,1992)。また、B-Tmは白頭火山を給源とし、降灰年代は約800～900年前と考えられている(町田・新井,1992)。しかし、本分析の産状は拡散しており、これらのテフラの降灰層準は推定できない。

試 料 番 号	カ ン ラ ン	斜 方 輝 石	單 斜 輝 石	角 閃 輝 石	不 透 明 物	そ の 他	重 鉱 物 同 定 粒 数	バ ブル 型 火 山 ガ ラ ス	中 間 型 火 山 ガ ラ ス	軽 石 型 火 山 ガ ラ ス	そ の 他	軽 鉱 物 同 定 粒 数
1	24	122	35	14	17	38	250	10	11	17	212	250
2	3	126	34	9	16	62	250	7	3	33	207	250
3	0	133	37	10	18	52	250	14	13	17	206	250
4	0	118	44	18	15	55	250	9	3	83	155	250
5	0	88	25	32	16	89	250	3	4	5	238	250
6	0	102	17	14	37	80	250	8	6	5	231	250
7	6	88	22	22	27	85	250	1	10	2	237	250
8	2	93	19	18	26	92	250	0	2	0	248	250
9	22	98	16	15	27	72	250	1	0	0	249	250
10	1	107	14	19	24	85	250	0	0	0	250	250
11	2	89	7	12	31	109	250	0	0	0	250	250

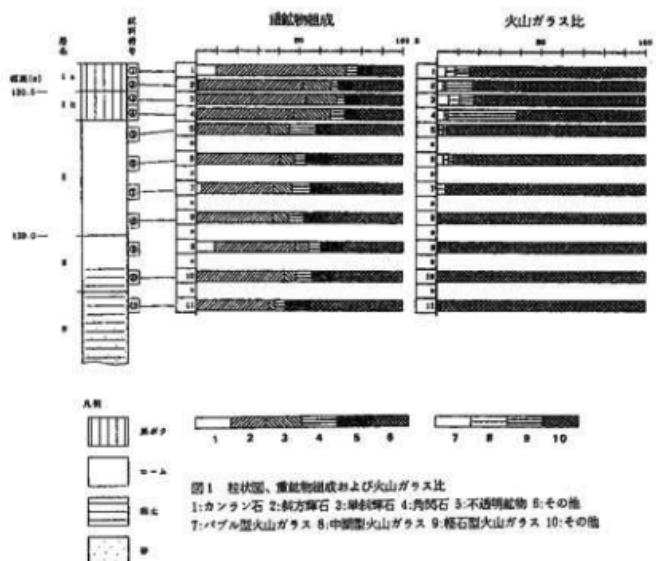
第8表 重鉱物および火山ガラス比分析結果

## (4) 考察

重鉱物分析の結果から、試料番号③のIb層上部の両輝石の極大、試料番号⑤のII層上部の角閃石の極大は、いずれも層序対比の指標になりうる。当社による本遺跡周辺の分析例により、両輝石の極大はTō-HPの降灰層準にはほぼ一致し、本遺跡においても同様の結果となつて

る。これは、TO-HPが斑晶鉱物として両輝石を最も多く包有することに由来すると考えられる。

火山ガラス比分析の結果から、TO-HPの降灰層準はI b層下部付近と推定された。したがって、本遺跡が立地する段丘は新しくても約1.2~1.3万年前以前に形成されたと考えられる。



第102図 柱状図、重鉱物組成および火山ガラス比

また、今回の分析では姶良Tn火山灰(AT;町田・新井, 1976)に由来すると考えられる火山ガラスの降灰層準は認められなかった。ATは、鹿児島県の姶良カルデラを給源とする広域テフラで、降灰年代は約2.1~2.5万年前と考えられている(町田・新井, 1992)。東北地方においても宮城県鳴子町、青森県八戸市や木造町出来島などで確認されている(町田・新井, 1992)が、検出例は少ない。今回の分析結果からは、本遺跡の立地する段丘の形成年代がAT降灰以前か以降かはわからない。

ところでローム層(ここではいわゆる関東ローム層のような細粒の火山碎屑物を母材とする土壌をさるものとして用いる)の成因については、従来は小噴火による降下火山灰の累積したもの(たとえば町田(1964)など)とする説が主に支持されてきた。しかし、最近では、いったん堆積した火山灰が風によって移動させられて累積したものとする説が主張されるようになって

きた。この説は、中村(1970)により提示され、早川(1986)、早川・由井(1989)、早川(1990)などにおいて火山学および火山灰編年学上の種々の観察事実を根拠として述べられている。当社では、これらの文献において展開されている論拠から、この説がかなり有力であると考える。この説に従えば、ローム層も黒ボク土層も火山の噴火とは関係なく常に降りつもる風塵によって形成されたことになる。早川・由井(1989)に示されたその堆積速度の平均は約0.07mm／年程度であるから、ローム層が形成される過程をより短時間で捉えれば、地表面に降下した風塵が、そのまま落ちつくことはなく、風や降雨による再移動を繰り返したものと考えられる。また、その鉱物組成には、周辺火山の噴出物の鉱物組成が反映されており、それは地域的・年代的に類似すると考えられる。したがって、重鉱物組成による層序対比が有効となる。

今後、本地域において資料を蓄積することによって、より詳細な層序対比が可能になると考えられる。

### 3 種実同定

#### (1) 試料

試料は性格不明遺構、焼土遺構、遺構外より出土した試料番号①～③の炭化種実である。試料の一覧は結果とともに第9表に示す。

#### (2) 方法

試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察して種類の同定を行う。

#### (3) 結果

同定結果を第9表に示す。出土した炭化種子はオニグルミ属、クリ、マメ科の3種類に同定された。また、各試料には種類が特定できない破片(不明破片)が多数認められたが、それは試料番号①がオニグルミ、試料番号②③がクリの破片である可能性が高い。以下に各種類の形態学的特徴を記載する。

試料名	地 点	種類：部位(個数)
① 性格不明遺構SX2049埋土中	オニグルミ：核(破片48)、不明破片多数	
② 焼土遺構SN2069埋土中	クリ：子葉(破片89)、マメ科：種子(完形8・破片2)、不明破片多数	
③ NF88グリッド	クリ：子葉(完形1・破片118)、マメ科：種子(完形122)、不明破片多数	

第9表 出土種実同定結果

・オニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana*(Maxim.)Kitamura)  
クルミ科クルミ属

縫合線からほぼ半分に割れた核および破片が検出された。褐灰色。縦軸20.6mm、横軸18mm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は本来は

尖る。ただし、本試料では保存が悪く不明。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走るが保存が悪いため不明瞭である。内側には子葉が入っていた2つのくぼみがある。破片は表面が荒いしわ状となり、内側に子葉が入っていたくぼみが認められる。

・クリ(*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

子葉が検出された。大きさは縦軸18mm、横軸18mm程度。表面は荒いしわ状の模様が存在する。また、果皮が一部残っているものも認められた。

・マメ科(Leguminosae sp.) マメ科

種子が検出された。大きさ縦軸5.4mm、横軸3.7mm程度。橢円形。片側の面に線状のへそがある。

(4) 考察

試料番号①～③から出土した炭化種実はオニグルミ、クリ、マメ科の3種類に同定された。このうちオニグルミとクリは可食植物である。両種は堅果類の中でも「あくぬき」等の処理が不要な種類に区分され、日本各地の縄文時代の遺跡から出土報告がある(渡辺, 1975)。また、両種は冷温帯に属する本地域において容易に入手できたことが推定され、遺構内より集中して産出していることを考慮すると、当時も食用とされていたことが推定される。さらに、SX2049から検出されたオニグルミが全て破片であったことは、食用として利用された後に破棄されたことを示唆する。これは、検出された種実遺体が一括破棄されたものと考えられていることも調和的である。また、試料番号③で多産したマメ科もその仲間に食用となる種を含むが、種を特定することができないため食用として利用されたものか判断がつかない。ただし、多量に出土していることからみて人間の生業活動との関係は考えられる。

## 4 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、竪穴住居跡(SII05)の床面から検出された2点(試料番号①・②)と、2基の土坑(SK1026, SK2006)の埋土中から採取された炭化材2点(試料番号③・④)である。また、種実遺体の試料中に含まれていた1点(NP88グリッド)についても樹種同定を実施する。

炭化材は、住居跡から検出された2点が住居構築材と考えられ、土坑埋土中および種実遺体試料中から採取された4点については用途等の詳細は不明である。

(2) 方法

試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の剖断面を作製し、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

## (3)結果

同定結果を第10表に示す。炭化材は、試料番号①・②・④の3点がコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種に、試料番号③がカエデ属の一種に同定された。また、種実遺体試料(NF88グリット)から検出された炭化材はクリに同定された。

各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、主として「原色日本植物図鑑 木本編<I・II>」(北村・田代, 1971, 1979)に従い、一般的な性質などについては「木の辞典 第1巻~第17巻」(平井, 1979-1982)も参考にした。

番号	試料名	時代	用途	樹種名
①	豎穴住居跡S I 05床面	縄文時代中期後半	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
②	豎穴住居跡S I 05床面	縄文時代中期後半	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
③	土坑SK1026埋土中	縄文時代後期中葉		カエデ属の一種
④	土坑SK1026埋土中	縄文時代後期中葉		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
	NF88グリット			クリ

第10表 樹種同定結果

- コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種(*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus* sp.)

ブナ科

環孔材で孔圈部は1~2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。導管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ(*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.)とその変種ミズナラ(*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson)、コナラ(*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ(*Q. aliena* Blume)、カシワ(*Q. dentata* Thunberg)といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州(丹波地方以北)に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。

コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ(*Q. acutissima* Carruthers)に次ぐ優良材である。

- クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

環孔材で孔圈部は1~4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。導管は単穿孔を有し、壁孔は交互に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。

材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材などの用途が知られている。

・カエデ属の一種(*Acer* sp.) カエデ科

散孔材で、導管は単独および2~3個が複合し、晚材部へ向かって管径を漸減させる。導管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~30細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が、木口面において不規則な紋様をなす。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属には、イタヤカエデ(*Acer mono* Maxim. subsp. *marmoratum* (Nicholson) Kitamura)やイロハモミジ(*A. palmatum* Thunb.)など約25種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木~低木である。一般に材はやや重硬・強靭で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。

(4) 考察

住居構築材と考えられる2点は、いずれもコナラ節であった。コナラ節の木材は強度が高く、住居構築材として適した木材と考えられる。遺跡からの出土例も多く、日本各地で住居構築材として利用されていたことが推定される。本遺跡周辺では、小田IV遺跡、上谷地遺跡、虫内I遺跡で縄文時代の住居構築材の樹種同定が行われている。これらの結果ではクリが多くを占め、他にオニグルミ、ニレ属が確認されている。今回同定されたコナラ節は、虫内I遺跡で縄文時代早期の住居構築材に1点認められたのみである。

虫内I遺跡の竪穴住居跡SI4054(縄文時代早期)の結果を見ると、3本の柱穴から得られた炭化材は全て樹種が異なっている。このことは、構築材の木材に特定の樹種が選択されていたのではなく、条件さえ満たしていれば樹種に関係なく構築材として利用していたことを示唆する。その条件とは、住居構築材として適当な強度を有すること、大きさ(長さ、径)・形状が適当であること等であったと考えられる。本遺跡の結果も、とくにコナラ節が選択されたのではなく、周辺にコナラ節が生育しており、それを構築材として利用した結果と考えられる。

<引用文献>

- 早川由起夫(1986) 火山灰土の成因と堆積速度. 1986年度春季大会日本火山学会講演予稿集,p.34.
- 早川由起夫(1990) 堆積物から知る過去の火山噴火. 火山第2集,34,火山学の基本研究特集号,p.S121-S130.
- Hayakawa,Y.(1985) Pyroclastic Geology of Towada Volcano.Bull.Earthq.Res.Lnse.,Univ.Tokyo,60,507-592.

- 早川由起夫・由井将雄(1989) 草津白根火山の噴火史. 第四紀研究, 28, p.1-17.
- 早津憲治(1988) テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー A.T.にまつわる議論に関する一考察. 考古学研究, 34, p.18-32.
- 平井信二(1979-1982) 木の事典 第1巻～第17巻. かなえ書房.
- 北村四郎・村田 源(1971, 1979) 原色日本植物図鑑 木本編<1+2>, 453p., 545p.. 保育社.
- 町田 洋(1964) Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史－第四紀末期について－(その1)(その2). 地学雑誌, 73, p.293-308, 337-350.
- 町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰－蛤良Tn火山灰の発見とその意義－. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス, 276p.. 東京大学出版会.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981) 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p.562-569.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984) テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－. 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 中村一明(1970) ローム層の堆積と噴火活動. 軽石学雑誌, 3, p.1-7.
- 渡辺 誠(1975) 開文時代の植物食. 雄山閣.

### 第3節 脂肪酸分析

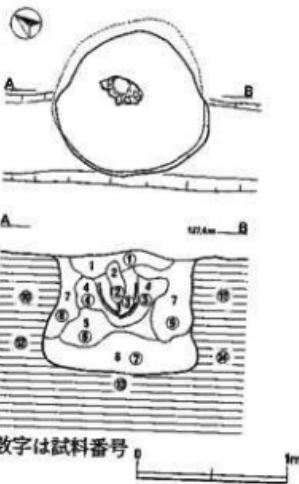
帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子、菅原利佳、長田正宏

#### 1 はじめに

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質(炭水化物)および脂質(脂肪・油脂)がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子、約5千年前のハーゼルナッツ種子に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。脂質は有機溶

媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量とともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに伸びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて小田V遺跡から出土した土坑の性格を解明しようとした。秋田県平鹿郡山内村に所在する小田V遺跡は縄文時代後期のものと推定されている。この遺跡の土坑SK1023内外から土壤試料を採取した。土坑の中からは土器も出土している。土坑内外での試料採取地点を第103図に示す。試料No.①は土坑内1層、No.②は2層、No.③は3層、No.④とNo.⑤は4層、No.⑥は5層、No.⑦は6層、No.⑧とNo.⑨は7層、No.⑩とNo.⑪は8層、No.⑫～No.⑭は9層から、それぞれ採取した。



第103図 SK1023試料採取地点

## 2 残存脂肪の抽出

土壤試料168～369gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。残存脂肪の抽出量を第11表に示す。抽出率は0.0027%～0.0560%、平均0.0153%であった。このうち特に土坑外試料No.⑪～No.⑭の抽出率は低かった。この平均抽出率の値は全国各地の遺跡から出土した土壤、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100%より若干高いものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグ

リセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
①	SK1023 1層	240.4	134.7	0.0560
②	SK1023 2層	279.6	93.3	0.0334
③	SK1023 3層	223.2	29.0	0.0130
④	SK1023 4層	344.8	77.2	0.0224
⑤	SK1023 4層	251.3	57.9	0.0230
⑥	SK1023 5層	234.3	26.7	0.0114
⑦	SK1023 6層	368.7	31.3	0.0085
⑧	SK1023 7層	299.8	35.7	0.0119
⑨	SK1023 7層	309.3	36.5	0.0118
⑩	SK1023 8層	167.9	13.7	0.0082
⑪	SK1023 8層	171.6	4.7	0.0027
⑫	SK1023 9層	173.3	5.7	0.0033
⑬	SK1023 9層	196.1	8.3	0.0042
⑭	SK1023 9層	212.0	9.5	0.0045

第11表 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
①	4.62	24.02	0.19
②	4.00	37.74	0.12
③	4.98	34.63	0.14
④	4.07	43.78	0.09
⑤	5.50	23.79	0.23
⑥	4.06	23.14	0.18
⑦	8.93	17.81	0.50
⑧	4.27	35.88	0.12
⑨	3.54	37.96	0.09
⑩	5.70	28.52	0.20
⑪	8.64	21.92	0.39
⑫	4.03	49.42	0.08
⑬	3.87	43.32	0.09
⑭	5.70	33.66	0.17

第12表 土壌試料に分析するコレステロールとシトステロールの割合

### 3 残存脂肪の脂肪酸組成

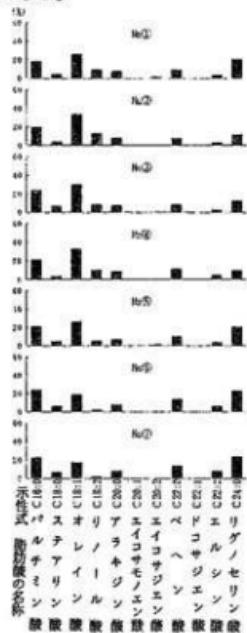
分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中に2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチル化してから、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサン-エーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。

残存脂肪の脂肪酸組成を第104・105図に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0),ステアリン酸(C18:0)オレイン酸(C18:1),リノール酸(C18:2),アラキシン酸(C20:0),エイコサモノエン酸(C20:1),ベヘン酸(C22:0),エルシン酸(C22:0),リグノセリン酸(C24:0)の9種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

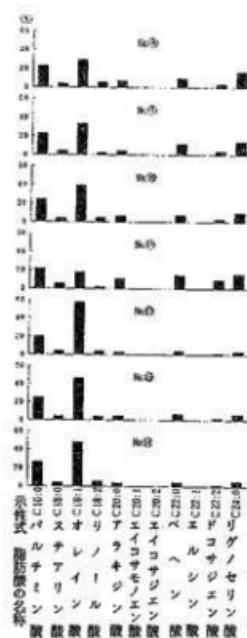
試料中の脂肪酸組成パターンを見てみると、2つのパターンに分かれた。1つは試料Na①～Na⑤, Na⑧～Na⑩, Na⑫～⑯に見られるような、主要な脂肪酸がオレイン酸のもので、他の1つは試料Na⑥, Na⑦, Na⑪に見られるような主要な脂肪酸がパルミチン酸で、全体としては谷状のパターンを示すものである。主要な脂肪酸がオレイン酸の中には、試料Na①～Na⑤, Na⑧～Na⑩のように炭素数20以上の高級脂肪酸が多いものと、試料Na⑫～Na⑯のように高級脂肪酸が少ないものとがあった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するためで、主として植物遺体の土壤化に伴う腐植物から来ていると推定される。また、オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキシン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計含有率が土坑内試料Na①～Na⑨と土坑外試料Na⑩, Na⑪では約24～45%, 土坑外試料Na⑫～Na⑯では約11～18%であった。通常の遺跡出土土壤中でのアラキシン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸3つの合計含有率は約4～10%であるから、試料Na①～Na⑯での高級脂肪酸含有量は非常に多く、Na⑫～Na⑯でのそれはやや多めといえる。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分として含まれている場合がある。以上、小田V遺跡の試料中には土坑内試料Na⑥, Na⑦, 土坑外試料Na⑪を除きオレイン酸が主要な脂肪酸として含まれており、高級脂肪酸は試料①～Na⑯に非常に多く含まれているこ

とがわかった。土坑外試料No.②～No.⑪には高級脂肪酸はあまり含まれてはいなかった。試料No.⑥、No.⑦、No.⑪では主要な脂肪酸はパルミチン酸であり、脂肪酸全体としては谷状のパターンを示していた。谷状のパターンは試料中に動物性脂肪が含まれている場合に見られる典型的なものである。



第104図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



第105図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

#### 4 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ビリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてから、もう一度同じ展開溶媒で精製し、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第106図に示す。残存脂肪から25種類前後のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペスチロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No.⑦とNo.⑪に約9%、

他のすべての試料中に約4~6%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2~6%分布している。従って、試料No.⑦とNo.⑪でのコレステロール含有量はやや多く、他のすべての試料中でのコレステロール含有量は通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであった。植物由来のシトステロールはすべての試料中に約18~49%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはシトステロールは30~40%，もしくはそれ以上に分布している。従って、試料中でのシトステロール含有量は通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みか少なものであった。

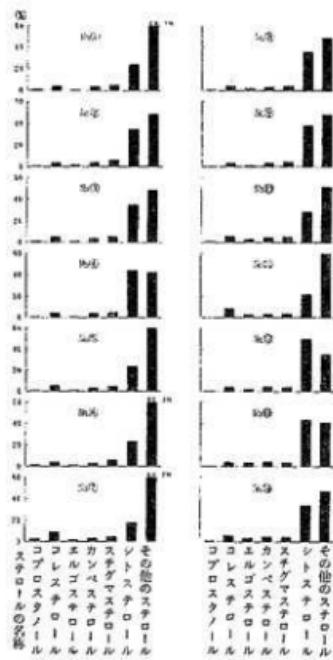
クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペスチロール、スチグマステロールは、すべての試料中にカンペスチロールが約3~5%，スチグマステロールが約4~6%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはカンペスチロール、

スチグマステロールは1~10%分布している。従って、試料中に含まれているカンペスチロール、スチグマステロールは通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みで、植物性ステロール含有量はすべて、通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みか少なものであった。

微生物由来のエルゴステロールはすべての試料中に約0.5~3%分布していたが、これは土壤微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、すべての試料中に約0.5~3%分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壤中には分布していないが、1%程度の量は検出されることがある。従って、全ての試料中でコプロスタノールが多いといえる。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合があるが、今回は含まれていても3%以下の量であるため、それらの判定はできなかった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土坑で0.6以上、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる。試料中のコレステロールとシトステロー



第106図 試料中に残存する脂肪のステロール組成

ルの分布比を第12表に示す。表からわかるように、分布比はすべての試料中で0.6以下であった。しかし、0.6以下ではあっても、試料No⑦とNo⑪の値は0.4～0.5と0.6に近いもので、他の試料の値に比べると高いものであった。分布比から見る限りでは、試料中には動物遺体または動物由来の脂肪が少ないことを示唆しているが、試料No⑦とNo⑪には動物由来の脂肪が残存している可能性もある。また、コレステロールの分布割合から、試料No⑦とNo⑪以外の試料中に多く含まれている高級脂肪酸は植物遺体のワックスに由来するものと推測される。

以上、小田V遺跡の試料中のすべてのステロール類の含有量は動物性コレステロールが土坑内底部試料No⑦と土坑外試料No⑪にやや多いのみで、他はすべて通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比もすべての試料中で0.6以下で、試料中にヒトや動物遺体そのものを直接埋めたことを示す脂肪は少ないことを示唆していた。しかし、試料No⑦とNo⑪は分布比が0.6に近く、動物由来の脂肪が残存している可能性も考えられる。

## 5 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に同じ秋田県内の遺跡で、土器埋設構造や土坑にヒト遺体が直接埋葬されていたと判定した虫内I遺跡、桂の沢遺跡、虫内III遺跡、出土土坑を土壤墓と判定した兵庫県寺田遺跡、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡、ヒトの体脂肪、出土土器にヒトの骨のみを埋納したと判定した秋田県片野I遺跡、出土土壤を再葬墓と判定した宮城県摺荻遺跡、ヒトの骨油、出土土器を胞衣壺と判定した奈良県平城京右京三条二坊十五坪、ヒトの胎盤試料など、各種遺跡試料や現生試料の脂肪酸の類似度とも比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが第107図である。図からわかるように、小田V遺跡の土坑内試料No①～No⑤、No⑧、No⑨は相関行列距離0.1以内でA群を形成し、よく類似していた。土坑外試料No⑩、No⑫～No⑯はヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの骨油試料と共に相関行列距離0.1以内でB群を形成し、よく類似していた。土坑内試料No⑥、No⑦と土坑外試料No⑪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる秋田県内の遺跡の試料と共に相関行列距離0.1以内でC群を形成し、よく類似していた。他の対照試料はD～F群を形成した。これらの群のうちA、B群は相関行列距離0.2以内の所にあり、互いに類似していた。C群はA、B群とは相関行列距離で0.2以上離れており、類似しているとは言いがたい。

以上、小田V遺跡の試料中に残存している脂肪は、土坑内試料No①～No⑤、No⑧、No⑨、土坑外試料No⑩、No⑫～No⑯がヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存する脂肪と

残る土坑内試料No⑥, No⑦と土坑外試料No⑪がヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存する脂肪と、それぞれ類似していることがわかった。A群とB群の試料中のコレステロール量は少なく、コレステロールとシスステロールの分布比も低く、C群のそれは高く、特に試料No⑦でコプロスタノール量が多いことを考慮すると、試料No⑦採取位置付近を中心にヒト遺体が直接埋葬された可能性が高い。同一土坑内で層位によりヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の脂肪とヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の脂肪の両方に類似している結果が得られた理由は不明である。土坑外試料No⑪採取位置付近は多少動物遺体で搅乱されているのかもしれない。

## 6 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。土壤試料の残存脂肪から求めた相関図を第108図に示す。図からわかるように、小田V遺跡の土坑内試料No①～No⑤、No⑧、No⑨は第1象限内の原点に近い位置に分布し、A群を形成した。土坑外試料No⑩、No⑪～No⑭は第2象限から第3象限にかけての位置に分布し、B群を形成した。土坑内試料No⑥、No⑦と土坑外試料No⑪は第1象限内の原点から離れた位置に分布し、C群を形成した。これらの群の分布位置はA群、C群の試料中に残存する脂肪は動物脂肪に由来し、B群の試料中に残存する脂肪は植物腐植土に由来することを示唆している。A群にも多少動物脂肪は分布するが、コレステロールの分布比が低いことを考えると、C群を中心に骨も含めた動物遺体が残存していたと推定される。

## 7 総括

小田V遺跡から出土した土坑の性格を判定するために、土坑内外の土壤試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、土坑内試料No①～No⑤、No⑧、No⑨、土坑外試料No⑩、No⑪～No⑭にはオレイン酸が主要な脂肪酸として分布しており、土坑内試料No⑥、No⑦、土坑外試料No⑪にはパルチミン酸が主要な脂肪酸として分布していることがわかった。高級脂肪酸

は土坑内試料No.①～No.⑨、土坑外試料No.⑩、No.⑪に非常に多く含まれており、土坑外試料No.⑫～No.⑯にはあまり含まれていないこともわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、クラスター分析からは試料中に残存している脂肪は、土坑内試料No.①～No.⑤、No.⑧、No.⑨、土坑外試料No.⑩、No.⑫～No.⑯がヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存する脂肪と、土坑内試料No.⑥、No.⑦と土坑外試料No.⑪がヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。種特異性相関からは、試料中に残存している脂肪が土坑外試料No.⑩、No.⑫～No.⑯以外はすべて動物脂肪に由来し、土坑外試料No.⑪、No.⑫～No.⑯は植物腐植土に由来することがわかった。残存するステロール分析の結果、試料中のすべてのステロール類の含有量は動物性コレステロールが土坑内底部試料No.⑦と土坑外試料No.⑪にやや多いのみで、他はすべて少なめで、通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであることがわかった。また、コレステロールとシトステロールの分布比もすべての試料中で0.6以下で、分布比から見る限りでは、試料中に動物遺体または動物由來の脂肪が少ないことを示唆している。従って、先の脂肪酸分析で多く含まれていた高級脂肪酸は植物体の表面を覆うワックスの構成分由来のものである可能性が強い。しかし、コレステロール量とコレステロールとシトステロールの分布比は試料No.⑦で0.5を示し、試料中で最も高く、また、哺乳動物に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.⑦で約3%分布し試料中で最も多いことから、この位置にヒトを含む動物遺体が埋葬されていたと推定される。同一土坑内で層位によりヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の脂肪と、ヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の脂肪の両方に類似している結果が得られた理由は不明である。土坑外試料No.⑪の採取位置付近も若干動物遺体の脂肪で搅乱されている可能性がある。

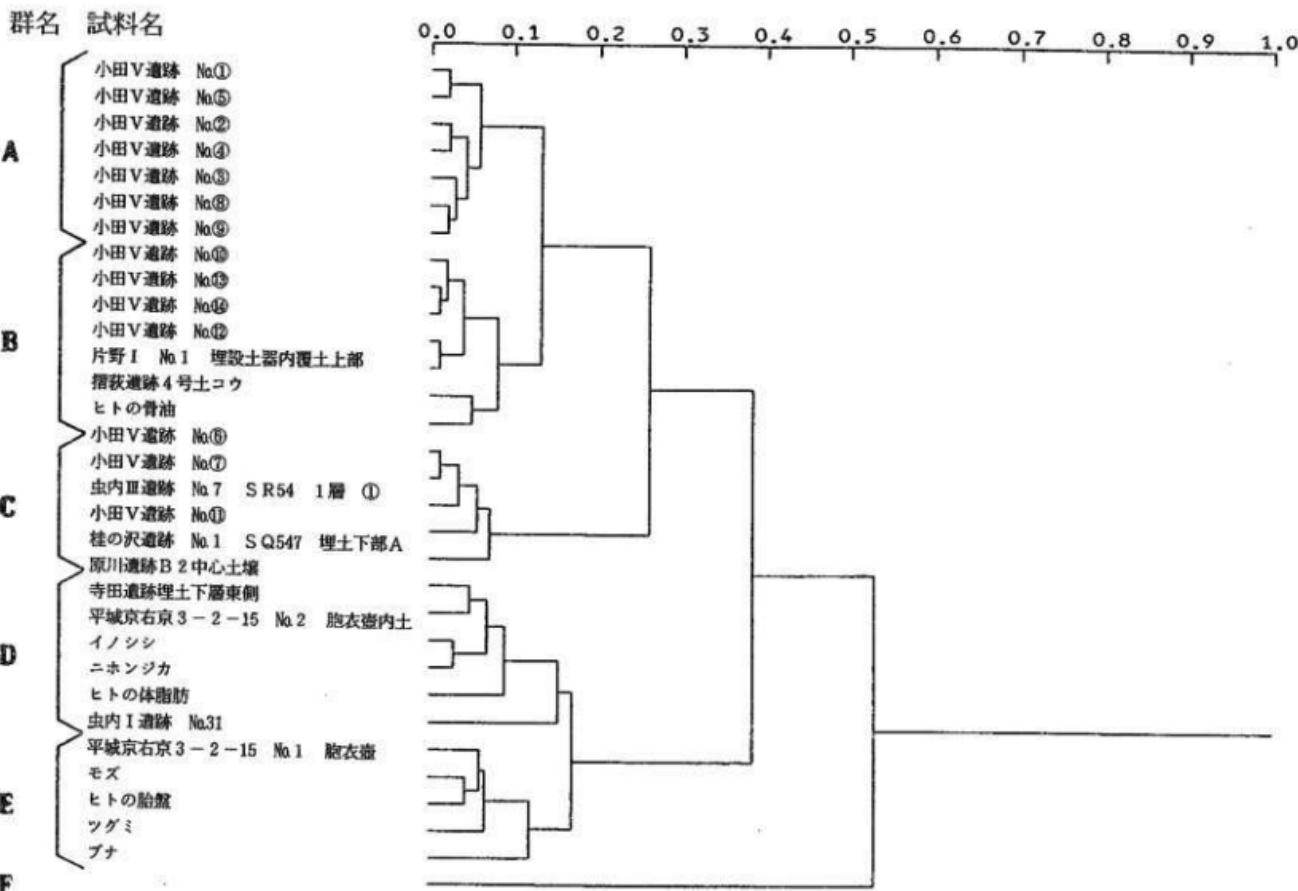
以上の成績から、土坑には試料No.⑦の採取位置付近を中心にヒト遺体を直接埋葬した場合に残る脂肪と、層位によってはヒトの骨のみを埋葬した場合に残る脂肪の両方に類似した脂肪が残存している可能性がある。

#### 〈参考文献〉

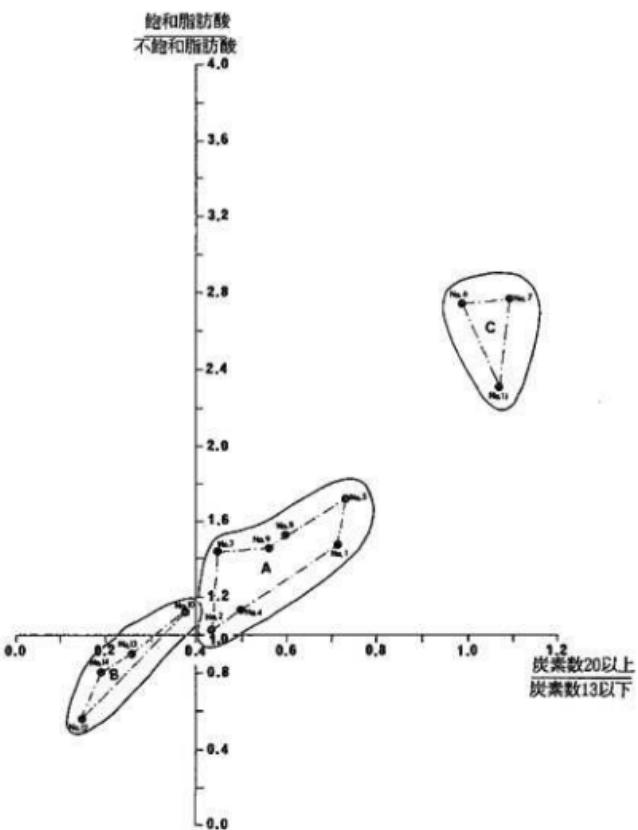
- (1) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle: 「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10巻, 1979, pp260.
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold: 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292巻, 1981, pp146.
- (3) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle: 「Analyse fruhgeschichtlicher Gefa - inhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70巻, 1983, pp33.
- (4) 中野益男: 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻(6), 1984, pp124.

- (5) M.Nakano and W.Fischer: 「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」,『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.Chem.』, 358卷, 1977, pp1439.
- (6) 中野益男: 「残存脂肪酸による古代復元」, 『講演収録集—新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会, 1989, pp114
- (7) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教博, 煙 宏明, 矢吹俊男, 佐原 真, 田中 琢: 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- (8) 中野益男: 「真駒遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真駒遺跡—農村基盤総合設備事業能都東地区真駒工区に係る発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真駒遺跡発掘調査団, 1986, pp401
- (9) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子: 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第3集, 1987, pp191.
- (10) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男: 「虫内I遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 秋田県埋蔵文化財センター.
- (11) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男: 「桂の沢遺跡の配石造構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 秋田県埋蔵文化財センター.
- (12) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男: 「虫内III遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 秋田県埋蔵文化財センター.
- (13) 中野益男, 中野寛子, 福島道広, 長田正宏: 「寺田遺跡土塁基状遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会.
- (14) 中野益男, 幅口 剛, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏: 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡I—昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』, 第17集, 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.
- (15) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男: 「片野I遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 秋田県埋蔵文化財センター.
- (16) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏: 「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 宮城県教育委員会.
- (17) 中野益男, 中野寛子, 明瀬雅子: 「平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」, 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書—平成3年度』, 奈良県奈良市教育委員会, 1992, pp38.

## 相関行列距離



第107図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



第108図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

## 第7章 まとめ

### 第1節 A・B区について

A・B区の遺構では堅穴住居跡3、土坑23、陥し穴10、焼土遺構2を検出し、遺物では縄文時代早期末葉～前期前半、中期中葉～後半、後期後半、晩期中葉～後半、弥生時代の土器と石器が出土している。

遺構の中で堅穴住居跡SI 05は南側斜面の肩部に位置する円形の住居であるが、地床炉が北西壁際に寄っているのが大きな特徴である。出土遺物には石鏃、石核などの石器や剥片で接合資料があり、土器は1点だけである。またこの住居と同時期（縄文時代中期）の遺構もA・B区では無い。のことからSI 05は集落を構成する住居ではなく、地山に露頭する頁岩の採取と石器製作を目的とした住居と考えられる。

SI 07は南東側側斜面に位置する縄文時代晩期後半大洞A式期の堅穴住居である。壁溝が巡る円形の住居で、中央には浅い掘り込みを伴う地床炉がある。この時期の遺構には他に断面が袋状になる土坑SK10があるだけである。住居の検出位置が調査区の南東端で、隣接する東側未調査区の平坦部に、該期の遺構群の存在が予測される。

SI 1032はB区の遺構の集中する南側平坦部に位置する、柱穴と中央部に地床炉と考えられる炭化物の広がりを確認しただけの住居である。柱穴から出土した土器と炭化物の年代測定からは縄文時代晩期後半から弥生時代にかけての住居の可能性が考えられる。これと同時期の遺構としては住居南側にある平面形が橢円形の土坑SK1027・1028があるが、両者の関係は明らかではない。

土坑については先にも一部触れたが23基の内その出土遺物などから時期の明らかなのはSK10（縄文時代晩期後半）、SK1023（縄文時代後期後半）、SK1026（縄文時代後期）、SK1027（弥生時代）、SK1028（弥生時代）、SK1031（縄文時代後期後半）だけである。この中でその性格を想定できるのは埋設された土器内に骨片の確認されたSK1023が、おそらくは土壙墓と考えられるものである。他の土坑については断面がビーカー形の土坑SK01・1021・1022・1025・1036・1031・1034、断面形が袋状の土坑SK10・12・1026・1040・1041があるが、いづれも貯蔵穴としての性格が考えられるものの明確ではない。その他底面中央に円形の小穴を有するSK22・23・1058・1060は陥し穴としての性格が考えられる。

陥し穴は10基検出したが、いづれも溝状の断面がV字形のものである。時期については出土遺物が無いために明らかにできないが、今村啓爾氏によればこの形態の陥し穴は、北海道と東

北地方では縄文時代中期から後期を中心とする年代が推定されるという。A・B区では遺構外の出土遺物として縄文時代中期の大木7b・10式と縄文時代後期後半の土器が確認されており、10基の陥し穴はこの両時期のいずれかの遺構と考えられる。またこの陥し穴の配置を見ると、北側のSKT1043・1044を除く8基は、隣接する陥し穴のSKT03・13、SKT11・19、SKT15・18、SKT1014・1015の4グループに分けられる。これらは各グループ毎に長軸方向が一致しており、特にSKT11・19では上面が大きく広がり、主軸がわずかに歪むことなど極めて相似する点から同一グループの2基は同時に作られたものと考えられる。また先に述べたSK22・23、SK1058・1060も各々隣接した位置にあり、これも2基同時に作られた可能性がある。

溝状と円形の2種類の陥し穴の設置される場所は、前者は台地上の平坦面に、後者は斜面の下方あるいは裾に設けられている。現状では2種類の陥し穴が同時に存在したかどうかは明確にはできないが、遺跡内における設置場所が明確に分かれることと2基同時に作られるという点では一時期に設けられたものと想定することも可能であろう。この場合陥し穴の形状の違いが狩猟対象となる動物の種類に拠るものなのか、狩猟方法に拠るものなのかの検討が必要であろう。

## 第2節 C区について

C区では竪穴住居跡4、土坑56、土器埋設遺構1、石器集中部5、焼土遺構10を検出し、遺物では縄文時代早期後半～前期前半、前期後半、中期前半、後期、晚期前半、弥生時代の土器と石器などが出土している。

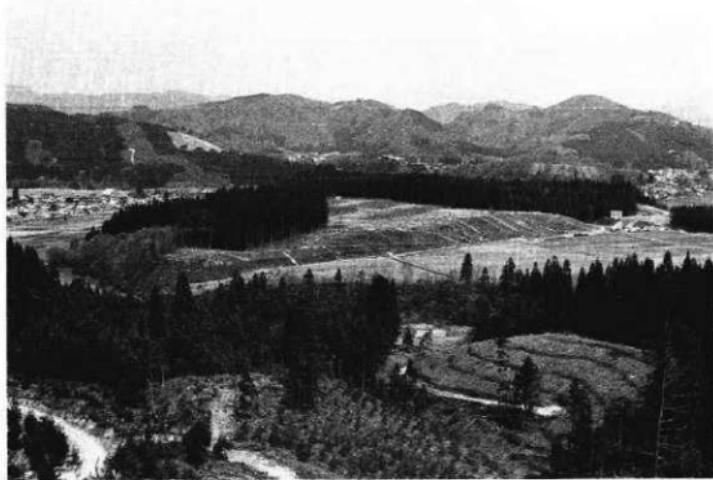
総数76の遺構のうち時期の特定できたものは竪穴住居の他は比較的少ない。最も古い遺構は、土坑SK2001で大木2式の土器が出土しており、SK2005・2006・2020もこの時期の土坑と考えられる。その後大木4～5式の土器を出土した竪穴住居跡SI2060・2074・2075があり、土坑にはSK2044・2064・2078がある。縄文時代中期になると土坑SK2043があるが、次の後期には遺構が無く、晚期になるとSR2024があるだけである。

竪穴住居跡SI2060・2074・2075はその出土遺物から縄文時代前期後半の大木4～5式の住居と考えられ、住居内に廃棄された遺物は石器を中心として豊富である。特にSI2075からは4点の深鉢形土器と石箇・搔器などを中心とする遺物が、SI2074からは完形の土器が出土していないものの、やはり多種の石器群の他に3点の磨石が目立つ。またSI2060からは4点の無茎石箇他に石錐が出土している。この住居とほぼ同じ時期には断面が、ビーカー状やフラスコ状を呈する土坑群が存在する。この土坑の中には底面の小穴に向かって放射状の溝のある土坑や、底面の壁際に溝のある土坑、中央の小穴のみある土坑がある。土坑底面の放射状の溝は中央の小穴に向かって傾斜しており、中央の小穴の底面は砂礫層まで達しているものが多い。土

坑底面の小穴や溝の施設は土坑内の湿気、水分を除去する目的のものと考えられ、こうした施設を保有する土坑は貯蔵穴と考えられる。また土坑群は台地の北側先端部に集中していて、一部には重複したり、埋土が人為的ものもあるが、この土坑群の台地内側に竪穴住居が存在している。このほか石器集中部とした遺構もSXQ2077出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。これらのことからC区における縄文時代前期後半には、食物食料の採取と貯蔵、狩猟、漁業の生業のほか、石器製作などが行われていたものと考えられる。



1. 遺跡全景（西→東）



2. A・B区近景（西→東）

図版2 (A・B区)



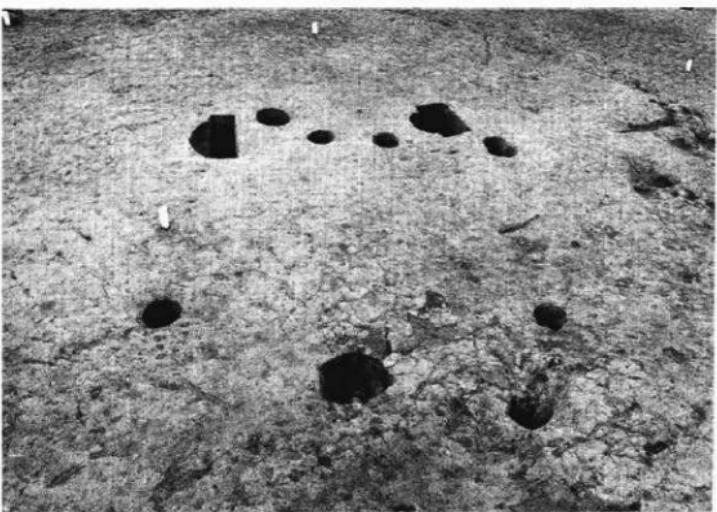
1. A区調査風景（南東→北西）



2. S105完掘（南東→北西）

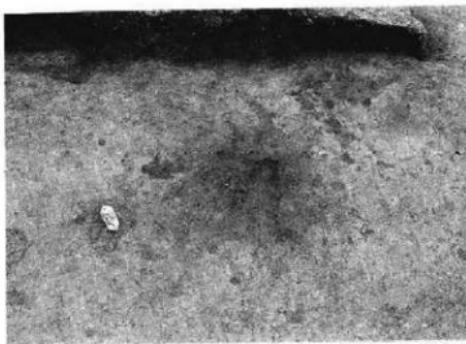


1. S 107発掘 (南西→北東)

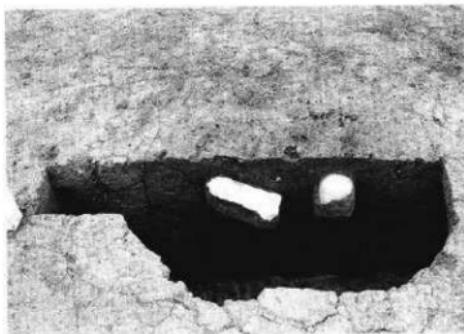


2. S 11032発掘 (北→南)

図版4  
(A・B区)



1. SK 10確認状況（南西→北東）



2. SK 10土層断面（南西→北東）



3. SK 10完掘（西→東）



1. SK22土層断面 (西→東)



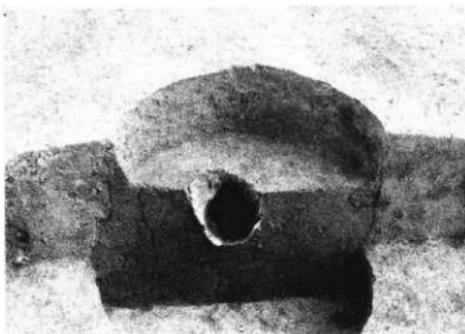
2. SK22完掘 (西→東)



3. SK23完掘 (東→西)



1. SK1023確認状況（西→東）

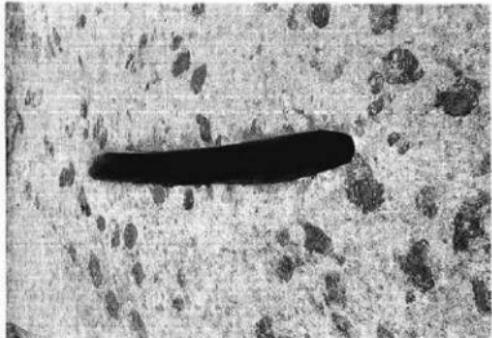


2. SK1023土層断面（南西→北東）

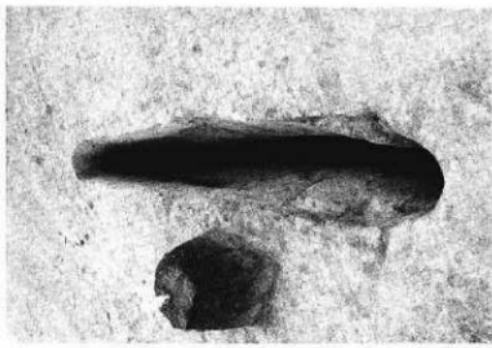


3. SK1023完掘（西→東）

圖版 7 (A+B)



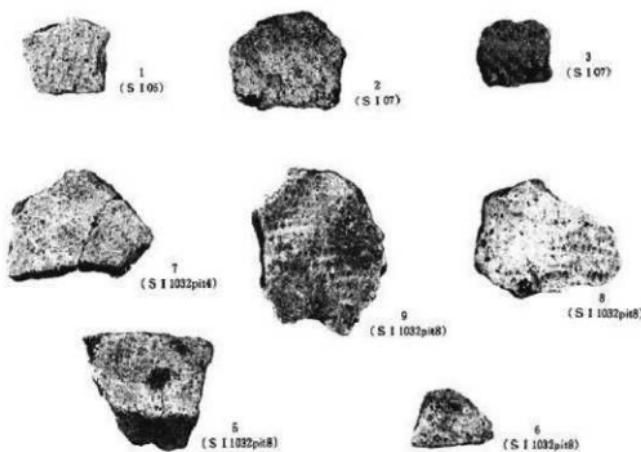
1. SKT19先掘 (西→東)



2. SKT1044 (南→北)



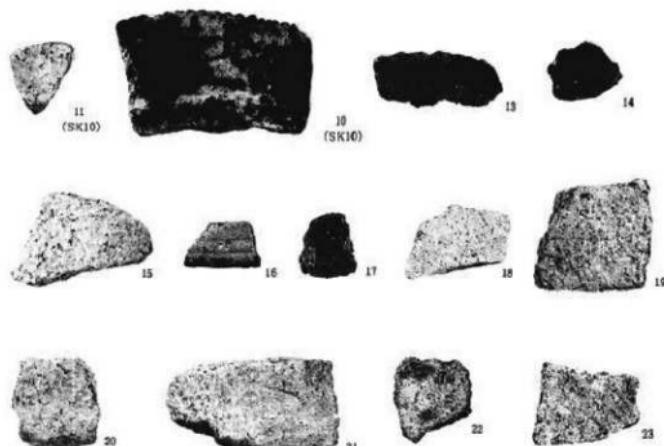
3. SKT15土層断面 (西→東)



1. 遺構内出土土器 (1)

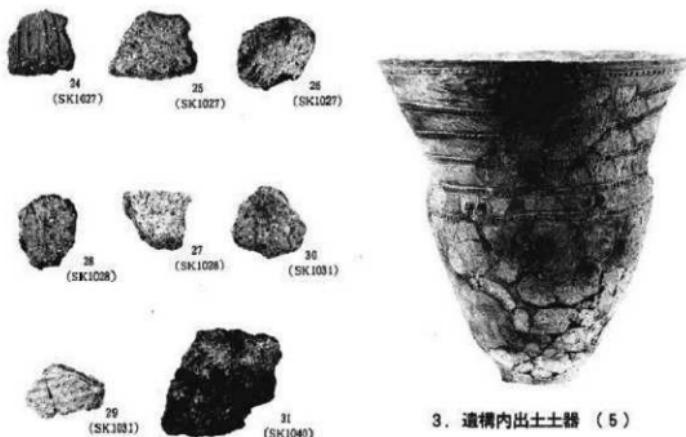


2. 遺構内出土土器 (2)



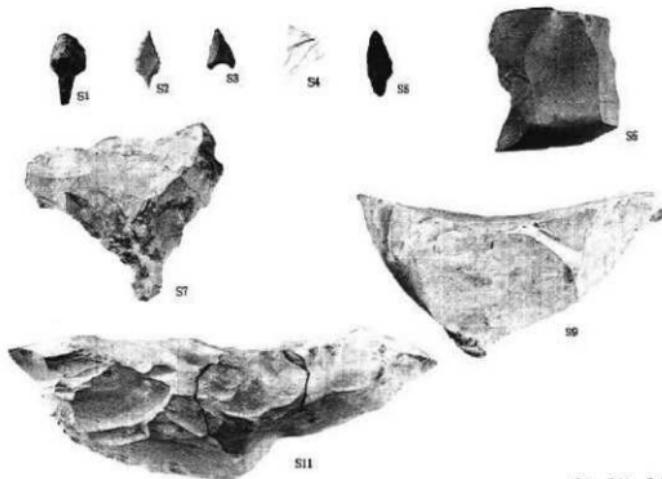
13~23 : SK1086

1. 遺構内出土土器 (3)



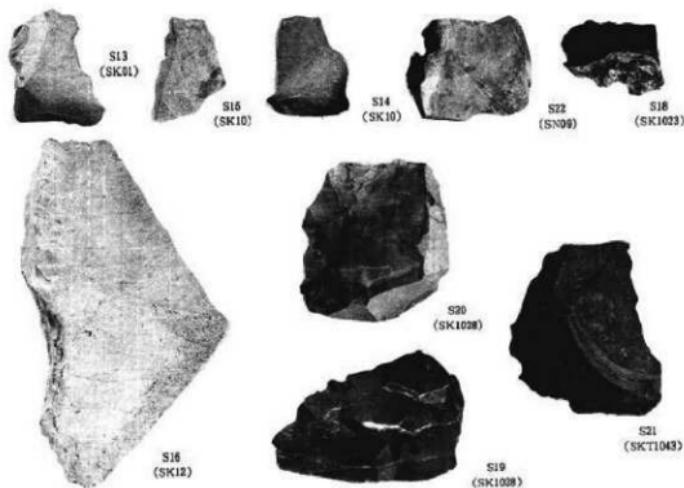
3. 遺構内出土土器 (5)

2. 遺構内出土土器 (4)

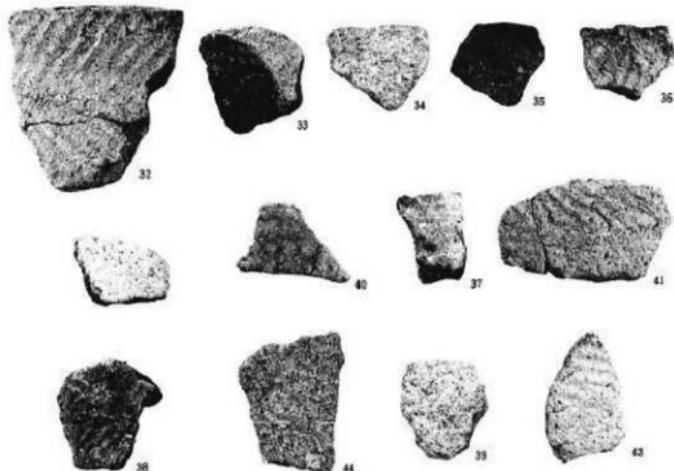


S1~S11 : S 105

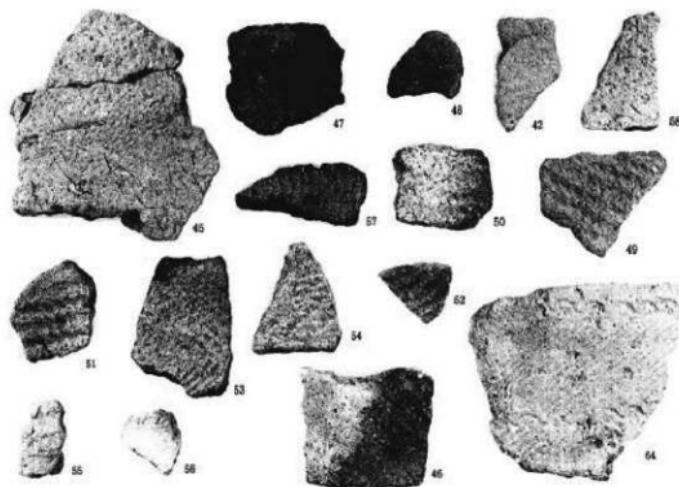
1. 造構内出土土器 (1)



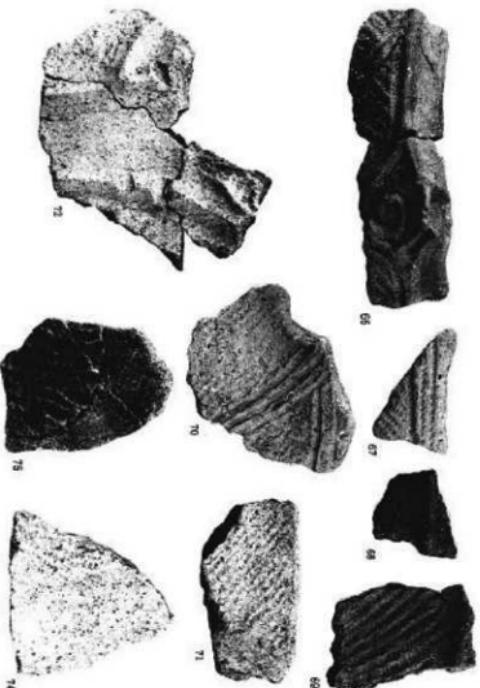
2. 造構内出土土器 (2)



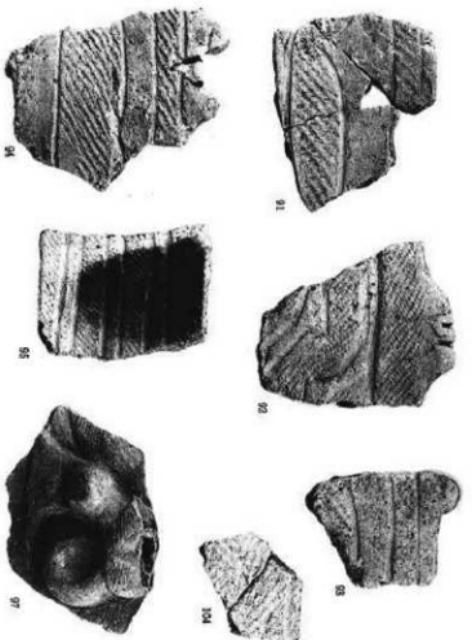
1. 造構外出土土器 (1)



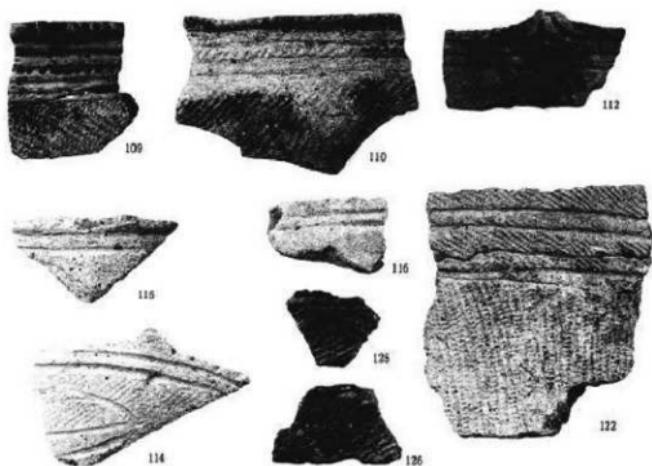
2. 造構外出土土器 (2)



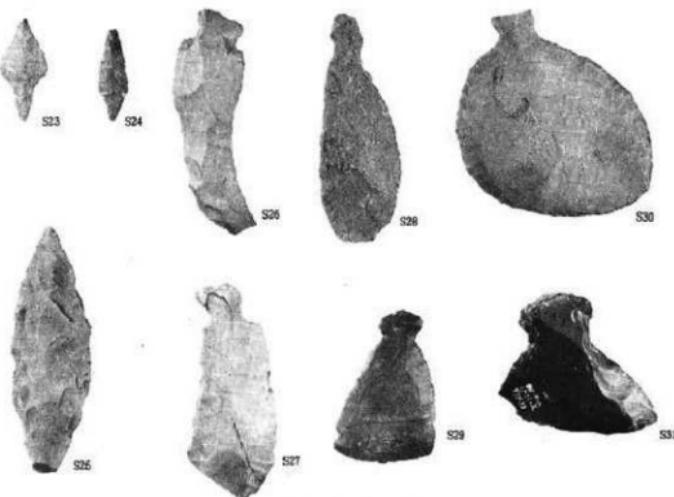
1. 遺構外出土土器 (3)



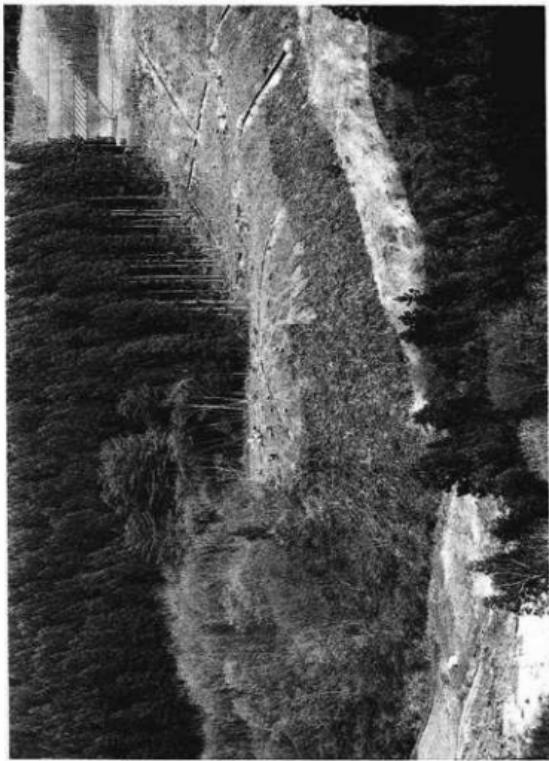
2. 遺構外出土土器 (4)



1. 遺構外出土土器 (5)



2. 遺構外出土石器 (1)



1. C区近景（東→西）



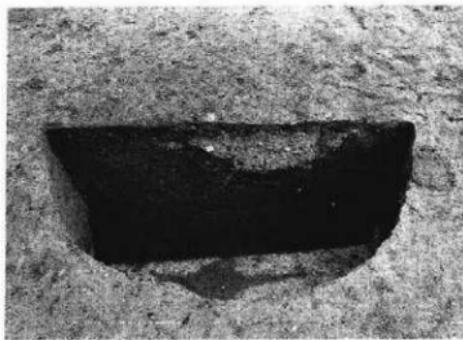
2. C区西部の土坑群（南→北）



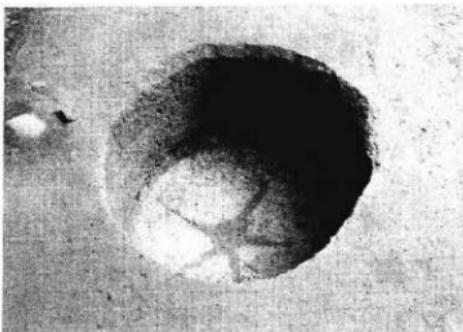
1. C区中央部の土杭群（南西→北東）



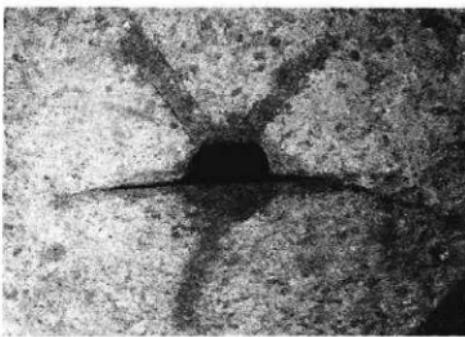
2. S I 2075壳掘（南西→北東）



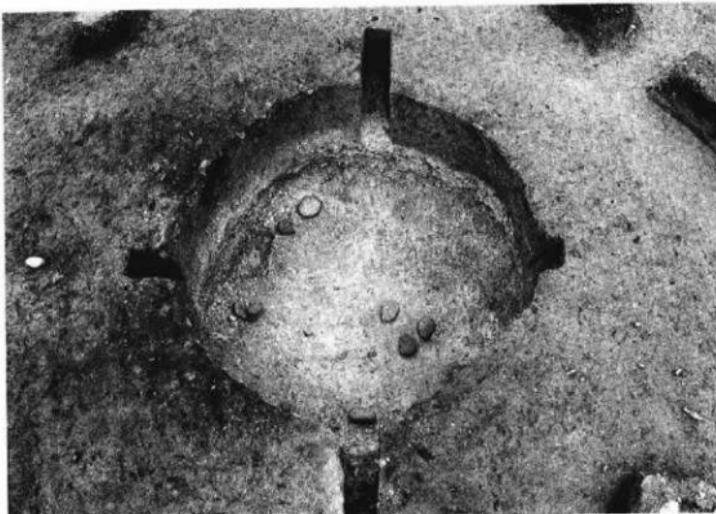
1. SK2003土層断面（北→南）



2. SK2003完掘（北→南）



3. SK2003底面のpitと溝



1. SK2004完掘（北→南）



2. SK2007完掘（南→北）

図版  
18

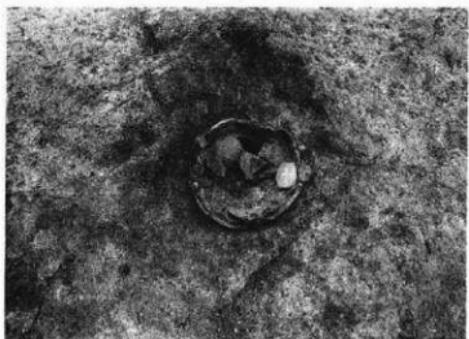
(区)  
C)



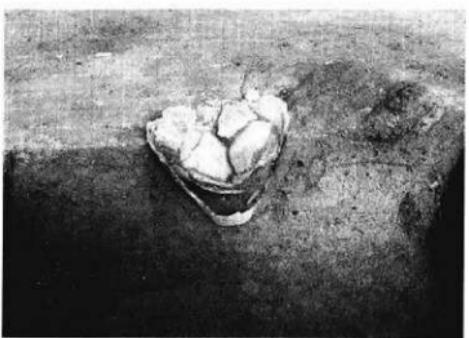
1. SK2020完掘 (南→北)



2. SKQ2095・2094 (南→北)



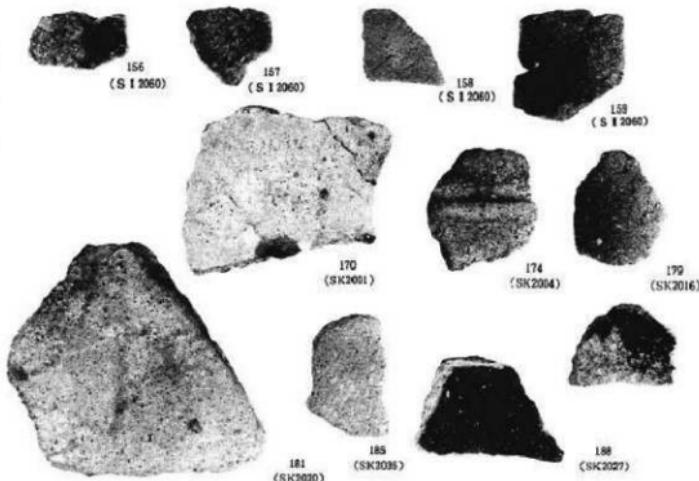
1. SR2024確認状況（真上）



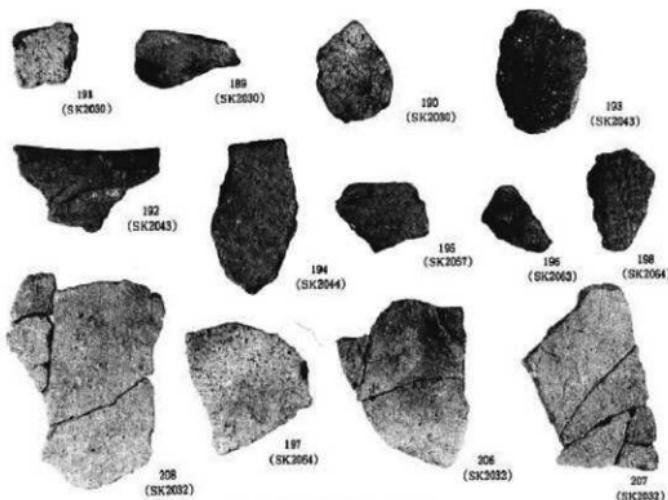
2. SR2024土層断面（西→東）



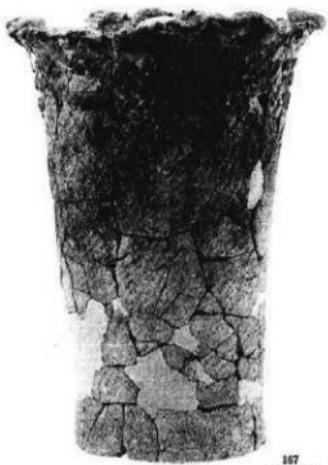
3. SR2024完掘（西→東）



1. 造構内出土土器 (1)



2. 造構内出土土器 (2)



167  
(S I 2075)

1. 造構内出土土器 (3)



168  
(S I 2075)

2. 造構内出土土器 (4)



220  
(S I 2096)

3. 造構内出土土器 (5)



323

4. 造構外出土土器 (1)



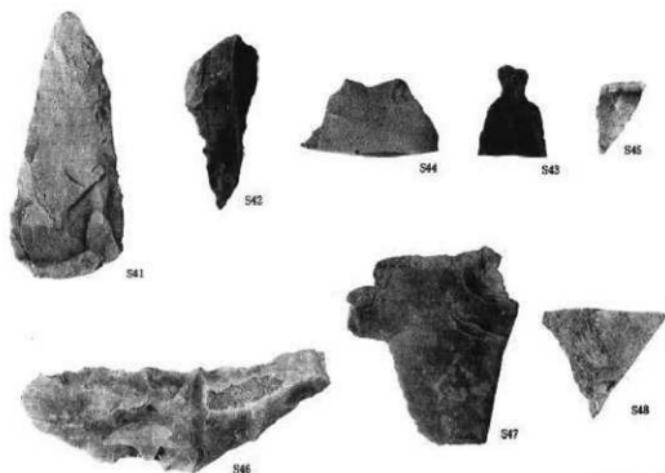
202  
(SR2024)

1. 遺構内出土土器 (6)



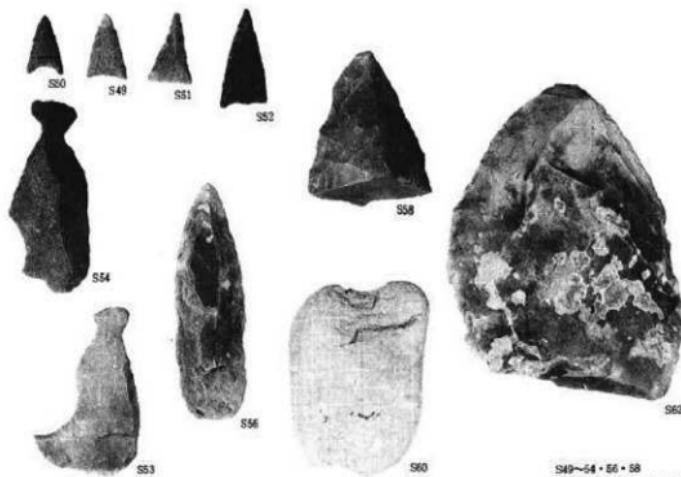
201  
(SR2024)

2. 遺構内出土土器 (7)



S41~48 : SI 2022

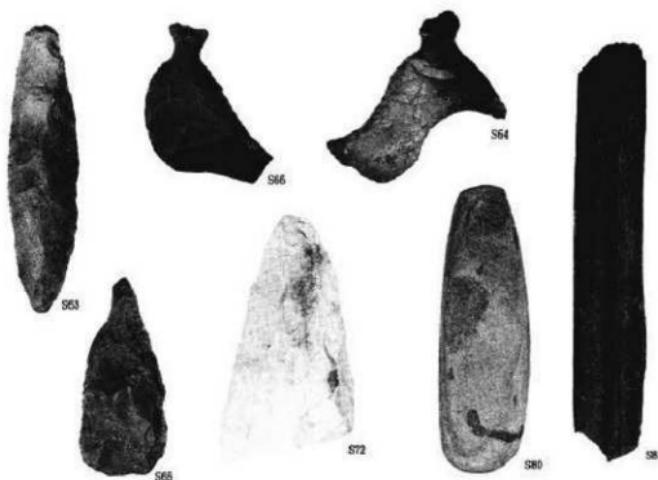
1. 造構内出土石器 (1)



S49~54・56・58  
60・62 : SI 2060

2. 造構内出土石器 (2)

図版  
24(C区)

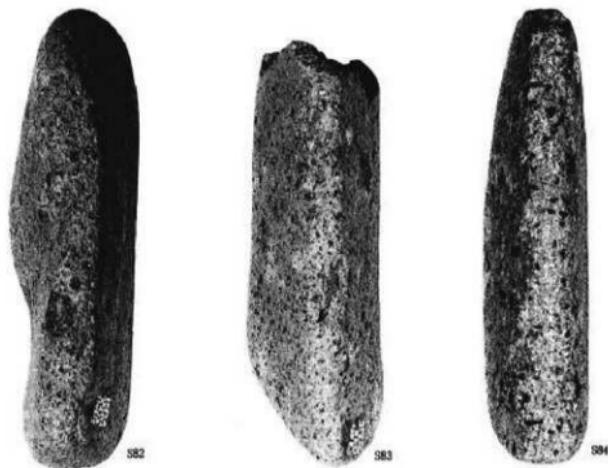


1. 造構内出土石器 (3)

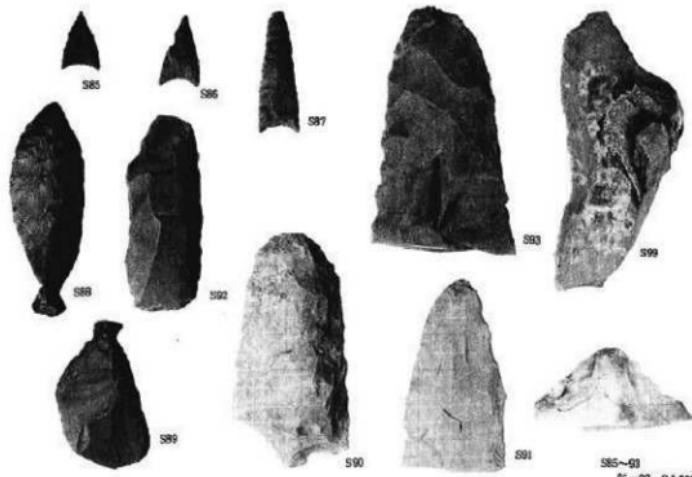


S77~79 : S 1 2074

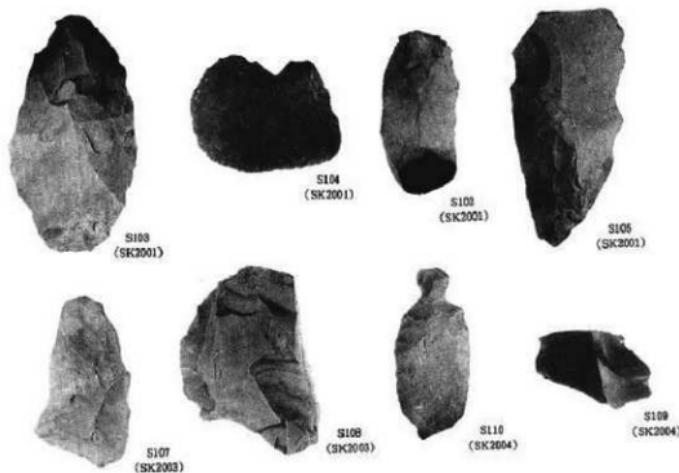
2. 造構内出土石器 (4)



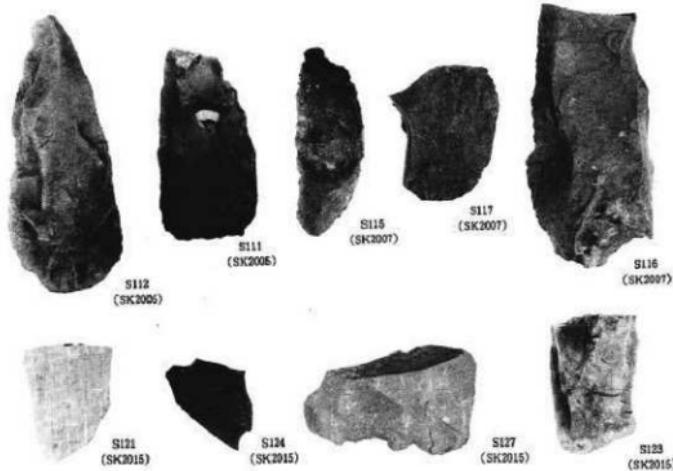
1. 造構内出土石器 (5)



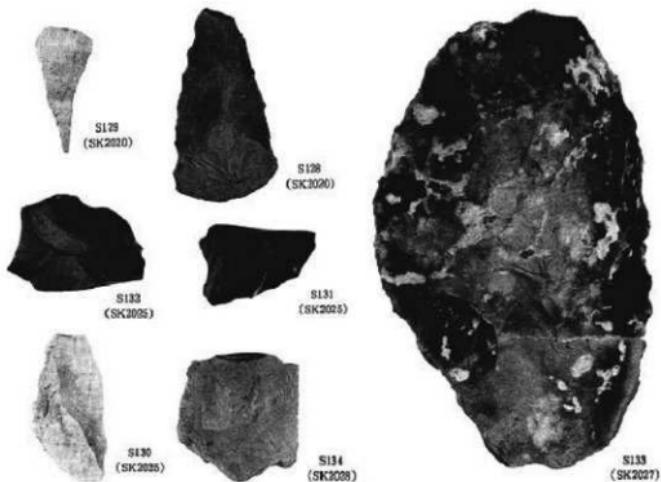
2. 造構内出土石器 (6)



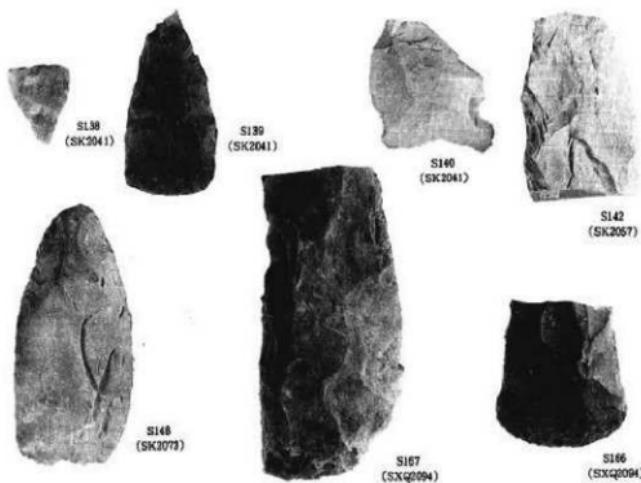
1. 造構内出土石器 (7)



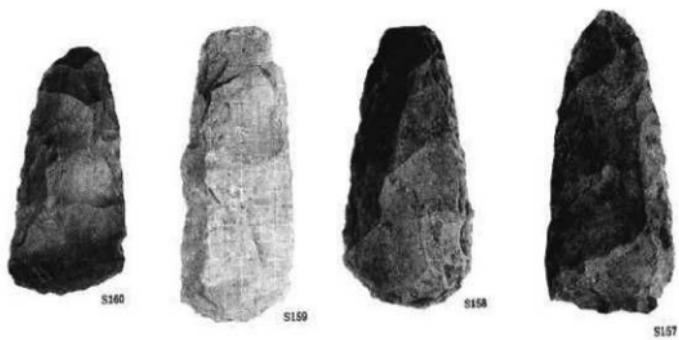
2. 造構内出土石器 (8)



1. 造構内出土石器 (9)

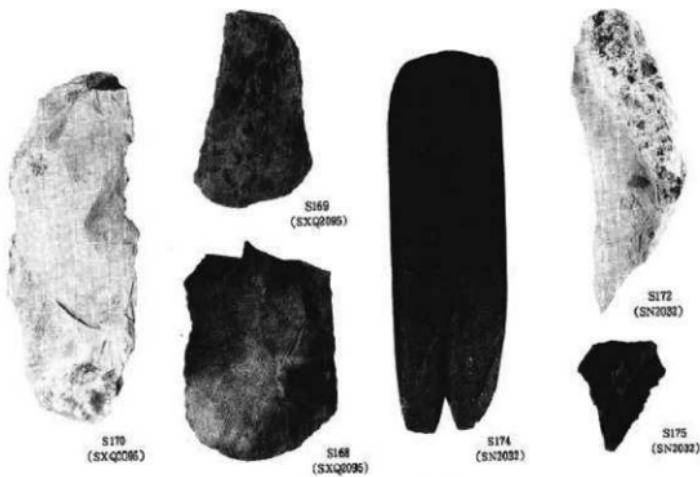


2. 造構内名出土石器 (10)

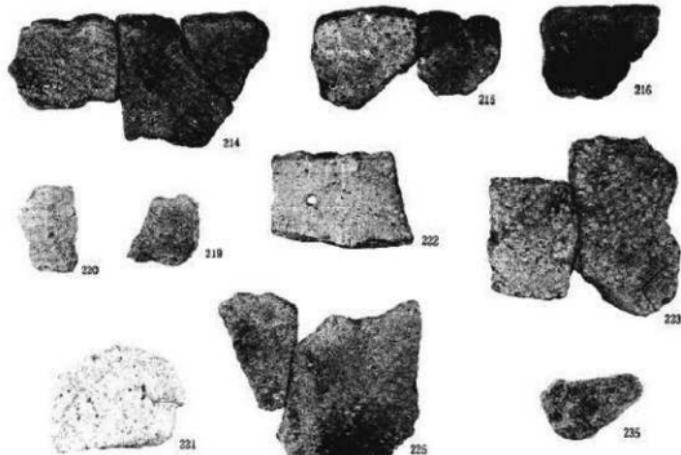


S157～160 : SXQ2056

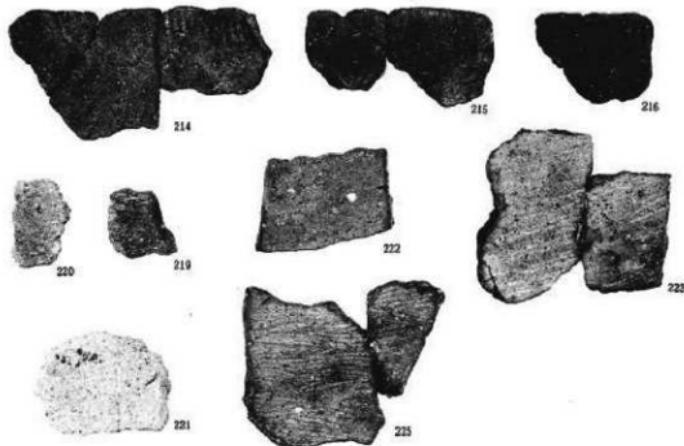
1. 造構内出土石器 (11)



2. 造構内出土石器 (12)

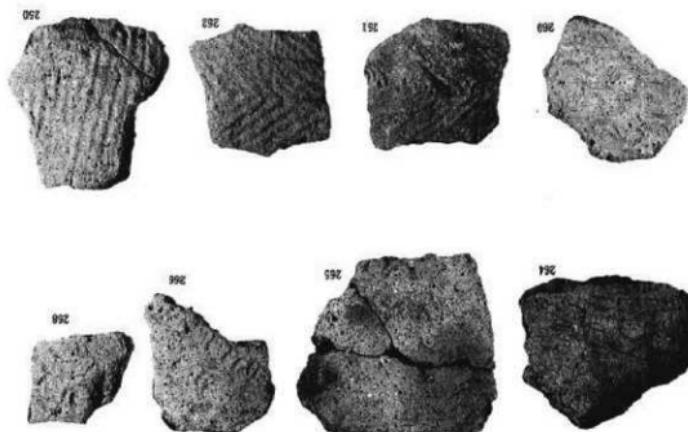


1. 造構外出土土器 (2)

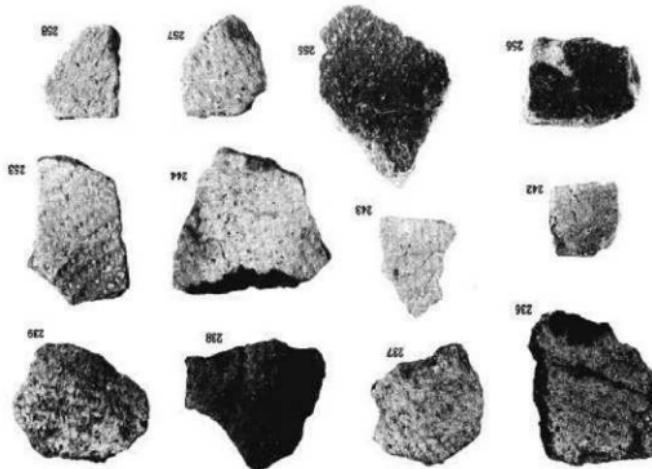


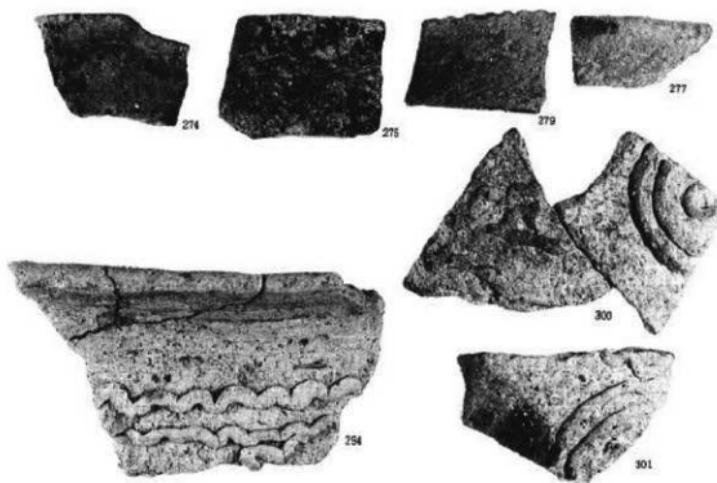
2. 造構外出土土器(2)の内面

2. 遷都外出土土器 (4)

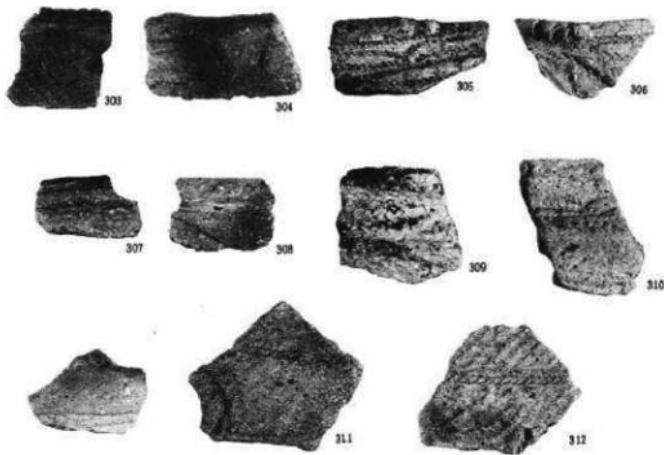


1. 遷都外出土土器 (3)



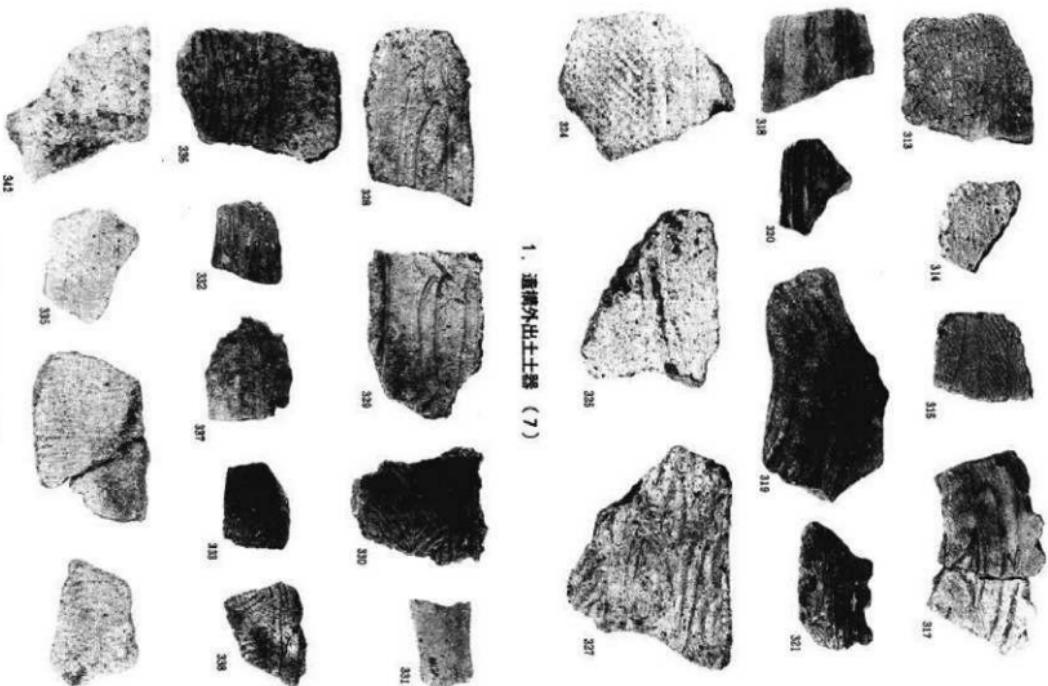


1. 遺構外出土土器 (5)



2. 遺構外出土土器 (6)

(区C)32面図



1. 通溝外出土土器 (7)

2. 通溝外出土土器 (8)

341

305

318

324

318

313

332

319

320

314

337

313

325

319

315

331

330

327

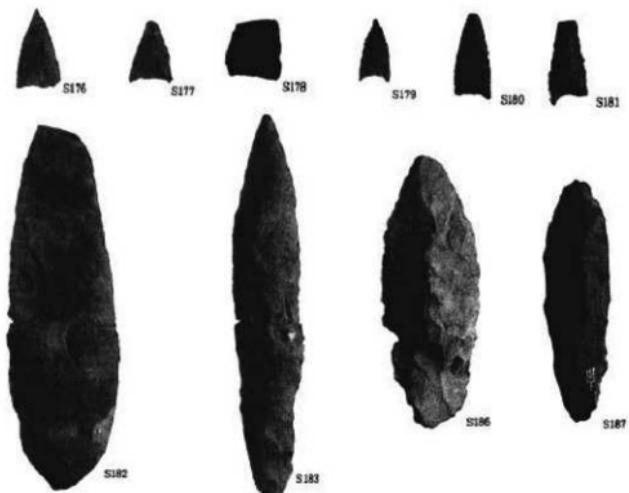
321

317

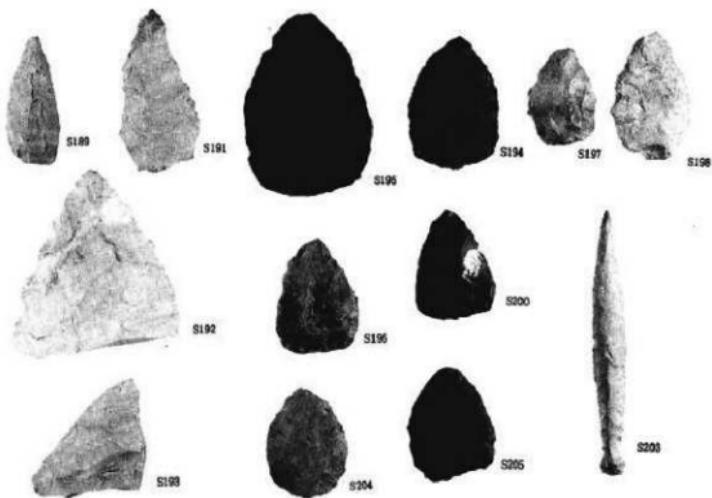
338

331



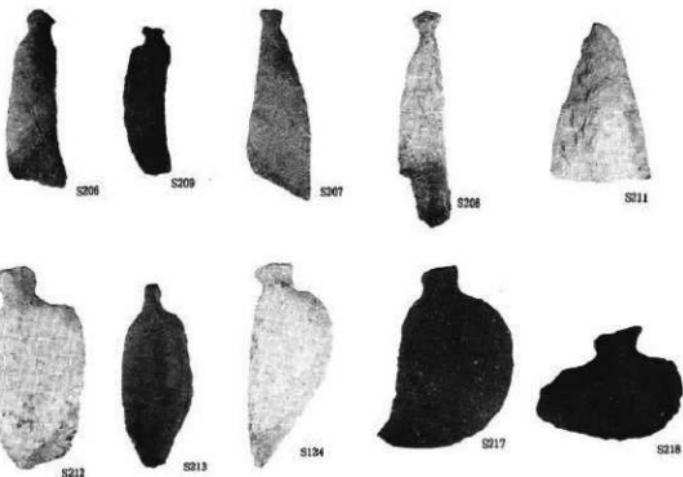


1. 遺構外出土石器 (1)

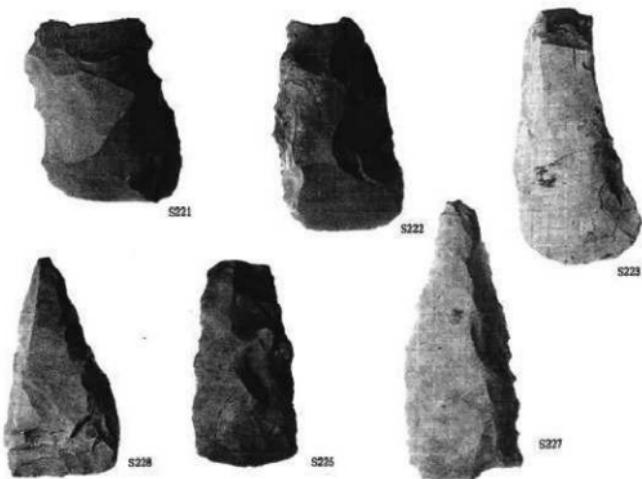


2. 遺構外出土石器 (2)

図  
34 (C)

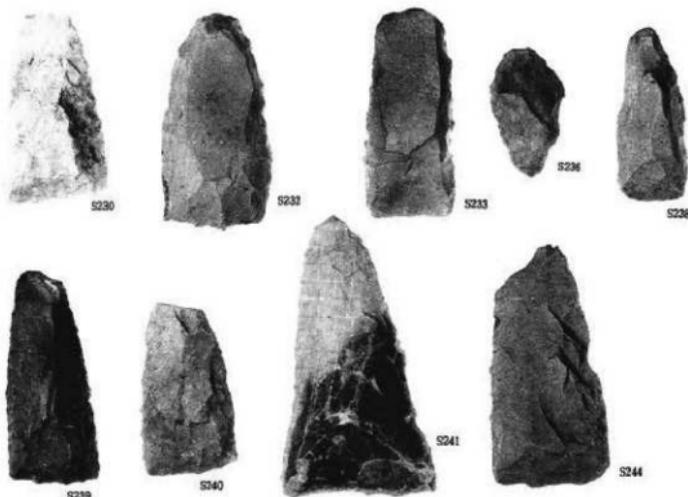


1. 遺構外出土石器 (3)

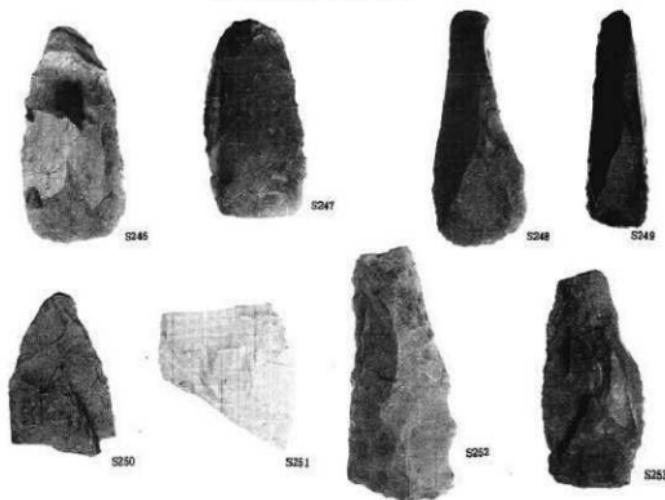


2. 遺構外出土石器 (4)

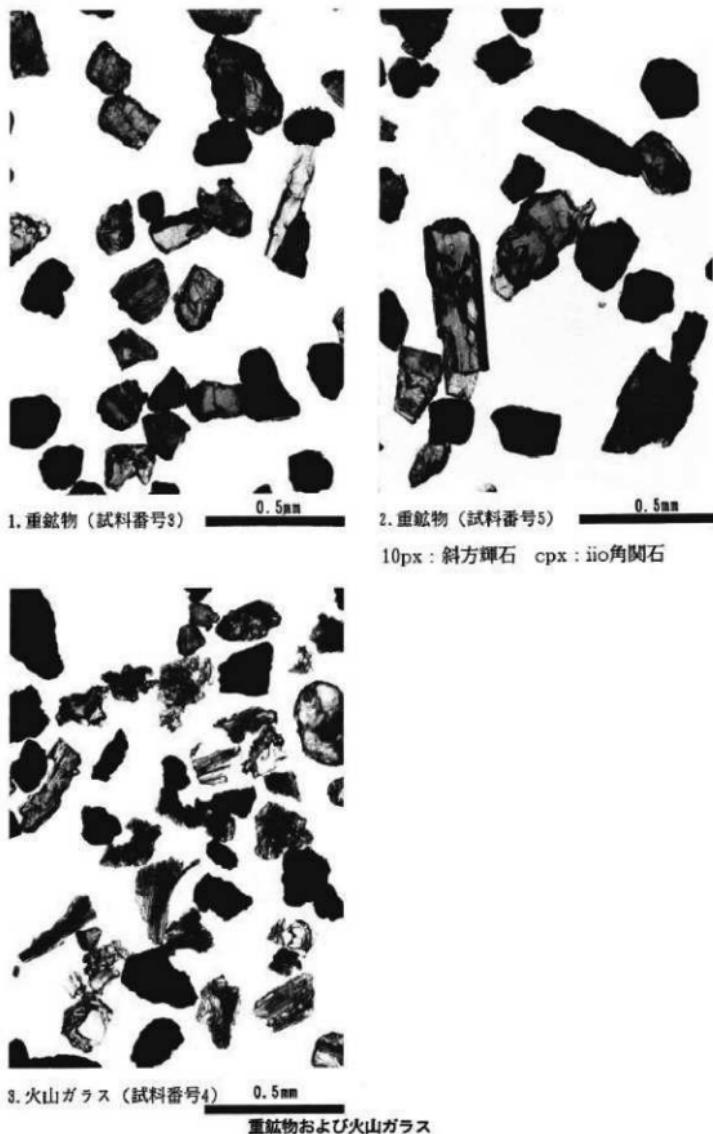
図版35(区)

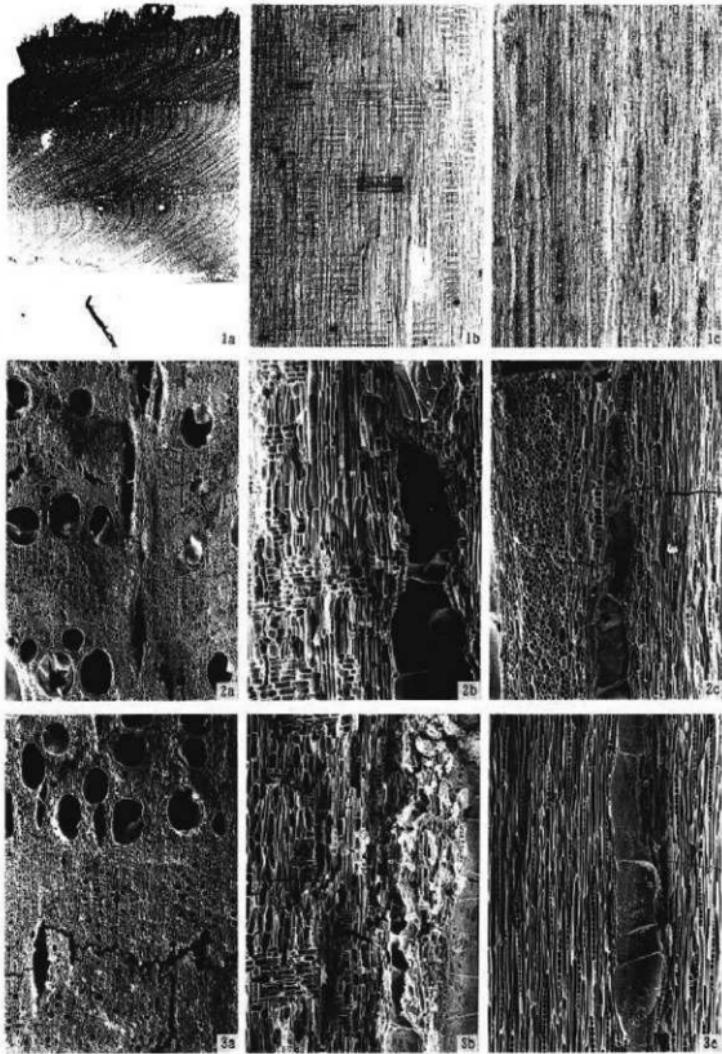


1. 造構外出土石器 (5)



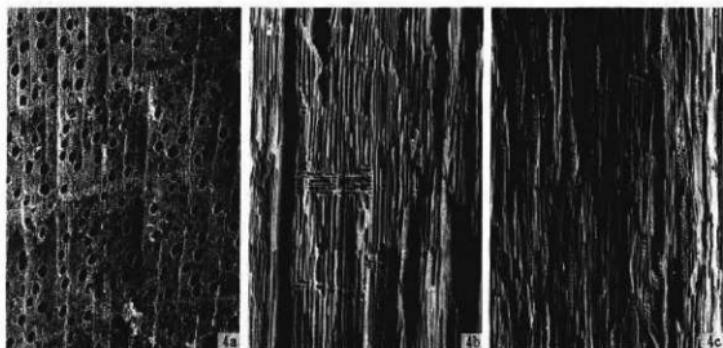
2. 造構外出土石器 (6)





木材 (1)

— 200  $\mu\text{m}$  : a  
— 200  $\mu\text{m}$  : b, c

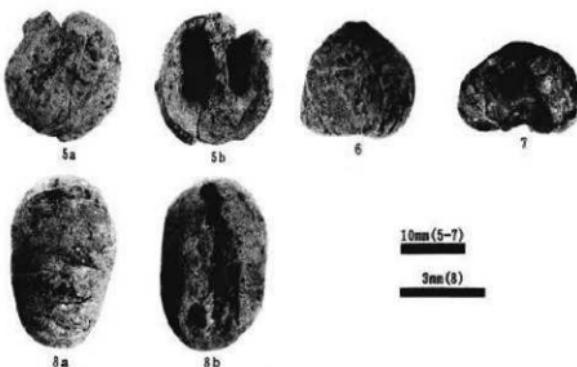


1. カエデ属の一種 (試料③: SK1026)

a:木口 b:柾目 c:板目

200 μm : a

200 μm : b, c



5. オニグルミ : 核 (試料①: SX2049)

7. クリ : 子葉 (試料②: SN2059)

6. クリ : 子葉 (試料③: NF88)

マメ科 : 種子 (試料③: NF88)

## 報告書抄録

ふりがな	とうほくおうだんじどうしゃどうあきたせんはくつちょうきほうこくしょ						こだごいせき	
書名	東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XX -小田V遺跡-							
副書名								
卷次	21							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第262集							
編集者名	高橋忠彦							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20 TEL 0187-69-3331							
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	○○○	○○○			
小田V	秋田県 平鹿郡 山内村 土淵字 小田111 -2外	2201		39° 16' 47"	140° 36' '38"	19930506 19931119	19,800	東北横断 自動車道 遠野秋田 線建設事 業に係る 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
小田V	集落跡	縄文時代 前期～ 中期	竪穴住居跡 土坑 陥し穴	7 79 10	縄文土器・石器 弥生土器		縄文時代前期 末葉の集落では石器製作が 行われている。 排水設備を持つ貯蔵穴群と 陥し穴からは遺跡が食料獲得の場であつたことがわかつ る。	
		縄文時代 晩期	土器埋没遺構	1				
		弥生時代						